

多幸ある様祈つた。いよ／＼私等は高工の校庭に整列私は第二集團第六中隊の一員として編入された。我が中隊長の御訓辭一句／＼心に喰ひ入る。そして晴れの式場へ臨む時此の身は緊張し心は躍動する。今日こそは日頃鍛ひし力を十二分に發揮して我熊本青年の意氣を遺憾なく發揮し大御心を安め奉る可く心の奥に誓つた。いよ／＼午後一時 陛下の臨御を御迎へし壯快なる、分列式は初められた、意氣満身の九州男兒六萬六千の劍光帽影、軍樂隊の奏でる行進曲と共に我も人も皆満身の力をこめ、大地も砕けよとばかり歩武堂々と進み行く。いよ／＼軍樂の曲も程近に迫る頃は無我無中たゞ感激中に邁進又邁進するのみであつた。「頭右ツ」の敬禮におそれ多くも龍顔を拜し唯々其の有難さに感激の涙にむせんだ。皇恩の宏大無邊にして我等民草を子の如く御憐み下さいます事を、拜して何とも申上げ様ないおそれ多い感に打たれた。感激唯感激の幾分間、私達は所定の地に進んだ、私等の後にまだ／＼大集團の行進が続いて皆遺憾なく九州男兒の意氣を發揮した。私は其の様を目撃して高らかに心に叫んだ、「諸君よ、九州男兒よ」我等は此の榮譽を紀念として、今胸に満ち／＼てゐる忠勇の心もて國家の爲大に奮勵し昭和青年の眞面目を發揮しやうではないか」と、しかして彼の時の光榮に浴した人々は皆一様に此の決心を深く堅く心にきぎ附けられた事であらふ。其の幾分間の尊い感激、否々永久に忘れ得ないあの心を私は胸の奥に秘めたのだ。そして感激の中に誓つた事を、私の身の護として、青年期にある自分の今後進むべき路に向つて大にむち打つべき絶好の訓としたい。

御親閱當時の感想

菊池郡陣内村青年訓練所 大田 黒 正 信

十八日午前四時起床今日は恐れ多くも 今上陛下の御親閲かと思へば胸の高なるを禁する事が出来ない。朝食もそこそ

こに吾が訓練所に集り、今日の御親閲を思ひて光榮に浴する自分等を思ひ現世に生れたる事を神に感謝したくなる。

大津驛を五時十一分發車し熊本水前寺に下車し高工グラウンドに集合す縣下の全訓練所生皆集り今日の御親閲を思ひて緊張の顔。午前十時半、訓練所旗を先頭に翻し歩武堂々と帯山練兵場に向ふ。十二時愈々 陛下の御親閲が始まつた。勇しき軍樂隊の行進曲におのづから緊張し、さうして世界に比類なき我が國體を誇りて、嬉しくて涙の出づるを禁する事が出来なかつた。威風堂々として、隊伍正しく分列の勇ましさを自分もその中の一人として光榮に浴するんだ、陛下は玉に神の如く勇ましき號令の下に吾等は一齊に瞑目す。陛下の御休姿私等の目にうつりし時何物かに、うたれし如く自然座と頭が下つた。あゝ吾等は比類なき國體と比類なき。天皇陛下を戴くことはなんたる幸福者ぞ、我等は比類なき國體を今一層善美なる國體たらしむるは吾等青年の責務だ。吾等は皇國の臣民として恥かしくないだけの臣民となると共に、青年訓練所の向上、國家の發展を。神に誓ふと共に努力精勵の覺悟を決めた。

御親閱感想

菊池郡合志村青年團員 吉 岡 明

秋天麗かにして瑞雲棚引き地に錦綾羅を飾る此の盛天の佳節をトし特別大演習が縣下に於て施行されました。此の日 聖上陛下には親しく御統監遊ばさるべく十一月十一日九州の地に御足跡を印せられて以來森の都銀杏城下に一週間の夜を過ごされ長途の御旅もお厭ひなく豫定の如く十八日帯山練兵場に於て六萬六千の青年男女の御親閲を施行遊ばされました無上の光榮に浴する吾等はお迎への喜びに氣も心も轉倒して言ふことも後や先午前七時三十分中學濟々費出發。隊伍整然長蛇の列を連ねて愈々意義深き第一步を力強く踏出す。仰げば靈峯阿蘇は泰然として黎明の東天に聳へ天氣清朗にして一片の雲影なく絶好の御巡察日である。家々には日章旗が交叉され街路は紅白三角旗で裝飾し不言の中に滿都總て奉祝氣分

を物語る。幾多の奉拜者と摺れ違つて所定の位置に就く。十一時に中食を済まし、緊張してひたすら 陛下の御臨場をお待ち申上げる。遠くの方に煙火が冲天に轟く。陛下には今偕行社を御出發遊ばされたのである。あちこちに聞へる「氣を付け」の號令。莊重の氣は場内に溢れて各集團寂として物音一つしない。軍樂隊の「君が代」の吹奏は靜かに空氣を流れて奉受者の心を打つ。今 陛下には御臨場遊ばされたのである。自分は責任の重且つ大なるを感じ唯誠意以て神明に祈るのみであつた。各集團は指揮官の號令に依つて最敬禮を申上げる。陛下には有難くも御答禮遊ばされ茲に御親閱を開始遊ばされたのである。學生を先頭に各集團は續々と行動を開始する。靴音心地良く四邊に反響し緊張の色眉宇の間に溢る。「頭右ツ」集團長の號令に依て一同注目。軍服に御裝束遊ばされた御機嫌麗しき 陛下の御英姿を咫尺の間に拜するを得たのである。長くも 陛下には吾々一同に擧手の禮を以て御答禮遊ばされた。ここに於て協力一致忠君愛國の大義を忘れざる吾等の赤誠をお受け遊ばされたのである。終ると女性團聲朗かに軍樂隊の快調を以て歓迎歌を合唱する。一つとして臣分の至誠の發露でないものはない。豫定が終ると本山知事の音頭で陛下の萬歳を三唱す 陛下には殊の外御機嫌麗はしく自動車に召されて偕行社に御歸り遊された。續いて扈從し奉る百官百僚の自動車が消へる迄お見送り申上げ 陛下の御行路に御安全あらん事を祈念し奉つた。

噫々長時間にわたつて一糸亂し給はざる 陛下の直立不動の御英姿を拜しては赤誠の至情自ら喚起するをどうすることも出来ぬ。吾等性迂愚なりと雖も造化の神は尙吾々を見離し給はずかゝる 陛下にお盡し申し上げる事の出来るは吾等の無上の光榮幸福と云はねばなりません。轉じて眼を四圍に送ると無慮數十萬の奉拜者は唱へし萬歳の叫と打上げる煙火の響がいつまでもいつまでも耳朵に残り惜別の情に堪へざる者が場内を埋めて立去るを知らない。その間より阿蘇の雄姿が陛下奉迎の誠を現してゐるかの如くで吾人の終生忘れる事の出来ぬ印象であつた。一同は遅々として家路に向つた。

御親閱感想

菊池郡隈府町處女會員 光堀 世紀子

御親閱!! 拜察するだに恐懼極まりなき感激とおのゝきに拙き身もて拜受者の光榮を唯々忝う思ひつゝも地方の乙女にとりては希ひても與かり得べくもあらぬみ恵に浴して、いとも千載一遇の想はひしひしと腸に泌みつゝかくて御親閱當日を迎へし。はるばる海を經山を縫ひて來し若き同胞のすべからく希望と感激とに満みたる輝かしき彼の帶山原頭の集ひは成れり。さても絶大なる若人の群集、その壯觀!! その莊嚴!! おゝ今日ぞ!! 今日ぞ!! 鳳輦を迎へまつるは。み姿を拜みまつるは眞にみ恵の有難さ深く深く身に泌みて覺え自ら容を正し我を制してひたすらに大君の御着御を迎へ奉るのみ。

折しも原頭の靜寂を破りし「君が代」の奏樂!! 肅々と一入全身の緊張を覺ゆ。はるか五百米突の玉座に畏こしみ神の現れ給ひしを仰ぎまつれり。やがて幕落されし雄大なる若人の分列式嚴かに立御あらせ給ふ 陛下のことごとくに御擧手の御會釋を賜るを拜せば眞に神のみ動きを覺え奉りて忝けなき言はん術なく畏こさに耐へがたく胸つまる。あゝこゝに大君の在はします比類なき我が大君の今こゝに在します。奉唱一齊!! 豫てよりの赤誠をこの歌に表象せんものと。全身は歌全身は聲、總てはこめてあゝ誠に唱ひまつれり。潮の如き全員「君が代」「萬歳」あゝ赤臣至誠の魂をこゝに捧げ歌々聲々の如何に響き立つことが。かくてつゝがなく鳳輦を送り奉りける。

あゝわれ等生ける甲斐あり。……あゝわれ等生ける甲斐あり、今日の日に生れあひたる歡びの獨りわが胸は壓す。されど務めてもつとめても大御心を安じ奉るべくもあらずと思へば痛ましう胸はうづきぬ。あゝ絶對無比の尊嚴!! 絶大無限のこの恩恵。譽れある天恩に報ひ奉るべく吾等はこれを永久に記念して民草の誠に生きん。

御親閲の光榮に浴して

菊池郡大津女子青年團員 豊岡香代子

噫、思ふだに唯有り難さに涙こぼるのみで御座います。十一月の十八日、この日天高うして秋晴のよき日私共幾千の奉唱隊は長き君の御姿を拜せんと身を固うしてお待ち申し上げる程に、高く／＼澄み渡る「君が代」のラツバ、あゝ何と莊嚴なその響き、私共の心は打ちふるひ、ただ屏けなさに頭はおのづと下つて何の物音も聞えず、さしも廣き帯山練兵場一杯につめかけし人々のしはぶき一つするものもなく、その有りがたさ、莊嚴さ、それは到底筆舌につくすことはできません。唯感激の涙にむせぶのみでした。やがて分列式も終り、いよ／＼私共奉唱隊は行進を始めました。踏みしめる一歩も勇ましく、軍樂隊の奏でる軍樂の響も清らかに、やがて高らかに唱ふ私共の熱誠溢るゝ聲、聲、聲。聖上陛下には直立不動の御姿のまま私共の奉迎歌をお聞き遊ばさるゝを拜して又々熱き涙の下るのを禁ずることが出来ませんでした。帯山も揺がんばかり眞剣に熱誠をこめた私共の奉唱歌が假令拙くとも、大君は如何に聞き召されたことせう。私共の一生にこれ程有難い思ひ出を残したことは子々孫々に傳へたいと心にちかひました。

御親閲参加者としての感想

菊池郡陣内村處女會員 兒島うた子

十一月十八日、此の日、此の時畏くも 聖上陛下の御親閲を受け奉り千載の喜びは萬代まで忘れ得ぬと共に、追懐致しますれば、畏き萬感胸に迫り只有難さにむせびました。秋の色も愈々深み四方の山々も錦織なしたる奉祝の衣にかへて、姿は晴やかに、何處となく軟風にとまはれて、はら／＼身輕に飛び舞つてゐます。天迄も幸多き日を祝福してか一滴の雨さへ降らず一點の曇もなく、日本晴の好天氣に己が身の幸福に高鳴る胸をいだきて心靜かに待ちました。

十一時過ぎ帯山での中食もソコ／＼に！嗚呼、只々一分一秒に御親閲の時間を刻み行くのみ！二、三發の合圖、物音高く、天地に鳴り響き、身に沁み通る様な喇叭の音、いとも煌やかな、無数の御旗はひら／＼心嬉しく翻つてゐます。次の瞬間清らけき音を發して、 聖上陛下の御召自動車は一段と玉座の位置に近づき、陛下におはしましたは御供一人なく玉座に進み給ひ御立姿を拜し奉りてより。息詰るやうな沈黙の幾時かが續きました。今だ遠隔より、御勇姿を拜す、其の内に御親閲も次へ／＼と進みまして、一團休毎に何の御退屈の色もなく御敬禮あらせられる度に白雪のやうな御手を拜し、まるで生きた心地もなく、知らず／＼感涙にむせぶばかりでした。いよ／＼御親閲も済み、今度こそ奉唱部隊の幾萬かの物は全身に力をこめて廣く響き渡る軍樂隊に、ともなはれて一歩／＼玉座の前へと進む毎にいとど御置はしき、御玉顏を拜し奉り云ふも忝なき想像外な御質素なる御服装が何となく深く畏きに頭は下へ／＼と下るばかりで御座いました。緊張せる心にて、力一ぱい「君が代」次に奉迎歌合唱も數知れぬ人々の音聲も心よくそろひ隅々までも響き、萬歳を三唱致しまして、再度 陛下の御會釋を戴きましたは、尊くも畏れ多い御心に眸は涙で曇り尙も長時間の其の間御立ち遊ばして御ひどい御苦痛も御厭ひなく 陛下の御身を偲んでは重ねて止めどもなく涙は溢れました。御親閲を御受け申すべき身とは存しても、かうまで御心安く……萬感に打たれて、陛下の萬福を祈り申して感恩に泣く、其の中に二時の頃御召自動車はゆるやかに、今は自動車とのへだても遠く見へなくなるを名残おしげに御目送のうちに終へました。

御親閲の感想

菊池郡津田村女子青年團員 板楠桃子

御親閲……なんと有難いお言葉で御さいませう。十一月十八日、幸多き此の日奉唱隊の一員として畏くも 天皇陛下を奉迎致すことの出来ましたことを身にあまる光榮として喜びに堪へません。

前日まで降りつづいた雨も名残りなく晴れて廣々とした帯山の練兵場には七萬人の御親閲拜受者の輝きに満ちた顔と幾十萬とも知れぬ拜觀者の群にてうづまり、各團体の熱誠を表徴する旗はひら／＼と風になびいて此の壯觀は言ふべき言葉もありません。午後一時愈々御親閲の時刻となつて臨御を報ずる花火を合圖に、場内に並み居る人は身も心も緊張し長くも玉座に龍顔を拜し奉りし時は有難いやらかたぢけないやら神々しさで胸が一ぱいでございました。はしたなき私共も、この千載一遇の光榮に浴し長くも天顔を咫尺の間に拜し奉り御仁慈深き大御心に對し奉り私共はどうしておこたへ致してよいやら唯々感激と感謝で胸がはりさけさうでございました。誠心誠意軍隊の指揮の下に奉唱致しまする奉迎歌の

あゝ我等生けるかひあり おほけなき

今日のほまれを よろづよに かたりつぎつゝ

ことほがむ ひとつ心に……と

奉唱致しました時は全身水をかけたが如く今日の御親閲拜受の光榮に浴しました餘りの幸と喜びにてしばらくは涙がとどまりませんでした。

私は此の時萬邦に比なき萬世一系の 天皇陛下を戴き奉ることを壽ぐと共にこの聖代に生れあはせし幸をしみ／＼と感じました。私はこの有難い御親閲を更生の日として益々國民としての修養を怠らず私の毎日の仕事に勵んで 陛下の大御心にそひ奉ることをお誓ひ致します。

御親閲を拜受して

菊池郡護川東部處女會 田 呂 丸 はる え

小さき少女の身ながらも千載一遇の御親閲の一人に列して唯感慨深く限りなき皇恩限りなき光榮に涙するばかりで御さいます。

記念すべき十一月十八日秋の空はよどみなく晴れて光榮に光る帯山練兵場の秋の陽はうら／＼かで御さいました。榮へある御親閲に列する六萬餘人の整然としてそよぐ人の波、流石に廣大な帯山の地も人に埋もれました。數百の校旗團旗は秋風にはためきて人一人として咳一つせず、玉座高く御起立遊ばせられた 陛下の颯爽たる御英姿を仰ぎ奉りては筆舌にも比喩するものはなく唯異様に胸がこみ上げて我ながら神境にある感が致しますばかりで御さいました。つらなる帽子、銃劍の林、肅然たる大分列式が始まりました。長くも 陛下には舉手にてお答へ遊ばしました。其の有難き御心には又一入感泣されるのでございます。十分二十分感慨無量の中に奉唱隊の前進、やがてはあゝこゝにすめらみことの御鳳輦を……力限りに奉唱致しました。唯すみきつた秋の空に流れゆく聲の餘韻を耳に感じつゝ本當に一生懸命でございました。そして満腔の熱聲を以て 天皇陛下萬歳を三唱致しました。

あゝ私達は彌が上にも榮へゆく御稜威を仰ぎ奉り又此のめでたき御親閲を仰ぎ泌々と皇恩の有難さに感泣するのでございます。そして女乍らも強く生くべく、いさゝかにても聖恩に報いたいと思はれるのでございます。拙き私も此の榮へある記念誌に筆とらせて戴く幸をよろこびつゝ。

御親閲を拜受して

菊池郡瀬田東部女子青年團員 東 み てる

あゝ、追憶するだに長き十一月十八日は、六萬六千の若人が御親閲の光榮を忝うした思出ある有難き日であります。此の日天高く晴れ榮ある帯山練兵場は微風漂ひ、誠に絶好の麗日で、今日の目出度き日を悦ぶかの如く、小鳥はしきりに頭上をさへづり、總てのものが 陛下を迎へる如くでありました。まして私共女子の悦びは何物にも譬へ様なく、只管威儀を正して待ち奉りました。『大君を迎ふる心は一筋に、誠忠燃ゆる一つ心に。』

此の時「氣をつけ」の喇叭は隔々迄響き渡り、場内は水を打つた如く緊張し、思はず私は目を閉ぢ心を清め、何とも言はれぬ感じに高潮せる胸を押へ、靜かに目を開き、玉座に在します神の如く威嚴に満たせ給ふ御英姿を拜した瞬間、只々恐懼の外無く、自らは引きしまり、頭は下り、暫くは夢心地でございました。御繁忙なる中にも、我々女子に迄大御心を置き給ふ事の忝なさに、只々感激にむせぶのみでありました。殊に恐懼に存じました事は、約一時間の長きに渡り、連日の御日程にもかゝはらず、益々御機嫌麗しく、終始端然たる御容姿を毫も崩し給はず、常に御目を注がせられいとも御熱心なる御態度を以て、一々御會釋を賜うた事でありまして、陛下が如何に、士氣の鼓舞にお心を用ひさせ給ふかが窺はれ、誰か祖國の爲に奮起せざる者がある者か。非常なる緊張味の中に、軍樂隊に和して分列式は行はれ、步調正しく揃ふ見事さ、太陽の光に軍旗はまばゆきばかりにて、正に日清日露の役を思ひ起させるに充分でありました。我が國がいざ戦争となると、一身を捧げ君國の爲盡すのも、皆かうした御恵み深き大御心に報い奉らんとする、感激の現はれに外ならぬのであります。分列式の情景の美しさよりも、身体にみなぎる忠誠に燃ゆるが如き心の現れそのものゝ美しさでありまして、力強くも頼母しく、此の様を他國人に見せてやり度いほこらしさを感じ、世界に比類なき我國體の安かさを思ひ明かに日本の將來を見せ付けられた様な氣が致しました。最後に女子奉唱隊の榮ある時は來たのであります。今日のおたり行幸を仰ぎ、御英姿を拜して、光榮と感激とに無限の思をいだきつゝ、歩一步陛下の御前へ近づくを思へば、血湧き肉躍り胸はふるひ、一種何とも言ふ事無く、餘りの忝なさに奉唱より先に感激の涙は止めども無く流れるのでした。それでも有る限りの聲を惜まず、女子の歌ふ聲は莊嚴なる中に響き渡り、奉唱と共に、心の底よりほとばしる赤心の表れとも云ふべく、日本の女子として生れた事の悦と共に、此の大御心に如何にして報ゆべきか、女子としての任務も亦如何に重大なるかを感じ、強く胸にこたへるものがありました。斯くて陛下には龍顏殊の外麗しく、御退場遊ばされ、萬歳の聲は天地をゆるがし、誠に平和なる幸福にひたり、感激の涙は泉の如く盡きず、心の限り聖壽の無窮をことほぎ、名残惜しくも終了致しました。私共は此の意義ある日を記念として、御聖旨を奉體して、益々女子としての本分を盡し、大御心の

萬分の一にも報い奉らん事をかたく心に誓ひました。

御親閱拜受の光榮に浴して

菊池郡合志村上庄處女會

森

フ ミ 子

國家の現状を凝視する時思想上經濟上、日支紛争、聯盟理事會の險惡、内に外に國家多事多難の際聖慮をなやまし給ふ陛下が大元帥として大演習御統監の爲御發聲遊ばすと聞きてより數日間、近年稀なる雨中の物凄き大演習もつゝがなく終へさせられ、待ちに待つた御親閱の日はついに來た。私達は限りなき希望と喜悅とに心を躍らせながらさうして天顏を咫尺の間に拜し奉る無上の光榮を感謝し、陛下の御英姿や幾萬の青年男女學生の奉迎のシーン等次から次とはてしなき想像を小さき胸に描きながら足の運びもいと繁く帯山練兵場へ……。

數時間の後九州各縣より集れる數萬の拜受者拜觀者さしにも廣き練兵場も所せまきまでの群衆である。午後零時十五分大本營御發聲の報知と共に和氣滿々たる式場にもいよいよ慎重の氣滿ち未だ曾て味はざる靈感をおぼゆ。喜びあふれる幾萬の群衆、至高至純なる面持、衿を正し直立不動の姿勢にて、陛下の御臨場を今か今かと待ち申し上げる赤子の純誠、さもかくあるべきであらう。やがて二十五分皇禮砲の轟きと同時に陛下御到着、「君が代」の奏樂につれて白布におぼはれたる玉座に玉歩を運ばせられ、直立遊ばした陛下。其の節拜みまつる赤子の心中やいかに？。到底筆舌の盡す所にあらず恐懼恐惶おくあたはず自ら頭の下るを覺えた。やがて開始された分列式、進軍ラッパの音も勇ましく、清風にひらめく青年團旗、校旗、分會旗、陛下の御前に進む度毎に擧手の禮を賜ふ大御心、天顏に咫尺する青年、光榮に心身共に清淨見る者をして唯恍惚たらしめる。いかでか皇恩のかたじけなさに感泣せざるを得やう。練兵場の一隅に天使の様に美しく日本女性の特色を彰はした勇氣潑刺たる中にも奥床しさのうかがはれる少女子達、その中で次から次と進行する分列を默視し中でも未だかつて傍觀した事の無い學生銃劍隊の分列、大和男の子の意氣躍如たり。いかに心強く頼もしく思つた事

か。

神國日本、一天萬乗の君居ます國、大和魂を持つ赤子、世界平和の鍵を握る日本に生れ合した幸福を感謝し心中ひそかに皇國の隆昌を祈つた。

かしこき 陛下には如何にみそなはせ給ひしか。一國の柱石たる赤子よといと頼もしく思召されし事ならんとお察し申し上げる。やがて奉唱部隊前進軍樂隊の奏するいと晴やかな中に慎重にして莊重なる音律に歩調を整へ 陛下の御前へ進み行く少女子の幸咫尺の間に御英姿を拜して奉唱歌を奉唱申上げる。その間あまりの莊嚴、有難さに涙のみ流れて拜まみつる 陛下の御姿の朦朧として見えざる事幾度、

實にかゝる叢毛の地に一天萬乗の君にておはしますにもかゝらず御榮を運ばせられ、天機うるはしく御親閱遊ばす聖恩に感泣し我等は何を以て之にむくいん。只管職務に忠實に教育と産業の提携をはかり良き日本の産業たらしめ、智徳の併進に務め日本女性としての責務を全うし世界に誇るべき人格を養成し以て皇國の隆盛と世界平和人類愛とに貢献すべきである。御親閱拜受の光榮に浴せし當時の偶感を拙き筆につゞり後世への思出となす。

御親閱拜受の光榮に浴して

菊池郡合志村處女會

齋 藤 美 治

今日か明日かと待望されてゐた大演習も十四日をもつて、いよいよ終を告げ 聖上陛下におかせられては、連日御統監の御疲勞も顧みさせ給はず、十五日に觀兵式、十六日からは産業教育其の他を御獎勵の思召を以て地方御巡幸の途につかせ給ひ國民の誠意をこめたる奉迎の中につゞがなく御目的を果させ給うた。

明くれば十八日、十八日こそは八縣より選拔されたる學生及び青年男女にとつては千載一遇の光榮に浴するの日即ち御親閱を拜受するの日である。かゝる光榮に浴する同胞は誠に天下第一の多幸多福なる者とも云ふべきである。宜なるかな不束ながら私も第三奉唱部隊の一員として身にあまる光榮に浴した事を思へば、皇恩の辱さ身にしてみても、感激の極であつた。幸にして縣當局の御計らひによりこの尊き紙面を通して胸に滿る想の幾分かをのべさせていたゞく事を心より御禮申し上げる次第である。再三の豫行演習に準備全く成り、常には満目廣々とした帯山練兵場も當日は四方八方何處をみても全く人の海で奉唱部隊拜觀部隊其他何れも拜受の時の近づくのを今やおそしと待つてゐる、御親閱日和とも云ふべくよく晴れ渡つた秋空より金筒を放つ日輪はさながらこれ等すべてを祝してゐるかの如くに見えた。とかくする中に遠方に投ぜられた「氣をつけ」の號令は廣く、波紋をえがき遂に第三奉唱部隊にも及んで係の先生の徹底したる號令により今までの騒音も何處へやら全く消え失せた程の静けさとなつた。かくして聖上御臨場の報はすみ、にまで行き渡り全くの緊張の中に「君が代」の奏樂とも玉座につかせ給うた。勇ましいラツバのひびきもの、鋭劍のきらめき黄金色にかゝやく聯隊旗の波、これ等のすべてが隊伍整然として一糸亂れず前進する様はまことに何物にも形容し難き壯觀でこれを親しく御覽遊ばされる 陛下にはどんなにか御心強く且つ御たのもしく御思召された事であらう。分列式終れば直ちに奉唱隊の前進、軍樂隊に合せて歩一歩と玉座に近づきつゝある事を思へば、自ら襟の正されるを覺えた。畏くも陛下におかせられてはかゝる長時間にわたる間身動き一つなさせ給はず直立不動の姿勢をとらせ給ふかしこき天子の御英姿をまのあたり拜するを得て自らを顧みまことに恥ぢざるを得なかつた。玉座よりわづか二十五米の近きにまで前進し鮮かに御雄姿を拜し奉り、あらん限の聲を出して、奉唱歌を歌ひ御聖徳を讚美し、又今日のよき日に接する赤子のおほけなき光榮と喜とを心より感謝した。最敬禮の時に世界に比類なき國家を與へられ一天萬乗の大君にまじゝながら我等臣民を子として愛撫し給ふ大御心の有難さに感激して落涙するを禁じ得なかつた。かくも尊くまします大君を咫尺の間におろがみまつる畏さを思へば、現とも思はれぬ様な氣がしてたゞ、感謝の外なかつた。

かくして君國に對する忠誠の念を更に新にし、更に強くする事が出來た。就ては大君を始め奉り皇室の上に國家の上に

益々神の御祝福の永劫に加はらん事を祈ると共に、尊き御聖訓をつねに心にとめ、天賦の力のあらん限りを盡し君國のため、國民の力に盡すこそ我が日の本のかためなりけり

御親閲の一日

阿蘇郡古城村立古城青年訓練所生

岩下義廣
軸丸平次

(一)

昨日 聖上陛下阿蘇神社行幸奉送迎の疲れも忘れて、午前零時半目覚時計の音に飛び起きて、先づ榮えある今日の御親閲に天氣は如何にと空を仰いだ。薄雲が満天を覆ふてゐた。雨具の用意と言ふ不安がやゝ襲つた。時計を前にして準備萬端一時半二、三の友人と共に第一集地たる一の御田に急いだ。晩秋の夜半の寒風に吹きはらはれたのか、三時五十分宮地發の臨時列車が熊本に向つて發車した時、空を覆ふてゐた薄雲もいつか晴れて一面に星がきらめいてゐた。數百の光榮に輝く若人に乗せた汽車は夜半の静けさを破つてすさまじい勢で眞暗な線上を走る事約一時間半汽車は水前寺驛に着いた曉の全熊本市には無数の電燈がまたゝいてゐる。汽笛の音、諸車のきしる響、人のぞよめきの騒々しい中に薄暗い道を第二集地高等工業學校に向つた。夜がほの／＼と明け離れた頃、高等工業學校の芝生に座して、三三五五美味しい握御飯に腹を満した。騒々しい人聲に空を仰ぐと幾十とも知れぬ鳴の群が行列横隊に並んで、次から次へと續いて西の方へ飛んで行く。不圖周圍を見ると焚火をかこんだ群の中に青年幹部講習會で見知りこしの懐かしい顔が二つ三つ見える。

(二)

莊重な軍樂の音は、一糸も亂さぬ肅々たる行進と調和して、美しく晴れた秋空に高く響く、おゝ何と言ふ嚴肅な場面

であつたらう。私は曾て経験した事の無い敬虔な氣持に打たれて、心からなる最敬禮をした。大元帥の正服を召された陛下には、恐れ多くも私共に對して玉座より擧手の禮をは賜はつた。申すも長き極みであるが、陛下の御英明御仁慈の徳は日頃拜承して民草としてのよろこびをこの上もなく感じてゐたものであるが、今此處に目睫の間に其御勇姿を拜し奉つた時、光榮と感謝の感情が胸一杯にこみ上げて思はず感涙に目頭を濡らした。何と言ふ有難い極であらう。此の聖代に生を享けた私共の幸福、私は滿腔の誠意、滿腔の感謝を以て君が代の千代八千代の榮えを祈つた。

此の英明仁慈の君を上に乗ればこそ、我が同胞は彌が上にも強いのだ。大君の馬前にならば水火をも辭せないと云ふのは、帝國臣民總べての心持であり、決心である。金匱無缺の帝國を護らねばならぬ。皇統の連綿を守護せねばならぬ。私は心に深く誓つた。

「廣漠たる帶山を埋めつくした人々の心は皆同じ光榮に輝き感激に燃え、誠心誠意、胸の奥の奥。心の底の底からほとばしり出る「天皇陛下萬歲」の聲は肥筑の山河に響き渡つた。感慨無量。主事先生に導かれて退場する時、黄色に枯れた帶山の芝生に秋光は麗かに照つて御代の無窮と御稜威のみ榮えを祝福してゐるかの様であつた。

御親閲拜受

阿蘇郡南小國村立中原青年訓練所第一年次 麻生計早治

前夜、母校に合宿、十八日午前一時起床、身を清め村社に禮拜し、直ちに自動車にて熊本に向ふ。金の粒を播きたるが如き星のきらめき、燦として眼を射る。先づ今日の好天氣を祝す。夜が全く明けはなれざる中に、熊本の集会所に到着、團休を編制して帶山に向ふ。

人の波、旗の列、帶山原頭は、人と旗とによりて埋められたり。余等は、部隊長の號令一下に所定の位置をとる。折し

も、午後一時、そよ風にひるがへる天皇旗を仰ぐ時、はるか北方の玉座に 聖上陛下の御英姿を拜す。軍樂の吹奏につれて第一集團より御親閲拜受。動く、動く、人の山が、旗の列が、次から次へと。轟く胸を抑へて余等第二集團第二大隊の出動を俟つ。前へ進メ!!一齊に踏み出した我が僚友、やがて、玉座近くなれば、全身の血と魂があふれて極度の感激、頭ア右!!仰げば龍顔うるはしく擧手の禮を賜ふ。思はず眼うるほひ、啼泣禁すべからず。右も左も、余と同じき心ならん、前後左右宛も電氣に打たれたるが如し。次から次へ、更に御親閲を續けさせ給ひ、不動の御姿勢を以て一時間、微動だも遊ばさず、七萬五千の大部隊の御親閲を辱うす。

畏し、 聖上陛下の御高德、天地四海に満ちて、物も、現象も此の靈感に打たれたり。今や内外多事、御宸襟をなやまし給ふ事、いと多かる中に、余等は、此の御親閲の光榮に浴す。此の天子の御爲に、此の御國の御爲に、余等は、只赤誠を以て奉公の務を盡さんかな。

御親閲拜受

阿蘇郡南小國村立中原青年訓練所第三年次 河津正則

一點の雲もなき帯山の原頭に燦として輝く天皇旗、微動だに遊ばさぬ 聖上陛下の御英姿、萬場、寂々、莊嚴の氣天地に滿つ。軍樂の吹奏と共に、第一集團より御親閲を開始させ給ふ。山の如き大集團の動き、肅々。ひらめく劍尖ゆららぐ旗列、只、瑞氣に打たれて胸とどろく。愈々余等の集團、御前に進む。うやうやしく仰げば龍顔うるはしく擧手の禮を賜ふ。泪潸然、啼泣の聲、耳朵を打つ。嗚呼。

聖天子、畏くも、國際難局に御寂慮をなやまし給ふ。臣等只々恐懼、一途に臣道を盡さんのみ。

御親閲を拜受して

阿蘇郡南小國村赤馬場青年訓練所第三年次 室原恒利

御親閲を拜受する六萬六千人の一大集團も、午後零時三十分迄には全く帯山練兵場に整列を終りました。風稍々強けれども、天氣眞に清朗、東に登ゆる靈峯阿蘇も今日の光榮に輝き、幾千旋の校旗團旗會旗の秋風に翻翻たる其の様は、誠に莊嚴の極であります。やがて大國旗は秋の空高くスウ〜と掲揚されました。嗚呼畏くも 聖上陛下行在所を御發轅遊ばされたのであります。先頭に訓練所旗を捧持する私は唯一念、只管に今日の御親閲の萬全なることを神に祈りつゝ暫し默禱を續けました。忽ち起る「氣ヲ付ケ」の喇叭の響、續いて「君が代」の奏樂其の奏樂裡に畏くも御英姿を遙かの玉座に拜した時、有難さ、畏さ、胸に迫つて唯々感激の外はありませんでした。いよ〜分列は先頭部隊より開始されました勇敢極りなき軍樂隊の行進曲と怒濤の如き響を傳へて勇壯に分列は開始されました。やがて分列發起點に立つて行進を續けました私は、全身唯々忠報國の一念に燃ゆる外は何物もありません。砂煙彈雨も物の數ではありません。水火も厭ふ所ではありません。

殊に天顏御英姿を咫尺の間に拜し奉り畏くも御答禮を賜はりし時私は感涙に咽びつゝ行進を續けました。分列も終つて奉唱部隊の心からなる奉迎歌も滞りなくすんで六萬六千一齊に天地も轟く萬歳三唱、續いて「君が代」の奏樂裡にいともお安かに御還幸遊ばされ、こゝに退散喇叭は響き渡りましたが、感激更に加はつて御親閲場を去るに忍びないものがありました。

生れて是處に二十年光榮ある御親閲に参加し、かゝる廣大無邊なる皇恩に浴して感激惜くところを知りません。嗚呼昭和六年十一月十八日私はこの光榮ある日を一轉機として、こゝに私の第一歩を踏み換へ精進不斷の努力を續けて、皇恩の萬分の一に酬ひ奉らんことを誓ふものであります。

御親閲感想

阿蘇郡北小國村立第二北小國青年訓練所

辛 島 正 巳

有難いといふ言葉等ではとても盡し得ない感激。私の一生を通じて又とこんな大きな喜びがあるだらうか。下手な口や拙ない筆にも表はし様のない唯僅かに涙で表はし得るほどの私の生涯の歴史を彩る特筆大書すべきあの日。昭和六年十一月十八日。この日が二度と来ない様にこの感激。この光榮この喜びも又とないかも知れない。青年訓練も御親閲があると聞いた時どんな犠牲を拂つても是非参加しやうと決意して家業に勵み乍らこの日を指折り數へて待つた私だつた。

帶山！私にとつては昔懐しい帶山ではある。あの廣々とした草原。もとはまだ大きな草が茂つてゐた様に思ふが高工のグラウンドを隊伍肅々と繰り出した第二集團。みんなの顔は生々と輝いて今日の光榮に緊張して時々と微笑む。帶山にいた。もう十時に近い。空は晴れて晩秋の陽は暖い。東には阿蘇山が紫に薄霞み西には金峯山が若人達の光榮を祝福する様に微笑みかけてゐる。龍田の山の松の緑も彌濃くそよ吹く風に帶山の小さな草も喜びにふるへてゐる様だ。おゝ太陽は燦として天に輝いて地上の森羅萬象を温い熱と晴々しい光で包んでゐる。祥氣だ。瑞雲だ。鷹が舞ふ。一時十二分嘯唳たる「君が代」の奏樂裡に鳳輦は御着御。純白の布で覆はれた一間余の臺上に御立ち遊ばせ給ふ。この時天地けきとして聲なく六萬六千の若人は息する者もなかつた。やがて起る樂隊。行進曲。今ぞ／＼畏しわれらの若き 聖上陛下は西海の若人を憐せられ給ふ。學生。そして訓練生。浮き立つ様な樂隊の音にみんなの足並は揃つた。距離間隔も整つた。豫行の時と違つてみんなの氣持が弾んでゐる。地を踏む足に力がある。「頭右」高鳴る胸をおさへて仰ぎまつる

「聖上陛下の神ながらの御英姿。われらの大君。われらの天皇。われら若人の眼に感激の涙が浮ぶ。海行かばみづくかばね山ゆかば草むすかばね大君の邊にこそ死なめかへりみはせじ。金色の菊花御紋章の天皇旗は翻々として陽に輝く。

あゝ日本。この大君の下にこそわれら赤子は生甲斐がある。榮えゆく日本に生れた事の幸福と明日の日本の建設を思ふ

とき若き血潮は沸き若き胸は躍る。訓練旗は輝くよ。この光榮に。この感激に。

天皇陛下萬歳。萬歳。若人の心からなる叫びは高らかに帶山をゆるがした。否日本を。

御親閲に参加して

阿蘇郡草部南部青年訓練所第四年次

甲 斐 政 利

「陸軍特別大演習熊本縣下ニ於テ舉行セラル」と發表せられた其の日から私共はどんなにか十一月の來るのを待つてゐたことだらう。それに私どもは御親閲を拜受されると聞いた時又どんなに喜んだことだらう。一日も早く光榮の日の來らんことを希ひつゝも、余りの光榮を思ふと又、其の日にもしや身に過ちでも出かしたらといふ危惧の念の起るのも禁じ得なかつた。朝な夕な神佛に御加護を頼み、指折り數へて待ちながら身を潔め心を正して練習に練習を重ねしこと幾回！。

肥筑の野山に紅葉は映えて晩秋を飾る時、十一月十八日 此の日こそ私どもにとつては一生忘れることの出来ない光榮の日であつた。心配してゐた數日來の雨脚全く絶えて天に片雲なく、熊本の平野に小春日和の長閑けき平和の氣充ち／＼て至尊の御英姿に接するに絶好の朝となつた。陸續と押寄する拜受團體、無慮七萬と註せられ、場外に溢れた拜觀者の群遙かに東を望めば大阿蘇の噴煙も靜かに今日の佳き日を壽ぐかの如くなびいてゐる。中隊長の號令にて所定の位置に着いた。やがて打上げられた煙火は 聖上御出門の合圖、秒を刻むセコンドの音もどかしく御待ちすること十五分、遙かなる練兵場の西端より起る「君が代」の奏樂、朝風にひるがへり竿頭高く昇る日章旗、七萬の若人寂として聲なく玉座に御立ち遊ばされた 聖上陛下に注目した。やがて私どもの光榮の御親閲は先頭部隊より開始された。一團二百余名一步の亂なく行進を始めた時もう私どもは全身靈となり、心中に過去なく將來なく、只現在の最善を盡くし、其の誠を發揮すべく外は何物もなかつた。中隊長の「頭右」の號令で龍顏を拜した。

陛下はいとも厳かに擧手の御答禮を遊ばされた。其の瞬間の感慨や全く無量！筆舌で到底述べることは出来ない。没我の境、全くさうだつた。分列後休形を整へた後始めて我に返つた、と同時に身体はしつとりと、汗ばんでゐるのを覺えた。遙かに玉座を仰ぎ奉れば、宛々長蛇の如き團体に一々厳かな御答禮。分列終つて女子青年團女學生の御親閲歌奉唱、一同「君が代」奉唱。天皇陛下の萬歳三唱まで時餘に亘る間御微動だに遊ばされぬ。陛下を仰いだ時、今更ながら聖恩の廣大無邊に感泣するのみであつた。

神佛の御加護ありしか身に一つの過ちなく此の光榮を終了した時、ホツと安堵の胸をなで下したと同時に私どものやうな賤の子まで一青訓生として御親閲に参加の出來た光榮、日東帝國に生を享けた有難さをつくづく感じた。そして近き日一介の帝國人として軍籍に身を置く私は、君の爲め、帝國の爲め、自己の本分を竭くし一旦緩急あらん日に、鴻毛より輕き身命を惜しまざるの感慨を更に深くしたのであつた。

御親閲を賜はつて

阿蘇郡草部北部青年訓練所

本田不二夫

嗚呼昭和六年十一月十八日此日こそ我等一生の頁を飾る御親閲拜受の日なり。この日は實に我等が過去の練習奮闘を發揮する日なり。此日一片の雲なく大阿蘇連山を背景として帶山原頭に描き出されたる御親閲の大繪巻は雄々しくも又華やかなりき。之より先き御親閲参加部隊は玉座を正面にして、それ／＼所定の位置に到達整列を完了したり、見渡せば校旗團旗訓練所旗軍人分會旗は各旗手に守られ眼もあやに林と並ぶ。六萬數千餘の全部隊は肅々として御着叢を今か今かと待ち奉れり。程もあらせす一發の合圖煙火と共に式場正面の大國旗は帶山原頭に翻りつつ樞頭高く掲げられ場内は愈々緊張度を加へたり。

鹵簿の先驅式場に達するや喇叭手の吹奏する喇叭の音は滿場を壓し一時十分供奉の諸員を従へさせられ、「君が代」の奏樂裡に諸員の奉迎を受けさせられつつ、御着御遊され、御少憩もあらせられず直に玉座に御登上らせられ、此の時全員最敬禮をして再び起る「君が代」の奏樂に滿場寂として聲なく莊重の氣漲る。やがて軍樂隊の行進曲につれて學生隊を先頭とし順次諸隊の分列開始せられ、玉座に御注目申上げしが畏くも、天皇陛下には各隊毎に一々擧手の御答禮を賜はり有難き極み今にも龍顏のいとうるはしき御姿のしつばれて身に餘る光榮全く感慨無量なり。斯くして男子分列は終り所定の位置に復するや女子中等學校、女子青年團よりなる奉唱歌を御受け遊ばされたり。續いて熊本縣知事の發聲にて萬歳三唱をお受け遊ばしつゝ式場を御發御遊ばされたり。之を以て御親閲全く終れり。此間一時間有餘の長時間にも陛下には直立不動の御姿勢に御親閲を終へさせられし事は我等臣民にとつては感泣恐懼の極みなり。

惟ふに陛下が一天萬乗の尊き御身にましましながらも我等民草に至るまで聖旨を垂れ給ひ大御心の有難さ筆紙の盡し得るところにあらず、如何でか奉公の至誠を申し上げべきか、即ち職業に奮勵努力し身を慎み皇恩の深きに報ひ奉ると共に聖壽萬歳を壽き奉り吾が尊き皇室の御榮まさん事を祈り奉る次第なり。

御親閲感想

阿蘇郡草部北部青年訓練所第三次

本田成之

我等が一日千秋の思ひにて、待ちに待つた大演習も肥筑の野山に紅葉映える十一月つゝがなく終つた。彼の熊本の地に風聲を迎へ奉るには我等一生に何度と有るまい。我等は此の良き時代に生を受け。恐れ多くも、大君の御前に分列参加奉拜の出來た事何んと光榮なことであらう。思ひあこがれて居た十一月十八日はどうして此の思出ふかき記念日を忘ることが出来やう。この日午前二時半起床、手洗ひ口すゝぎ、先づ第一かしくも、大君のましまし給ふ熊本大本營に向つて最

敬禮を申上げ、先祖代々の位牌に向ひ「御先祖様のおかげで今日は最も光榮ある御親閲を受けに行つて参ります。どうか御喜び下さい。」と禮拜し、叔母の心づくしの出立ちの朝茶をすまし三時半となつた。急いで高倉驛へ来た。誰を見ても皆楽しい、そして緊張した顔をして居た。發車の合圖が有ると汽車は山間を縫ひ縫ひ走りに走り間もなく水前寺驛に着いた熊本市内全部が喜びと緊張のみなざりであつた。高等工業學校にそろひ第十九中隊も整列して愈々御親閲場たる帶山へと行進した。

何百本かの青年訓練旗が風にひらめき足並揃へて進む勇しい姿、何とも例へ様も無かつた。帶山へ着いて二時間休憩して居ると愈々御親閲の時間となつた。「君が代」のラッパと共に、玉座へ御昇り遊ばされた。大元帥陛下を仰ぎ奉る時萬感胸にせまり分列に奉唱に一々御答禮を賜はり且又一時間に亘る式を凛然として贊はせ給ふ御英姿を奉拜注目申し上げたる時こみ上げて来る涙は止め得なかつた。誰しも一人として涙を流さなかつた者は無かつたであらう。あゝこれこそ日本人の有する感涙なのだ。此の一涙これこそ忠君愛國のほとばしりであり大和魂の結晶で有る」と深く感じた。

御親閲に参加して

阿蘇郡草部北部青年訓練所第二年次

本 多 幸 雄

時は昭和六年十一月十八日、我等青年訓練所生として一生忘れる事の出来ない千載一遇の光榮である。今上天皇陛下の御親閲を仰ぎ奉つたのである。余は青年訓練所の一人として、御親閲を拜受する爲に二回の豫行演習にも参加して誠心誠意 陛下の御西下を御待ち申し上げたのであつた。時は來つて十一月十八日愈々我等は訓練所旗を押し立て、御親閲場たる帶山練兵場に其の第一歩を進めたのであつた。午前十時頃には大隊の集合所に隊伍を整へて時刻の來るを待つばかりであつた。早十二時の午砲も響き渡り、晝食をすまして、午後一時を待つて居た、やがて午後一時となるや煙火が打上げ

られたと同時に指揮刀はぬかれ此處彼處で「氣を付け」の號令に引きつゞき着剣の號令も下つて午後の太陽の光に指揮刀の光りと訓練旗のひら／＼風に吹かれて動く美しくさ、その中に何とも言ひ知れぬ静かな氣持の中に誘はれて行つた。

陛下の着御と同時に軍樂隊の「君が代」は吹奏された。そして遠くの玉座の上に 陛下の御英姿を拜し奉るやうになつた。分列行進も始まつた。我が第二集團第三大隊集合地を後にして前進した。そして玉座近くなると歩調を揃へて軍樂隊の太鼓に足どり勇ましく行進した。愈々我が熱誠をささぐる時は來れりと「頭右」の號令と同時に我が全精神をあげて天皇陛下の龍顔に注ぎ奉つた。その瞬間我が心には何とも言ひ知れぬ有難みの念がわき出でて兩眼には熱い涙が浮んだのであつた。陛下の龍顔より我が視線のはなれるのがまことに名残をしいやうな氣がしたが、どうも仕方がない。方向轉換を幾度もして又始めの集合地附近にかへつたそして奉唱隊の奉唱の聲も又身にしみて我が心には陛下の有難さをなほ一入感じ込んだ奉唱が終ると「君が代」を全部で歌つた七萬幾千人かの心からの叫びであつた。陛下の御前で「君が代」を歌ふ此の聲は天地に轟き渡つた。又其の後には引續き天皇陛下萬歳が三唱された。帶山一体は皆其の聲にうづめられたさうして我が待ちし光榮の一日は終りを告げたのであつた。

この御高恩に報ゆるには忠君愛國の至誠を以て家業に精勵し國家の爲め奉公の努力を致さねばならぬ。

御親閲拜受の感想

阿蘇郡白水青年訓練所

倉

岡

武

萬木悉く凋落し盡して山骨やせ白雲低う飛んで吹く風はうら寒く人目も草も枯れ果て、み冬立つた夕べの事吾は神聖なる一日の勞働を終へ今夜我等が下市銀光會しかも來年の計劃たる話合が開かれる等を案じつゝ、孤影肅然として馬屋の前にとすんでかき曇りたる大空を何氣なく見つめた。時しも「幾そ度かき濁しても澄みかへる水や御國の姿なるらん」とい

ふ句を案じついた。さうだ雲有つてこそ天は曇れども月には何の曇りも有るまい、月は唯々やさしく下界を照らす心組の物だらう、雑念は次から次へと湧いて来るが、しかして我等が生ける甲斐あるを思ふ時心のどん底から大日本萬歳を唱へずには居られない。先般御親閲を拜受致し千載一遇の光榮に浴しました神々しさに涙こぼれる帯山練兵場の黒雲の如き青年男女血も有り涙も有る六萬六千人の心は如何ばかり感激措く所を知らず、あゝ何と言つて何と書いて表はすか自分としては到底出来ぬ。唯々日本魂其の物が拜受者となりて表はれたものゝ如くに感ぜられた。

大君には雨風の荒きにも賤しき我々の爲に大御心なやませ給ふ、龍顔を拜し奉る事の出来た有難さを思ふ時自分をして艱難辛苦にも打勝つべき奮闘の血を永久に全身に漲らせるのだ。おゝ同胞すべて幾千萬日本の國民として恥かしからぬ奮闘の歴史を續けて行かねばならぬ。二度天を望んだ時雲の切間より月はやさしく照らして居た。

御親閲感想

阿蘇郡北小國村女子青年團北里支部

田代ふさ

一日千秋の思をして待ち奉つた喜びの日が来た。秋空は晴れて一邊の雲もない。大阿蘇連山を背景として六萬六千の赤子を包んだ帯山原頭の草木も、陛下の臨御を今や遅しと待ちあぐんで居る。極みない歡びに燃えつゝやがてかうむる光榮を前にして我等御親閲團員は肅として着御を待ち奉つた。

ふと遠くに響く喇叭の吹奏に思はず戰慄を覚え六萬餘の群衆は水を打つた様に緊張し不動の姿勢をとる。はるかに前方を仰げば「君が代」の吹奏裡に玉座につかせ給ふ大君の御英姿高鳴る鼓動と共に颯爽たる御英姿を仰ぐ一同は光榮と感激に唯々感涙す。軍樂隊の伴奏の下に奉唱。

あゝ今しすめらみことの 御姿を拜みまつる

御姿を拜みまつるみ恵の

いかなる幸かかしこさに涙こぼるる

若き女性の感激にみちた聲は帯山の原頭に響き渡り覺えず涙にて奉唱を終る。今眼の前に麗はしい龍顔を拜し奉つた我等は誠に千載一遇の幸にたゞ感奮する外はなかつた。奉迎の喜に満ちた火の國の山河は榮光に照り地方民草はこの上ない譽れを喜び祝うて居る。

まして我等参加部隊は比類ない皇恩に浴し得て之より謹んで大御心にそひ奉り業に勵み職に努めて身を憤み以て皇恩の深いのに報ひ奉らねばと無限の思を抱きつゝ帯山を後にした。

御親閲感想

阿蘇郡草部村女子青年團員

二子石すえよ

秋風に寒さを覺ゆる十一月中旬、本縣に行はれたる特別大演習御統監の爲め御行幸あらせられ給ひ、かしこくも

大元帥陛下の御英姿を拜み奉る有難き十八日、前日までの天候はからりと晴れて空には一點の雲もなく鮮かな秋晴れ各縣より集る幾萬の人、榮ある今日を笑顔に笑顔、大元帥陛下の行幸を待ち奉るのみ、時早くも大本營御發の花火澄渡りたる大空には日章旗燦としてひるがへる、やがて天皇旗かゞやく御車は現はれたりと思ふ間もなくはるか彼方の玉座にかしこくも御玉体龍顔いともうるはしく立たせ給ふ、大元帥陛下の御英姿勇ましく吹き出さるるラツパのひびき軍樂隊より起る行進曲の流れ、ひらめく旗かけ、歩武勇ましき分列行進の雄々しさ、唯感激の極みのみ、分列終れば吾等の熱誠こめでの奉唱歌、陛下の御前に、あゝ何たる光榮何たる畏さ、唯一途に心をのゝき、無我の境地にて奉唱を終り引つゞきての萬歳三唱、その感激は今尙ほ目のあたり、陛下のかしこきお姿のましますが如く、この世に生れし幸ぞ思はれてその有

難きことは一生忘るゝことが出来ぬ、たゞ感激の涙こぼるゝばかりである。
この光榮に報ひ奉るには己れが本務にいそしみ身を修め一家一村一國の隆盛をはかりよりよき日本人としての活動努力が第一と思ふ。

御親閲感想

阿蘇郡草部村女子青年團員 本田リツ子

昭和六年十一月十八日此の日こそ御親閲拜受者の一生忘るゝ事の出来ない有難い日であります。畏くも 聖上陛下におかせられましたは熊本市外帯山練兵場に於て各縣の男女青年團六萬六千人の御親閲を行はせられました。

私も奉唱隊の一人として千載一遇の光榮に浴し奉りて眞に生けるかひあるを切に切に感じました。連日の雨も名残りなく晴れて好天氣となり御稜威の賜と感激の極みでありました。

豫定の時刻に至つて陛下の玉座着御と共に始められたる喇叭吹奏軍樂の奏樂にて心身ともに莊嚴のきはみ御惠の尊さを感じ自然と頭下りて涙のこぼるゝを禁ずる事が出来ませんでした。

あゝこの日、すめらみことの尊き御姿を拜し奉りたる事を思へば此の後は一層忠義な臣民となり辱けなき皇恩に報ゆる心であります。

御親閲を拜受して

阿蘇郡白水村中松處女會 園田訓

御親閲式參列の榮を賜はつた青年男女學生の終生わするゝ事の出来ない感激の日十一月十八日

此の日は一點の雲もなく大空は清く澄み互りすべてが喜に溢れてゐる託麻原頭でございました着御を今か〜とお待

ちする裡に軍樂隊の奏樂と共にはるかに 聖上陛下の御英姿を拜し奉りました。あゝその時のありがたさ言表はす言葉もありません。あまりの喜びに涙を禁じ得ませんでした。學生青年團の分列式を御親閲遊ばされて、次に私共は御座所近く進み軍樂隊の伴奏で「あゝここにすめら尊の御車を」どんなに歡喜にうちふる聲で謳歌したかしれません。

かゝる堂々たる若人の隊列を御覽遊ばされる時、大御心の如何におはしますかを拜察申し上げどんなに私共に御期待遊ばさるゝか何はれて恐れ多い事でございます、此の無上の皇恩に浴し私共は御期待にそむかない様益々忠君愛國の精神を發揮し専心修養致し健全なる國民たらむと努力致し度存じます。

御親閲を拜受して

阿蘇郡白水村中松處女會 緒方美佐子

汽車は延着し電車は停電してもタイムの流には一瞬時の停滯もありません。一九三二年も刻一刻と、刻まれて参りまして畏くも 大元帥陛下におかせられては十一月八日東京御發榮親しく大演習御統裁の爲に西下し給ひて熊本縣下に於て、陸軍特別大演習を舉行せらるゝは明治三十五年以來三十年振りの事で至尊の行幸を仰ぎ奉るもまたおなじである縣民の光榮歡喜いかばかりであらう。流石に聖駕奉迎を控えし月にありて歡喜と感激の素晴らしい大渦に全市町村がまきこまれましてより十数日いよ〜十八日の日をお迎へいたしました今日ぞ千載一遇の光榮に浴すべき日として起床する身もかろがろしい各自のしたくもすつかりと〜のつて宿舎を出で集合地へと向つた空晴れて風清く身心はいやが上にも清よめられる様である。

集合地へ到れば最早や大部分は集り豫定の時刻には全部規律正しく出發し一路墨を流せる様である。エメラルドに晴れ渡り絶好のお天氣に恵まれて目的地帯山練兵場に整列し 大元帥陛下の着御をお待ち申す時には身も心もおのすとしまり

天皇旗も一そう神々しくみえ意氣は昂るのみであつたかくして緊張裡に定刻は來り信號煙火は天高く打揚げられ待ちあぐんだ私達は一層緊張せり間もなく陛下には御疲勞の御模様さへ拜せられず玉座に立たせられたり一同號令のもとに最敬礼をなせり此の時の私達の胸中……たゞかしこさに涙はとめどもなく頬をつたはるのみでした頭あげて玉座に注目する時自己も忘れたゞ魂は母國のありがたさに一杯で有つた數十分の中にいよゝ女子奉唱隊の番となり軍樂隊のいとも莊嚴なるに迎えられて血湧き肉躍り行進するも一歩一歩に力あふれる様である。畏くも天顏を咫尺の間に拜し奉り奉唱前の氣分いかばかり雜念は掃かれてたゞ一心に私等女性としての思想の幾分なりとも氣分のみ歌ふ聲も高らかに赤誠あふれて共同一致ともに宏大無邊の皇恩のかたじけなさにまたもやあつき涙の頬をつたうてとめどもなし。長き時間にわたりて大元帥陛下には直立不動にて御熱心に御覽遊ばされましこと誠に感激の極みである奉唱も終り「君が代」吹奏裡に最敬礼をなす最後に陛下の眞白き手袋の敬礼に私は感動させられましたかくて十八日の御親閱も無事嚴肅裡に終りましたけれどもまだ其の地を去る氣分はしないでやつぱり母國の幸がしのばれてまいりました大日本帝國臣民の健全なる思想の發展を計るためにさながら軍事的教育的に極めて意義ふかきこの適切なる催しは私等の前途を祝するかの如き氣分を私は痛感いたしました。

現在にある第二國民たる私等女性はこの機會に何をとらへ何を理想とし何物を實現して行くべきであらうか現在の社會は何物をさげびつゝ如何なる國難をひかへてゐるであらう、それを打開すべきは何人の手に……？喘ぎ苦しみながら急坂登る人は必ず頂上に到達すると言ふ疑ふ事なき信念を有するが故に登山の苦勞を徒勞とは思はない。輝かな至上の理想に到達の一路を信するものはよく與へられた試練を受入れ苦闘に挫折しない努力を惜まない今後母國の爲に大奮を樂闘すべき第二國民、私等女性は恥ぢざる人格者となるべきである。常に正義を重んじいかなる苦難をものごたいそ想にうして至上の輝かな理想を良き臣民を作るには先づ自己人格を修養すべきであらう自己を反省し自己を自覺し謙遜な心持で世に處して行き自己を殺した犠牲的精神こそやがては本當に立派なる自己向上の路ではないのでせうか、小をなし大にい

たりやがては第二國民の手により此の現在の國難も一掃しいやが上にも輝かしいたぐひなき國家の發展の道に努力すべきである努力と共にそこは光ある共同一致の精神を養はなくてはならない。畏き天皇陛下の御姿を拜しそれにしたのもしき男子の行動を見る時私等女性もこれにおとらじと……私達女性も文化におくれず前途たのもしき國民になるため教育勅語、戊申詔書の主旨に基き文化の理想を實現して屹度々々この際の催しの意義をふかめんことを心にちかひ母國のありがたさに心行くまで泣いた、かへりみる時過去に在りし事實を眞實の涙で洗はずにはゐられなかつた。

親親閱に感激して

上益城郡大島青年訓練所第四年次 武田神次郎

恐れ多くも世界萬邦に比倫なき萬世一系の皇室を戴き、本秋恐れ多くも玉歩を我が熊本の野に進めさせられ、親しく陸軍特別大演習を御統裁を遊ばされ、其の御有難き思召の下に御親閱を帶山原頭に御舉行相成り、畏くも龍顏麗しく咫尺の間に拜し奉り誠に恐れ多き極みであると共に我等の光榮これに過ぎるものありません。

大阿蘇の連峯は薄かすみ秋空高き帶山の原頭には清淨の白布に蔽はれたる高き玉座の上に 聖上の御尊姿を仰ぎ奉つた時、我に押寄せる感激は唯々莊嚴の感が満ちて自體には何等一物も考へない所の純白眞剣なる精神が發揮してゐる様な感がしてならない。この時の精神こそ眞の心を發現した莊嚴なる我が態度であつて、これを永遠に胸に銘じて自身の行を慎み、德行ある精神を養ふこそ御親閱を拜受した價値一層現ると共に御聖旨の幾分を果すことが出来るものと思ふ。我等は此の無上の光榮を永久に記念すると共に、昭和の聖世を祝福し古今東西に比を見ざる日本帝國をして益々名聲を發揚する條件は、一は我等自覺奮勵の如何によること多大であると共に德行ある精神の活用による事亦偉大であります。

御親閲に参列して

上益城郡廣安青年訓練所

西村政男

時は昭和六年十一月長くも、聖上陛下には聖駕を西睡肥後の地に進め給ひ、十二日より三日間に渡る陸軍特別大演習を御統監遊ばされ十五日には觀兵式十八日には御親閲の爲に帶山練兵場に臨御遊ばさる。其の間寸暇もなく親しく肥の國の教育産業の様子、民情の御視察を遊ばされ、皇軍の士氣の鼓舞と肥の國の隆昌發展に大御心を用ひ給へるを思へば誠に有難き次第である。殊に我が廣安村に於ては、陛下には御愛馬白雪を召されて小峯の地にて大演習を御統監遊ばされ、我々も陛下の御英姿を奉拜し得たるは誠に光榮の至りである。

待ちに待つたる大演習及觀兵式も無事済んで十八日は愈々青訓、在郷軍人、青年團學生等の御親閲の日である。我々も青訓生の一員としてこの千載一遇の光榮に浴するを得るかと思へば其前夜はともゆつくりと眠る氣はせぬ。數日前から大演習見學の疲れも何處へやら、鶏鳴曉を報ずる頃には冷水浴に身を清め、身仕度整へて廣崎の村はずれに集合、歩調の音も輕快に第二集團の集合所たる高等工業の運動場に至り、此處にて隊伍を整へて目的たる帶山練兵場に入る。此處は數日前の演習の激戦の跡もさつぱりと整理され先着の軍人學生青年團等各所定の位置について居る。我々も其中を行進して所定の位置につく、全く平常の練習場とはうつつ變つた清らかな氣分に自分の心もすつかり淨化されてしまつた。整列が済むとそこで一時間以上の時間の餘裕があるので一同はそこでゆつくりと晝食をすます。聖上陛下御臨幸の時刻がせまると場内は層一層と緊張して来る。時刻は来る。陛下の御召自動車に拜し奉る頃には軍樂隊の奏する「君が代」の音もいと莊嚴に、自分の頭は思はず下つて居た。愈々分列行進となると何だか一抹の不安が胸を包む。どうだらう、果して立派に分列行進が出来るだらうか、次から次へと方向變換をする頃には尙一層その感を強くした。今度こそはどんなことがあつても立派に行進して行かねばならぬと思ひながら進んで行く。陛下の御前にて頭右をするころは大休よく行進

も出来た様に思ふ、而しもうその頃は唯、感激と言ふのか莊嚴といふか、さうした有難さで胸の中は渦を巻いて居た。分列行進も無事済んでほつと一息ついた。然し青年團學生等の行進が後から後へと續いて来る、それが済むと今度は女子青年團の奉唱部隊の奉迎歌である。かうして御親閲の式も事無く済んだが、その間陛下に正味一時間以上眞白き臺の上にお立ちになつた儘全くの直立不動の姿勢を以て御親閲遊ばされ、一々御答禮下さつたのである。

陛下のこの御嚴格な御態度こそその大御心に接した人々はその有難さと嬉しさの爲涙を流さぬ者は一人もなかつた。そして自分もかう覺悟した。聖上陛下を尊ぶことは今更言ふまでもなく、今後は一層心を引しめて自己の職業に努力し、粉骨碎身家の爲村の爲國家の爲に盡力したいと。

御親閲感想

上益城郡津森青年訓練所

田上圭夫

草木の葉は枯れ吹く風膚寒く、秋空には一片の雲も無く、大阿蘇の連山を背景に帶山練兵場原頭に整列したのは、先月十八日だつた。見渡せば青年訓練旗青年團旗校旗在郷軍人分會旗目もまばゆきばかりに林立して居た。やがて師團司令部の號砲一發轟然と響くや、正面橋頭高く大國旗は揚げられた。嗚呼其の時の静けさよ、六萬六千の若人は、一語も語らず唯時折吹く風に旗がパタ／＼とかすかな音を立てるのみであつた。こんな事に遭遇したのは私には始めてであつた。か程に多くの人々が緊張して静かに成らうとは思つて居なかつた。身はしんと成り、心の底の底までしすまつて、待ち奉る鹵簿の先驅、御親閲場の西端に達した時、喇叭の吹奏滿場を壓し我が胸は高鳴り初めた。

やがて、軍樂隊のマーチにつれて玉座に注目の敬禮を奉つて行進した。聖上陛下は身動きだに遊ばされず直立不動の御英姿を以て一、一、舉手御答禮遊ばされた。そして始終參加部隊に御目を注がれし御大御心拜察するだに畏き極みであつ

た。若き乙女の感激に満ちた奉唱歌もすみ、鳳輦の還御を御送り申上た。けれども今日の邊り陛下の御姿を拜して、光榮と感激とに無限の思ひを抱きつゝ、暫くは其の場から去るあたはず、眼は熱く成り感激の涙は幾筋と無く頬を傳つた、嗚呼皇室の有難さの今の今まで書物に新聞に先生の話に皇室の有難さは幾度となく聞いたけれどもが日本の行方を知り、實際に斯程であらうとは思ひだにしなかつた。自分等は此の有難い君の國日の本に生を得て來た之に過ぐる幸福は無いと思ふ。かくも有難い御親閱が外國にどうして出來様か我等日本國民で無くては得られぬ事である、此の光輝ある御親閱此の日に此の時を期して自分の目標に向つて奮つて努力しよう之が我等の使命である。

人々は寄ると觸はると不景氣で立ち行かぬと言ふ。そうして不景氣を叫び不景氣を呪つて居る然して自分は世に此程有難いものは無いと思ふ。我々が青年時代に不景氣の來たのを喜ぶ、不景氣は我等の緩みを引締める爲の天使である。自分の家は借金爲に苦しんで居る、好景氣時代に有頂天に成り胸の太い事をすれば後で、斯く苦しむぞと、之生きた自然の教訓である。此の外現代の世は幾多の教訓を我々にあたえてくれた之により青年の性格を築き御親閱を期して家業の爲君恩にむくゆる爲一身を捧げ奮勵努力し重大なる使命を全うし聖恩の萬分の一にも應え奉らむ事を誓言する。

御親閱感想

上益城郡津森青年團員 岩 木 安 雄

天地に轟く號砲一發行在所發御の合圖東西に奉奔する騎馬警官萬般の指揮に忙殺される將校下士東奔西走する中幾何も無く 聖上陛下御着鳳の「君が代」の喇叭は場内隈なくいと森嚴に響き渡り「氣ヲ付ケ——」の號令隨所に起り斯くして感激極致の神秘的シーンは展開された。

紺碧の蒼空一抹の片雲無きは是全く本日參集せる數十萬の赤子の丹心を表徴せるものであつた。七萬に垂とする大集團は肅々と移動を開始し分列所定に至る間黙々不語不言の全員の胸中や如何に吾々八千萬國民を赤子よと慈み給ひ八千萬國民亦國父君よと仰ぐ 聖上陛下の御英姿如何にと思ふ心一様に滿溢せる胸を抱きつゝ行進す其の靜肅さ如何前月の予行演習と懸隔の甚大さ殉に全然別個の集團の如き感じがした。其の緊張振りに一驚すると共に是ぞ吾々國民の心胸に流るゝ大和魂の發露と思ふ時に無限の喜悅と絶大な心強さを痛感せざるを得なかつた。嚴肅なる樂隊に合致して意氣昂然として如何なる難關も突破し如何なる難問題をも解決し正義の國日本帝國の進路を防壓干渉せんとする國は擊攘粉碎せんとするの意氣自ら此の分列の裡に認識せしめられた 聖上陛下の御前近く到るや「頭右」——仰ぎ見る吾々八千萬國民の國父君聖上陛下の御英姿や如何に全く吾人の憶測根底から倒覆された。恐らく全員同時に其の瞬間に餘りにも簡易質素なる御英姿に一驚したであらう。全く感慨無量かねて 聖上の御質素にあらせられる事はとうに拜聞して居たが斯程迄とは想ひ半至らず斯くては何ぞ一將校と其の服裝に於て幾何の差があらうか。斯くまでも 聖上陛下御自ら驕奢をいましめ給ひその範を垂れさせ給ふ大御心を拜する時に吾々臣民は恐懼の念に堪へず、只管大君の大御心を奉戴し必然御聖旨に副ひ奉りますと固く胸中に誓つたのだつた。其の御衣亦質素なるに係らず神さながらの御龍顔ひし／＼身に迫る無量神秘な御威力吾が大日本帝國の御聖君吾々同胞八千萬の 聖上として推戴する確固不動の心強さと萬國無比無限の幸福を感じざるを得なかつた餘りにも有難いかたじけなく餘りにも勿体ないとも云ふか語らんとして語る能はず。萬感胸に滿ちて兩方のまぶた熱し兩眼潤み熱涙の流るゝを禁する能はなかつた。この感激こそ生涯至誠奉公一身を捧ぐるの誓であつた。

御親閱を拜受して

上益城郡白旗青年團 岡 本 直 人

長くも 聖上陛下には昭和六年十一月十一日陸軍特別大演習御統監遊ばさる可く英姿を肥の國に進ませ給ひ、我等肥の

國民は勿論九國の民草はこよなき譽れに誠心捧げて奉迎致したのである。そして我々青年男女は千載一遇の御親閱を拜受するの榮を得、天顏を咫尺の間に拜し奉り我等六萬六千の青年男女は皆、感激惜く所を知らず、忠君愛國の誠心いやが上にも高潮し奉公の熱念今更の如く燃え立つたのである。

私は此處に帝國臣民としての力強さを知り同時に又光輝ある帝國青年の責任が重且つ大なる事を痛感せり。實に我が帝國の興亡盛衰は我々青年若人の雙肩にある。今や我が國は内外共に多事多端である。内にあつては即ち經濟界と云はず將又政治界と云はず思想界と云はず眞に憂慮しないものはないのである。外にあつては即ち我々が最も研究を要する所の支那其れに追加して英米最も陰險なる赤國ロシアがある。然して我等青年時代を考ふるに此の時代は堅實なる思想に乏しく動もすれば詰らない誘惑に陥つたり又は危険なる思想に感溺したりするのだ。故に我々青年たる即ち第二の後繼者たる者は此の際相當の警戒を必要とする。若し我々が惡思想の感化を受け自己の天職責任を忘却したりとすれば將來の國家は如何になる可きか。其れは滅亡に他ないので。故に我々は自ら省み心身を飽くまで強健剛壯にし知能を研磨し徳育を修め方針を誤らず此の光輝ある皇國をして泰山の安きに置く可き大責任を果す可く此の光榮ある御親閱を拜受し血を以て誓ふ次第である。

感想

上益城郡田口青年練習所 山口 壽一

軍樂の伴奏！強く踏みつゝ進む我等何たる幸福な我等で有らう！

生れ来て之程の幸福にあふ自分何たる名譽で有らうか自分は、仰げば空は紺碧、見渡せば幸福と光榮にはち切れそうな人々の輝く顔、ならぶ旗數百十。響き来る樂の音、踏みつくる足音。幸福だ！幸福だ！名譽、無上の光榮。無上の喜び有り難いことだ。日本に生れた有り難さ。有り難き日本輝く日本！

萬乘の大君を御迎へする嬉しさこの名譽。再びあらんとも思はれぬ此名譽。この光榮とこの名譽を誰に語つて喜んでかう一家の名譽は無論！響き来る扶桑行進曲何とはなしに涙があふれる。止め度もなく涙が流れて来る。指揮者の頭右ツの聲が耳に入つた。仰見んとして見ゆるものは只涙に光る露の彩りのみ。なぜともない、涙！たゞ何物をも考へざるに止め度もなく流るゝ涙をどうすることもできなかつた。この涙を自分は決して拭はんとはしなかつた。

おゝこの日をこの日をどうして永遠に生かさうか、さうだ。自己には天職がある筈だ。一意自己到達の終への精進！それだ。我れを永久に生かすものは之だ！しかし目標は遠い彼方にある筈だ！自分の仕事は遠い處に理想に似たものがある筈だ。一抹心に悶えあり。それは過去の緊張の足りなかつた自分の生活の姿を思ひ浮べるのがその悶えだ。光榮にうち喜びつゝ過去のしみじめさにおのゝく自分！そうだ、過去は潔く棄つべきだ、過去は現在への参考にすれば充分である筈だもつと働かねばならぬ。もつと修養に心かけねばならぬ。有り難い日本に幸福に生きて行ける自分達ではないか明確な目標と堅固なる努力それが今一番大切なものではあるまいか自分には現在充實へ努力して明りへの輝かしい實現に憧れを抱いて一糸亂れぬあの軍樂伴奏の分列の様に歩調を進めて行くのだ。徹底せねばならぬ。なま半の友情が却つて友を害する様に自分の意志も折れては悲惨な結末を人に語らなくてはならぬ。徹底する。そして自分と共に四隣の人をも生かして行きたい。凡ての人もよかれかしと、感激に打ふるひつゝ努めよ青年奮ひ起て青年勵めよ青年と叫びたくなつた。仰げば空は紺碧みくるまの後の煙かすかにて我が心何時までも感激にうちふるふ。

御親閱拜受感想

上益城郡宮内村青年團員 花園 敏夫

十一月十八日此の日ぞ我等が豫ねて千載一遇の光榮の日として待ちに待つてゐた御親閱拜受の日であつた。我が心は躍

動する午前四時甲佐驛發列車に分乗すれば氣笛一聲列車は幾百の参加者をのせて晴れの喜びの内に黄金の波の間を縫うて春竹驛に到着した。驛前の白いアーチには奉迎々々と書き立たれ、奉迎の氣分に充ち充ちてゐた。隊伍堂々勇ましく青年團の集合所だ中學濟々營校庭に集合した。折しも今日を奉祝せんと太陽はなごやかな微笑を含んでさし登つた。此處で整列の上晴れの御親閱場たる帶山練兵場に到着した。

一天高く氣澄み渡る晩秋の候で託麻ヶ原の原頭に涼風はそよぎ太陽の光は頭上に一線を投じ今日の喜びの日を祝福してゐるかの様である。拜觀者は續々と入場し所定の位置に到着する在郷軍人分會旗青訓旗青年團旗と色とりとりで晩秋の光に照らされ眼もまばゆきばかりであつた。午後一時戸山學校軍樂隊の吹奏する莊重な「君が代」の奏樂と共に 陛下には供奉員を従へさせられ略式鹵簿で御親閱場に臨御あらせられた。さうして 陛下の御英姿を奉迎する我等七萬の九州健兒等の胸は高鳴り莊嚴の感に打たれた。陛下には白布にて覆へる玉座に登御あらせられた。斯かる中に分列始まり各大隊の行進に對して 陛下には一々擧手の御答禮を賜はつた。私は感激の極み涙で胸が一ぱいになつた。終つて全員萬歳を三唱した。阿蘇の連山を背景に帶山原頭に展開された九州健兒若人七萬の活躍は眞に空前の壯觀であつた。

當時の模様を聯想すると唯感激、感激、陛下がかねて我等臣民の上に大御心を注がれ、ことに我等青年に對して畏くも御親閱を賜はつた事を追想すれば只々天恵の有難さに感泣するばかりである。我等は日本を背負つて起たなければならぬいと云ふ覺悟を今更ながら一層強くした。

御親閱拜受感！

上益城郡北中島青年訓練所第三年次

渡

邊

進

時しも頃は十一月十八日天高く空晴れ瑞氣洋々として全九州若人の期待に期待した日は愈々來た。

全九州より集り來れる男女若人六萬六千熊本帶山練兵場に雲の如くに集り時の至るを待つた折りしも聞ゆる軍樂の響きに一同目を見張り耳をそば立たす「氣を付け」の號令一下水を打つた様な沈黙が続く、午後一時十六分嚴なる「君が代」の奏樂と共に颯爽たる御英姿を練兵場に移させ給ふ。一同は寸分の身動きもせず非常なる靜肅さである。陛下には一きわ高き正面玉座に着せらる、時しも打出す軍樂と共に龍馭肅々と第一集團より御親閱を賜はる愈々吾等の第二集團も行動を始め、陛下御面前に至り「頭右」の號令にて 陛下の御威光の偉大さにうたれ自ら頭も下り今更の如く萬世一系の皇統の世界無比にして金甌無缺なる國体がしみくと有難く感ぜられた。まのあたり 陛下の威風あたりを拂ふ尊嚴の御神容を拜します時、一同は一足事に忠誠の敬意を表し感激のあまり涙が込み上げどうする事も出來ず、只々献身報國の至情に全身が躍動するのみで有つた。「全體止れ」にて止り見れば後から後から續く數萬の若人皆同一の誠心をもつて足並揃え御親閱を拜受してゐる。それに連る數千本の青年訓練所旗團旗在郷軍人旗本日の榮え有る日を祝するが如く秋風にひら／＼として瑞雲に連つてゐる。やがて吾等の御親閱は終えられ奉迎隊は赤心以て奉迎歌を歌ふ、嚴かなる合唱に山水草木皆耳目を傾け靜肅に聞き入つて居る様である。何と畏れ多い嚴肅な事實だらう。嚴かなる「君が代」の唱歌に六萬六千の合唱練兵場内外に轟き渡る時千載一遇の光榮に浴した私は、感きわまり行く所を知らず、陛下萬歳の聲に吾等若人の心臓には愛國の誠心躍り高鳴るを禁じ得なかつた、陛下には此の二時間餘の長時にわたらせられ玉座に直立不動の御姿勢をもつて親しく御親閱を賜はりし御英姿只々感慨無量の中に時間は過ぎ行く、かくて何の滞りも無く莊嚴、嚴肅の裡に一大盛事は終つた。

此の場面にふれ此の莊嚴而も嚴肅に御親閱を拜受せし者こそ眞劍に國家の爲に奮闘努力して勇往邁進すべきでありませう。

御親閲日の感想

上益城郡御所青年團員

堀

照

雄

昭和六年十一月十八日此の日こそ我等が永遠に忘るゝ事の出来ない御親閲を拜受せし榮ある嬉しい一日であつた。その日我等は御親閲を拜受せんと午前六時第三集團集合所に集合した。こんな光榮はない、こんな嬉しい事はないなどと口々に語りつゝ宿を出れば、はや何處にも此處にも同じ帯山に行く男女青年の姿が目についた。朝ぼらけは今日の良き日に朗な夢を破りて今明け初めた。深紅の太陽、おどる我等が心。

今日我等には實に天をも貫く勇氣があつた。集合所に着いた時、そこには今日眞心から御親閲を受けんとする青年の歡喜に満ちた顔が目についた。こみ上げて来る嬉しさをおししづめつゝ我等は時の來るのを待つた。中隊を編成しやがて中隊長よりの幾重もの注意がすんで我等は帯山に向つて發進を命ぜられた。

大演習期間内降り續いてゐた雨も今日は全く晴れて、天も今日の御親閲を祝せる如く、日本晴の上天氣となつた。長蛇の如く、我大隊は道を進んで、やがて帯山に着いた。帯山にははや集まれる拜受者山の如く、いづれも時の來るのをまつてゐる。吾等は所定の場所について中食をなし服裝を正して整列した。秋半といへども照りつける日光は炎の如く暑い、午後一時はもう程なく近まつた、さゝやくもの一人もないうちに折から前面に當りて響く喇叭はこれ 陛下の御着の合圖である。全員滿腔の赤誠を捧げて奉迎した。「前へッ」やがて凜然たる大隊長の號令に我等は歩一步と前進した。進むにつれて軍樂の調べは我等をより一層緊張させた。「頭右ツ」とおごそかな號令がかゝりて、大君おます玉座に頭べを向けた時、其の時——あゝおそれおほいあゝかたじけなと言ふ心の底にまた一種言ふべからざる勇氣が溢れてくるのであつた。我等は今日こそ一生の晴れの日、日頃鍛へし術を現はすは此の時なりと、熱血こめて行進した。女子の奉唱部隊は 陛下の御前に進んで嚴に奉迎歌を申上げた。續いて全員の國歌合唱、終りに 天皇陛下萬歳を三唱した。我々は

大地も、大空も挫けとばかり叫んだ。潮の如き萬歳の聲は山びこを響かせながら天地を轟かした。そして我等はまた滿腔の赤誠を捧げて、今日の 陛下の御勞苦を謝し奉り、いとも御名残おしく御見送り申上げた。かくて一時間と數分にして今日の榮ある御親閲は終を告げた。

思ふに 陛下におかせられては、今日炎天に長時間、寸分も御動き召されず、而も少しの御疲勞の御様子もなく御立ち遊ばした御疲れは、幾何なりし事ならん、かくの如きは能く我等のなし得る處でない。實に思うもおそれおをく、もつたいない事である。それと同時に我等は日本帝國に生を享けたる事を、實に有難く思はずにはゐられない。

下人民の我等、何で日頃輕卒浮華であつてよからう。ことに國家的經濟的に一大變革を來したる今日、我等は等しく天皇陛下の、今日このやうな御示しを手本として日々の業務に忠實に働き、また、社會に出でゝは忠良なる臣民となり、一層國家に盡すの心がけを持つべきであると、強く感ぜられた。

御親閲を拜受して

上益城郡朝日南部公民學校

原

田

榮

昭和六年十一月十八日、嗚呼それは思ひ出づるも畏れ多き九州の健兒六萬餘が齊しく有難き感泣に咽びし千載一遇の御親閲に浴した最も意義深き記念日である。

東雲の空、紅にそまり、山の一端より燦然たる陽光天地一ぱいに漲る頃、隊伍も靜肅に勇ましくも帯山練兵場に向つて出發した。程なく着せし帯山練兵場一帯の大平原には、愼ましくも老若男女の、整然たる縣民總動員の姿は輝かしくも、世界に類ひなき大日本の力強さを表示してゐる。秋空一碧、東に大阿蘇の雄大、西に金峯山の瑞雲を望み、天眞たる大自然を背景に、今や御親閲の盛儀が展開されんとしてゐる。飛行機のプロペラの音も何時しか消えて、原頭の大國旗が高

く翻り、莊重な「君が代」の吹奏が禪かに流れて、午後一時十五分麗らかな陽光を浴びて銀色に光る二間餘の純白な玉座に、畏くも 天皇陛下の颯爽たる御英姿を拜した。錦の御旗が燦然と輝きわたる莊嚴輕快なる軍樂隊のマーチが吹奏され、茲に勇壯麗美極まりなき分列行進は開始された。

第一集團第一大隊より順次に、マーチにつれて堂々と進み行く。「頭右」の大隊長の赤誠こめし號令に恭しく陛下を拜せし瞬間、萬感胸に滿ち、感激の涙眼にうるみて、えも言はれぬ私の腦裡に深き一つのシヨクを刻みこまれた。分列式は嚴肅極まる中に終り、奉唱部隊の奉迎歌に尙一層ひし／＼と胸にこたへる。本山縣知事の音頭に續いて、天皇陛下萬歳の奉唱裡に一切の御親閲の幕は閉ざされた。

噫々思へば、あの「頭右」の瞬間、あの奉迎歌の餘韻、あの赤誠こめし萬歳、あの軍樂隊のメロデー、あの御親閲一切のシーン、總て未だ嘗て感受せざる感激、到底筆舌の盡くす所でない。吾々は此の感激の最高潮を永久に忘れず、あのシンを膽に銘じて、日頃心の鍛錬に努め、此の意義深き印象の種子を心の奥深く植ゑつけ、永久に忘れざるべく永久に育てよう。

今や現下の時局愈々急、日本は今容易ならぬ危機に直面してゐる。此の際、此の時、吾々青年は寸刻も凝乎としてはゐられない。新興日本の建設！祖國愛への精進！進めよ若者、臥せるものは立て、立てるものは走れ。そして身に餘る光榮に浴した甦生に新しき正道に、美はしき光明を求めて進まう。

御親閲を拜受して

上益城郡御船町女子青年

吉 住 信 子

帶山原頭に秋空碧く澄んで今や中天に輝く日の光もより強く晴の御親閲を仰ぎ奉る七萬餘の拜受者の張りきつた總てを

照して居る。果しなき廣さを誇るさしもの練兵場も九州近縣八ヶ縣下に亘る男女中學生、男女青年團、青訓生、高専校生在郷軍人會の一大集團で整然と配置された。

思へば後數十分の中に長くも尊い 聖天子の御姿を拜受し奉る私達の胸は感激と喜びとの錯綜した名狀しがたい緊張でおぼはれてゐる。すべての人の頬には紅の輝きさへ見える。場面を告げるアナウンサーの聲も一段の強みをおびて聞える。噫！思へば何と恵まれた身であらう。日夜私達の國主と仰ぎ奉る一天萬歳の 大君を迎へ奉るこの千載一遇の今日の晴の光榮に參列出來様とは……。いよ／＼緊張した寮圍氣の中に御着御遊ばす時間も迫り、空は彌が上に澄み渡り、日は隈なく晴れて、金峯の山々から遠く阿蘇の連山迄薄藍色に染えて今や畏き 聖天子の御車を待ちに待つてゐる。

正に午後一時、嚴かな喇叭一聲、「氣を付け」の號令に寂として靜まりかへつた原頭に先驅のオートバイの爆音高く、續いて一段高く臙脂に色取られた御召自動車「君が代」の吹奏裡に音もなく私達數萬の瞳に映されたのである。全身の血はいよ／＼高潮して「最敬禮」の號令に恭しく頭を上げた時そこには純白によそほはれた中央玉座の御上に直立不動の陛下が將に御立ち遊ばしてゐるではないか。あまりの御勿休なさに夢ではないかと暫し見つむれば戸山軍樂隊の奏でる勇ましい行進曲につれて晴の分列式が始まらんとしてゐるのである。銀色に輝く中學生の銃劍の揃ひ、はては色取々の在郷軍人、青訓生の旗の列、一糸亂れぬ此の嚴かな行進に恐れ多くも一々舉手の禮を遊ばされる 陛下の白い御手が藍色に輝く山々を背景にくつきりと拜せられる。私は何とも云ひ様の無い有難さにせきくる涙をどうしようもなかつた。私達に迄かゝる御いつくしみを垂れさせ給ふ、大君の御國に生れ得た我身の幸が今しみ／＼と胸にこたへて、此の小さい腕でも 大君の爲、御國の爲にはと強い信念が泉の様にわいてくる。軍樂隊を先頭に御前を進行する十二もの集團の力強い歩み、かくて此の場面は皇國の隆盛と溢るる赤誠の心のシンボルでなくて何だらう。噫！輝き進む我日本の本の磐石として動かぬ礎の精神はかくして無窮に榮え行くのである。此の秋冷の空氣の下に原頭を飾つた分列式も終を告げて、愈々はり切つた私達の心に「進め」の號令が強くひびいた。足取も輕やかに數十歩を進めば三方に別れる軍樂隊の旋律につれて玉

座間近く進行したのであつた。かくも眼のあたり、輝く御英姿を伏し拜み御紋章金色にもゆる錦の御旗の燦然と翻るを見ては唯感激あるのみである。朝夕勵んだ奉唱歌も今日の日あればこそ、指揮者のタクトに合せて阿蘇の深山も張り裂けよと聲高らかに歌つた時、おそらく三萬有餘の少女の心には口ずさむ歌そのものもなかつたと思ふ。只一生懸命だつた。聲の限りだつた。やがて嚴かな國歌合唱、それに續いて知事閣下の萬歳にこの場内もわれるばかりの高らかな萬歳の聲が三度、こだまして七萬の耳に流れ込んだ。御行幸を迎へ奉つてからこゝに一時間有餘 陛下には恐れ多くも不動の御姿勢で達の奉迎をみそなはし給ひ、龍顏特に御麗はしく「君が代」の奉送裡に鹵簿を隨へ遊ばして將に二時十六分この記念私さるべき帯山練兵場を御退場遊ばされたのであつた。

榮光に輝やく私達の燃ゆる瞳は何を云はうとしてゐるのか。恐らくこの尊い御恩に報い奉るべき強い信念の下に各自の使命を今日より明日へと進展せしめてたゆみなき我が道の上に全全靈投げ出して皇國のため勉勵すべく堅い決心があつたに違ひない。そして感激に充ちた人々の心に永久にこの御英姿と奉唱の歌とはつきぬ泉となつて力を添へないでゐないだらう。噫、記念さるべき十一月十八日はかくて人々の心にそれ／＼偉大な何ものかを印して靜かに頁を閉ぢたのである。今尙當時の感激判然と心にわき、拙いながらその日をしのんで喜びにかへたいと思ふ。

光榮に感激して

上益城郡木倉農業公民學校 柚原藤子

舍營の夜、乙女子私達の胸は明日の日の光榮に高潮して一夜轉々としてまどろむことが出来なかつた。明くれば十八日秋空一碧、今日の一大盛儀を祝するかの如く隈なき朗らかさである。早朝多數の拜觀者と共に帶山原頭へと急ぐ。「肥筑の野山に紅葉は映えて、輝く御稜威を仰ぐ。」全くさうだ。廣漠帶山原頭に漲る百三十萬縣民の赤誠の雰圍氣は、之れぞ忠

勇なる傳統大和魂の發露である。時は過ぎて、清淨の白布に被はれたる高き玉座に、今し大君は颯爽として立御あらせ給ふ。御英姿を拜する津浪の國民——打震ひつゝ拜せし其の瞬間、私達の胸は有難さに感泣し、有難さに洗はれ、御尊姿と共に金光る天皇旗の、おぼろかすむを如何ともすることが出来なかつた。頃て御親閱一大分列式は爽啖たる軍樂の音と共に始まり、一糸亂れざる歩武堂々の繪巻物、何と言ふ壯觀さよ!!日の本の行手を守る幾萬の若人の、其の力強き、其の頼もしき動きを御覽遊ばされて、定めし大御心も安らけき、ひとときを得られたであらう。

やがて私達は御前の光榮に浴しつゝ、感激の「あゝこゝにすめらみこと」の歌を奉唱す。少女等の赤誠こめてお待ちせし喜びの聲を、私達八千萬大御親は如何に聞こしめされたであらう。ただ辱なさに幾度か迫り来る胸、打震ふ胸をどうすることも出来なかつた。最後に「君が代」奉唱。赤誠こめし聖壽無窮の萬歳の大どよめきは、暫し、火の國大阿蘇の噴煙もゆらぐかと思はれる間に、恙なく御盛儀終り 陛下の御鳳輦は行在所へと滑る。思へば御親閱開始より終りに至る迄、長時間直立不動の御姿勢にて在はし給ひし、御謹嚴其のまゝの至尊の大御心を拜察するだに恐れ多き極みである。光榮と感激との洗禮を浴せられし私達は無限の思ひを抱きつゝ、帶山道路をうつむく。

御仁慈深き大御親を戴き、世界の強剛と伍し迎ふる年、送る日毎をただに安らかなるは、これいづくより惠まるゝ幸ぞおゝをろがみて感激せよ、泣けよ、感泣の勢き涙は、私達大和撫子の心を隈なく清澄に洗ひ、日の帝の赤子としての本分を完全に果たさしめるであらう。

御親閱にのぞみて

上益城郡廣安處女會員 福島千代子

十一月十八日午前七時我等熊本奉唱休は市立高女に集合、整列をなして帶山練兵場に向ふ。

この日如何かと心配してゐた天候、今日の御親閲を祝してか、日輪の光くまなく筑紫の平野を輝かし吹く微風我等の心を清めさせ歩み行く心一步々緊張に緊張を加へさせるのみである、町々の折水の跡もすがすがしい。やがて御親閲式場たる帯山練兵場に着く、鹿兒島縣を除く沖繩、山口各縣の若人が待ちに待つた御親閲式場である。午後零時三十分頃御親閲受團体が所定の位置に整列をなして、陛下の着御を今か今かとお待ち申し上げる。

やがて「氣を付け」の喇叭を吹奏し始める我等七万余名不動の姿勢を取る、何たる光榮の日よ！かくて軍樂隊の奏する「君が代」の奏樂が終へた頃ほひ、聖上陛下には玉座に着御あらせられた、再び「君が代」の奏樂裡に全員最敬禮をなす本山熊本縣知事玉座の御前に前進し御親閲を仰ぎ奉る旨を奏上がありやがて軍樂隊の奏樂裡に全員分列を始める、畏くも聖上陛下には御みすからを以て各團体の校旗、團旗に御答禮を賜はり、その有難さ何とかしこきはみだらう、やがて女子奉唱隊たる我等一万五千人は指揮者の號令に依り正面玉座に向つて前進をなし奉唱位置に着く、秋空一拭のもとに玉休を拜み奉る我等の幸を如何にせん「ああこゝにすめらみことのみくるまをむかえまつれり!!」あまりの有難さ身に沁みて涙流るゝ我等の心靈は只光明と感激に躍る。大阿蘇の連山を背景たる帯山原頭に流る、萬代までに語つても語つても盡きそうにない心の奥から奥からとわき出る無量の感!

天皇陛下萬歳を三唱する、「君が代」奏樂裡に御還幸遊ばされる。唯々夢心地である今日の有難さと云ふより外に云ふ言葉を知らない。「何事のおはしますか知らねどもかたじけなさに涙こぼるゝ」西行法師の言葉をしみく心に感じた

御親閲にのぞみて

上益城郡廣安村處女會員 西山ふじ子

十一月十八日!!大演習を御統監遊ばしました。聖上陛下には私達乙女にも御親閲を賜はると新聞紙上で拜讀致しまして、

その時の私の悦び到底筆舌に依つて云ひ表すことは出来ません。

昨秋宮城二重橋での御親閲に不健康のため拜受することの出来なかつた私は夢ではないかと思ふほど嬉しく眞?虚?疑はざるを得ませんでした、ところが「虚にあらず」でございまして野山は錦なし菊花の香も芳しく空高く氣澄める十一月十八日!!此の日こそ永劫に忘れる事の出来ない有難い印象深い日でございます。帯山練兵場に御輦をお迎へして畏れ多くも我等火の國の乙女は、聖上陛下の御正面に於て御親閲を拜受致し奉唱歌を奉唱するなど無上の光榮に浴しました拜受致します時自ら感涙頬を傳ひ心身に緊張するのをおぼへました、御親閲遊ばします。陛下には長時間に亘らせ賜ひ直立不動の御姿勢で少しの御疲労の御模様も遊ばされず又私の豫想は他所に極めて御質素な御服装、實に女性としての私又第二の國民を養成すべき責を負ふ者としての模範とすべきと思ひます。本當に斯くの如き情景は「君民一致」である我が國でなくては到底見出す事は出来ないでせう、身に餘る光榮に浴しました私達は以後益々修養に努め心身を練磨し自己の職業に精勵し滿洲の野に出ですとも内にありて必ず御奉公申上ぐ可く努力しなければならぬと思ひます。

感想

上益城郡乙女村田口處女會 岩村照子

莊重な軍樂の音に響かれて並び立てる人達、みどりの空に翻る日の丸の旗が私達の心をじつとうつてくれます。たゞ涙が流れ出ます。止め度もなく涙が流れ出ます。

嚴肅とも言はん莊重とか言はんさうしたものを一度通り越して何とも申すことの出来ない只々感激の心で一ぱいなつて仕舞ひました。仰ぎ奉る陛下、畏き陛下、涙で拜めませんでした。國旗も涙で光つて見えます。列び居る人々も

涙で光つて仕舞ひました。奉祝の歌が！前奏が耳にはいりました。

何と言ふ名譽でせう。有難いことです。何といふ光榮のことです。有り難いことです。日本に生れたればこそ！永久の喜びで有ります。涙で！涙で歌が出ませんでした。歌はんとして一層涙があふれました。

おゝ大事な場合名譽な場所と感じたのも一瞬やつぱり有り難い心で凡てがぬれて光つて仕舞ひました。拜み奉るさへ有り難い極みなのに御祝の歌さへ奉ることの出来る私達！只自分の歌のみが聞えるようです。自分自身どんなにして立つてゐるかさへわかりませんでした。心の底の底まですみ切つて響いてくる曲の流れに私の心はすべてが洗ひさらされてゐました。この光榮とこの名譽を何に残しませう。

幾世つゞけて語りつゞけられるでありませうこの光榮の日をどんなにして記念いたしませう。さう、私自身を美しく生かしつゝ自分のこの感激に一ぱいになつた心を永久に生かさねばなりません、自分を生かすことです。よりよく生かすことです。光榮と名譽を！感激を正しく生かさねばなりません。私と共に凡ての人々がみんな、よりよい生活になるように努力いたさねばなりません。自分一個の力はたとひ小さくとも明るい生活への一歩には違ひありません。御互喜び合ひ感激し合ひ涙を流して語り合ひ得る人達と共に現在生活をこの喜びでこの光榮に輝く心で尙一層輝かせ女性の生くべき道にしつかと足を踏みつけて正確な歩みをいたしたいものです。女らしさの天地へ女らしい意氣と希望でそしてほんとうの女らしさの生活に正しう生きたいものです。莊重な軍樂の響きがまだじつと耳に残つてゐます。幾世語りつがらん光榮の日、感激の心かときめきます。いつまでも心のときめきがやみません。仰ぐ聖恩の無窮。心のときめきがやみません。

御親閲を拜受して

下益城郡杉上東部農業公民學校

寺

田

渡

私は本校杉上東部公民學校補習生より選拔せられて九州山口沖繩九縣の青訓處女會並各學校男女生徒約七萬人の御親閲

分列部隊に参加しました。實に盛大に舉行されました。此の生徒諸子は誠に有難き大御心に感泣せざる者は唯一人も無く胸には湧然として忠君愛國の精神に燃え熱情が漂つて居りました。

畏くも 聖上陛下には連日の特別大演習御統監並地方御行幸等に付御疲れ遊ばさるゝをいとはれ給はず天幕を撤去させ給ひて御親閲を賜はつた其の御仁徳眞に感泣の外ありませんでした。御親閲拜受者は實に實に此の上も無い無上の光榮と存じた次第でございます。

吾等は大に身体を鍛錬し以て質實剛健なる精神を進歩せしめ延いて忠君愛國の精神を堅固ならしめ協力一致中堅人物となり國民精神を發揮したいとの覺悟を深くしました。

聖恩に感泣して

下益城郡杉上西部青年訓練所第三年次

松

永

睦

十一月十八日……おゝそれは吾等の憧憬の日、永遠に記念するの日だ。小春日和とも言はん絶好の日和に恵まれて、六萬五千の若人の血湧き肉躍り胸は榮有る今日を迎へ得た其の喜びに感激して高鳴るのでした。

陽光咄々と立登り九時の集合時になると部隊長の號令勇ましく、高等工業の校庭に整列して各個人の一舉手一投足にも愈々緊張した面持です。やがて幾百の團旗、校旗は宙天に朝風を受けて翻り、帶山練兵場を目標に行進曲を奏るのでした。今日は龍田の山の松杉の緑も一入鮮かに山麓の大津往還を東上して、小積橋より右に折れ、新鍋南部、保田窪を通つて延々長蛇の如く皆の心は無言の中に緊張して歩を早めるのでした。かくして九州各縣より集ひし男女青年團、青年訓練生、在郷軍人、男女中等學校以上の生徒等實に六萬五千、十五集團に分たれて、それ〴〵皆指定の場所へと幾多の代表旗を先立て、隊を組んで集合し吾等青訓生は第二集團に屬して居るので先づ練兵場の東端の中央に位置して小憩の中に冷たい握

飯をかじり腹をふくらしたのです。やがて晝頃になると空は愈々明るく、空を見上げて吾等の胸はどんなに小躍りした事
 でせう。練兵場の北方に面した所に設けられた玉座の純白さと、コバルトの秋空と相和して輝しく十二時過ぎる頃には早
 や大官連、外國武官、陪列、陪觀、參列員等續々出場整頓して皇族殿下の御姿も遠く拜されました。かくして時の移るに
 連れて、廣い練兵場の廣野も言ひ知れぬ緊張味が加はつて來たのです。

時に一時十五分……勇ましい喇叭の合圖と共に「氣を付け」の號令……戸山學校軍樂隊は莊重に「君が代」を吹奏し始
 めました。五尺に餘る休驅の全身に唯緊張した面持の中に 聖上陛下には御召の自動車に召されて、玉座の下に御着御遊
 ばされ、「君が代」の再奏に陛下には玉座に御尊影を運ばせられました。本山縣知事は御前に進み、御親閱を仰ぎ奉る旨
 を奏上されました。參加部隊一同感激に高鳴る胸を抑へてうやくしく敬禮をしました。やがて軍樂隊の演奏と共に第一
 集團より愈々御親閱の行動に移り、第二集團の吾々も小草を蹴つて一齊に行進を起し玉座の前を大圓形を畫いて、軍樂隊
 の奏でる行進曲と、草を踏むさつ／＼の音は相交響して胸を打つのでした。吾々の部隊も玉座近くに分列隊形を整へて進
 み緊張味は益々加りて、我有るを知らず五十米近くに來たかと思ふ時「捧げ銃」の號令にて頭右……をして二十米餘りも
 進んだかと思ふ時 陛下には長くも吾々に擧手の禮を賜はり御聖徳に唯全員一同國民としての感激の最高潮の涙の中に御
 親閱を拜受しました。他の部隊へも天機うるはしく擧手の禮を賜はり、場内はたゞ緊張と感激と壯觀の大繪巻ものでした
 御親閱が濟むと隊形を整へて奉唱部隊は前進して御前に進み樂隊と合せて奉迎歌「肥筑の野山に紅葉は映えて」……朗
 かに九州乙女等の榮有る今日の尊い日を心からお迎へする歌なのです。それが濟むと知事の音頭で萬歳三唱、九重の奥深
 く響く様に遠く肥筑の野山をかすめて行くのでした。今度は又知事より御親閱の終りたる旨を奏上致しました。其の間約
 一時間御微動だに遊ばされなかつた 陛下には若き赤子等の敬禮に對して擧手の禮を賜はり再び御召自動車に召されて大
 本營にと御歸還の途に着かせられたのです。

萬世系の子天子、世界に類ひ無き所の 陛下を上へ頂き、目出度く御親閱を拜受した吾等は此の御聖徳深き現つ神の大

御心の萬一にも副ふべく奮勵一番、自己の職業に邁進し延いては國の爲君の爲にと努力致すべく此處に深く／＼自覺致す
 のと同事に不斷の努力を惜まない事を誓ふものであります。

御親閱の光榮に浴して

下益城郡杉上西部青年訓練所

堀 坂 廣 喜

十一月十八日……おゝそれは我が熊本縣民にとり否、否、御親閱拜受者にして決して忘れる事の出来ない感銘深き佳き
 日であつた。明年十一月には熊本縣下に於て大日本陸軍特別大演習が舉行せらるる其の時にかしこくも 今上天皇の御行幸
 あらせられ一般臣民にも御親閱を行ひ給ふとの事を早くも豫知せる熊本縣民は此の千載一遇の光榮に浴し得らるゝ時代に
 生れ合せたる己の幸運を喜び今日よ明日よと待ちしに早くも歲月は流れぬ。

待ちたる十八日は來りぬ。午前三時小學校々庭に集合直ちに自轉車にて出發す。全青訓生の二割七分と言ふ人員制限中
 の一員になり得しは實に自己一代の幸運と言はん我等は第二集團の第二三中隊として熊本高等工業學校裏校庭に集合午前
 九時隊を組んで帯山練兵場に至る各所より集り來る人此の道に相合し市内より練兵場まで一寸の餘地もなし。

此の日天氣薄曇りにて此の上なき佳き日なりき整頓せる市街の店頭に日章旗ひるがえり奉迎の意十分に現るさすがに廣
 い熊本市も至る所人々々々をもつて埋められぬ練兵場に整列を終りぬやがて打鳴らす百一發の祝砲天地にひびき人心いよ
 よ緊張す此の時嚴かに起る軍樂隊の「君が代」の吹奏終りて奉唱部隊の奉唱歌あり我等は不動の姿勢を保つやがて大隊長
 の號令一下直ちに行進は始まる。日頃の訓練數回に渡る練習もこゝに於て遺憾なく發揮せんと心に誓ひ行進す 天皇陛下
 におかせられて終日無事に終らせ給はんことを神に祈りつゝ歩一歩と前進するにしたがひ精神の緊張一絲亂れざる人の足
 音嚴かに吹奏する軍樂隊誰一人として咳するものもなし……

突然起りたる大隊長の號令私の頭はほとんど無意識に右四十五度の角度を保つバツと目にうつりたるは九尺の臺上に直立不動の姿勢を保たれたる嚴正なる 今上天皇の御英姿……あゝこの君あればこそ世界の一等國民として幸福に暮し行かれると思へば有難さ骨肉にひびき何事も言ひ得ず……此の時 天皇陛下におかせられては嚴かに擧手の禮をなし給う。

此の國家多難の秋内に經濟國難思想國難外に國際問題等々善處して行き給ふ日夜の苦心さぞかしと思ひやられて自ら眼に露の宿るを禁ずるを得んや……號令にはつと我にかえりて行進す身体は恰も電氣にでも打たれたるかの如く緊張し全身に汗の流るるを感ず、古言にも「勇將の下に弱卒なし」とある如く我が國の如き 天皇が御在ますればこそ彼の日清日露の兩役にも近くは歐洲大戰濟南事件又今回の日支衝突の如きに於ても日本軍の犠牲的精神献身的努力とにより一回の恥しめも受けず皇國の威光を遺憾なく發揮し得たるは實に歴代の 天皇及び 今上天皇の御威徳のしからしむるものならん此の様なる國家に今日生れ合せたる我等の幸福何ものかこれに如かん。世界の一等國として益々發展せる此の國をば背負つて立つべき第二の國民たる我等の任務の如何に重且大なるかを知るときに於て輕毛にも比すべき我等の身命國家の爲犠牲になすこと何程のことやあらん。

聯隊止れの號令にはつと我にかえれば帶山練兵場を一週して元の地に來るを知る。嚴かに「君が代」を歌ひ縣知事の萬歳の聲に連れてあらんかぎりの聲をしぼりて萬歳を三唱す、其の聲天地に轟き有明海の魚もさぞ驚きしことならん。皇國の永遠に榮えまさんことを神に祈りつゝ歸途につく。

御親閱拜受

下益城郡杉合東部青年訓練所

濱 田 藤 雄

「ぢや氣をつけてね」「では行つて來ます」 寶石を散らした様な星は空一ぱいにまたたいて居る。ふう／＼と云う笛を

合圖に自動車は氣持よくすべつて行く。

御親閱／＼僕はどんなに待ち焦れてゐたことだらうか、木枯吹き荒む冬の朝或は水田の水までには返る様な眞夏の下で訓練を受けた事もあつたそんな時にも少なからず刺戟を與へた事は事實だつた。幸に僕は無缺席で進んで行つた、今日選抜されて参加する事の出来るかと思へば嬉しくて胸一ぱいに成つて來た。地上の物は後へ／＼と走つて行く自動車は益々突進を續ける。いつの間にか憧れの帶山練兵場に着いた。六萬有餘の同胞は長蛇の様に續いて居る。

ばん／＼ 陛下の御着の合圖が上つた、陛下は軍樂隊の奏樂にて玉座に着御遊ばされ、錦の御旗が朝風にひるがへつて居る御前でいよ／＼分列式は開始された學生青訓生と次から次へと林の如き團旗及び銃劍は天を壓する様な意氣込みだ、すぐ僕等の番だと思へば全身が水にでも清められた様だ軍樂隊の太鼓に次第と揃つて來た。大隊長の號令「頭——右」にて龍顏を拜することが出來た。陛下には一々御答禮遊ばされ吾々此の上もない光榮である。其の時一種言ひ知れぬ靈感に打たれて何と感謝の言葉と言つてよいかわからない。

宏大無邊なる皇恩に對し僕は第二の國民なり、若々しい青年男兒なり、土の香りに親む農民なり、青年の意氣と熱と力とで米國はおろか世界全國に類いなき瑞穂の國と成さずにおかれるものか、否々成して見せる。そうして骨格たくましく日本男兒となつて一旦國難起りたる場合には身命をささげて御恩にむくいたい覺悟である。

御親閱を拜受して

下益城郡守富東部農業公民學校高等科三年

牧

山

十二月十八日今日は青訓時代に於ける好紀念の御親閱日である。榮ある今日の御親閱も愈々訪れて我等若人の血湧き肉躍る活躍の日だ。學校集合教官以下十七名は我が母校を出發した。嬉しさで胸は一杯、一步と足を熊本へ運ばせた、我が

訓練所は第二集團第三大隊第二十三中隊だ。高工のグラウンドへ集合集團長の命令の許に帯山練兵場へ向つた、陽の光は勇ましく我等幾萬かの青年男女の心も勇まし廣々たる場内へは先づ玉座が設けられ其の右側には日章旗が翻り各集團は整列し我が二集團は中央に座らし中食を済し 陛下の御幸臨を御待ちした。やがて勇ましい喇叭の音と共に爆音勇ましく御召自働車は戸山軍樂隊の樂の音と共に御豪臨遊ばされ静かに止つた御召自働車より御降り遊ばされ玉座へと御立ち遊ばされると同時に分列が軍樂隊の樂と共に開始された。「君が代」萬歳。今は名残惜しや軍樂隊の奏する樂と共に大元帥陛下は幾萬かの民を後に靜まり返つた場内を出御御還幸遊ばされた。

噫思へば年來より待ちに待つた御親閱も無事に済み 陛下の御盛徳を忍びつゝ電車にて歸郷の途についた。

御親閱を仰いで

下益城郡守宮西部青年訓練所 平 江 常 記

御親閱の日、熱望の十一月十八日は訪れた。この日、畏くも 聖上陛下には三日間にわたる大演習の御統監を了へさせられ續いで各學校各地に教學の振興、産業の開発の爲め行幸遊ばされ御疲れの御身も御いとひなく微民我々を御親閱遊ばさる。我等の榮譽、我等の幸福この上もなく我等の魂は躍りに躍る。

その日午前六時三十分、我第二集團は高工の校庭に集合。東雲の空明るく頃幾十の雁列東より西へと飛び去り天氣清朗絶好の御親閱日和である。集團の前列に位置して爽々たる朝風に颯として翻る數十旋の訓練所旗を見れば轉心中の勇躍を覚える。やがて整列婉々として帯山に向つた。遙か大阿蘇の連峯を背景にした帯山練兵場は専門學校、中等學校、青年訓練所、在郷軍人、青年團、處女會等實に七萬、場の周圍は拜觀者も埋もれ準備を整へて 陛下の臨幸を待つ。やがて嘖嘖たる「氣をつけ」の喇叭響きわたりて一齊に捧げ銃 聖上陛下には今や着御あらせられんとす。たゞ聞くものは莊重

る「君が代」の奏樂、たゞ見るものは竿頭高く輝く大日章旗、場裡肅然として神威自ら場を壓し恰も遠き神代の古を偲ぶ重ねて「君が代」の奏樂裡に齒薄整然として着御あらせられ玉座に御起立遊ばし給ふ。その颯爽たる御英姿を遙かに拜し奉り崇嚴の靈感に打たれ感涙に咽ぶ。折しも天上雲晴れて陽は豊かに、地上塵清められて氣は嚴に、大繪巻物の大分列は學生隊を先頭に展開せられた。

見よ 天皇旗燦として輝く所、隊長の指揮刀一度旭に閃き捧銃の劍光たゞ目映くも覺ゆ。勇壯なる軍樂隊の行進曲、錦繡燦然たる校旗團旗數百旋、三十有八の大隊は勇往邁進の氣漲る。我等また第三大隊として玉座近く御英姿を拜せば畏くも辱くも御擧手の禮を賜はる。嗚呼我等の心、將に此の時の狀を何によつて表はし得べき。玉座を遠ざかりつゝ感激胸に滿つ。式終りて「あゝすめらみことの風聲を迎へまつれり」と奉唱隊の聲、莊重にして窃に襟を正さしめる。續いて國歌合唱にて本日の式を終る。さるにしても 陛下には一時間餘も不動の御姿勢にて御直立遊ばされ親しく御親閱を濟ませ給ふ。我等はあまりの辱さに遙か玉座を拜し奉り感激措く能はず。

あゝ上に一天萬乗の御仁慈深き大君を戴き、地に悠久不變なる國土を踏む我々は身命を抛ちて國を愛護するの念に燃え高く聲を絞りて「天皇陛下萬歳」を三唱す。

かくて列を正して歸る途すがら我はふと來るべき軍隊生活に思をはせた。人生の硬教育即ち他力修練の好舞臺たる軍隊辱くも明治天皇より「汝等を股肱と頼む」と仰せられたる帝國軍人の向ふ所に何で不可能の文字があらう。我は數多の徵兵適齡男子中より選ばれたる名譽を有したるに更に又斯の如き軍隊にて教育を受くるかと思へば不肯又自重せざるを得ないのである。あゝ天地と共に窮りなき帝國の民と生れ、今日御親閱の光榮に浴し更に近く名譽ある帝國軍人の一員たらんとす。あゝ幸多き我なるかな。

御親閲を拜受して

下益城郡豊川村青年訓練所 吉 田 守 保

私共の訓練所は生徒總數百餘名で其中二十名の選に入つたのさへ嬉しいのに千載一遇の聖天子の御親閲に参加の光榮を得たとは誠に自分ばかりが家門の名譽でこの上もなく家内中の皆が喜んだ。私は其の後孿生に注意して體の健康を祈りつゝ来る日を待つた。

その當日は九州全土山口縣の各種團体の代表者に依つてさしにも廣き帶山の練兵場も壓せられた。午後一時聖上陛下には供奉員を従へさせられ爆音勇ましく場内に進ませ給ふ。喇叭の響「君が代」の奏樂場内俄に水を打ちたる様になり咳一つだに聞えない。長き英姿は龍顔いとも麗しく玉座に立たせ給ふその神々しさ！海行かばみづく屍山行かば草蒸す屍の感を今更の如く深うした。そして私の血は湧き肉は躍り今日こそ大和島根の若人の意氣を御前に現はす時であると天地も崩れよとばかり堂々と歩んだ。聖壽の萬歳も叫んだ。

その間一時間餘りの長き間一々御會釋を賜はり御身動きだに召されず赤子の誠心をみそなはせ給ひし大御心誠におそれおほく何として御奉公を盡したらよいかとつくつくと身にしみて奮起の念が湧き出でて止まなかつた。噫忘るゝことの出來ない御親閲十一月十八日。

御親閲を拜受しての感想

下益城郡小野部田青年團員 西 村 武 雄

十一月十八日、この日こそ忘るべからざる幸福な日であつた。朝は曇があつたが夜明けては一點の雲なき、御親閲日和となつた。濟々奮にて分列部隊に編成され午前九時過ぎ帶山練兵場に着いた。練兵場は早や拜觀者參列者拜受團体の人々

で黒山を築いた。これ皆忠孝一致の我國でなければ、見る事の出來ない光景である。同胞すべて愉快に嚴肅に陛下を御待ちしてゐる。國の内外の難事もこの臣民の緊張した精神で努力したら、何事も出來る事と思つた。豫定の時間が來ると國旗と喇叭の合圖で御召自動車に着いた。一同最敬禮をした後分列式が始まつた。

陛下には御側近く御親閲下され、御尊顔を間近かに拜する事を得たるは、何物にも替へ難き光榮である。陛下には一時間有餘始終不動の御姿勢にて、御答禮を賜はりし事は御壯んであらせられる現れで、なほ有難き極みであつた。

この幸福なる機會を得ました私共は陛下の御心を安じ奉り國家の繁榮を圖らねばならぬ。國內にありては思想國難經濟國難と重ねての難事外交にありては、日支事件突發して我國の立場は急を告げてゐる。我々昭和の青年の責任は重且つ大である事を覺ゆ。現在農村の窮狀を救ひ國家を安堵の域に置くは、我々の各自の職業に勵み身を立て家を起すにある。寸暇も惜みて精勵して國難に當ることを心掛けねばならぬ。有難き御親閲を拜受しての感じをそのまま述べたれども、言ひ盡されざる點多き事なほ大である。

御親閲を回顧して

下益城郡河江青年訓練所第三年次 中 村 義 人

昭和の聖代此處に年を重ねる事將に六星霜晚秋十一月噴煙天を覆ふ大阿蘇の麓將た近くは明治西南戰爭遠くは南北兩朝時代の古戰場菊鹿平野を中心として肥筑の山野に陸軍特別大演習を舉行され長くも 聖上陛下には親しく御統裁皇軍の威容を贊はせられ引續ぎ寸分の御暇もなき地方行幸の御事あり。民情を察し、地方教化を布かせ給ふ。あまつさへ我等青訓生其他無慮八萬の大衆を御親閲遊ばされ我等又此の比類なき恩典に浴す其の光榮と有難さに唯恐懼感激の外はないのである。

待望の十一月十八日は来た。我等時の御親閲に浴する在郷軍人、青訓生、男女青年團の數百名は東雲の空未だ明けやらぬうちに臨時列車にて小川驛を出發した。午前七時熊本驛に下車した吾等は愈々高鳴る血潮を押へて隊伍堂々晴の場所帶山練兵場へと繰込んだ。此の日は快く晴れて清爽の氣満つ秋日和、午後零時二十分朗らかに照る陽光の下に我等は同じくこよなき聖恩に相會する鹿兒島を除く全九州山口沖繩の在郷軍人學生男女青年團青訓生八萬の大衆と各自躍動する胸を静め乍ら威儀を正し整列を了して今や陛下の御臨幸を待ち奉る。午後一時十分肅々たる鹵簿は正面の玉座前に着御陛下には直ちに玉座に上らせ給ひ、此處に光輝ある御親閲の式は開始された。先づ第一集團より分列行進に移つた。見よ感激に燃ゆる若人の意氣と颯々たる歩調とを更に秋風に轉じ、幾千の校旗團旗青訓旗分會旗の威容を仰げば陛下には玉座に嚴として直立あらせられ、御機嫌麗はしく吾等を聞き給ひ且つ長くも擧手の禮を以て吾等の敬禮を受け給ふ。あゝ何等の光榮ぞ。「頭右」して陛下を拜する吾等は感激の高鳴りに歩調も亂れんとする。あゝ、こゝに我等は無上の光榮に浴したのである。ついで女子青年女學校生徒よりなる奉唱部隊の奉唱もすみ満場の人の至誠の心より咽喉も破れと高らかに唱ふる。陛下の萬歳を最後として嚴肅莊嚴のうちに吾等が永久に記念すべき御親閲は全く終りをつげた。

御親閲を終へて自分は何んか考へた。吾等は此の名譽ある御親閲に浴し限りなき聖恩に報ふる爲め如何に此の身を處すべきかを。惟ふに國家隆昌の基礎は實に我等第二の國民たる青年の双肩にかゝり特に今日の如き時局困難にして内外頗る多事多端の折柄我等の責任は一層の重大さを加ふるのである。自分は茲に更めて自分の責任立場を強く反省し且つ現時の世相を考へ日本國民として將來國家の中堅たるべき青年として特に堅實なる農村の青年として更に一層の自奮自勵以て皇恩の萬一に報ゆべきを誓ひたいのである。

御親閲の感想

下益城郡海東村青年訓練所 米村甚藏

大空高く掲げられし大國旗は晩秋の風に翻り帶山練兵場頭六萬有餘の御親閲拜受團体は等しく光榮と歡喜の波に打振ふかに見えた。思へば我々はこの光榮ある御親閲拜受の一員として選拔せられ、この光榮の渦中にあり、責任重大と一身の幸福に自ら心の緊張するを覺えたのであつた。

天皇陛下御來着に軍樂隊の莊嚴な「君が代」は幾萬奉拜者の魂を洗つた。待つ間程なくきこえる御召自動車のサイレン愈々息づまる感激の波に場内寂として聲なく、等しく玉座を仰いで聖姿をお待ち申し上げたのであつた。何といふ嚴肅な其の光景であつたことか。

やがて玉座につかせられた 聖上陛下の御英姿を拜んでは、唯有難さに聲もなく、ひし／＼とせまる御威光に國民的自覺を深くするのみであつた。

六萬有餘名の分列はいとも嚴肅に行はれた。歩武堂々折からの日光に映えて劍光帽影は、燦として輝き爲に天地を壓するかの觀があつた。その間陛下は絶えず玉臺に立たせられ各大隊に擧手の禮を賜ひ端正なる御態度を以て終始せられたのであつた。私はこの御嚴格なる御姿を拜して今更恐懼おく所をしらなかつた。

思ふに陛下の御高德は天成のものであつて、我々の村度すべからざるものではあるけれども、萬民の師、萬民の父として深く御修養をつませられた結果は尙更に光輝を増したものである。御親閲を終へて村へ歸り光榮の歡喜尙新に朝に起き夕べにねむる、其の時々に深き尊き印象を回顧してはおごる心をいましめ慚意の心を叱つて日常の修養につとめてゐる。これも陛下の尊き御力の故かと感拜するのである。當日をしのんでは感激を新たにし陛下の御英姿を思つては感奮の希望を高めるのである。こゝに無難なる感想の一文を綴つて送る次第である。

御親閲を拜受して

下益城郡中山青年訓練所第三年次 藤 本 荒 太

昭和六年十一月十八日、此の日御親閲を仰ぐ鹿兒島縣を除く九州各縣並に山口縣の總數六萬六千人。高等専門學校中學校青年訓練所青年團在郷軍人等早朝よりさしもに廣き帶山練兵場を埋めた。天皇陛下には一時十八分供奉員を従へさせられ「君が代」の奏樂裡に場内中央の玉座に立御あらせらる。御英姿を仰いだ拜受者全員は最敬禮を行ひ、此の光榮に浴する。自分は唯々「あゝ有難い」の他に何とも表現する言葉が知らなかつた。やがて喇叭の音の鳴り渡ると共に軍樂隊の行進曲につれて諸隊の分列行進は始められた。畏くも天皇陛下には各隊毎に擧手の禮を賜ひ詳かに御親閲あらせらる。男子部隊の分列行進を終りて所定の位置に復するや女子奉唱隊は最敬禮の後「あゝこゝにすめらみことの」の奉迎歌の合唱をなす。終へて熊本縣知事の發聲により天皇陛下萬歳を三唱した。陛下には二時十二分全員の奉送を受けさせられつゝ「君が代」の奏樂裡に御機嫌麗はしく御退場遊ばされた。

嗚呼我等は青訓生の一員として此の光榮に浴するを得た。と共にこの感激、この光榮を永久に記念し、益々國家の隆昌と國威の發揚とに力めなければならぬと云ふ心を強くした。

御親閲の光榮に浴して

下益城郡年福南部青年訓練所 古 賀 來

昭和六年十一月壯絶なる陸軍特別大演習を肥筑の平原に舉行され、原頭には錦の御旗が翻り、兵馬は錦旗の下に雌雄を決せんものと大活躍を演じたのである。其の後を承けて十八日に九州山口八縣下の郷軍、青訓生、青年團、男女學生、處女青年團等其の數實に六萬六千の御親閲を仰ぐこととなり、我が年福南部青年訓練所生徒も此の光榮を浴することが出来

て誠に感激に堪へない次第である。

一同は御親閲場たる帶山練兵場に隊形を整へ、御親閲の時刻を只管まつた。いよいよ午後一時大本營御出門の花火は轟然と宙空高く轟いた。各大隊の大隊長が「氣をつけ」の號令をかけるや六萬六千の全員は水を撒いた様に肅然として陛下への忠誠を内に躍らせて玉座に視線を集めた。一時十分、軍樂隊の「君が代」吹奏裡に御召自動車に御親閲場に御進車遊ばすや、たゞ森嚴、たゞ感激、たゞ熱涙の湧くを覺えた。

やがて大元帥陛下には御玉歩を玉座へ進めさせ給うて御直立遊ばさるゝや九州山口八縣の縣知事は陛下の御前へ進み出て御挨拶申し上げ退下されて、愈々御親閲となつた。軍樂隊の行進曲につれて第一大隊より前進を初め、第二大隊それに続き、我が第三大隊も第一第二大隊に劣らず威風堂々肥の國武士の誠忠を示し、莊重なる足どりで玉座の前まで進軍するや「頭右」の號令がかゝつて一齊に頭右の御敬禮を申し上げ陛下の御英姿を目ともに仰ぐことが出来た。

陛下には一々御擧手遊ばして、御會釋を賜はつた。其の瞬間何とも言へぬ感激に打たれて、目は有難涙にくもり、たゞ感涙にむせぶのみであつた。さうして我ながら我が身にあらす陛下に捧げられた我が身である事をつくづく感じた。郷軍青訓、青年團、學生の御親閲が感激の中に終へて、處女及び女學生が奉迎歌の奉唱を申し上げた。其の時もたゞ「あゝ」の感激で一杯だつた。胸はつまり、目は涙で曇り、我ながら自己を知る事が出来なかつた。最後に國歌の合唱から天皇陛下萬歳を三唱した時は何が何やらわからず感激の絶頂に達して、聖恩の廣大無邊なるに感泣し、たゞ天に向つて聖壽の無窮を絶叫したのであつた。一時間の長時間に亘る御親閲に陛下に於かせられては御英姿を少しも御變へ遊ばさるゝことなく御親閲遊ばされたのである。其の御尊嚴なる御英姿は古來及び全世界を通じて無比であらせられることを必々感じた。斯くも尊い御親閲を拜受した吾々の幸福や何にたとへやう。感銘深い御親閲に浴したる我々は聖恩の無窮を膺に銘じて皇室の榮を祈り奉り、皇國の發展を期せねばならぬ。

時恰も滿洲事變に際會し、國を擧げて國難にあたる時機に到來して居る。斯くも切迫したる時機に大元帥陛下の御親

闇を仰いだ吾々の任務や重且大である。吾々は萬全の慮置をとり、全身全靈をあげ、粉骨碎身以て國難にあたり、皇國の爲に一身を捧げねばならぬ。

御親閲を受けて

下益城郡年福青年訓練所 徳 永 年 行

昭和六年十一月十八日。この日こそ我等が永久に記念すべき實に千載一遇の御親閲の光榮に浴した當日である。昨日まで降り続いた驟雨も今日は名残なく晴れ渡つてうらかな日和となつた。眞に天恵である。元氣に充ちた若人達は意氣揚々として集合所に集まり行く。帯山練兵場には人の山が築かれ、所せまいと思はれる程である。定められた場所につき中食をすまして時の到るを待つ。時間は刻々に迫つて行く。日章旗は晴れ渡つた晩秋の空に輝いて、陛下の臨幸を待ち顔である。

間もなく大本營發御の合圖の號砲は響き渡つた。萬人はひとしく緊張した氣分で御着を待つてゐる。午後一時いよいよ着御あらせられ玉座に玉歩を運ばせらる。御英姿を拜して一同水を打つた様に靜まり切つてゐる。軍樂隊の樂の音、ひらめきわたる青訓旗、團旗、分會旗、さながら征戰の途に上るが如き勇ましい有様である。分列式が始まつた。劍の林、肩の波、武歩堂々、實に力強さを感じずには居られない。我が部隊の順は來た。氣分は緊張の極に達した。音樂の音と共に「分列に前へ進め」の號令で足並揃へて進む。「頭右」。長くも陛下には、直立不動のまゝ大部隊の分列に對して一々擧手の禮を遊ばさる。御若き帝の御英姿を拜し奉るとき血は湧き、感激の極に達して有難涙にかきくれずには居られな

「海行かば水づく屍、土行かば草むす屍、大君の邊にこそ死なめ顧みはせず」

との歌も今更の如く思はれて大君のためには水火も辭せないといふ氣分で地の底までもひびけと強くふみしめ、天までも届けと聲を限りに萬歳を奉唱せずには居られなかつた。

奉唱隊に加はりて

下益城郡松橋町處女會員 大 庭 勝 子

十一月十八日!!! おゝ其の日は私達四千人の乙女が忘れ様としても忘れることの出来ない日でございます。時今秋は闇にして山々の木々はおみちに映えて秋の火の國は一層の美しさに飾り立てられてゐました。朝の帳はそと切り落されるのと共に私達は鼓動する胸のおのきを靜かにおさへながら今日の光榮に浴する事の出來た幸をどんなに喜び、且又どんなに感泣した事で御座いませう。かゝる愚なる身を以て長くも天皇陛下の御前に……と思ふばかりでも身がぞーつといりました。はたして私達はこの責任重い難關を無事に果し得るであらうかと云ふ不安が一杯で時の進むのがどんなに待ちどほしいことで御座いましたでせう。

一分一秒はや時計の針は一時十五分、長くも陛下の御乗車は帯山練兵場内の規定の場所に運ばれました「氣ヲ付ケ」の號令に私達は緊張の上に緊張致しました。そして遙か彼方より流れて來る音律に身も心もひきしまり、あたりは水を打つた如き靜けさに歸り、私達の陣からは知らず／＼の間に涙が溢れるのでございます。軍樂隊を先頭に私達は前進致しました。唯何事も考へず有難さ尊さに心は一杯でございます。さうして私達の視線は遙か彼方の御座所に御立ち遊ばさる聖上陛下の御姿へと集注されたので御座います。大元帥陛下として大演習の御統監の御爲めこの火の國に御下り下さいまして、連日ののげしい御統監に少しの御つかれなき御模様!!おゝその御英姿何とまあ尊く神々しくあらせられました事でせう。唯々感極まつて、頭は自然と前に垂れ下り何とも云ひ知れない神秘的な感じに打たれました空はあくまで澄み

渡り吹く風は清く、軍樂隊の奏するメロデーは、あたり全体にこだまして今日の佳き日を聲高らかに祝して呉れるのでございます。「今こゝにすめらみことの」と奉唱歌を慎んでお歌ひ申します時、腹の底より溢れる熱情と共にうれし涙がこみ上げてくるのでございます。瞳はうるみ、聲はつまり、出る涙を打ちはらひ、やうやく歌ひ終えました時は……おゝそこからもこゝからも、かすかなるすすり泣きの聲が聞えるではありませんか、あゝみんな、我身の仕合せにむせび泣いてゐるのでございませう、涙は止めどもなく流れます、「君が代」を奉唱いたします時、三唱いたします時、その一句、が身にしみて、あゝ何と致しませう、何と書きませう。たゞ、出来るだけの力を出して、出来る丈聲を出して涙と共に、陛下の御幸と國家の安泰とを御祈り申し上げました。

あゝほんたうに私達はこの上もない身にあまる光榮に浴しました。この記念すべき日にあたりまして、私達乙女は大日本の女として大日本の母として大に修養し大に目ざめて婦人として道を間違へず立派に務めはたす事を一層ちかつて止まない次第でございます。

奉唱隊に加はりて

下益城郡小川町女子青年團 宮崎 ぶき

あゝ、今すめらみことの風聲を迎へまつれり風聲を迎へまつれりみ光に、阿蘇の高嶺も有明の海もかゞよふ。あゝ、今すめらみことのみ姿をおろがみまつるみ姿を拜みまつるみ恵のいかなる幸かかしこさに涙こぼるゝ。あゝ我等生けるかひあり、おほけなき今日のほまれを、おほけなき今日のほまれを萬世に――

おゝ!!誠になんと言ふ身の幸であらうか。生けるかひあり!!生けるかひあり!!我等今日の日の幸を受くべく命を授けられた事を心から感謝せずには居られない。はしたない何の取柄もない、賤しい身のこの我等が現つ御神と大八洲知ろし食す 天皇陛下の龍顔をかくも身近く拜せらるゝ光榮に浴する事が出来ようとは、いかなる幸であらうか。おゝとこしへ

に我が玉の緒の續くかぎり、我等は此の日の光榮を胸に秘めて、人々に語り傳へるであらう。又語り傳へないでは居られぬであらうと思ふ。あゝ、我等生けるかひあり、おほけなき今日のほまれをおほけなき今日のほまれを萬世に語りつぎつゝことほがむ一つ心に――

あゝ勿体ない!!暫し歌ふ事すら聲に出でなかつた鴻毛よりかろき賤しきこの身常ならばおん影すら拜する事も出来得ない身にもかゝはらず、このはえある光榮を擔ふことを得たといふ事はいかなるしあはせであらうか。たゞ、大君の廣き御心深き御恵みに依るものと、感涙に咽ばずには居られなかつた。陛下には、雨の中を毫もおいとひなく、乗馬にて、數日間にわたり、大演習を御統監遊ばされ、連日の行幸、又行幸に、玉体もさこそ御疲れ遊ばされたらうと拜察し申し上げるものを、民草の熱誠をはかり給ひての聖慮にてか、いさゝかのおいとひの色なく、今日この御親臨に御臨幸あつたものと、拜察する時、陛下の如何に我等國民にみ心を注ぎ遊ばさるるかを拜せられて、勿体ないといふやかすには居られないのであつた。

思へばこゝに立ち給ふ陛下、我等の國土をしろしめす日の御子、この日の御子の光あまねき所、整然たる秩序の下に法律は施行され、生命財産の安全と、永遠の平和は約束されてある。何といふ有り難い國に自分は生れ合せた事であらうか、しみじみ感謝せずには居られない。如何に廣漠たる國土を擁し、幾億の人口を有し兵力豊富なりとしても、個々の國民は、一日として心の底からの平安な日を過すことの出来ぬ支那といふ國は、何といふ哀れな國であらうか。無秩序不統一の國情は、一日として安易な日を迎へ過さしては呉れないではないか。それといふのも、彼等を好く統制し、彼等の光となり、希望となり、或る時は、父となり、母となる或る目標が無いためではなからうか。彼等を治めるに幾人の英雄? (馬賊上り多ければ) はあるにはある。しかし、不統一な幾つかの政府を作成し、私腹を肥すためには、國民に重税を課して苦しめたために、國民は、慕ふ所か、彼等の政治をのろうて居る、しかし多少でも行動に現はさうものなら、忽ち命を奪はれる事を知つてゐる、弱い國民は、彼等の下にしひたげられつゝも不平不満を如何する事も出来ず、それでゐる金と

命の欲しい無智の國民であれば、その慾望を満たすに掠奪、暴行を以て本職とする如き觀がある。もし自分が支那の國民として生れて来て居たらと、考へるだに戰慄せずには居られない。弱きものゝ住む國土ではない、己が國の掟の下では安逸な日を送る事は出来ず、むしろ我が大日本帝國の保護を乞ふものが滿洲に於てのみ十數萬もあるといふ。あゝ憐れむ可き支那の國民よ、それにくらぶれば 陛下のみ恵の温い光につままれて、日々を安らかに過ごす自分達は何といふ仕合せな國民であらう。これは恐らく自分のみの感激では無く、幾萬の奉唱隊の少女子の胸も同じ心ふるへて居たものか、その日ラヂオの實況放送を拜聴して居たといふ母や姉は共に口を揃へて、奉迎歌の三番は如何にも感極まり、聲ふるへ、思はず感涙が止めどなく頬を傳うたと言つた事であつた。おゝ、この一瞬の感激、自分は一生忘れはしまい、氣落ち、心亂れた時、この折の感動を思ひおこす時かならず聖恩の尊さと報恩の誠とを誓はずには居られぬであらうと信するのである

三つの感想

下益城郡砥用町農業公民學校高等科第一學年

森田 よしえ

畏くも 聖上陛下には今秋特別大演習御統監の爲め肥筑の地に御臨幸遊ばされますことをもれ承りましてより私ども肥州の民草は如何に其の幸榮の日をお待ち申上た事です。私を奉唱隊の一員にお加へ下さいますことを聞いた母はその喜びを私以上に喜んで下さいました、着物のことや病氣せぬ様にと色々お心盡し下さいます私を爲めにわざ／＼其の日の晴着さへもこしらへて下さいました十一月十七日午前四時母の心づくしの晴着におどる心を包んで家内一同に見送られて家を出ました。未だ明けやらぬ薄暗の夜路を急ぎ集合所に着くと間もなく一同はおなじ喜びを抱いて車上の人となりましたエンジンの響さへ私共の今日の門出を祝つてくれる様です。出發の間際校長先生と専任の先生から「元氣で無事にお歸り」と一同を見送つて下さいましたその言葉そのお親切が未だ新しく身に染みてゐます、無量の感慨と感謝とを滿載

して自動車は未だ明けきらぬ町を後に一途熊本に向つて發車しました。

豫行演習も無事終了し明ければ十八日長蛇の列は今日晴れの御親閱場なる帶山に集合し各隊所定の場所にひたすら着御をおまち申上りました。大本營御發の報が秋晴の空にとゞろき渡ると十數萬の群集等しく緊張の裡に 聖上陛下には玉座に御直立遊ばされる軍樂隊の奏する樂の音に分列式は開始されました、其の統制ある行動訓練されたる動作私達の始めて見る又又と見難い壯觀です、指揮長の打振る旗を合圖に玉座近く進みたる私達奉唱隊寂として聲なく御健かなる御聖姿を奉しては自ら頭は下り我知らず目頭のにじみさへ感じました、再び起る樂の音につれて今日を限りと歌ふ歌聲は一聲に和して朗らかに託摩原頭に響き渡り、最後の君が代萬歳三唱の頃身の何處にあるかも忘れてその幸福、光榮に包まれて他にもものもご座いませんでした。その間 聖上陛下には御みじろぎだにもなさいませす至尊の御身を以て私共に一々舉手を賜はりました。其の大御心をお察し致しますに唯感激そのものが感涙の中から自づと湧き起つて参りました。

思へは上に一天萬上の大君を戴きそのあまねき御威徳の恵みに安住し、二つには私達を直接お導き下さいます世の先輩諸先生方の御情に生き、三つには温き、心の親兄弟と和し、つゝがなく日々を送る幸福を心から感謝致します。

御親閱を拜受して

下益城郡杉上西部校専攻科

大橋 八重子

菊花薫る此の好季節に當りて、十一月十二日より三日間我が肥筑の野に於て陸軍特別大演習が行はれた事は誠に縣民一同の無上の光榮とする所で、衷心感謝に堪へない次第である、其の時長くも 聖上陛下には、親しく御統監遊ばされ給ひ其の御ついでを以て九州近縣八ヶ縣下に亘る青年男女の、血湧き肉躍る若人約七萬名に及ぶ御親閱の盛儀を行はせられる事となつた、私も此の千載一遇の一大盛儀に參列して尊き御聖姿を拜み得たことは實に無上の光榮と思ひます。約七萬名

中一萬五千餘名は、私達第一第二第三女子奉唱部隊であつて、私達第三奉唱部隊は市立高女に集合した。あの廣き校庭も光榮に輝く美しき乙女達で、立錐の餘地もなく、美しく飾られたる熊本市の東郊帯山練兵場へと参入した。この日一片の雲もなく前日に劣らぬ秋晴の爽かさ、北東の風稍強けれども寒からず、誠に御親閲に相應しい日和。やがて午後零時半、玉座に西面して整列し、雲霞の如き一般拜觀者を共に聖上の御着を待ち奉る。

一時號音一發式場入口の竿頭にスル／＼引揚げられた大國旗祖國の聖き姿赤き心を青空高く描いた日の丸の旗風に萬衆の心も自から引締る。突如「氣を付け」の合圖の喇叭遠近に響き渡れば、廣き帯山寂として音を潜め軍樂隊の「君が代」吹奏裡に御召自動車御着、龍顏麗はしく玉歩を運ばせ給ひ清淨雪を欺く白敷布の高き玉座に、肅然として立御あらせ給ふ聖姿の神々しさ、御紋章金色に燃ゆる錦の御旗は、原頭の風に翻りてさながら一つの名畫とも云ふべきである。華やかな軍樂隊の行進曲に合せて、こゝに御親閲の一大分列式が始まつた、其の彩色さまざまの校旗團旗をかざし蜿蜒長蛇の大陣形となつて、足並揃ふ美事さは實に壯觀のかぎりで、私達には始めて、見られる一大偉觀であつた、分列式が終ると軍隊に合せて私達奉唱部隊は三方より玉座の御前に凹形を描いて靜止し、軍樂隊指揮の下に「あゝこゝにすめらみことのみくるまを迎へまつれり」の奉迎歌を奏でた。あゝ其の時こそ覺えず涙が溢れて感激に高潮された其の聲は又となく澄んで美しく思はれた、次で君が代の美樂有る限りの全大衆の合唱である、熱誠溢るゝ其の聲は大地を響かし、遠雷の唸りを生ずる其の莊嚴無比、實に言語に盡し難い、本山知事の音頭で「天皇陛下萬歲」の熱叫三唱は、再び全大衆の口々から迸つて帯山原頭を揺がした。此の間實に一時間餘、聖上陛下には終始直立不動の御姿勢を取らせ給ひ、一々御會釋を賜ふ大御心げに拜察するだに畏き極みである。

あゝ西日本の精華を擧げた大繪卷はかくして滞りなく終了した。誠に私達は何と云ふ幸福でせうか、まのあたり行幸を仰ぎ御英姿を拜して、光榮と感激と矜持とに無限の思ひを抱きつゝしばし御車の還御を送り奉つた。おそらく又とこんな光榮ある盛儀に參與することは無いでせうに、待ちに待ちし此の佳き日も何と云ふ御名残惜き記念すべき日でせうか。

御親閲式に参加して

下益城郡杉上西部農業補習學校

土持チエ子

あゝ何といふ、私は幸福者か、やさしき土が育ててくれた。野べの乙女も、今日は此の帯山に於て、有難き、御親閲を許されるとは私はあまりにうれしい、身も、心も、飛立つばかり、唯々、偉大なる何物かに對して、感謝せずには居られない、空はあくまで晴渡り、廣々とした練兵場は、もう拜觀者で一ぱいになつた。右に、左に、整列した、各郡の處女、女學生の方々、今日は何れも晴々としたお顔付、だれもかれもうれしいのであらう。皆自分等の姉妹かと思へば懐かし

さうして居る間も、天皇陛下のお出が待遠しい、早く御姿を拜みたいものだ、待ちあぐんでみると、向ふの方が急にさわがしくなつた、けたまひしい自動車の音つゞいて、ズドンと一發合圖の大砲の音、私はハツとして思はず緊張した。今、天皇陛下には高臺の上に立たせ給ふ。一同最敬禮の號令と共に、靜かに頭をさげた。やほら頭を上ぐれば、はるかに答禮を賜はる。陛下の御姿が見えて、ほろりと、涙こぼれ御慈悲の程が、しのばれる。やがて軍樂隊の音につれて、青調在郷軍人、中等以上の學生の行進となつた。皆姿勢正しく、足並揃へて、美々しき旗そよ風になびかせ、正々、堂々たる有様は、實に、勇ましかつた。きつと、陛下には、御満足に思召した事でせう。しばらくして行進は終つた。次は奉唱部隊の番となつた。勢のある進めの號令と共に、軍樂隊につゞく奉唱部隊は、いよ／＼陛下のおん前近く、五十米迄進んだ。一同かたちを正せば、最敬禮の號令莊重にひゞきわたる。一同恭しく頭を下げる、しばしの後見上ぐれば直立不動の姿勢をなし給ひし。陛下の御姿、今は間近に拜されて、麗はしき御尊顔を拜し奉る私は思はず國の親様お懐かしゆうございますと心にさけんで目禮した。あたりはしんと靜まり返つて、水をうつたやうである。一分二分時が立つにしたがつて不思議に心の靜まり行くをおぼゆる、おゝそこには、陛下の偉大なる御光明の輝きに照されてか、心の奥底に、新しい

希望の輝きと、女性に生きんとする道が明かに見出された思はず微笑まずにはおられなかつた、やがていとも嚴に樂器の音が流れた、ア、コ、ニ、聲がつまつた。目頭の熱くなるを覺ゆ、一同の聲も涙にくるうてゐた。でも今日は皆歌が一致して非常に元氣に満ちた良い聲のやうに思はれてうれしかつた。次に國家合唱、いよ／＼お別れとなつた。臣民こそつて君が代の、千代八千代にお榮えあらん事を萬歳三唱と共に。

御親閱感想

下益城郡杉上西部農業公民學校

中 島 綾 子

嗚呼回顧すれば畏き身にしみたうときあの面影は今だに胸を去りやらぬ光榮なりし十一月十八日の思出大空には一片の雲もなく清空涼風絶好の秋日和、朝日は美しい陽光を、光榮の熊本市に浴びせて、洋々とのぼります、其の日こそうら若き青年男女の血わき肉躍る晴の一日で有りました、廣々たる帯山練兵場をうづむるが如き奉迎團の集ひを見ました時何とも言へない、同胞のいつくしみと、なつかしさを感しました、其の大群の中にこの不束な私が加はつて共に 陛下を御迎へしたとは、何たる幸で御座いませうか。

はるか彼方の玉座に長くも 陛下の御英姿を拜した時、誰一人として微動たにせぬ。嚴肅な静けさで有りました。翻る旭日の訓練旗は、きらびやかな旗波をうたせ、學生團の持つ鉢は林をなして、壯然きわまりなき分列行進の有様女子青年團のゆるやかな前進等すべてが唯一の印象として私の胸に永久に残る事で御座いませう、畏くも 陛下の御前で奉迎歌を奉唱する時萬感胸にせまり唯、感激に腫を潤すばかりで有りました、民草の眞心こめて三唱する萬歳の轟きは天地にひびき遠き四方の連山にもこだませよとばかりひびいたので有りました。陛下には御微動だにさせ給はず御直立遊ばされて御熱心に御親閱遊ばされました。陛下の御英姿を目前に拜し乍らあふるゝ涙に腫はくもりはつきりと拜する事が出来ま

せんでした。光榮の式もいさぎよく終り 陛下の御列車はエンジンの音も靜かに帯山を後に御還幸になりました。

私達は盡きせぬ名残を胸にいだき乍ら帯山を出ました。其の一日の内に市街を御通りになる 陛下を幾度か拜しました嗚呼其の神々しさ、私達凡人の筆に書きうる所にあらず、かくも畏き 陛下のもとに民草として生存する私達はいよ／＼日本女性としての覺悟を誓はずには居られません。すべてが私達の誇りと感謝致して居ります。不幸にしてこの光榮にも浴する事の出来なかつた人々にくらべて身の幸福を喜ばずに居られませうか其の目目にし、耳にしたあらゆるものに名残をおしみつゝ、陛下の面影を胸にえがき乍らえき前に立ちましたが早あたりは夕闇につままれて居りました。やがて汽車は光榮なりし私達をのせて汽笛と共に發車致しました。歸りの車窓より、ながむる夜の都の美しさ、ならば電燈そびゆる洋館すべてが華で有りました。光榮なりし日の思出

尊き其の日

下益城郡豊野南部處女會員

村 瀬 ふ さ ぶ

嗚呼!!十一月十八日!それは永久に忘れる事の出来ない嬉しくも尊きそして意義深き日であつた。思へば長い間の空想が實現化された其の日。今を盛りの庭の菊も今日の佳き日に一入香り高くも美しく感ぜられた。未だ夜も明けやらぬ曉のやみに處女一同學校に集り、トラック二臺にて熊本帯山練兵場に向つた。御親閱、生れて初めての事であり、又初めて拜する 陛下の御姿、九州各縣下の處女青年及び中等學校以上の學生、數萬に及び、かねて教育に御心を用ひ給ふ 陛下とは存じ上げ乍らもこうした機會に遭遇して一層その感を新にしたのであつた。我等は將來國家を背負ふべき者なるが故にかくも特別な御心情をたれ給ふかと一入 陛下の御仁徳を偲び奉りて感激さらに深いものがあつた。

寸暇をおしみて學びし奉迎歌を口づさむ我等をのせてトラックはひた走りに進む。途中見る物配く物總てが喜びであつ

た。其の喜びに私は人々に對する一種の感謝の念さへ自ら湧くのを覺えたのであつた。愈々帶山練兵場の入口にて下車してそれより各團體の席につき約一時間餘お待ちする間も感激にふるへた。

午後一時すぎ 陛下は玉座に御到着遊ばされた。莊重なる軍樂隊と共に在郷軍人青訓生及び學生の分列が行はれ最後に處女及び女學生の奉唱部隊が出て、奉唱歌を歌ふ。風吹きすさみて樂隊の音が時々朗らかにかすかにひびいてかへつて莊重の感を深くした。陛下は長い間段上に直立不動の姿勢をもつて玉座前を行進する分列隊に一々御會釋を給ふ御様子を遙かに拜し何とも言へぬ感に打たれたのであつた。愈々式も終りて名残を惜みつゝ車上の人と成つた。

私達永久に當日の氣持を忘るゝ事は出来ぬであらう。あの燃へる様な意氣と誠實とを永久に持續して行く事が出来たら我等は本當に幸福であらう。我等の前途は永い、眞實なる生活の中により良き向上の二字を求めて、日々修養して行く處に我等の前途は明るい何かを見出すことが出来るであらう。眞實の道の奥には眞實に輝く殿堂の建設されつゝある事を信ずる。この信この熱情を私ははつきり此の度 陛下を拜した事に依つて私の胸に植ゑつけ得た事を限りなく喜びとする。

御親閲を拜受して

八代郡植柳村青年團員 矢 鉾 康 雄

昭和六年十一月十八日。嗚呼何と感激に満ちた意義深い、そして光榮の日だらう。未だ嘗て經驗しない。そして終生忘るゝ事の出来ない尊い體驗即ち日本國民としての情熱に燃え、眞の自覺に醒めた日だ。

未明に起き出でた苦痛、車上の混雑、熊本驛より帶山に至る三里餘の徒歩、疲労、すべては感激そのものに被はれ、心の醜不快の一切は消失し、そして爽やかな厳かな大氣に包まれた。七萬の若人、學生、青年、在郷軍人、處女等皆等しく感激に満ちて至尊の御親臨を待ち奉る。靜々と大國旗は帶山西端に掲揚され、煙花一發青空に響く。心は彌が上に緊張又緊張。

張。「氣を付け」の號令。軍樂隊の「君が代」の奏樂。胸は高鳴る。

至尊の御姿、純白の臺上に立たせ給ふ。燦として秋風に搖ぐ天皇旗。「最敬禮」の號令頭は自然に垂る。仰げば至尊の御姿の神々しさ、若き聖天子の端然たる御姿、それは國体の尊嚴、悠久、皇統の無窮、建國の御精神そのまゝの御姿。「前へ進め」いよゝ御間近に至尊の御姿を拜するのだ。軍樂隊の行進曲、目は輝き、足も軽く、隊伍堂々前進する。「分列に前へ」あゝ愈々至尊の御姿間近に拜し奉るのだ。胸は高鳴る。一步一步大地を踏みしめゝ前進する。「頭——右。」至尊は御舉手、御會釋をたれ給ふ。凡ての自己は没した。あゝ光榮、歡喜、感激、茫然たる中に我は力強き眞の日本人に甦生した。一步一步、感激の前進だ。女學生、處女會員の奉唱歌、「君が代」の奉唱、すべては至尊を迎へ奉る感激、歡喜の旋律だ。涙、頬を傳ふ。

天皇陛下萬歲。萬歲。萬歲。天地に響く、誰の聲だ。自分の聲だ。甦生せる日本國民の生きて強き、感激、歡喜の聲だ。「君が代」の奏樂裡に還御し給ふ。

あゝ感激の此の日よ、若き尊き聖天子の神々しき御姿。それは建國の悠久、國体の尊嚴そのものゝ如くに拜し奉る。微動だにし給はぬ端正そのものゝ御姿、集團毎に垂れ給ふ有難き御會釋、それは建國の御精神そのものゝ如くに拜し奉る。あゝ至尊の有難き、それは道義そのものゝ如く拜し奉る。あゝ今日の光榮其れは何であらう。あゝ今日の感激そは何であらう。眞の日本帝國臣民としての覺醒だ。眞の日本國民としての甦生だ。あゝ昭和六年十一月十八日、それは尊き感激の日だ。光榮に充ちた歡喜の日だ。

御親閲を拜受して

八代郡龍峰青年訓練所第二年度 岩 山 久 治

嗚呼一生を通じて身に餘る光榮に浴する時は來た。今日昭和六年十一月十八日午後零時半、七萬の若人は緊張に緊張を

重ね、當に御親閱を拜受すべく、天皇陛下を帶山練兵場に迎へ奉らんとしてゐる。

やがて煙花一發、國旗は遙かに竿頭に揚り莊嚴なる「君が代」は軍樂隊によつて奏せられた。陛下には今しお着き遊ばされたのである。かたじけなくも我等はもうすぐに御親閱を拜受するのだ。省みれば、火の國に生を受けて、此の千載一遇の光榮に浴するとは何といふ幸運児だらう。有難さにいつしか頭は下り、兩眼のまぶたが熱くなつて來るのを覺えた。「頭——右つ」バツと下つた訓練所旗の上より、玉座にお立ち遊ばされた御英姿をかすかに拜み奉つた瞬間、何ともたとへやうのない神々しい感に打たれ、只陛下の御壯健を祝し、且つお祈り申し上げた。いよ／＼第一大隊より分列式は開始され、我が第四大隊もすん／＼陛下の御前に進んで行く。言ひ知れぬ感激の中に突然「頭——右つ」元氣潑刺たる大隊長の號令！緊張は絶頂に達して勇往邁進する。

嗚呼、御英姿を間近に拜する時は來た。胸は高鳴り満身の熱、兩脚は空を蹴り兩手は前後にち切れ飛ぶかと思はれる。その瞬間皇恩が針で突くやうに身にしみ、一朝事ある時は粉骨碎身して陛下の御爲に盡さう、平常に於ても一心籠めて聖旨を奉體し、本務に奮勵努力して、益々國運發展の基礎を堅くしようとの覺悟が電光の如く心中にひらめいた。「なほれッ」やがて我が隊も停止し、陛下を遠くに拜しつゝ熱血したたる若人の分列式に見入つた。陛下には尙微動だにも遊ばされぬ。只時々擧手の禮を賜はるのみである。渦巻く旗は光榮に輝き、満場は感激の大増場となつてたぎりにたぎる奉唱歌は歌ひ出された。今し乙女は感激の絶頂であらう「あゝこゝに……」餘韻は帶山の四方に流れて九州全土に擴がるやうに思はれる。續いて全員は今日の感激の限りを心に籠め、高らかに「君が代」を合唱した。暫くしてラヂオの報する「天皇陛下萬歳」の聲、之こそ熊本縣知事が熱誠を以て音頭を取られるのであらう。我等は之に和して萬歳を三唱した聲は阿蘇山にこだまして、天地も爲に崩れんばかりであつた。と忽ち起る啞啞たる「君が代」の奏樂、お名殘惜しくも天皇陛下には帶山練兵場を御發榮遊ばされるのである。全員は謹んで奉送申し上げた。今や御親閱を拜受して二十四日なるも、感激は昨日の如くである。我等はいつまでも此の心を以て修養に勉め、職務に

勵み、必ず聖恩の萬分の一に報い奉らんことを期する。

御親閱を拜受して

八代郡吉野青年訓練所第一年次 桑 原 保

十一月十八日 空は紺碧に澄みわたり、千切雲さへなく東方は阿蘇の連山浮彫の如く鮮かに、西方雲煙の彼方に雲仙を

望み、日本晴の託麻原頭に集ふ若人は、山口より遠く沖繩に及び、其の數無慮六萬六千なりしと云ふ。午前十一時全く集合を終り、劍尖は陽光に輝き、掲ぐる校旗國旗はそよ風に翻り、一種侵すべからざる偉觀なり。其の場を取圍む幾十萬の一般拜觀者を縫ふて、兩薄の先驅練兵場西端附近に達したる時、「氣をつけ……」の喇叭にて、我等は直立不動の姿勢をとる。響き渡る軍樂隊の國歌吹奏と共に御着御、直ちに展望臺へと玉歩を運ばせられ、全員之最敬禮を終り、軍樂隊の行進曲に合せて、各専門學校學生を先頭に青年團青年訓練生中等學生と、六萬六千餘の各團體は、歴史ある校旗國旗を掲げ、分列は開始せられたり。「第三大隊第十八中隊前へ！進め！」踏出す脚は威風堂々、はち切れんばかりの意氣全身に充滿、唯聞ゆるものは、大地を踏みしめる靴音、勇壯なる軍樂、翻る國旗校旗の音、各將星の指揮の聲のみ、玉座近くに進むにつれ、一種言ふ可らざる嚴肅さを感じ。

「あゝ盛んなるかな！あゝ盛んなるかな！」斯くも盛大なる事何處の國にも有り得るものに非ず。唯々萬世一系の

天皇を戴く我が國にあるのみ。何と盛大なりし事よ。「あゝ盛大なるかな／＼」。軍樂隊の伴奏にて奉唱歌隊の奉迎歌も、知事の萬歳三唱先唱に依れる萬歳も、一は千載一遇の我等の喜びを上聞に達せんとし、一は陛下の萬歳を祈り奉りし我等の赤誠なり。

吾等は直接に其の赤誠を捧げ得たり。我等は永久にこれを記念し、常に自己の本分に誠心をこめて聖恩の深厚なるに報ゆるの努力精進なくしてやまんや。

御親閲を拜受して

八代郡河俣村青年團員 岩 本 正 勝

秋色深く肥後の山には紅葉はえて菊の香高き十一月十八日熊本縣を中心として近縣から集まる若人の心血は高鳴る、頓て定刻午後一時十分「君が代」の奏樂が起ると共に風聲肅々として入御し給ふ。分列行進は直に開始せられた。風にひるがへる幾千幟の團旗、カーキ色の團服きらめく劍光、夫が勇ましく行進曲のリズムと共に軽い砂煙をたて、大波のゆれ行くが如く次へ次へと歩武堂々行進を続ける。「第三集團!!分列に前へ」愈々吾等の集團の分列、夢我夢中精の限り根の限りの力を出して行進、集團長の「頭右」の號令に、仰げば畏くも白布の壇上には鮮緑の山を背景として、嚴として御答禮あそばされる御英姿、その神々しさ言ひ表はすべく餘りに尊い、美はしくも雄渾な感にうたれる。私はこゝで我が皇國のみがもつある「偉大なるもの」を感得した。

何事のおはしますかは知らねども

かたじけなさに涙こぼるる

と歌つた西行の實感直に私の實感であつた。我が尊嚴なる國體の本質は斯くして理屈でなしに實感として我が胸に追つて来る。何とはなくして眼頭が熱くなる。夢の様な氣持になつてリズムの中に巻きこまれてしまふ、六萬六千の健兒。列する若人の心は必ずや我々と同感であつたと思ふ。

あゝ思へば我々は今日の此の光榮を、日東帝國に生れた有難さをしみじみ實感することの出来たといふ事は私の生涯に於けるこの上もない光榮としみじみ思つた。陛下から與へられた、國民としての本分を發揮せなければならぬと深く覺悟した。

御親閲を拜受して

八代郡下岳青年訓練所 山 本 正 巳

十一月十八日此の日こそは一生一代の光榮に浴する御親閲拜受記念日で一日千秋の思ひして待ちに待つた日であつた。午前三時青訓生一同は足音軽く我が下岳校を出發しそゞろに陛下の御英姿を頭に描きつつ帯山練兵場へ到着した時はさしもの廣場も旗と人とで埋まつてゐた。時間は刻一刻と迫る。今日は一生一代の晴れの日なので十二分に陛下の御尊顔を拜し奉らんとセカンドを刻む時計に心をくだいた。愈々分列式は開始された。軍樂隊の奏樂は次第に高くなるザクザクと歩調を揃へて進む、先頭部隊!壯嚴極まりなき陛下の御英姿!!「頭つ右——つ」の號令に心は皆躍る。列中唯我あるを知りて他あるを知らず。白き御手の動きを眼のあたりに拜するの光榮を擔うた我は我を忘れて歡喜と有難さに眼に時ならぬ露を宿した。かくして嚴かな中にも喜びのうちに始めの場所に着いた時、畏くも陛下には直立不動の姿勢を以て各集團毎に御答禮の御姿を遠くより拜察し涙はこぼれた。

噫!神乎人乎あきつみ神の大前にぬかづく光榮を擔ふ、我等若人の心は血潮の躍動をどうすることも出来なかつた、此の有難い國土に生を受けた我等の幸福!此の好期に御親閲を拜受した代表者の喜び!噫!子々孫々に至る迄筆に止めて残したいとの感が胸を往來した。十一月十八日忘れんとして忘れられない。御親閲拜受の記念日永久に今日の幸日を心の記念日とし身を君國の爲に捧げんとする決心の度は強く堅く魂を動かした。

感想一首

身は遠く深山路近く住へども榮ある式に逢ふぞ嬉しき

御親閲を拜受して

八代郡八代町優雅會 益 田 つ ぎ

噫、昭和六年十一月十八日我等肥の國少女の一生を通じて記念すべき御親閲の當日。ねもやらで朝風に一夜の旅床を潔く起つ、數時にして東雲仄々と明け初む、清々しき曉の瑞氣漲る今日の佳き日、高まる胸の鼓動宙を行く歩みを静め、つ市立高女の奉唱集会所隊へ。此處に集る三萬餘の少女の顔に漲る喜びの色、唯一筋に變らず、漸くにして編成成り隊伍整然として帶山御親閲場へ。廣漠たる帶山、無限雄大遙かに煙る阿蘇の山、晴れたる空に風、後方に設置されたるマイクも七萬の参加人員と共に緊張の裡に只管御鳳輦を待ち侘ぶ。

午後一時十三分「君が代」の吹奏と共に御鳳輦に御入場。玉座に御英姿を拜し奉る、静寂、唯々有難さに涙こぼる體で、戸山軍樂隊の奏樂に分列行進、奉唱歌、君が代刻々に進行し、知事閣下の唱へられし聖壽無窮の萬歳は山彦となつて天地乾坤の裡に轟く。此の間凡そ一時間、玉座に直立不動にてまませし御姿の賢きこと、誠に千載一遇の今日の譽身に餘る光榮壽がむ一つ心に。

御親閲を拜受して

八代郡和鹿島女子青年團員 森 田 み つ え

昭和六年十一月十八日。そは私共の生涯を通じて尊くも意義深い日であります。此の日をどんな思ひで期待してゐたか筆舌の盡くすところではありません。千載一遇の光榮に私共が遭遇しやうとは何といふ幸福であらう。私は 陛下の御親閲を拜受する身になつた夢のやうな思ひ幾度かその事實なるかを疑ひました。御親閲の豫行演習を重ねること六回に

及び其の間農繁期の猫の手でも欲しいといふ時であつたが両親とも再び受け得ぬ光榮と知つていつも心よく練習會に出席さしてくれました。練習會にも一回より二回と私の心は緊張して行きました。そして御親閲の日の近づくにつれ私は仕事を上にも心の引きしまるのを覺えました。

いよゝ其の當日は來ました。午前六時すとはね起き、身を清め 陛下の行在所をふし拜みすつかり出掛ける用意を整へました。緊張した静かな長き行列は本日の御親閲場たる帶山練兵場に續きました。道々私共の心はひたすら 陛下の御尊姿をお拜みすることの感激で、その他には何の思ひも起りません。前日までの練習會の空氣とはまるで想像もつかない緊張しきつた空氣に整列は正されました。時は刻一刻進んで出御の知らせがありました。最早私の胸はたゞならぬ鼓動が打ち始めました。陛下が純白の玉座にお立ちになつて先づ青年の御親閲が始まりました。愈々私達は御前に進み出て奉唱歌を歌ひ申しました。陛下を八十米離れた所から拜する私達は恐懼おく所を知らず、すべてを忘れました。御姿のあまりに尊さ、かたじけなさに全身の強直を感じました。陛下は神の如く嚴として直立不動の御姿勢であつしやいます。愈々音樂隊の前奏につれ私共は歌ひ出した。けれども聲がどうしても何時ものやうに出ません。目は涙にくもつてかすかな聲を振りしぼつて歌ひました。直立して歌へと注意を受けて居れども自然に頭が下つて來ました。

あゝ、この光榮、この感激私共は永遠に忘れることは出来ません。唯 陛下が此の國に在すばかりで私共は安心して生活してゆける其の皇恩を思ひ、今その源泉たる大君を目のあたりにお拜みするなんと有難いこととせう。此の感激を永遠に醒めさせず平素に於て自の業務に勵み國家のために盡し、一家を平和にし、一度國家の事ある際は男子をして、後顧の憂ひなからしめ以て皇恩の萬分の一にでも報い奉ることをこの御親閲を記念として一層堅く覺悟致しました。

御親閲の光榮に浴して

伊藤 ミ サ ヲ

城南の片田舎に只土と親しみつゝ、一生を送る私達にとつて 陛下の御親閲を仰ぐことは何と云ふ幸福でありませう。あの廣々とした帯山練兵場に立てば、深く澄んだ碧空の彼方から、若人七萬人の溢るゝやうな喜びと感激を奏でるかのやうに風が吹いて來ました。

大君の御英姿を玉座に仰ぎ奉つた瞬間のかしこさと感激は、私達の拙い言葉では到底表すことの出来ない氣持でした。「あゝ我等生けるかひあり、おほけなき」歡喜、崇嚴、感激に打ちふるふ胸をついてほとばしり出る奉唱歌。打ちこめ、練習した歌も、尊い御姿の前で歌ふとすれば、あまりの有難さに胸が一ぱいになつて、歌はうたひ得ず、只涙のみにじみ出るのです。遂に身がふるへました。

「天皇陛下萬歳」心の限り聖壽の無窮を祈りつゝ大地もふるへと叫びました。御親閲開始より終了に至る一時間、その間 陛下は玉座に直立せられしまゝ、身動きだに遊ばされず、終始参加部隊に御眼を注がれ給ふ大御心たゞ有難さの極みでした。

御親閲の感想、それは有難さ、もつたいなさの外何もありません。この有難い御代に生れ、一天萬乗の大君の御親閲に浴した幸福な私達は、こゝに一層奮勵努力農村の一女性として一日々々を堅實に眞面目に働くことにより今日の光榮にむくいたいと存じます。

十一月十八日、忘れやうとして忘れられぬこの光榮の日を記念すると共に 陛下の萬歳を祝し、皇恩の萬分の一を報いたてまつることを深く心に銘じたいと思ひます。

御親閲を拜受して

茨北郡日奈久 松 本 朝 義

晩秋の山野に紅葉は照り映え、百舌の裂帛頻りなる酣の秋は一日として深くなり、大自然も聖駕奉迎と云ふ榮光に一層の鮮かさをまして居た。此の地肥筑の平野に錦旗は翻へり皇運の精銳を以て鳴る九州男子の活躍する秋は來た。延いては百三十萬の縣民は心を一つにして聖駕を奉迎して如何ばかりか感激し欣躍した事か。此の光榮ある良き日を忘れまい、さうだ、此の良き機會を記念に綴つて見よう。

想起すれば先年よりの噂に上つた本年度陸軍特別大演習は順調に進んで行つた。我等百三十萬の縣民は躍起となつて喜んだのだ。然るにそれも東の間鼓に皮肉にも日支の風雲は急を告げた。政府は滿蒙問題に傾注しつゝ大演習も事止みとなつて了つた、噫残念である。茲に全く落膽せざるを得なかつた。が、畏くも一天萬乗の今上 天皇陛下には滿蒙の時局の重大なる折柄にも拘らせられず、只管皇軍の士氣鼓吹の御思召を以て大演習御統裁の爲め宮城御發聲軍艦榛名に召させられ、十一月八日正午天機麗しく佐世保に向け横須賀御出港遊ばされ、十日佐世保御入港此の間横須賀御出發以來天候極めて順調にして海波澄に終日碧空に一點の雲朵もなく 陛下には御航海中は終始天機殊の外麗しくあらせられたやうに拜聞す。又拜聞するところによれば 大元帥陛下には九州への第一歩を佐世保に印せられ給ひ、御機嫌殊の外麗しく十一日午前十時四十五分佐世保發の御召列車に乗御文武百官を従へさせられ、鐵路御恙もあらせられず沿道各驛に奉拜せる民草に一々御會釋を賜はり乍ら午後三時十五分大演習地たる熊本驛に御到着官民多數の奉迎を受けさせられつゝ偕行社なる大本營に無事入御遊ばされしと承はる。斯くして鶴首御待ち申し上げた吾々民草百三十萬は一致熱狂的感激裡に、御奉迎申し上げ各町村に於いては奉迎の式を舉行した事と思ふ。此の良き日吾が當町に於いても前夜來から異常の緊張裡に奉迎氣分は益々横溢して式場なる小學校校庭に臨む町長を始め、學校長並に諸先生有志の方々、消防隊、青年、青訓生、學校生

徒、婦人會、處女會等々の諸團體はひきしまる胸を抑へて待ち奉る。……しはぶき一つ聞えない感激裡に式は順次嚴かに行はる、此の日晚秋の色濃かに菊花いよ／＼薫り一入山野に榮え輝く、正しく午後三時十五分御召列車熊本驛御到着の定刻、學校校長先生祝辭、町長祝辭ありて續いて熊本市偕行社なる大本營に向つて遙拜に移る。「一同最敬禮」の聲邊を拂へば森嚴の氣益々溢れ……陛下御旅情を慰め奉ると共に皇恩のありがたさに思はず感涙の溢るゝを知る。終りて校長先生の音頭に萬歳三唱して茲に異常の奉迎氣分は最高調に達した。想起すれば百三十萬の縣民を初め民草はこの千載一遇の行幸を迎へ奉り、只管その喜びと感激とに溢れ欣躍措くところを知らないものであつた。

大元帥陛下御親裁の特別大演習は肥筑の山野に楡紅葉に深み行くところにおいて花々しくその幕を切つて落した。九州男子の剛勇を誇る對抗兩軍將卒は高く翻へる錦旗を奉拜し、感激して戰意愈々募り、勇氣百倍して陛下の大御心に答へ奉つたと云ふ事である。そればかりか第一日より演習地たる肥後平野には蕭條と降る雨の中にも拘らせられず、畏れ多くも大元帥陛下には御乗馬白雪に召させられその純白の雄姿が戰場を縫ふて出沒する光景は、これぞ三軍を叱咤し給ふ英姿と拜せられ、畏くも御軍帽御外套の端より點々として雨滴したゝり落ち洵に恐懼に堪へざる御模様を拜せられたが、この日陛下には大元帥としての御勇武を御親ら示させ給ふ大御心にてか、連日の野外御統監にも御疲れの色を見せ給はず、御勇壯なる御統監振りを示し給うたと拜聞す。

畏くも陛下には將士と勞苦を共に遊ばされ、此の如き聖天子の下に一死以て、萬難にあたらんとする猛將士も、上に勇武仁慈の英姿を奉拜し狂喜感激して勇躍して奮撃猛進よく敵と對抗し、以て陛下の大御心に答へ奉つたと云ふ事はこれこそまさに君民一體となりて國難にあたるの感激的歴史的大和魂の發露と思ふ外は無い。噫この皇恩の有難さに感激の涙胸に滿溢するを覺ゆ。吾々理想ある若人青年諸君よ、この感激的歴史的大シーンはそも／＼何を教へ何を語るものであらうか……。上に勇武仁慈の聖天子あらせられ、下に先輩將士一死以て國難にあたるを見れば如何に吾々の心に響くか！。内には經濟國難外に目を見張れば滿蒙……。聞くならく、今期大演習の眼目は從來の如く單に軍隊の體力、戰闘動作の

演練に止まらず、北滿の野にも似たる演習地の山野地形錯綜せるを利用して、大兵團を如何に活躍せしむるかにありと聞く。諸君よ重大なる事局を顧みて令旨の皇恩に萬分の一たりとも盡す覺悟を望むと共に至誠を表し奉らうではないか。

十四日を期し茲に全く大演習も終り、翌日十五日は朝來の秋雨霽れて清淨なる日射は一入榮光の輝しさを増した。當日畏れ多くも天皇陛下には大觀兵式場なる帶山練兵場に於いて演習参加部隊を御閱兵遊ばされ、相次いで消防隊の御親閱遊ばされしと聞く。十八日青年青訓生並に學生在郷軍人等々の九州各縣山口縣下等の鹿兒島縣を除くの諸團體其の數六萬六千人の若人の胸に歡喜溢れると共にこの光榮ある日こそ過去半歳に亘つて鶴首して御待ち申し上げた此上なき譽の日、如何で忘れ得べき。これこそ吾等の記念すべき御親閱の日なのである。想起すればこれを書くに當り再新なる感激の淚滿腔に廣がるを覺ゆ。當日御親閱の光榮に浴すべく躍る胸を抑へもやらず（手の舞ひ足の踏む所を知らずと云ふ語は此の如きかと）時來るを待ち床に付いても見たが眠りもやらず、青訓服に身を堅め暗れの出立ちにぞと、母親の心づくしに滿腹し、我が家を後に郊外に出づれば肌寒き夜風は身に沁む。仰ぎ見れば一點の星影も見えず、晩秋の夜空は墨の如き黒雲に覆はれ、天地ます／＼靜寂を思ふと共に神かけて光榮に浴する日のはれるを祈つたのである。斯くして驛前に於て人員検査をなし一人の缺員も見ず愉快に列車の來るをホームに待つ。暫て幕進し來る六十九號列車は滑るが如く所定の位置にピタリ停車するや、血氣にはやる胸を躍らせて飛乗つたのである。聽て汽笛一聲鐵路遙かに列車は闇の中を馳驅した。熊本驛頭に降り整列したのはそれより一時間餘の後の事であつて、驛前に輝く奉迎門に眼を射られ、坦々砥の如き大道はこれ半歳に亘つて滿腔の赤誠と努力を盡して來た萬般の準備なる光榮に輝く熊本市を通つて濟々費に向ふべく各中隊の編成に整列したのは數分間の後の事であつた。これより奉迎成る夜の都を縫ひ、こと更に輝く熊本城趾は榮光に浴し寝るが如く大きな體を横臥するが如きを左に見、行在所なる偕行社に陛下下ましますかと伏し拜み只管感激すると共に一夜を明すべく急いだ……。鶏鳴曉を報ずるや曉風冷え々として森の都を襲ひ來り、夜の衣は東より次第に剝けて變遷たる曉靄幾多の色彩を呈しつゝ次第に消散して光まばゆく射出づる朝日は、露光る樹葉と相映じて肥筑の野は紅葉照り映え譽れ高く榮光

に輝くを見たのである。これ神かけて祈りしかひあつてか、夜空の雲晴れてこれぞ光榮に浴する日なるぞと神に御禮を申したのである。茲に朝も明け渡されて九時近く歡喜横溢した若人達は各中隊に分れて御親閱場なる帯山練兵場へと急ぐ。指定の場所に留置され、此處で腹に元氣を付けんものと各持參の握飯に舌鼓を打つたのである。

此の日天朗らかに澄みて瑞雲榭曳く檀紅葉照り映ゆ都熊本市街を抱く山腰に薄霞かけて、見るからに錦織りなす繪のやうであつた。かくて、陛下の臨御を仰ぐ刻限は迫りて御召自動車到着の時刻にひきしまる胸を抑へ待ち奉ると、聴て喇叭たる喇叭吹奏裡に侍従武官を従へさせられてか數臺の自動車を従へられるを幽か乍らに拜し奉つた。かくて奉迎の裡に御英姿颯爽として直に場内正面に設けられたる白木造りの玉座に着かせられしと拜し奉ると、暫て再び喇叭喇叭と響き渡れば大隊長の指揮の下に頭を玉座に向つて注目敬禮すればほのか乍らにも直立不動の御姿勢にて御敬禮遊ばされしを拜し奉り其の神々しさに全員何れも聲を呑んで限りなき感激に胸を打ち顫はせた。

かくて大部隊は戸山陸軍軍樂隊先導に師範學校生徒を始め諸部隊は堂々濤々白塵を蹴立て、進むを、畏れ多くも陛下には一々舉手の御答禮を賜はり……小生も此の光榮に浴する一員となりて、畏くも御天顏を咫尺の間に拜し奉りし時皇恩の辱けなさは感激の極み感慨無量の涙滿腔に滿たされ、これ筆舌を以て盡しがたき……かくて指定の位置に着し一時間許りにて大部隊の移動も終りて女學生及び處女會等の奉迎歌も終りより嚴かに「君が代」も六萬六千の若人の胸より溢れ出る感激のこもる聲は神々しくも森嚴の内に。次いで知事の發聲の下に天にもとどろけと「天皇陛下萬歲」を三唱し茲に吾等御親閱は終了した。時に午後二時頃。聖上陛下には再び全員最敬禮の裡に陸軍軍樂隊の吹奏する「君が代」と共に行在所に御還御遊ばされた。

かくて翌十九日御長かりし御駐紮地を御後に一路遙かに鹿兒島の地に進ませ給ひ、櫻島の峯に轟く股たる皇禮砲發射裡に御召艦榛名に御乗艦あらせらるゝや、天皇旗は橋頭高く翻へり夕闇迫る海波を蹴つて御出港海路東へ東へと還幸の途に就かせられたと拜聞す。

拜聞するにこの肥後平野の地聖駕を迎へ奉つたのは明治三十五年 明治大帝御在世の御時陸軍特別大演習の爲め御西下を仰ぎ奉つて以來星霜まさに三十年、此の間 聖上陛下未だ東宮殿下に在せし頃九州各地御巡遊の御御迎へしてより滿十ヶ年、茲に再び 大元帥陛下として龍顏を拜し奉ると承はる。この間觀兵式、御親閱に贊はせられる外教育産業御獎勵の思召を以て、更に四日間に亘り地方行幸仰出され、地方の民情を贊はせ給ふ一方、縣下の神社に學校にまた各所に侍従御差遣御沙汰あらせられ只管皇恩の遍きに感奮する外は無かつた。

殊に滿蒙の時局重大なる折からにもかゝはせられず只管皇軍の士氣鼓吹と地方民草の心を汲ませ給ひて、玉歩を西陲の地に枉げさせられた事は、我等の特に銘記すべき所である。茲に恭しく聖壽の無疆を壽ぎ奉ると共に聖駕を迎へ奉りてわれらの感懷を披瀝して至誠を表し奉る。

御親閱を拜受して

臺北郡水俣町青年訓練所 柴田定文

思ひ得がたき尊き御尊顏を拜觀する一員として出頭がかなつた。一生得ることの出来ない此の有り難き場合に臨み、心しみじみと唯有り難さが身にこたへました。

時は拾壹月十七日夜、○時二十五分發の列車は夜の暗黒を勇ましく縫ふがごとく進んだ。車内で語り合ふは唯陛下の尊話だけだつた。空は黒雲に包まれて、いと明日の天氣が心にかかる。會話も段々に静まりかえり、何時しかどの車内もあなむりにふけて居た三時過ぎ熊本驛に着いた、プラットホームは早くも車内よりくり出された人々で人山を築いてゐた。晝をあざむく市街に何千人の人口が帯山練兵場指して進軍をして居た。夜のあける頃まで五高の校庭でまつた。曇りきつた雲も東が白むころより取れた。七時には五高を出發して思ひ輝く練兵場にと足を進めた。うねりうねつた道を何千の同輩四列縦隊で進軍したのだ。廣々たる原野は又も人山ですきもないほどだつた。私共は第四大隊の第四中隊であ

つた。拾時過ぎには御親閲が開始された、何萬の同胞は清らかな思ひで御親閲を受け、待ちに待つたる私共の番が来た、大隊長より整頓の聲が聞えた。やがて前進の號令に移つた、大隊長は前方に立つて勇ましく音楽の聲とともに前進した。一さう音楽の聞こへるようになった頃、大隊長の號令で頭右をした。陛下には高臺に御立ちになり御答禮遊ばされた。陛下の御心を安んじ奉るを得るやと感慨にふけりつゝ、前進を續けて居た。吾々の御親閲がすんだ時は一時間過ぎだつた。つゞいて女子の奉迎歌を二十分後にすませ、陛下萬歳の聲天地もゆるがすほど三唱した。陛下にはまもなく「君が代」の吹奏にて御立ち遊ばした。

御親閲を拜受して

茨北郡田浦村青年團員 本村三生

其處此處から工場や會社の汽笛が鳴り出すと燃ゆる太陽は東の山から一寸二寸、見る／＼東天に跳躍して晴の御親閲日を麗らかに照らした。

おゝ光榮の日は来た。希望と感激に燃ゆる若人が向ふの町から其處の通りから續々と詰めかけて靴の音佩劍の響御親閲拜受の群は今や全市をカーキ色の波で包んだ。聽て朝霧も霽れて電車や自動車動き始めると千載一遇の御親閲を拜せんものと老も若きも三々五々晴の託摩原々頭帯山を指して押寄せる。これ等赤子の群に加はつて我等青年團も蜿々列をたして帶山に向つた。漸く御親閲場へ着くと、おゝあの茫々たる帶山の野も感激と歡喜にもえる赤子の爲に立錐の餘地もない太陽は中天に輝いて四方の山も近くの森も生々として今日の盛事を祝ふが如く數萬に餘る同胞皆希望に充ちみちて居る。時刻は刻々と進んで我等は輝く幾百の旭日旗の下に、陛下の出御を今か今かと待つた。

突如、唳々響く喇叭の聲。スワ、とばかり數萬の者は一齊に緊張した。莊嚴な「君が代」の樂が高く低く靜かに／＼吹奏される中を、陛下の御車は肅々と進んで神々しい氣は式場を包んだ。聽て陛下は玉座に着御あらせられた。あゝ我

等は今目前に現神を拜し奉り、數萬の頭は自ら下つた。咳一つするものとしてない只しいんとして居る。直ちに分列行進が開始された。勇壯な音楽に合せて場の一角から次々に行進する。君の御心と臣の心が一つに融けて慈光輝く暖かな和やかな筆舌に盡し得ぬ莊嚴な感に打たれて、今上陛下の直前に進んだ。「頭——右」一齊に注目の禮にうつると、陛下は靜かに擧手の禮を賜はつた。何とも言はれぬ、只々有り難き涙の出るのを覺えた。分列式も終り一同が位置に着くと女子奉唱部隊は陛下の御前に進んで奉迎歌を合唱した。感激に顫ふ乙女の心算めた聲、濟んで萬代に動きなき我が皇室の萬歳を奉唱し終つた。斯くして吾等の晴の御親閲は終つた。

あゝ我等は光輝ある我が祖國の爲に祈らん。
聖壽の無窮を。聖壽の無窮を。

御親閲拜受に臨んで

茨北郡津奈木村津奈木青年訓練所第二二年次 吉野常美

時は昭和六年十一月十八日我々青年として國民として一生がいわされる事の出来ないそして意義深き永遠に記念すべき果報な日であつた。それぞ我が今上天皇陛下、男女青年團並に青訓生御親閲の日である此の光榮ある千載一遇の時季に臨み如何にか感想をのこさずに居られやうか……。

吾等青年團及び青訓生兩方ながら二十有餘名午前一時前無上の光榮を前途になひ意氣揚々として津奈木を發し熊本に向つた。幾多の夜景を汽車の窓より眺めつゝ、(或は海岸の邊を……)列車の車輪は小波に洗はれんとする所を或は黄雲十里と云ふべき八代平野の平田稻の中を眞闇の中を過ぎて二時間餘にして熊本驛に到着した。市内一面の電燈に照され、將に晝もあざむかんとする所田舎にあらば唯淋しくそして靜かな時分吾等は市内を眺めつゝ道を進んだ豫定の休息所についた時は既に鷄鳴の聲を聞く頃であつた。間もなくして夜は白々とあけ大阿蘇の連山は朝靄につゝまれて見ゆ、東天は紅に

色どられ朝日は勢よく立のぼつた、休息を終り出發した道途中も御親閲中 陛下の御武運を只管神に祈りつゝ目さす前途光榮無上を想ひつゝ、帶山練兵場に到着した。時は午後一時前後 聖上陛下の御召自動車は勢よく御親閲場に到着間もなく畏くも 陛下には臺上に御立ち遊ばされた。指揮官の命令一下我々は動きだした。「頭右」の號令のもとに 陛下の御健康にまします御尊顔を拜し同時に懼れ多くも御答禮あらせられた之こそ何んと云ふべき、満つる人皆涙をうかべ吾等は何ものもおかん、誠心誠意一種無限の感きわまりて唯々莊嚴……かくまで我等臣民を御思ひ下さるかかくまで愛撫し下さるかと思へば思ふ程又感は無限であつた。軍樂隊の奏する「君が代」と共に我等も合唱し七萬の同胞一聲に萬歳三聲した、御親閲中何事なく無事に終り大本營さして御歸還あらせられた。萬歳／＼萬々歳。

我が國は今思想上に經濟上に幾多の難局に遭遇してゐる此季に際して國民は或は生活上に悲觀してゐる者もあらんに此の光榮をになひ恐れ多くも又御尊顔拜奉致し誠に果報である。あらゆる九州男子も女子も悲觀をわすれて此後大いに奮ひ立つ事であらう。如何なる國難來るとも如何なる事變に遭遇すとも切つて切つて切りまくりに大いに國家を安榮ならしむること我等青年のつとめである。そして 陛下の御心の萬分の一にそひ奉るべきである、あゝ奮はう、奮へ、青年我等、皇御國は千代八千代に、聖天子御武運御長久併せて國家安榮を神願すべき也光榮に満ちほこりにほこり無事津奈木についた。我等は常に御親閲拜受者として永遠に記念す。

聖駕を拜し奉りて

東北郡湯田農業公民學校高等科四年

柏 木 緑

今度本縣下に於ける陸軍特別大演習に際し、畏くも——天皇陛下におかせられましたは御統監遊ばされて引續き玉體の勞にも御いとひなく、我等が數ヶ月前より指折り數へて待つて居た、青年訓練の御親閲を拜受する時は目前に迫つて來た。吾等青訓は緊張極に達し、十一月十八日午前十二時過ぎ我が訓練所は水俣驛を發車致し、同夜更けに熊本に着驛した

のであつた。市内は萬國旗にてかさられて居た。往來を行く人、來る人も何だか緊張し、國運進展の氣分が満々として居た。吾等は何千人と列を整へ帶山練兵場に到着した。

間もなく、氣を付けの喇叭は一度に吹奏せられたのであつた。其の時であつた、頭の髪もよだつばかりに何と云つてよいか萬感胸に迫り感涙の落ちるを禁じ得なかつた。いよ／＼分列行進にうつり 陛下にあらせられては九尺の玉座にしかも一時間餘りに達する御親閲を、御動きもあらせられない御態度、何と御健康にて遊ばされる事よ。吾等人民としては此の上もない喜びに絶えない所ではないか。又吾等青年に對する 陛下の御態度、如何に緊張遊ばされた事か、痛感せないのであらやうか。

萬國に比類なき事は、眞に此の御態度だけでも分る事である。吾等青年は何時迄も此のおごそかな一日を記念として大に奮勵努力して國家の爲に盡さねばならぬ。

御親閲拜受の感想

東北郡大岩青訓所第三年次

草 野 文 雄

熊本市の東郊、帶山練兵場に於て、御親閲を拜受すべき光輝ある朝は來た。帶山へ／＼と、歡喜に震ふ群集は素晴らしい勢で寄せて行く、まるで蜿蜒たる長蛇だ、人の波だ。

午前十一時式場到着、廣漠たる帶山平原も、先着部隊と拜觀の群集とで所狭きまでに埋められ、均しく聖上の着御を待つてゐる。やがて時は定刻を知らせた、我等の背すじを緊張の電が走つた。喇叭たる合圖の喇叭一聲高く遠近に響き渡れば、さしも廣き帶山原頭寂として音をひそめ、高き玉座の上にやがて 聖上陛下の御英姿を仰ぐ神々しさ。筆舌を以て表現することの出来ない莊嚴な氣持に、我等は我と我が身を忘れた。四方展望の雄觀をめぐらし乍ら、帶山原頭碧空高く澄み冴え、燃え立つ日輪の輝く下、仰げば尊き御尊顔に、我等の眼には感激の清き涙が溢れ出でた。次いで合圖の喇叭、軍

樂隊の行進曲と共に分列式は開始され、我等の分隊も歩調勇ましく玉座の御前に進んで行つた。一歩々々踏みしむる我等の足は感激にわななき、「頭——右」の號令一下一同均しく敬禮すれば、畏くも陛下には御答禮を賜ふ。其の時我等の血管は、一時に逆流する様な氣持がした、おゝ此の感激、我等は、一旦戦端が開かれた曉に、陛下の御馬前に於て奮戦する時の歡喜を今更の様に強く感じた。

千載一遇の好機を得て、我等はこゝに至尊の英姿を拜した。我等は「日本國民の一人だ」といふことを深く知つた。そして日本國民としての誇りと幸福を思つた。

奉唱歌を奉唱する若き女性の感激に高潮せる聲は、流れ／＼て幾萬の人々の胸を打つた。かくして陛下には「君が代」の奏樂裡に、いとも麗しく御退出遊ばされた、御英姿を拜して、光榮と感激との無限の思ひを抱きつゝ、暫し歩くことも出来なかつた。あゝ光榮と感激に泣いた御親閱は終了した。

忘れ難き光榮の思ひ出

臺北郡深川青年訓練所第三年次

森 山 定

千載一遇の御親閱を受くべく十名の同志と共に十一月十八日午前〇時二十三分發の列車で、身に餘る光榮と重き責任とを痛切に感じながら水俣驛を出發して熊本驛に着いたのは午前三時頃であつた。それより援助員の軍曹の案内で吾等一同が定められた休憩場所たる熊本高等工業學校々庭に着いたのは午前四時で天にはダイヤの様な輝いた無数の星を載いて丁度戦地に出た軍人の思ひも、かくやと勇み立つ嬉しい氣に充ちた胸を抱いたのであつた。寒夜の校庭に四方八方の話に花を咲かせ乍ら各郡よりの同志と共に夜の明けを待ちまつたが夜は次第に更けて同六時頃には東の方ほの／＼白む頃になつた。其の頃から幾百羽とも知れぬ雁の群が鍵になり竿になりして大空を渡り行く有様を眺めて有名な會我兄弟の歴史も偲ばれた。次から次へと飛び渡る雁の群で今までの疲れも眠さも皆忘れて居た。八時頃になると、大隊長の指揮で整列し

て帶山に向つて校庭を出發した。途中も速足で十一時頃目的地に到着した。

あの廣々たる練兵場も光榮に輝く若人で埋まり見渡す限り人山で築かれた。しばらく休憩して中食をなし、午後一時頃いよ／＼御親閱も開始された。吾等一同も今か／＼と待ちに待つて居た。午後一時半頃……それは何と言ふ嚴かな場面であつたらう……。その時こそ、嗚呼!!永久に忘れる事の出来ない深い印象を頭に刻み込んだ時であつた。軍服を御召になつた 聖上陛下は玉座に御立ち遊ばされそして我々にいち／＼擧手の禮を賜はつた。御聰明にましまし御仁慈に渡らせられる 陛下の晴やかな御麗はしい御英姿を拜した時、此の上もなき光榮と感激と歡喜とが一時にこみ上げて感涙に咽んだ吾が帝國の礎はいよ／＼益々鞏固になつて行く事を喜ばずには居られませんでした。午後二時半頃御親閱も恙なく萬歳三唱と共に終つた。それから少憩の後援助員の引率で市内に入り、まだ列車にも餘裕あつたので大急ぎに銀丁や忠誠博覽會等を見物した。

かくて忘れ様としても忘れる事の出来ない昭和六年の十一月十八日……。一生記念すべき御親閱も無事終了し、思ひ出多き熊本を後にして歸途に着いた。

御親閱の光榮に浴びて

臺北郡日奈久處女會

粟 谷 ツ イ

赤い毛布に身をくるめながら寒さうに笑ひ合へる四時過ぎ、昨日のつかれも忘れて今日の晴の帶山を想ひつゝ希望に微笑み、ねむたい氣持、緊張した氣分、自分ながら其の相反する氣がおかしい。楽しい修學旅行の様な一夜も明けた。

おゝいよ／＼今日である。私達のどんなにお待ちした今日か。今日こそ 天皇陛下の御前で奉唱し奉るのだな、いやいやもつと御親閱の日は遠い所にある様でもある。何んだかそは／＼した皆の顔、夕べやすんでうつとりとしようとする所に萬歳々々の聲を聞いてびつくりした。まあ、誰かのねごとだつたのだ。おかしさがやまない。しかし今ねごと言つた人

がどんな夢の内を歩いて居るかと思ふと御親閱に参列する人でなくては味はへないうれしさを感じた。なんと清くすんだお天気だらう。この廣い帯山も今日の行幸を迎へんが爲に歡喜の色に包まれて居た。遠く列をなす拜觀者の群れ、畏き天子の御英姿を拜する喜びと有難さを胸にこむる六萬六千の青年男女世の人々が皆私達の居る帯山を中心に活動して居る様でならない、さしにも廣き帯山も人の山。

午後一時 聖上陛下御發轅の合圖が緊張せし帯山をいやが上にも緊張させる。數分の後 聖上陛下お着輦、共に靜かに「君が代」吹奏、お、お着輦だ、と感じた時早や六百米の彼方九尺の高き御座所にお起立遊ばされしお英姿をかすかに拜せし時しみ／＼と胸につかへる物を感じた。數分の後軍樂隊の壯快なるマーチと共に學生より分列式が始められた。遙かの彼方においていち／＼御答禮遊ばさるお姿を拜み申して言ひ様のない幸福感とも言ひませうか、うれしさがこみあげ千載一遇の此の光榮に浴した自分あまりにもうれしかつた。學生。在郷軍人、青年、青訓。人、人、旗、旗、其の美しさ其の雄々しき壯觀さ目のあたり見た私達、自分も大日本帝國の一人だ、と力づくよくほへまれた。分列式の終ると共に我々女子奉唱部隊尖進、一步々々さく／＼と草をふむ足もうれしさ、有難さの爲に如何に勇躍した事か、早や先進と共に軍樂隊のマーチも變り一萬四千の乙女の胸は踊る、御座所より五十米の近きにすゝみ天顔を拜せし時のうれしさ戸山音樂隊の指揮の元に「あゝこゝに」と奉唱し奉る時の氣持ちはどうして言ひ表し得よう。天顔を拜しながらあらんかぎりの聲で奉唱し奉つた。別になんの考へもなく只奉唱し奉る事が私の只一の 陛下へのお務めの様な氣がしてならなかつた。續いて全員一同莊嚴なる「君が代」奉唱、軍樂隊の「君が代」の有難さたゞうれしい、本山知事の音頭と共に全員一同萬歳三唱さしにも廣き練兵場もゆるぐばかり、表し得ない胸のうれしさ有難さを今こそ此の萬歳の中に叫びこんだ。いよいよ知事の行事終了の旨奏上、喇叭一聲吹奏の元に一同最敬禮、其の間、「君が代」吹奏 陛下も舉手の禮を遊ばされ、九尺の高き御座所よりお下り遊ばされて、其のまゝ直ちにお召自動車にお乗車かゝやく天皇旗と共に靜かなる「君が代」吹奏裡に御還幸遊ばされた。

此の間一時間高き御座所にお立ち遊ばし微動だに遊ばされざりし其の御英姿を拜み申して聖恩の有難きを強く感じた。我等縣民百三十萬の待ちに待ちし大演習も御親閱の式も共に十八日を以て幕をこゝにおろされた、今までこんな事のあろうとは豫想だにしかかつた事が餘りにも早く私達の上にはあらはれた事が感激の極みである、今日のかがかやかしい喜びが永久に私達の記憶に残る事であらう。終りに聖壽の無量をおいのりする。

日誌の一節より

羣北郡水俣町葛渡處女會 藤 川 妙 子

「嗚呼此處に皇尊の御車を」 吁嗟!! やつと此處迄奉唱し得た私だつた。これ以上は、どうしても聲が出ずに唇はワナワナと震へる許りで如何する事も出来なかつた。それは餘りの有難さ辱なさに!! 唯々有難く、恐れ多いのが胸一杯で全身全靈シーンとしてしびれた様になり、頭さへ舉げてゐる事が出来なかつた。其の瞬間心臓の鼓動はビタリと止つた様な氣がした。それから涙は後から／＼ハラ／＼と流れ出て来る。けれどもそれさへ拭ふ事も出来なかつた。前後左右で皆が歌つて居られるけれど有難さかたじけなさ一杯でしばしは聞きも得なかつた。丁度他界にでも行つて居る様な氣持になつてゐた。やゝあつて我に歸つた。「これではいけない。今日と言ふ此の目出度い光榮に浴する日、十八日!! 無事奉唱し終る様に毎日神々に祈りつゝ稽古したではないか。それなのに／＼今と言ふこんな風ではどうしよう。「折角千歳一遇の光榮に浴してゐながら」と我と我が身に鞭打つて、有るかぎりの勇氣を出した。やつと聲が出た。けれども又一節しか歌ひ得ない。又勇氣を出して歌ふ。さうしてとぎれ／＼にやうやく奉唱し終へた。終へたと思つたら、体の何處かにかすかなゆるみが出来た。と其の時はもう手は無意識に動いて、ハラ／＼と落つる涙をおさへてゐた。しばらくすると、其處にも此處にも啜り泣きの聲が聞える。……久しい間有難さ、かたじけなさ、嬉しさが入り亂れて、何とも形容し得ない感じに全身を掩はれてゐた。

あゝ光榮ある十八日よ!! 有難いそして忘れやうとして忘れられない記念の日よ!!

御親閲拜受の感激

茨北郡田浦村處女會

山下よし子

十一月十八日午前六時半縣下の奉唱部隊は市立高女へ集合、御親閲拜受に關しての訓辭あり。いよいよ隊伍を整へ一路秋色包む朝露を踏み分けつゝ、帯山練兵場へ向ふ。練兵場へ着けば夫々指揮者の命に従ひ設けられた場所に整列を終る。折から恵まれたる好晴に一昨日迄の雨氣は何處へやら空には一點の雪だになく、微風は四邊の小草をゆるがしてゐる。物みな千載一遇の今日の譽れをことほぎ奉るかの如く見ゆる。かくて時刻は迫り式場正面の大マストに國旗は高々と掲げられる。式場肅然として緊張す。

定刻午後一時十分喇唳たる「君が代」の奏樂裡に、陛下には設けの玉座に麗しき英姿を運ばせらる。やがて男子分列部隊の分列行進は軍樂隊によりて勇壯に繰り出されて行く。分列終りていよいよ我々千載一遇の光榮の時は來た。指揮者の號令により軍樂隊のリズムに歩調を揃へ乍ら規定の席へ進出した。其の間の緊張!それは未だ曾て前數回に亘る豫行演習に於て見ざる光景であつた。

やがて一禮の後流れ出づる樂の音につれて、かねての豫習會ぞとばかり天にも響けと歌ひはしたるものゝ尊き英姿を目のあたり拜し奉りては神嚴の氣自ら漂ひ迫りて溢れ落つる感激の白露は止度なく頬を傳ひ、稍もすれば込み上げ來る涙の爲に聲をのまれつゝ奉唱を續け茲に榮ある御親閲を無事終了。最後に數十萬の拜觀者共々「君が代」を奉唱、天皇陛下萬歳を三唱し奉る。その聲ははるけき大阿蘇の外輪山にこだまして響くかと思はれた。時に午後二時十分。此の長い時間に亘りて陛下には直立不動の御姿勢を保たせ給ひしは誠に長き極みであつた。全員最敬禮裡に龍顔いとも麗しく再び響く「君が代」の奏樂裡に退御遊ばされた。大任を果し得し吾等も等しく感激に打ちふるふ胸を抱きつゝ歸路に着いた。

御親閲の光榮に浴して

茨北郡津奈木村女子青年團員

野崎りよ

噫!!我等六萬六千の、血湧き肉躍る若人を御親閲遊ばさるゝの日、十一月十八日は遂に來た。如何に其の日を待望して居た事であらう。噫!!いよいよ十八日!!準備を全く終へ身軽く宿舍の庭に降り出發の時を待った。一列六十名の編成を終へ市立高女へと急いだ。まだ六時過ぎたばかり、お互の顔さへ判然としない。第三奉唱隊全部市立高女に集合して、それより御親閲式場たる帯山練兵場へと急いだ。式場の當てられた位置に着く、第一に目に付いたのは高さ九尺純白の布で掩はれた御座所であつた。

やがて時は過ぎた。午後一時、天皇陛下大本營御出門の合圖の爆竹は青空高く炸裂した。日の丸の旗は高く掲揚されていと心地よげに風に翻へる。人々の顔は一樣に緊張して、自ら襟を正し、姿勢を正して薄の御着を待ち奉る。やがて喇叭の吹奏、軍樂隊の奏樂裡に自動車輿簿は靜かに着御、天皇陛下には御質素な軍服の御姿で御座所に立たせられた。錦の御旗は風に翻へる。全員最敬禮に恐れ多くも御擧手の御答禮を賜ふ。たゞ有難き限りである。軍樂隊の奏樂につれて御親閲拜受の分列は順次に進ませらる。軍人、學生、青年團の旗また旗、劍また劍、壯烈を極め、自ら、手は握りしめられ。それより女子奉唱隊の御親閲に移らせられた。歩一步と御座所に近づくに隨ひ、いやが上にも緊張して來る。この千載一遇の、こよなき光榮に浴し咫尺の間に龍顔を拜して感激のあまり歌ふ聲も思ふやうにすべらず、感激の涙は止度なく頬を流れる。

天皇陛下には一時間五分の長時間に渉る御親閲に、微動だもなし給はぬ御姿勢で御座所に立たせ給ふ御容姿の神々しさを拜し奉れる姿は唯々かたじけなさに涙を催すのみであつた。萬歳の聲は山に木霊して響き渡る。愈々奉唱終りぬれば聖上陛下には喇叭と軍樂隊の「君が代」奏樂裡に還御遊ばされた。御親閲の光榮に浴した姿等は等しく竹の園生の御榮へ

を祈ると共に永く今日の譽をことほがむ。
 帯山の廣野に光榮を受けし身のかたじけなさに涙こぼるる

御親閲の日を追懐して

蒙北郡深川處女會 宮崎 こと

嗚呼!!思ひ出すも床し、十一月十八日!! 聖上陛下の御親閲に参加致した私共は、如何に無限の光榮に浴した事でせう……。只有難さの爲に涙の湧き出るのを禁ずる事さへ出来ませんでした。

此の日、全九州の青年、學生並びに處女の幾萬とも知れぬ群衆で、あの廣々たる帯山練兵場は埋まりました。あの光榮に輝く團旗と、喜悅と感激に充ちた若人の有様は今も心のカメラから消えません。神聖なる空氣に満たされた場内は、聖壽の萬歳を壽ぎ奉り静寂の中に高らかに響き渡る喇叭の聲……、勇ましく嚴かに胸底深く鳴り響くのみでした。

時は午後一時、「君が代」の軍樂の吹奏と共に御座所に玉歩を進ませられ、整美の極致を盡した分列式又は眞心捧げて合唱する奉唱歌と軍樂隊の伴奏に調べを合せた赤誠籠る可憐な乙女の奉迎歌…… 陛下にはいと御満足の御模様を拜せられた。陛下には一時間位、直立不動の御姿勢にて一々御親閲遊ばされ、御氣謙麗はしくみそなはせ給うた。其の御姿の畏こさ……。只々兩眼に熱き涙のはふれ出づるばかりでした。かくて知事殿の發聲で 陛下の萬歳を三唱し御名殘惜しくも玉座を御引きになり給うた。其の御英姿の雄々しさ、永久に——私共の心中に深く印象付けさせられました。

嗚呼!!なんと幸福なる私共で御座いませう……。只に私共ばかりでなく眞に一門の光榮でございます。この上は益々努力に努力を致して、一段と奉公の誠を捧げ、大御心に副ひ奉る覺悟であります。

まのあたりおろがみまつる天つ神かたじけなさに涙はふるも
 千代八千代かたりつゞけむ感激よすめらみかどの高き御威徳

御親閲感想

球磨郡多良木青年訓練所第四年次 梅 本 安 市

肥筑の平野に聖駕を奉迎する事の公報に接した時私は歡喜と希望に燃へ其の期の切迫するにつれ果して 陛下の御前に侍り得るやを疑つた。主事の許状は來た。光榮の日九州男子の榮ある日は來た。十八日午前〇時洗濯物ながら訓練服に身を纏ひ神前に御安泰遊ばす事と今日の天氣を祈願した。町長より配布の大演習心得を默讀した。驛には輪茨先生の井然たる訓練定員に倍する人員も四分に乘車五分下車人間業とは思へぬ緊張振統制ある國体力の偉大さを痛感した。晴の御親閲場は果しなき帯山練兵場數萬の群衆一人一人赤誠の至忠一糸亂れぬ動作皇國々民の力強さを思はせる。

陛下には寸暇なき御身九州の青年のため大御心を留めさせ給ひ玉座に直立不動微動だに遊ばされず、皇輝燦として護神そのもの、如く一々擧手の禮を遊ばさる感激極みなし。身不肖若年にしてこの榮譽を得永遠にこの青史を記さんため私は直に御親閲記念貯金を開始した。更に記念田を開き之を永久記したいと思ふと共に此際帝國青年として皇恩の萬一に報ふべく心身を鍛錬し資質の向上に努めたいと思ふ。

御親閲を拜受して

球磨郡西村農業公民學校 西 忠

昭和六年十一月十八日、此日こそ我が肥後の若人の須臾も忘る可からずして且又永久に記念すべき一日だ。陸軍特別大演習を我が肥筑の大野原に行はせられ畏くも 聖上陛下御躬ら御統監遊ばされ十五日無事終了せられた。御英姿を我が肥後の練兵場に仰ぎ奉つて御親閲を拜受したのがそれより三日目の十八日だった。此の光榮に浴する幸福な若人の數實に七萬五千、さしもの廣き帯山練兵場も此の日狭しと計り埋められた。此の無上の光榮に浴する一人として、我が青訓旗手と

して参列する事の出来得たのを心から喜びとし幸福とするのである。軍樂隊の奏する莊嚴な「君が代」の裡に天皇陛下には自動車に成らせられ御臨場玉座に着御あらせらる。此の間我等は澄み切つた大隊長の號令にて遙かに奉迎、水を流した様な静肅さに、高臺の玉座に直立の陛下を遠く拜し言ひ知れぬ威嚴に打たれる。一時二十分愈々學生より御親閲は開始された。「分列に前へ」大隊長の聲は一層澄み切つて我が心は彌が上にも感激に充たされて雄躍した。

陛下には玉座に直立あらせられ、一々擧手の敬禮を以て閱せられた。實に長き極みである。女子青年、女學生團の奉迎歌も殊さら落ちつき、晴れ渡つた秋空に響き渡つた。我等の御親閲は一時間の永きに及んだ。恐れ多くも其の間陛下には微動だもあらせられず御熱心に御親閲あらせられたとも承はる。實に長き極みである。

威嚴と莊嚴の裡に取り終らせられたこの意義ある御親閲を我等は永久に記念すべき重大な義務を痛感する。燃えるが如き我等の心を尙一層勵まし勤儉貯蓄、健康な身体を養ひ奮勵協力以て皇恩に答へ奉るべきである。

終了の時に午後二時。陛下には再び軍樂隊の「君が代」吹奏のうちに自動車にて行在所へと向はせらる。我等は「捧げ鉢」に衷心の敬意をこめて御送り申上げた。御名殘惜さと、有難さにすべてを忘れた自分は握りしめた旗が折からの風にはたたくと手を打つのに始めて我に歸つた。

御親閲に参加して

球磨郡上村青年團員 上 淵 影 夫

我等青年の集合地たる五高グラウンドは、今や一杯若人によつて満されてゐる。輝く青訓旗の鋒は此の未曾有の一大御盛事を祝し奉るが如く、人山の上に突き出でて吹く朝風に翻々として翻つてゐる。愈々午前七時半は來た。感激にどよめく大部隊は帶山指して長蛇の如く前進を始め、一步步運ぶ足にも青年の元氣が満ちてゐる。道の兩側に立ち並ぶ家々には奉祝の日章旗が旭光にまばゆきばかり輝いてゐる。噫々これこそ我が肥の國民の熱誠の現れかと拜んだ。

午時九時練兵場到着。此處に集ふ幾萬の青年は皆々感激に満ちて一層の緊張を各自の面に表はしてゐる。此の時突然空高く響く爆音に一同の視線は集つた。これ我が軍用飛行機が今日の御盛事を奉祝する爲め現はれたのである。而して數度の旋回運動を試みつゝ何時しか彼方の空へ消え去つた。忽ち起る戸山學校軍樂隊の奏する「君が代」の曲に吾等の緊張は頭腦の頂に達した。愈々聖上陛下臨御しまして大部隊の分列式は開始された。此の時嚙咬たる軍樂の調べに一步步加と誠を籠めて前進した。やがて左に向きを變へたが間も無く頭右の令が青訓旗によつて示された。緊張の度は一步一步加はる。玉座の正面に進み天皇陛下の御顔顔を拜し奉つた利那私の心は唯々有難いと云ふ感激に満たされて、軍樂の響きも周圍の人々も何一つ意識せず唯聖上陛下御一人の御尊顔を拜し奉つた。そして頭の向ふ限り拜し奉つた。頭左の令と共に始めて我にかへり、移り行く大部隊の分列が終るまで幾度か感激の涙は流れた。天皇陛下萬歳を奉唱したあの聲は我が數萬の青年の口から迸り出でた真心の焰であつた。噫々此の有難き聖代に生れ合せた我等青年の幸を思ふ時、此の御聖恩に報じ奉る爲め層一層奮起努力せねばならぬと誓ひ奉つた。

御聖姿を仰ぎて

球磨郡岡原村立岡原青年訓練所第三年次 高 月 清 二

嗚呼。昭和六年十一月十八日!! 其の日こそ我等が一生の否子々孫々に至るまでの光榮として夢にも忘るゝことの出来ない感激の日であつた。九州山口八縣下の若人が辱くも御親閲を賜はつた其日である。

碧空高く冴えて何と朗かに、晩秋の大氣澄みて何と爽かなことよ。遠くに霞める阿蘇の連山、さては龍田、金峯、雁回山の雄觀と遠く近く圍まれたる此處帶山原頭には瑞氣ひし／＼と漲り來るの思ひがある。集まれる七萬の若人は感激の血潮を躍らせて廣漠たる帶山原頭に満ち溢るる。

煙花一發。中空高き竿頭にすく／＼と大國旗は翻つた。祖國の聖き姿、赤き心を碧空に描いた日の丸の旗風に身も心もとみに引締る。やがて「氣を付け」の喇叭、喇叭として響き渡れば七萬の大勢水を打ちたる如く、山も野も寂として聲を潜むる。「君が代」の莊重なるメロデーが靜かに流れて來た。感激の情が泉のやうに湧いて來る。靜かに面を上げて遙か玉座に肅然として立御あらせ給ふ御聖姿を拜しては、頭自ら垂れざるを得ぬ。「おゝ我何たる光榮ぞ、身の幸福ぞ。」生を皇國に受けたる我、今あゝ今こそ生甲斐あるを知る。最早明日死ぬとも心残りはないぞとまぶたの自ら熱くなつて來るのを禁じ得ない。程なく命令一下、勇壯な軍樂の音につれて、大集團の分列の幕は切つて落された。旗！旗！人！人！銃！劍！輝く波が赤線黒線となつて廣野の彼方、玉座の御前へ進みゆく。何と勇ましくも美しい輝きの波ではないか。我等の足並も亦自ら、勇みゆく。「頭——右ッ」「おゝ……おゝ！」雪白の玉座上に立御あらせ給ひ微動だも遊ばされぬ神々しき御姿。

やがて 陛下には、おゝ何たる辱さ、いとも嚴に我等に擧手の御會釋を賜はつたではないか。其の刹那、既に軍樂も聞えず歩みゆく自らの足並も知らず、涙はら／＼と流れ來り身の在る所さへ辨へない。

何たる幸ぞ。草深き山村の名もなき位もなき一田夫の身を以て今此の御聖恩に浴す。光榮なり。名譽なり。家門の譽、身の面目、何物かこれに過ぎやう。一死君に報い奉るの情、菊花とともに千載に薫らせらるべき皇運の彌榮え、旭日とともに無窮に輝く皇國の隆昌をどうして心から祈らずしてをられやう。分列すみ奉唱終り、還御あらせられたる後はじめて見る列中の友等の眼にも光るものがあつた。

御親閱拜受の光榮に浴して

球磨郡湯前村立湯前青年訓練所第三年次

岩

本

清

萬國に比類なき皇國に生を享けし身の幸を、今度といふ今度初めてはつきりと深く／＼此の小さき胸に悟つた。それは

此の度選ばれて御親閱拜受の光榮に浴しての強い感じである。私は大君の臣である。大日本帝國の男子であると小さい時より胸に描いて居たのが、圖らずも身にあまる光榮に浴するを得て、どんなにか私の胸は高鳴つたでせう。

十一月十八日、大空ははき清められたやうにすみ渡り、一片の雲影だも認めず、九州（鹿兒島を除く）沖繩、山口を加ふる八縣下の若人六萬六千名、熊本帶山練兵場に集合、正午頃全く集合を終り、午後一時十二分、「君が代」の奏樂裡に畏くも 天皇陛下には自動車輿篋にて着御遊ばされた。場内は一時に鳴りをしづめて、すべての人々の面には輝きが現れ、緊張の氣場内に滿つ。知らず／＼に我が心も清められるを感じる。廣い帶山の空いつばいに神々しい氣が滿ち／＼て居る。唯有難さに身は小さきみにふるふる。やがて分列式、軍樂の響きも天上の聲の如く、清くすみて緊張した胸を一層緊張せしめる。やがて長くも 天皇陛下の玉座の御前へ近づく、軍樂もひとしほさえて胸にしむ。「頭右」おゝ、その號令にさつと一齊に右を向く。これより先はおそれ多くて書けぬ。たゞもう何とも言へぬ。おのづとふむ一足に力が入り、頭はしんとすみ、目頭があつくなつた。おゝ、今千載一遇の光榮に浴したのだ。日本男子と生れた甲斐があつた。有難い／＼。もう此の外に言葉がない。そして整然とした分列式、五萬一千三百六十五名の大部隊が一条亂れぬ歩武堂々たる有様、私は目頭があつくなつて涙がこぼれた。心強く思つた。

上にあの叙聖文武なる 天皇陛下を戴き奉り、下に今見る如きたのもしき若人あり。大日本帝國の前途何のあやぶむことかあらん。天皇陛下も此の若人の堂々たる姿を御親閱遊ばして、いかばかりか御心強く思召されたことならんと拜察して、ほんたうに今までに経験したことのない、最大至上のうれしさにひたつた。しかし我々は此の光榮に浴して、たゞ有難がつては居られぬ。内外共に多事多難なる皇國の前途を思ひ益々心を引きしめて、此の難局を打開し、以て洪大無邊の聖恩の萬一に報い奉らなければならぬ。

御親閲

球磨郡黒肥地青年訓練所生 吉村忠夫

滿蒙の風雲急を告げ國民の意氣亦天を衝かんとする秋、畏も 大元帥陛下に於かせられては九州男子の兵團よりなる、特別大演習御統監の爲、馬を吾が肥後の平野に進め給ふ、縣民の至誠奉迎はさることながら、吾等青年の血潮はいやが上にも沸かざるを得ない。

十一月十八日大演習各地行幸を終はらせ給へる 天皇陛下には九州各縣及び山口縣下の青年訓練所、各學校生徒、在郷軍人男女青年團員等六萬餘人御親閱遊ばさることになつた、斯く云ふ吉村も亦青年中の一人として参加の榮を得たのである、殊に前十七日には我が黒肥地青年訓練所侍從御差遣に相成り又本日此の光榮に浴する吾等は終生忘れんと欲して忘るゝ事の出来ない喜ばしさである十八日夜暗を突いて熊本にと向つた、踊る心を乗せて汽車は走れども今宵ばかりは遅い心地がする、オ、帶山練兵場に着いた、見渡せばさしもの廣漠たる託麻の原も人波で動いて居る、やがて準備も整つて、午後二時號音一發、式場入口の竿頭にスル／＼と引揚げられた、日章旗こそ祖國の尊き姿だ旭日昇る勢見せて大空にへんばんたる、この有様げに世界を照すの概あり、喇叭一聲「氣を付け」の合圖響き渡れば滿洲の如き帶山原頭寂として音なく六萬の男女青年肅然たり、やがておこる、おごそかな君が代の吹奏裡に玉座に就かせ給うたのである、かくして軍樂隊の行進曲にいよ／＼大分列式御親閱の御儀は始まつたのである、仰ぎ見れば清淨雪の如き白布の高き玉座に泰然と、立御あらせ給ふ御聖姿の神々しさ御紋章金色に燃える、錦の御旗の下にて「頭右」あゝ其の時全身全靈にしみ渡る有難さ、喜ばしさ唯だシーンとして感きわまり記する言葉もない畏も 聖上陛下には舉手の禮もいと御ていねいに、御會釋あらせられた親にも勝る御したはしさ誠にかしこき極みであります、吾等は此の御英姿を拜し大御心を拜察し奉る時益々義勇奉公の念を堅くし以て天壤無窮の皇運を扶翼し皇恩の萬一にむくひ奉らん事を期した次第であります。

御親閲に参加して

球磨郡木上村青年訓練所 大園正治

肥筑の野山に紅葉は映へて錦のみはたに旭は昇り、輝く御秘威を草木も仰ぐ萬歳萬歳萬歳、畏き天子の英姿を拜みこよなき舉れに肥の國民は眞心捧げて慶び祝ふ萬歳萬歳萬歳、

かけまくも畏けれども今般吾が郷土熊本縣下に於て行はせらるゝ陸軍特別大演習御統裁の爲 聖上陛下には旅程萬里御多忙なる御玉休にあらせらるゝにも御厭ひなく御西下あらせられ三日間の大演習も恙なく終りを告げ愈々十一月十八日を以て我等六萬餘人の若人の爲に御親閱あらせられたり、折しも時は晩秋山野の草木今や紅葉し秋冷の氣ほのかに肥筑の野を拂ひ萬山の王者あの大阿蘇に噴煙ほのかにたなびきて天は愈高く晴れたり。

時は十一月十八日私は我が青年訓練所代表として御親閱式に参列するの光榮に浴するを得たり。

折しも頃は晩秋の候なれば四山の木皆紅葉し遠く大阿蘇の噴煙かすかに煙りて十一月十八日の空は飽くまで高く晴れたり秋風さはやかに帶山一帶を拂ひ此の盛式を讃賀するに似たり午後〇時三十分開式も後數刻となりぬる程に一同謹みてやがて御來場の御龍駕を高鳴る胸をおし静めつゝ待つ間程なくやがて定刻一時十分となれば帶山一帶俄かに緊張し設けられし竿上高く日の丸の國旗は掲揚され一發の號砲は秋空高く響きて折しも軍樂隊の吹奏する「君が代」の樂と共にいと嚴かに式場へと御着發遊ばされ少しの御休息をなし給はず御玉座へと進み給ひ然して御親閱の御式は開始されたのである。

君が代は千代に八千代にさざれ石の巖となりてこけのむすまで。帶山に我々が到着して定められし場所に整列して開式を待つ時より私は否私許りでなく参列者の總てがさうであつたらうけれ共辱なさに全く夢の中に彷彿して居るやうであつた唯意識してゐるのは不敬にならざる様にと一舉一動にも全精神を集注し休めをするにも隣人と語るにもそれすら何を語

るやら判然と知らなかつた後日どんな風だつたかと回想する時全く當時のすべてが夢の様である。開式の定刻前竿上高く翻翻として翻る國旗を仰ぐ時私は西行法師の詠みし歌を思ひ出した「何ことの在しますかは知らねども(以下省略)」西行は神前に額づきし時の感情を詠んだのだらうけれ共私も又その西行の氣持と同様なるを痛感したのである「あゝ有難い」と私は又國旗に對して頭の下るのを如何ともする事が出来なかつた。定刻となつて軍樂隊の吹奏する「君が代」と共に聖上陛下の帶山に臨御遊ばされるや私の五体は全く石の様に固くなつて高鳴る胸をおし静めるよしもなく唯熱涙の頬を傳はるのを拭く術さへ知らなかつた。熱涙! 全く自然に湧出す涙帶山のすべてが涙に曇りてほんたうに夢に夢見る心地がしたのである、恐れ多くも陛下には少しの御休息をなし給はず御玉座へと御登り遊ばされ我等青年團の爲に御親閱遊ばされた壇上高く聖上陛下の御英姿を仰ぎ奉つた時私は全く筆紙に書き盡せない心地で唯出るものは感涙五体は恰も電氣に打たれたる如く頭の知らずく下るのを如何ともする事が出来なかつた。やがて分列の式が開始されて陛下の御前を行進し注目の敬禮をした時恭なくも陛下の御龍顏を拜する事を得たその刹那ほんとうに萬感交々胸に迫りて誰が感泣せざる者があらう? 分列式も恙なく終りを告げて元の場所に歸り全精力を絞りて萬歳を叫んだ時ほんとうに自分と言ふものゝ存在を忘れて唯皇恩の深き事のみ痛感しかたじけなさの涙ばかりであつた。

重ねて曰ふ西行の詠んだ歌に對して私は或一種の疑念を抱いて居た、それは「果してそんなにある事だらうか」と然るに何ぞや自分は今それを如實に痛感したのである「嗚呼それが全く眞實の帝國人として必然的に起來す可き心情なのだ」と、西行の胸中を想察する時私は全く慚愧に耐へない次第である。要するに神前に額付いた刹那の西行の心理も又御親閱式に列して御龍顏を拜した刹那の私の心情も歸する所は唯確かに「恭けなさに涙こぼるゝ」の一事に外ならないのである。

御親閱を拜受して

球磨郡城内青訓所第二年次 中 村 一 二

昭和六年十一月十八日、これぞ私達青訓生の一生忘るゝことの出来ぬ御親閱の日である。午前二時高鳴る胸を躍らせつゝ城内校を出發した。あたりは静寂たる眞夜中である。我等は晴の今日の日を物語りつゝ行進する。冷氣は益々加はつて吾等の心を一入緊張せしめる。やがて人吉驛に着く、集る若人は皆かゞやかしい面さしを見せてゐる午前三時半「出發の用意」とは列車指揮係より發せられた第一の號令である。整列、人員點呼を終へた吾々は第二の號令を待つ午前四時「乗車」一つ一つの行動が豫行演習に一段のかゞやきを見せてすつゝと運ばれる。一同乗り終ると汽車は汽笛を残して人吉驛を發す、談ずる者、歌ふもの、食事をなすものなど列車は賑やかなものである。私は靜かに晴の練兵場を考へて見る。七萬の若人が集ふ。風聲が着御になる。分列が始まるなど考へてゐる間にうとく眠に落ちてしまつた。汽車が二十餘の陸道を縫つて八代へ着いた頃には東の空が白み初めて来る全く夜が明け渡つた頃には汽車は熊本驛に着いてゐた。又しても敏活な活動が始まる降車、整列、前進、市街の滿艦飾を眺めつゝ高工へ着く。部隊の編制を終へた數萬の健兒が帶山練兵場に着いたのは十二時近くであつたか、さしもの廣い練兵場も今日は人の山で埋まつてゐる。晝食などすましてゐると午後零時二十分整列の號令が下る。忽ち一發の號砲は轟き渡つて國旗は式場西端に掲げられ翻翻としてゐる。今聖上陛下には御發聲あらせられたと承はる。廣い式場も水を打つた静かさに益々緊張せしめられる。「氣を付け」の號令喇叭の嘯鳴たる響き、軍樂隊の行進曲、豫行演習にはかほど意識した發起點でさへいつ通り過ぎたかわからぬ。しかしながら我等の部隊が、玉座の直前に至るや、陛下には端然たる不動の御姿勢にて舉手の御答禮を賜はつたことは今で黙しても、目のあたり浮かぶことである。私達が分列をすまして定位置にかへるや女子の奉唱部隊の奉迎唱歌が靜かに流れて来る。あたりはたゞ靜かである。實に選ばれた光榮がこの上もなく有難いことが轟々と感ぜられて涙が止めどもなく流れ

て来て禁することが出来なかつた。分列がすんだのは三時近くであつたが、正味一時間餘もかかつたといふことである。この間一部には雑談したものもあつたといふ畏れ多いことである。陛下におかせられては不動の御姿勢であらせられたと聞く、まことに畏れ多い極である。

今や我國は國家多事の折からである。陛下には政務御多端に亘らせらるゝに關らず産業の上に或は教育上心を盡させ給ふのみならず、今また我等若人の上に心を盡させ給ふこと一方ならざるを想ひ奉れば皇恩の洪大無邊なるを感ずると共に我等若人は至誠以て奉公し以て國運の隆昌を圖らねばならぬのである。私は歸るとすぐ家内一同に今日の有難さを物語つたのであつた。

御親閲を拜受して

球磨郡山江青年訓練所第三年次 橋 口 喜 人

待ちに待つた千載一遇の御親閲は十一月十八日と決定され、私は幸にも其の一人に選ばれたのであつた。午前四時半一同と人吉驛を立ち同七時熊本驛に着く、此の時私の胸は御親閲を受けることに一ぱいだつた。熊本驛で先づ眼に映じたのは驛前の奉迎門真心こめた市の奉迎門は立派に裝飾されて香高き菊花の御紋章が燦として輝いてゐた。私共は直ちに豫定された中學濟々覺に案内された。途中軍隊及警官の嚴めしい警戒振りには實に素時しかつた。市内の道路の設備各商店の裝飾は大熊本としての一大表徴と思はせられた。

午前九時十分中學を出發御親閲場たる帶山練兵場に向ふ。各縣代表を網羅する青年男女、青訓在郷軍人六萬六千整列された其の偉觀は實に胸を轟かした。此の並居る者は等しく赤誠こめて陛下の御着榮をお待ち申した、正午過ぎて煙火一發陛下は御着榮遊ばされた、今眼のあたり、純白の御玉座に堂々たる御英姿を拜する時の悦び——有り難さ——感極まつて胸のつまるを覺えた。今尙勞駕として其の御英姿は私の腦裡深く銘じてゐる。間もなく分列式は行はれた、天皇旗は燦

然と風に翻る。行進曲は鳴りひびく九州健兒の行進は次第々々に移つて行く、實に觀るものをして深き感銘を與へたのであらう、此の時畏くも陛下は終始御直立不動の御姿を以て、御會釋を賜はつたのである。私共は有難さの感涙にむせんだったのであつた。そして約一時間の後御親閲は無事終了した、私共はそれから雑沓の中をくぐり乍ら市内見學をなし、熊本城より大本營を俯し拜み十時の熊本發にて歸途についた。

嗚呼此の日何たる幸福であつたらう龍顔を拜した。この悦びは私の一生を通じて最も光榮であり、記念すべき最大の名譽である。私は粉骨碎身以て盡忠報國の爲に一身を捧ぐる覺悟である。

御親閲拜受の感想

球磨郡中原青年團 山 下 敏

明日こそは待ちに待つた 聖上陛下の御親閲を仰ぐ日だ。明日の英氣を養ふべく早目に午後八時寝につく。御親閲のことで心は一杯だ。やうやく眠に入る。……リンリンリンけたたましく起し時計が午前三時を報じた。スハとはね起き支度を整へ渡驛へ向ふ。やがて御親閲團隊を乗せた列車は走るが如く霧の夜を光榮に輝く熊本さして進行する。列車の中には陛下の龍顔を拜し奉らんと赤誠に燃ゆる人々によつて充たされてゐる。夜は次第に明けゆく。吾々を乗せた列車は、長くも陛下が玉歩を印させ給ひたる熊本驛に到着した。熊本市は聖恩に浴し光榮と歡喜に輝いてゐた。行在所を左手に拜し集合地に至り大隊の編成下に入り光榮の地帯山に向ふ。さしにも廣い練兵場も赤誠に燃ゆる人々によつてうづまつてゐる御親閲の時刻迫るや、式場正面高く日章旗を掲揚せらる。姿勢を正せば、戸山軍樂隊の奏する莊重なる「君が代」は場に響く。陛下に對し奉り全員敬禮奉迎、一層の緊張を覺ゆ。各集團毎に分列開始、團旗を先頭に陛下の御前近く前進するのだ。軍樂隊の行進曲に歩調を合せ進みゆく、大隊長の號令にて敬禮し奉れば、大元帥陛下には眞白き臺上に直立不動の御尊姿、やがて擧手の禮を賜ふ。嗚呼何たる幸福ぞ。感極まりて眼は濕みぬ。奉唱隊の進出御前に至り最敬禮を

なし奉迎歌奉唱、其歌詞もはつきりと合唱せられたが後には段々甲高くなりたるが如く覺ゆ、感極まりたるならん「君が代」全員奉唱後、熊本縣知事の發聲にて「天皇陛下萬歳」を三唱聖壽の無窮を祈り奉る。全員敬禮奉送裡に陛下は還御遊ばされました。茲に大演習の最後を飾る御親閲は終了したが、何時までも何時迄も、陛下の神々しい御英姿が私の腦裡を離れません。

思ふに 聖上陛下には、特別大演習御統監、御行幸を遊ばされ、政務御多端にわたらせ給ふに、本日吾等民草のために正に一時間、御親閲を賜ふ。只々感激萬感胸に迫る。吾々は、萬世一系の天皇を戴き、世界無比の國体に生を享けてゐるのだ。聖恩に浴してゐるのだ。而して今、皇統連綿として絶え間なき 陛下の御親閲を拜受することが出来たのだ。何たる幸ぞ。此昭和六年十一月十八日の光榮を記念すると共に聖壽萬歳を祈願し皇恩の萬分の一でも至誠御奉公することを誓つた。

御親閲を拜受して

球磨郡渡村青年團 犬 童 徳 一

歩武堂々。一步は一步と感激に胸は高鳴る。呼吸苦しいまでに緊張した心と身。歡喜の足並は揃ふ、揃ふ。そよかせにはためく團旗數千、光榮によるこび勇む若人數萬。肅として聲無く進む、進む。おゝ我等は今や光榮の御親閲を拜受せんとしてゐるのだ。

心持ち微笑を含ませ給ひて御答禮遊ばす、おゝその御龍顏の麗しさよ。不動の御姿勢正しく御起立遊ばす御英姿の尊さよ。我等の心をはたと打つ森嚴さ、そしてその中に脈々としてもり上つて来る言ひしれぬなつかしさ。「義は君以、情は父子」「股肱の臣」「赤子」いろ／＼なうれしい言葉がフラッシュユバツクの様子に頭の中を廻る。一時間有半微動だもしたまはず分列をみそなはず大御心の有難さ。何れの國にこの感激の光景を見得るか。おゝこの感激こそ、皇國に生れ出た我等

の喜の源泉となるのだ。

「國運進展ノ基礎は爾等青年ノ修養ニマツコト多シ。」御令旨の御言葉が頭をかすめて通る。おゝ陛下には我等青年に無限の御期待を有せられるのだ。あの微笑を含ませ給うた御龍顏は何を意味するか。我等の使命は重い。ひしひしとその責任の重大さを感じる。さうだ我等は奮起するんだ、この大君の爲に、祖國の爲に。この御期待に副ひ奉らん事を誓ふ。つどへる幾萬の青年の心にも相通する本日のこの歡喜は將來の日本の向上發展を強く暗示してゐるではないか。

あの燃ゆる意氣、あの歩武堂々たる、これこそ新日本の力強さとなるのだ。おゝ皇國の前途の明さ、楽しさよ。歡喜の足どりは軽い。

御親閲の光榮に浴して

球磨郡神瀬村青年團 松 本 求 己

秋天高くして馬肥ゆるの候十一月十八日それは生涯忘れることの出来ない輝かしくも歡び溢れる一日であつた。午前一時起床冷水で身を清めすが／＼しい氣分になつて伊勢皇太神宮に禮拜した。午前二時家を出發四時四十七分白石驛發列車にて熊本へ向ふ。八代驛を過ぎて漸く夜は明けた。汽車の窓より空を眺むれば昨夜より氣遣はれてゐた曇天も何處へやら消え失せて良い天氣である。午前七時熊本驛に着く、驛頭に築かれた數丈の奉迎門、鋪裝工事を整へた十數間巾の道路、そゞろに 聖上陛下の行幸を壽ぐ想が身に染んで来る。

直ちに濟々費に集合し大隊中隊の編成を整へ隊伍を組んで出發、十一時御親閲場たる帯山練兵場に着いた。空は一點の雲さへなく澄み渡つて東に阿蘇の連山、西の彼方に金峯を望み、日本晴れに恵まれ若き血潮は燃へ胸は高鳴る、總べてが輝かしさと歡びに充たされる。この日集るもの九州、山口、沖繩、各縣男女青年團青訓生、學生、在郷軍人其の數實に六萬六千に達し掲ぐる團旗、校旗はそよ吹く風に翻り 聖上陛下の着御を御待ち申上げる。時に午後一時十六分「氣を付け」

の喇叭の合圖一聲に次々へと「氣を付け」「氣をつけ」の號令でさしもに廣き帶山も寂として音なく響き渡る戸山學校軍樂隊の「君が代」の奏樂裡に着御あらせられ龍顏いと御麗はしく展望臺に玉歩を進め給ふ。金色の錦の御旗はそよ／＼と吹く清めの風に翻り高き玉座に肅然として立御あらせられた御聖姿を仰ぐ時、其の神々しさたとへんに物なく自づと溢れ出づる感激の涙を禁じ得なかつた。一同最敬禮、直ちに分列、軍樂隊の奏でる樂譜に合せ「分列に前へ」の號令で前進愈々身心共に緊張し其の一步々に力はこもり恐れ多くも陛下の御前に到り「頭右」の號令で注目して行進すれば長くも陛下には直立不動の御姿勢にて一々擧手の御會釋を賜ふ。其の颯たる御英姿こそ實に神々しき極みであり、私は唯宏大無邊なる皇恩の辱けなさに感泣するのみであつた。分列終れば女子奉唱部隊がさながら押し寄する黒潮の如く三方より静々と玉座の御前に進み出る。一同最敬禮の後純眞なる乙女の眞心から湧き出づる一聲の濁音もなく清く澄んだ美しい奉迎の歌は熱血燃へる胸を打ち萬感胸にせまりて感激の涙は又も溢れ出た。續いて「君が代」六萬大衆の妙音は大地を響かし草木皆が今日の佳き日を詠ぐ思がした。終りに熊本縣知事（本山文平氏）の發聲にて萬歳を三唱、其の聲は實に天地に轟いた。これこそ御親閱拜受者六萬同胞の赤誠をこめ腹のどん底から熱血をしぼつて唱へた。天皇陛下パンザーイの聲であつた。午後二時十六分「君が代」の奏樂裡に陛下には還御あらせられ、指折り算へ一日千秋の想で御待ち申上げ我等の榮譽と歡喜に依つて迎えられた御親閱は終りを告げたのであつた。此の間實に一時間、陛下には直立不動の御姿勢にて微動だにあらせられず御親閱を賜はりしことは誠に畏き極み且つ恐懼に堪へない次第であつた。

皇恩普く幸なるかな君の御恵みは私達兄妹の身にも及ぼされ、私は男子青年團旗手とし、妹は女子青年團員として兄妹揃つて無上の光榮に浴し、畏くも天顏を咫尺の間に拜し奉り誠に感慨無量、殊の外其の感を深くすると共に昭和六年十一月十八日彼の帶山原頭に於ける御親閱の光景は深く／＼心のカメラに映じて生涯忘れることは出来ないのである。嗚呼憶へば昨年十一月は畏くも陛下が未だ東宮におはしませし時我々男女青年の教育に大御心を止めさせられし有難き御命令を賜うた十周年の意義深き記念日であつたが本年ははからずも大演習御統監のため我か熊本へ行幸遊ばされて親しく御親

閱を賜はる生等の光榮何物か之に加へん。是偏に上皇室に於かせられて我等青年の教育に大御心を止めさせ給ふ御聖慮の現はれに外ならぬのである。我々は此の千載一遇の光榮に浴したることをば片時も忘れず常に其の感を新にし一意奉公の念を失はず自己の修養に努め職務に勵精し青年資質の向上に努力しよう。

御親閱感想

球磨郡人吉町處女會員 山 島 君 子

大演習が報ぜられますや 聖上陛下の御盛徳を慕ひ奉つてゐる縣民は津々浦々に至るまで、擧つて皇帝の行幸を御待ち申し上げてゐたのでございました。九月に至りましてから私達處女にも御親閱を賜はるとの辱い通牒を戴きまして、有難さ此の上もなく唯々身にあまる果報を神佛にひれ伏して謝し奉つたのでございます。肥筑の里も奉迎の用意萬事整へられ紅葉にそまつた程遠き野山、澄みきつた大空、總べては皇帝の榮へある行幸をお待ち申してゐました。愈々十一日畏くも御聲を熊本驛頭に迎へ奉りました。

陛下におかせられましたは、三日間に亘る特別大演習を雨の中にもおいとひあらせられず恙なく終へさせられ、觀兵式地方行幸、寸暇の御憩ひもあらせ給はず、而も龍顏殊のほか麗しく、拜察するだに辱うございます。

明けて十七日、御親閱に浴する者は皆、きめられた臨時列車で送られ、帶山近くの學校に合宿して、明日を御待ち申し上げたのでございます。私達は黒髮校に宿をとりました。皇帝おまします地かと思ひますれば明け初める東雲の空いとも神々しく、午前六時には身を淨め装ひを整へまして市立校庭に整列致し、御親閱を仰ぐ縣下の女學生、處女は堂々たる列並をつくり、午前八時二十分より帶山へと進行致しました。

所定の席に着いて時を過します事約二時間半、白布にて覆はれた神々しい玉座は、遙か六百米の臺地に一段高く設けられ、九州各地より集りたる在郷軍人、専門學校、中等學校、青年男女子は夫々所定の場所に着きまして陛下の御風聲を

御待ち申し上げたのでございます。人々は緊張し、七萬の同胞は咳一つする者なく氣を付けの喇叭は極めておごそかに連山に響き渡り「君が代」の奏樂、最敬禮裡に玉座に成らせ給うたのでございます。聖上陛下に、直立不動の御姿勢にて亙らせたまひ左御下には、隣村の球磨郡大村出身吉峯曹長 天皇旗を捧げ奉り、右御下には鈴木侍従長をはじめ、澤山の侍従の御方々御付き申し上げ、本山知事閣下以下高貴高官の方々が列してゐられました。御聰明に亙らせたまひ、御健勝にてまします御英姿を拜し奉つて、感激は一時に込み上げ辱さに一入むせびました。軍樂隊の奏するマーチに合はせて、二百有餘の各團体は分列式を行ひましたが、陛下におかせられましたは、其の度毎に擧手の禮を賜はり、不動の御姿勢にて、一時間餘の長い間微動をもらせられず、親しく御親閱賜はつたのでございます。十三日の大演習におきましては御愛馬白雪に召され、降りしきる雨の中をも些かの御いとひなく、龍田山上寶積寺の野外統監部にて、秋雨煙る飽託の原野に奮ひ戦ふ皇軍の活躍を約一時間三十分亙り御統監あらせられたと承はりますが、誠に畏き極みでございます。續いて、辱くも御前近う數十歩の前に參進、此處に誠をこめて拜し奉りました。御前とて、おほけなさに自ら頭も垂れ、ひたすら畏さに感極まり、歌ひ奉る聲もとぎれ／＼に、込み上ぐる感激を押へて、眼は涙にかすみつゝ奉唱致したのでございました。

此の光榮、此の喜び、何によつてか表し得ませう。皆ひとしく此の感を深うせられた事と存じます。

すめ神の御前近うおほけなく

おろがみまつる今日のかしこさ

しみ／＼と偲び奉るのは、量りない御恩徳でございます。私達は此の御恩徳に對し奉り、唯報謝の誠を捧ぐるのみでございます。古今未曾有の國難多事の折、畏れ多き事ながらかうして我々に御親閱を賜はつたのでございます。こゝに七萬人のうら若い同胞は、他に類ない大和魂を鍛ひ、一致團結して、君に仕へまつらねばなりません。又大和をみなとして恥ぢない修養を積み、皇御國の礎を彌が上にも御守り申し上げ、輝く日本の建設に努力しやうと堅く心に誓ひました。

御親閱の感想

球磨郡大村處女會 山 本 智 惠

あゝこゝにすめらみことの御聲を

迎へ奉れり御聲を 迎へ奉れりみ光に

阿蘇の高峯も有明の海もかがよう

この有難き奉迎歌を口ずさむ度に十一月十八日、私達一生に取りてわすれる事の出来ない光榮ある御親閱の日が思ひ出されて参ります。總員六萬六千が御親閱を仰ぐ十八日の空は絶好の秋日和でございました。純白な高さ二間餘りの玉座のそばには大國旗がうら／＼かな陽光を浴びて高くひるがへり、總員幾萬かの姿は輝かしくも大日本の若き力強さを表現して廣々とした帯山の大平原を埋めつくし、誰一人として微動だにせぬ静けさだ。萬端の準備も終り、畏くも 天皇陛下には御英姿を御迎へするばかり、やがて號音一發自ら引締る、莊重な「君が代」がゆるやかに流れて敬禮の合圖がかゝり、玉座を拜せば肅然として立御あらせ給ふ御英姿の神々しさ。本山縣知事は御前に進まれ、御親閱を仰ぎ奉る旨を奏上して居られるのが、かすかに拜せられる。五彩の色とりどりの校旗を先頭に分列式が開始せられた。謹んで拜せば 天皇陛下には一々御會釋を賜ふ。やがて男子の御親閱も終了し、私等六萬餘の光榮ある御親閱を仰ぐ時はつひに來た。軍樂隊のマーチに合はせ玉座を凹形に圍みながら前進、体形を整へてびたりと止つた。玉座の御近くより御英姿を拜し奉つた時、有難さに涙こぼるる。「君が代」の奉唱も終り「あゝこゝにすめらみことの」御親閱奉迎歌の奉唱、誰一人として頭をもたげる人も無く、しのび泣く聲が其處此處からもれて來る。奉迎歌も終り本山知事は御前に進まれ精一ばいの力を張り上げられて 天皇陛下の萬歳三唱これに和して萬歳の聲は原頭をゆるがし遠き天地にもこだませよとばかり響きわたつたのであつた永い間の雨ははれ、今日の上は將來ますます日

本女性の名をはつかしめぬ様女子の本分に盡す事に努力し、その皇恩の萬分の一にもむくいん事を誓ふばかりでございます。

あゝ我等いけるかひありおほけなき 今日ほまれを

おほけなき今日のほまれを萬日に

語りつぎつゝことほがむひとつ心に

御親閲に参加して

天草郡富岡青年訓練所第三年次 野 口 直 忠

今日十一月十八日こそ、我等に御親閲を賜はる日なり。朝早くより、數萬の御親閲部隊と數知れぬ拜觀人とは、陸續として帯山へ／＼と急ぐ。部隊の整列を終りしは、正午近くなり。此の日、天は晴れたれど、北風寒し。彼方の高嶺のあたり、一抹の瑞雲のたなびくを見る。強雨中の大演習御統監より、毎日各所への御巡幸の御疲労をもいとせられず、我等に御親閲を賜ふ大御心の有難さを恐懼しつゝ御到着を待ち奉る。

一時近く軍樂隊の入場あり、やがて響くラツパの音、すは 陛下御臨場の知らせなり。ゆるめる心をひきしめて不動の姿勢にて御座所に注目す、緊張、廣き帯山に一語なし。午後一時十五分、陛下玉座御着の吹奏あり。間を置かず、前方にひゞく「氣をつけ。」の聲、かくて御親閲の幕はひらかれぬ。大集團は逐次に進みて、やがて我等の大隊前進す。心躍動して足輕し。軍樂隊の奏づる行進曲も間近に、いよいよ 陛下の御前近し。身も緊張の極やがてかゝれる大隊長の號令「頭右。」青訓旗を倒して「頭右」す。陛下には直立不動の御姿勢にて擧手の答禮を賜はれり。實に神々しき御姿、莊嚴涙の頬を傳ふを覺ゆ。見下し給ふ御親の隙見上ぐる赤子の感激の涙、おゝ汝等朕の子等たのもしき若者よ。我はその御聲きく心地ぞする。陛下の御心我等に傳ふ、我等の誠心また 陛下の御心に通ひしならん。分列終りて女子奉唱部隊の奉

唱あり。君が代の合唱かくして、天地にとゞろく萬歳の三唱にめでたく御親閲は終りぬ。「我生けるしるしありけり天地のさかゆる時にあへらく思へば。」げに生ける甲斐ありし今日の感激歡喜、何れの日か忘るべき北風寒きこの日、一時間餘にわたりて高臺に立たせられ微動だもなし給はず、御親閲を賜はりし御強き御心、弱き我等の心にむさうちうたれし心地ぞせし。

この有難き若き 陛下をいたゞく日本の若人、我等粉骨碎心すべてを捧げてこの大御心に副ひ奉らん。これ今日の我等すべての願望にして、覺悟なりき。

御親閲に参加して

天草郡赤崎訓練所第三年次 肥 前 瑞 吉

喇唳たるラツパの音が秋氣深き帯山練兵場に響き渡ると騒然として居たこの廣い原頭は寂として聲一つ出でず、満場の蒼生は聲を呑んで玉聲を迎へ奉つた。やがて、號音高く風聲があらはれると、勇壯なこゝちよい軍樂隊の「君が代」の合奏が西北の一隅から起つた。それを聞いて居る中、私はもう感激でいつばいであつた。やがて、玉座に、玉歩を運ばせ給ふや再び起るラツパの音に、満場の視線は期せずして玉座に注がれた。折から秋晴れの空は飽く迄晴れ渡り、各種の色に染められた團旗、訓練旗、在郷軍人旗は風に翻翻とひるがつてゐる。

思ひもしなかつた事である。愚かなこの身が民草の一人としてこの千歳一遇の好機に深い御恵みの爲に、このやうな名譽を得る事が出来ようとは。

私は遙かに双眸に全身の力をあつめたけれど、眼がかすんだ様な氣持がして何度も／＼眼をしばたゝいた。かうしてゐる中に合奏は止んだ。指揮官殿の「直れ」の號令で各隊は元の不動の姿勢にかへつた。再び起る進行曲の合奏裡に、見よ!! 靜かに力強く先頭部隊は行進を開始したのである。銃先の劍はきら／＼と輝き隊伍は肅々として一絲亂れず進んで行く。

おう!!この壯絶!この快絶!感激の靈感が背筋から足の爪先まで走つた。この壯觀をこの感激を言ひ表はず言葉は私には知らない。而して、この力は何處から生れて来るのか?理屈をはなれて皇恩の有難さといふものや、國体のすぐれてゐるといふ事がしみじみとわかつた。うごめいて行く、そして後からくくと續いて行く其の隊の動きを、遙か此方から私はぼろぼろとみつけてゐた。思はず涙が落ちた。その動きは一人一人の力強い自覺ある感激ある行進によつて出来上つてゐるのであるが、それが一人一人の自分ではなくして、全体に統一された大和魂の合奏曲である。大和魂の形をとつて表れたものである。

法悦に似たうれしい心の底から起る感激で私はいつばいであつた。私は之を——この壯大な實景を——草深い田舎に農業に従事して居られる父母に見せたかつた。幼い弟妹に見せたかつた。姉に見せたかつた。故郷の先輩に見せたかつた。否日本國民全部に見せたかつた。

我國体の精華に就いて、皇恩のきはまりなく大きいものである事に就いて、今迄校長先生始め諸先生のお話を聞いた事は幾十度に及び、其の度毎に感奮したがこれ程深く感銘を受けた事は未だ一度もなかつた。

現在の國民の中には、歐米諸國の思想にかぶれて、天下に比類のない光輝ある國体に對して如何はしい考を抱いてゐる者がある——譬へ九牛の一毛にも及ばぬ程の小さた力ではあるが、よし一人であつても識者は思想國難と言つて、之を憂へてゐられるといふ事も聞いてゐたが、この緊張せる場面を見た時に、まだくく大和魂は燦然と輝いて一點の瑕もなく、識者の憂は杞憂に過ぎてゐる事を大へん歡ぶのである。食へない反感から、富者に對する反抗となり、遂にこのやうなまとめな破倫の考に墮落してゆく同胞の事を思ふ時憐憫の情に耐へない。それに對して、深い理屈を以て導かうとしてゐるとすればそれは火を消すに火を以てするの類ではあるまいか。よしいかに道徳心の亡んでゐる者にせよ、この盛大な明るい朗かな大和魂の合奏曲に加はつたなら胸奥に眠つてゐる琴線は、春雷が鳴れば萬の魚蟲が之に呼應する如くにこの至美至高の團休への共鳴をよび起さないでは居るまい。

御親閲の感想

天草郡一町田青年訓練所第一年次

幸 川 光 幸

晴れの帶山練兵場にて、限りなき感慨に赤き血潮のたかなるを覚えしより早一ヶ月を経たり。

想ひ起す。當日の光景。莊嚴なる偉觀なりしを。果しもしれぬ廣々たる帶山の原頭、七萬に近き若者の群。やがて「君が代」の嘯唳とひびくうちに、陛下は玉座に立たせ給ひき。君を迎へ奉りて拜聞する。「君が代」の莊嚴さ、一入胸うたるゝを覺えたり。莊調なる軍樂の吹奏と共に、我等の御親閲を行はせ給ふ。陛下には一時間にわたる長き間、直立不動の御姿勢にて、一一會釋を賜はり、一分もお足を動かし給はざりきと承はる。御精勵拜聞するに長くおそれ多し。世界に其の類なき日東帝國の聖天子の大御前に分列式を行ひたる我等の光榮、皇恩限りなき聖代に生を享けたる幸、何物かこれにたとへむ。盡忠報國の赤誠を思はず神に誓ひたる者、あに我一人にあらんや。

陛下の國務に御精勵あらせらるゝ由、度々承るに、當日の御英姿を思ひてさすがにと拜察せられたり。かく光榮に浴したる我等の責務亦大なる哉。重大なる時局に際して、我等は大に奮ひたつこそ光榮ある御親閲に應へたてまつる唯一の道にあらずや。

御親閲に列して

天草郡嵐口青年訓練所第三年次

竹 地 知 義

我等青年の血の高鳴りを覺えつゝ一日千秋の思ひで待ちに待つた、千載一遇の光榮に輝くべき日、昭和六年十一月十八日の吉日は訪れた。

此の日晚秋の空はさわやかに晴れて、帶山一帯の高臺地は瑞氣漲り渡るの思あつて一入我等の感激の念を咬るものがあ

つた。空前の盛儀、御親閲の光榮に浴する九州各縣下男女學生、青年團、在郷軍人、青訓生七萬は熊本市の東郊帶山練兵場に整列して、陛下の御着を今や逆しと待ち奉つた。やがて機軸の熟するや一發の號音は鳴り響いて酔へる我等を覺醒させ、式場入口の竿頭にスル／＼引揚られた、大國旗。祖國の貴き姿、赤き心を青空高く描いた日の丸の旗風に萬衆の心々も引締る。軍樂隊の森嚴なる「君が代」の奏音と共に、英姿颯爽、神々しき陛下の御姿は清淨雪をあざむく白敷布の高き玉座に肅然として立御あらせ給ふ神々しさ。さながら神前に詣でし心地した。分列式はいよ／＼歩武肅々として展開し校旗團旗は千草の花の如く黒き服、柿色の服の人の流れはいつ盡きるとも知れない。終りて「あゝこゝにすめらみことの御車を迎え奉れり」の奉迎歌は若き乙女等の口々から清く澄んだ調は或は高く或は低く高い／＼山に登つた感がするかと思ふと深い／＼海底へ沈んで行く様な氣がし、その餘韻はかすかに秋空に消え、續いて全員熱血をしぼつて叫んだ。莊嚴無比の萬歳聲裡に、龍顏殊の外麗はしく假の宮居に還御あらせられた。其の間流石に廣き練兵場も最高潮の感激の渦の漲り、唯々夢に夢見る心地であつたと云ふ外形容すべき辭を知らない。

されど我が帝國が千載に動きなき所以は、上に斯くの如き叙聖文武にして臣を見ること子の如く慈愛深き大君を戴き奉り下に忠君愛國の至誠に燃ゆる臣民あるからである。この國に生れたる我等が幸福たらざるば、天下何處にか幸福なからんやとは、今回御親閲式に列して頭腦深く刻み付けられた一大信念であつた。

御親閲の感想

天草郡浦青年訓練所第四年次 高水萬作

菊香る秋、昭和六年十一月十八日。熊本の大空が曉のもや薄れ行くにつれて御親閲氣分は、さしもの大熊本の全土に満ちに滿つ。此の日こそ肥の國男兒の我等にとつて永久に忘却することの出来ない光榮の日である。

若者の血肉は躍る。感激は拜受者の顔に溢る。我等青訓生に在郷軍人女子青年團員、緊張せし足どりは整然たる隊伍を

整へ朝霧の中を光榮の地、帶山練兵場へと急ぐ。其の數七萬餘、見る間にさしもの帶山練兵場も人をもつて埋む。後方斜面をなす外輪は一般拜觀者の群をもつて目もはるかに連り、刻一刻近まる御親閲の時刻を待つ。分秒。おごそかなる樂の音につれて、畏き天子の英姿を玉座に仰ぎ奉るや、我等受閱者一般拜觀者は申すに及ばずあたりの草木に至るまで等しく、聖上陛下の御前にひれふす。おゝこの宏大無邊なる壯觀。只感極るの外なし。やがて各部隊の進軍は戸山學校軍樂隊の樂の音と共におごそかに御親閲は開始された。一糸亂れざる如く訓練された其の動作。其の壯觀。我が帝國の偉觀である。其の間かしこき陛下には一々親しく御親閲御答禮を賜り御親閲を拜受せし我等は等しく感激おくあたはざるなり御親閲を拜受したる我等は等しく畏き陛下の御勇姿を拜し御惠深き無限なる大御心に浴し奉る。誰か皇恩の深きに感泣せざる者あらん。拜受者我等は唯々御稜威に浴し、ひたすら皇威の發揚を祈つた。若人我等はそれと共に日本帝國の國運の隆昌發展の重任を一入深く膽に銘じ一層の奮起と努力とを心に契つた。

おゝ。十一月十八日。此の日こそ我が一生における最も深き意義ある一日であり感激措くあたはざる日である。

御親閲拜受の光榮に浴して

天草郡大多尾青年訓練所第三年次 船本勝一

(一)

十一月十八日。四五日降り續いた雨も止み、曉の空にはちぎれ雲がふんわりと浮き、青白くまた／＼大空の星に護られて、阿蘇の外輪山は紫色にぼかされたまゝ眠つてゐる。おゝ此の日よ。畏くも聖上陛下は我等九州男兒の意氣をみこなはせらる光榮の日だ。我等はこの限りなき光榮を身に浴びる今日あることが、如何に我等を勵まし、努めしめたことであらう。平素の訓練に於て、一舉手一投足にも氣をとめつゝ、ひたすら待ちわびた日は來たのだ。

(二)

十分身仕度をすませ、足も軽く集合地に向ひ、やがて高工に着く。こゝには露營したのも居たのだらう。所々に焚火のあとがあり、新しい柱の電燈が朝霧にうるんで、ぼんやり光つてゐる。やがて帯山練兵場に向ひ、第一集團から出發。意氣旺んなる我等の列は、蜿蜒として長蛇の如く、中隊の先頭毎に翻る訓練旗について肅々と進む。かくて練兵場に着き皆所定の場所に着いた。見れば早くも先着の九州各縣の團體が、胸に白、青、緑等の章をつけ、ひし／＼と居竝んでゐる。

(三)

我等は場の中央と思はれる所に整列、飯田中隊長殿の凛たる號令によつて「休め」をした。見渡せば帯山原頭の廣さを埋めつくしてひれふす民草を親しくみそなはせ給ふ。陛下の玉座を見た瞬間、全身の喜びは、はやあたたかき涙となつて、眼をうるほし、玉座がぼうと見えた。やがて陛下の御臨場である。一天萬乗の大君が玉座に立御あらせられた剎那崇高森嚴何とも形容し難き感激と感奮とを禁ずることが出来なかつた。我等が一齊の分列式だ。やがて榮ある喇叭たる戸山學校の軍樂隊の奏樂裡に、歡喜と光榮に熱し切つた號令と共に前進。長くも颯爽たる御英姿に崇高なる感激は荒磯に狂ふ怒濤の様を亂舞して、ただ進む感激の中に光榮の歡喜に陶醉するばかりであつた。聽て女子奉唱部隊の奉迎歌は一萬五千の若き火の國乙女の感激にふるふる唇から迸る。清く澄んだ旋律が、廣い帯山の平原を流れ、人々の胸奥にひびき、更に秋空に餘韻して幽かに消えて行く。おこそかさにおぼえず感激の涙ははふり落つるのだつた。

感激新に湧き起る尊き今日。今日ほど日本國民たるの幸福を痛感したことはない。聖なる感激にふるひ立つ心は、放たれたる彈丸の如く目的の彼方に邁進する。おゝ古き歴史の大亞細亞の興亡を一身に背負つて立つ三千年來の神國日本、我等は其の中堅である。大君、祖國、今や熱した我等の腦裏にはこの外には何物もなく、あらゆる事業を發展せしめ、障害を打破し突破する尊きものを獲たことを、永久に記念するは、この精神を、すべての行に具現するの外はないとの決心を深くした。

御親閱拜受の感想

天草郡富津村青年訓練所第三年次 倉田純義

瑞雲天にたなびき、陽光地に満ち、九州民草は欣喜して、聖駕肥筑の野に、行幸まします今年の秋を、お待ち申して居ました。三十餘年振りに、熊本の中野を中心に第六、第十二、兩師團の特別大演習は、天皇陛下御統裁の下に、十一月中旬を期して、行はせられましたので御座います。然も陛下寸餘の御暇もあらせられませぬのに、私達男女青年團、青年訓練所生、男女中等學校生徒の爲に、忝けなくも、熊本帯山練兵場に於て、十一月十八日をトし御親閱の盛儀を舉行致されました。私達は陛下の青年を御いつくしみ遊ばします。此の思召に感泣して、光榮の餘波に預つたので御座います。私達一個人の譽ばかりでなく、一家一門の榮譽は、何ものも之に勝るものはありません。不肖私は西陣の地、天草郡に人となり、今度選ばれました、當青年訓練所生を代表して、親しく龍顏に咫尺し奉つたので御座います。身の昭和の盛世に遭ひました事が、こよなく喜びに堪へません。當日は、早朝に床を起きまして、齋戒沐浴致しまして、聖上のみます行在所の地を拜し、松田青年訓練所主事先生に引率されまして、午前六時、成趣園鳥井前に集合、七時帯山に到着、所定の手續を済ませ所定の場所に集合、御親閱の開始されるのを待ち申しました。六萬有餘の今日の佳き日に集る人達は、威容整然として、隊伍を揃へ、水をうつたやうに肅として、聲咳一つもありません。「君が代」の奏樂と共に、天皇陛下には龍顏殊の外御麗しく、御出まし遊ばしまして御親閱を御開始遊ばされました。此の一瞬時御尊容に接しますと共に、身は自ら神に入り、名狀し難い、感激の渦にとざされました。漸くにして、自分にかへり、御親閱を無事に済しますと、言ひ知れぬ莊嚴無限、感激の涙は私の頬を流れました。私は日本帝國臣民としての有難さを切實に感じました。

嗚呼、私は日本帝國の臣民である事を如何に幸福に思つたことでありませう。と共に我が國體の世界無比の尊さを強く強く意識させられました。私は此の千載一遇の光榮に、身も心も強くなり、郷に歸りましては、衆に先んじて、忠孝の人

となり、一旦緩急の際は、義勇奉公の精神を發揮して、大君の爲に盡さむと、堅く／＼覺悟を奮ひ起しました。平時は、自家の業務に精進し、忠良なる日本國民となりて、陛下の赤子である事を、寸時も忘れずに行き度いと心に誓ひました御親閲を濟ませました後は、心氣の頓にすが／＼しさを覺えました。

御親閲をおうけして

天草郡二江青年團員 青木正利

光榮に輝く帯山の廣野瑞雲たなびく絶好な御親閲の秋日和御親閲かくも民草の上までも遍く御考へがゆきわたらせ給ふお恵の大御心にそひ奉り、集り來る我等六萬餘の代表は何とも申しやうなく、只々感涙に咽ぶものばかりであつた。整然たる代表者の姿は勇壯と言ふか壯觀と言ふか、莊嚴さはきはまり有りませんでした。内外の御政務御多端な折り御少閑をお割き遊ばして御親閲あらせらるゝことを思ひ奉る時、聖恩にたゞ／＼感泣するのみでした。

午後一時十五分 天皇陛下着御の知らせは莊重な「君が代」の吹奏によつて報ぜられた。かくて定め玉座に嚴然と御直立遊ばし給ふその英姿は實に颯爽たるもので凛たる御稜威は自然にあたりを拂つて見えました。壯快なる軍樂隊の吹奏に我等は一層元氣を鼓舞し歩武堂々と分列すれば、一々舉手を以て迎へさせ給ひ長くも始終端然として、容儀おごそかに拜せられたるは更に恐懼の外はありませんでした。赤誠こもる「君が代」の奉唱も眞心あふるゝ奉迎歌、聞くだに心骨に徹して想像に餘りあるのです。

斯くまでも御仁慈深き聖天子の上に戴く我々はその寂慮に答へ奉るべく、大に努力する所あらねばならぬと思ひます。すべてが人の龜鑑として誠に世界に類のない 聖天子でおはします御健かにおはす龍顏と言ひ御元氣に滿ち給ふ御動作と申し、今尙あり／＼と眼前に思ひ浮びます。私として實につきせぬ思出であります。

御親閲感想

天草郡富津村青年團員 田中勇

意義深き御親閲に不肖の身を以て天草郡富津村青年團を代表して身に餘る光榮に浴し無事に大任を果し得ました事を感謝致します。

十一月十八日此の日天高く氣澄み、瑞氣洋々として天も晴の御親閲を祝福するものゝ如く思はれ、千載一遇の光榮に浴せんものと集ひ來る男女青年團、在郷軍人、男女中等學校生徒六萬餘人は帯山練兵場に雲集し、さしにも廣き練兵場も所狭きまでに思はれました。

午後一時十五分煙火一發の合圖と共に 陛下には御親閲場に御臨場遊ばされました。御休憩の暇もあらせられず直に御玉座に御立ち遊ばされました。御親閲は開始されました。御威風あたりを拂ふ尊嚴なる 陛下の御英姿を目のあたりに仰ぎ拜しまして、六萬の御親閲拜受者は等しく感激に滿されずには居られなかつたのであります。又軍樂隊の演奏により嚴かなる「君が代」の合唱始められるや私は感激のあまり涙が込み上げて思ふ様に歌はれませず、只々若人の心臓に愛國の旋律の高鳴るをおぼえ献身奉國の至情に全身の躍動するを感ずるのみでした。

眞にあの莊嚴なる場面に觸れ嚴肅なる氣分に浸された者こそ今更の如く萬世一系の皇統連綿として類なく、世界無比の國体の有難き眞意がしみ／＼と感ぜられると共に眞劍に皇國の御爲に邁進せんとするの決意を堅くするであります。まことに十八日こそ全く平素見られぬ國民の美しく漂つてゐるのを感じました。さうしてあの清まつた心情と終生忘るべからざる感激とを永久に胸に刻みて更に自重せんことを誓ひました。「國家興隆ノ基ハ青年ノ修養ニ俟ツコト多シ」

陛下の我等青年に期待遊ばさるゝ事の如何に大なるかを思ひ至る時政務御多端の折にもかゝはらず特に我等青年の爲に御親閲遊ばさるゝ有難き御聖旨を奉戴する時我等は無上の光榮に感激すると共に其の責任の重且大なるに奮起せずには居

られません。不肖の身を以て今日の光榮に浴しました事を感激すると共に將來一層の自奮自重を圖りたいと覺悟致して居ります。

御親閲感想

天草郡富津青年團員 出崎 静人

昭和六年十一月十八日、此の日こそは私の一生に於て決して忘れる事の出来ない日であります。私は今秋吾が肥筑の地に於て親しく陸軍特別大演習を御擧げ遊ばすことを承はつて以來「萬事を排して」「是非」とかうした心で一杯だつたのであります。會ふ友達、集ふ友達、凡ての人は此の大演習の話で持切つてゐました。一日千秋の思ひで待つてゐました私にはからずも「御親閲」かうした知らせが参りました。其の時私の身は凡てを滿された思ひで身の置場を忘れる程でありました。

愈々十一月十八日、悦びに高鳴る胸をはずませながら廣漠たる帯山練兵場に参りますと、早や無慮數萬の若人や觀衆にて立錐の餘地だに無いと思はれる程、然も森として嚴かな光景に接した其の瞬間、御皇室の益々榮え行くを祈つた一人であります。やがて一發の號砲嚴かに響くと共に遙か御高座に御英姿を拜し得た若人達六萬の心は一層緊張しました。天高く馬肥ゆと稱へらるゝ秋の日は益々澄み切つてゐます。其の澄み切つた青空には威嚴に輝く天皇旗が翻つて然も軍樂隊の奏ぶる「君が代」と「行進曲」は森とした帯山一帯に或は高く、低く、速く、遅く、強く、弱く、滑らかに響き渡ります。此の榮典に臨むの榮を得ました私は、萬感交々胸に迫つて知らず識らず喉を熱くしたのであります。噫々國民の本懐でなくてなんでありませう。

今其の時を回顧しますとき其の實感を形象する言葉を知らないであります。然も陛下には御多忙の折御疲勞をおもいとひなく帝國進展の爲に各地各方面に玉歩をお進め遊ばす事を承るに至つては皇國の國民として實に感激の極みであり

ます。私は帝國の現状からしまして又第二の國民としまして其の責務の重大なる事を覺え身を擧げて報國の實を擧ぐる事にあるを痛切に感じたのであります。此の御親閲こそは身に餘る光榮であつたと共に實に鞭撻してくれる意義ある好機であつた事を深く感激してゐるのであります。

光榮の御親閲式

天草郡本渡町處女會員 近藤 敏子

昭和六年十一月十八日！あゝ何と云ふ光榮の日であらう。私の一生を通じて忘れる事の出来ない尊い記念日である。木枯吹く冬を間近に珍しくも日本晴の暖さ、今日の良き日を祝ふかの如く空には小鳥さへ囀つてゐる。我等拜受者七萬八千餘名が待ちに待つたる御親閲式の晴の日である。長く長く果ては無いかと續く拜受者の行列、護衛の軍人、朝まだきから押寄せた拜觀者の群で、餘りに廣くて、人々の目を驚倒させた帯山練兵場も賑々しい。何たる幸運兒よ！一同の面は喜悅に滿ち異様な胸の高鳴りさへ覺ゆ。在郷軍人青年團青訓男學生を隔て、正面はるかに玉座を拜む。地一面枯草で若芽ふく春の日のがしのばれた。四方の連山雲に霞んで遠く登へ、渡鹿練兵場をはるかに隔てて一大廣野は長く續く。御親閲式場としては最適地である。十一時には全く式場整ひ、潮の如く流れ込んだ群衆は身に餘る光榮に緊張し豫想以上に靜かである。一時十二分開始時間には大分間があつた。久しぶりに學生氣分によみがへり、先生を中にしておいしく中食を戴いた。先生も友も元氣でおやさしい。秋日和にない快晴に三枚の漁着も汗ばむ程である。時候はづれの氷屋アイスクリーム屋出張つてゐる。連日の疲れも全く去つて、身も心もすがすがしい。

「近藤さん、きつと出來ます。」とこぼす私を推薦して下さつた友の情、身にしみる先生の御教訓、老母の力添へ等々光榮を前に私の心は只管感謝しはげまされた。開始時間も間近だ、數分、瞑目無事を神に祈つた。

玉座後方はるかに「ドドドン」晴れた空に勢よく合圖は上つた。遂に時は來た。心がキリツと引締り頭が敏感になつ

た。静けさを破つて御車の音がやらかく聞えて来た。莊嚴な「氣を付け」の號令と共に喇叭が吹奏された。「君が代」の奏樂が靜かに流れて来る。胸は高鳴り今迄かつて無い緊張を感じた。おごそかな敬禮の喇叭に一同うやうやしく敬禮した。はるか玉座に 陛下を拜み奉る！二十萬餘の集りとは思はれぬ、人影の無い廣野の静けさである。餘りおそれ多くて夢にも思つた事がなかつたのに、今實現されてゐる。事實か、夢ではないかと、我が身を疑ふ夢心地である。再び「君が代」の奏樂がおごそかに流れて来た。知事御親閱を仰ぎ奉る旨奏上された。喇叭一聲「前へ！」の吹奏で分列式が始まつた。將校の號令一下此の大部隊が靜かに動く。黄金にかがやき風に棚曳く團旗の林、劍銃の林、目もさめんばかりの雄々しさ、勇ましさを、拜受者の心は喜びに泣いてゐる。餘りの莊嚴な光景に自ら頭が下つた。おそれ多くも 陛下には、一團休ごとに舉手を賜はつた。何といふ光榮であらう。大々的分列式も一時三十四分十五秒遂に終つた。分列式終りを告げ前方には障物一つだになく、はるか正面に 陛下を拜み奉る。時は来た、我等奉唱部隊は三方から靜かに玉座に向つて前進した。胸は高鳴り、前日の豫行演習の際感じた塵埃の苦しみも何とも感じない。唯喜びに勇み立つてゐる。

天皇陛下を間近く拜し奉る光榮に浴して、一同は咽び泣いた。軍樂隊の奏樂で奉迎歌を唱し奉る。あゝ、何といふ幸福者だらう。身に餘る光榮に感激の涙はほゝをつたふ。おそれ多くも舉手を賜はつた。續いて拜受者全員「君が代」を唱し奉り「天皇陛下萬歳」の聲は天地もゆるがんばかりである。知事行事終了の旨奏上されこゝにめでたく御親閱式は終りを遂げた。其の間正に一時間、おそれ多くも 陛下には直立不動であらせられ舉手を賜はる外は身動きだに遊ばされず、餘りの御英姿に一同感嘆した。一同うやうやしく最後の最敬禮をした。「君が代」の奏樂が靜かに流れて来る。還御の御車のわだちの音が、お名残り惜く遠ざかつて行く。新たな惜別の涙がにじんで来た。空には名も知らぬ鳥が、平和そのものゝ如く悠暢に輪を畫いてゐた。

あゝ、我等は何といふ幸運児だらう。日本國民と生れたことを心から神に感謝する。君の爲國のためならば我等の命は五分の蟲よりもまだ多い命である。前途は長い。我等の理想は良國民となることである。必ず辛苦に打勝つて理想に突

進しよう。一同の面も同様に緊張してゐた。榮え行く日本の前途がしのばれて思はずほゝえんだ。

御親閱拜受の感想

天草郡二間戸處女會員 齊藤 智 榮 子

今回陸軍特別大演習を舉行せられますに當り南國の野も山も秋色深く肥筑の平野に畏くも 聖上陛下の聖駕を進め給ひし事は洵に千載一遇の光榮でありまして津々浦々に至るまで熊本縣民の歡喜措く能はざる所でございます御統監地方幸と寸暇の御餘裕もあらせられませぬ中に青年を深く愛でさせます大御心より帶山練兵場において御親閱が行はせられました。幸ひ私共處女會員も奉唱部隊として御親閱に参加出来ましたことは唯々感激の外はございません。

去る十一月十八日私共處女の一日千秋の思ひで待ち申してゐる日は参りました四五日前からの降雨に私は日夜神佛に晴天を祈つたのでございます。私のみでなく参加されます方々も屹度さうであつたと思ひます神佛の御加護の爲か否皇室の御稜威の爲でございませう十八日は空に一點の曇なき小春日和でございました。練兵場に到着致しました時には何時しか旅の疲れも忘れてしまいました。陛下の御車御到着と共に君が代の奏樂の音山野にひびけば禽獸草木に至るまで今日の此の榮えある日を祝福するかの様に見え身體はおのづと緊張して参りました。陛下の龍顏を拜し奉り熱誠こめて奉迎歌を奉唱致しました。一時間といふ長い間直立不動の御姿勢にて一々御答禮あそばされます。陛下の御聖恩の有難さは私の筆舌で表し得る所ではございません。

聖上陛下におかせられましても滿州事變極めて重大にして行幸御取り止めの御沙汰さへ傳はりました程深く御聖慮あらせられます事多ふございますのに特に皇國軍人の意氣を鼓舞せんとの思召にして尊き玉體にましましてながら遠く聖駕を九州にすゝめさせられ大演習中の降雨の中にも御いとひなく御統監あそばされました由かゝる事どもうけたまはりますにつけていかに 聖上陛下の軍人教育の事に深く御熱心にあらせられますかゞうかゞはれまして恐懼感激に堪へない次

第でございます。火の國乙女なる私は御親閲の光榮を腦裡に深くきざみ千代萬代までも傳へ且つ女性としての道忠孝の二字を全うし益々奉公の至誠にはげみたいと存じます。

御親閲を顧みて

天草郡二江處女會員 藤 木 乙 女

十一月十八日それは私の一生涯忘れる事の出来ない光榮の日なのであります。かねてより國運の發展と青年の修養に特大御心を注がせ給ふ 聖上陛下には此の度の行幸に際して、全九州青年男女學生の御親閲を賜はりました事誠におそれ多い極であります。

其の日はいつにない絶好の天氣に恵まれ秋風いと清く廣々たる里餘の帶山練兵場も早朝より人々の群で埋められました。正午頃一同整列をなし御親閲式の行はせられるのを今か今かとお待ち申上げてゐる折ひゞき渡るラツパ一吹 陛下にはお召自動車にて御着覽直に玉座に向はせられました。其の御英姿を拜した瞬間萬感胸にせまり有難き極でありました。先づ學生、青年、在郷軍人とそれからそれへ分列行進は始まりました。其の力強き足音軍隊奏づる壯快なる行進曲に身体は緊張し嚴肅の氣分みなぎり感激そのものでありました。次は隊長の號令に従ひ愈々 陛下の御前近く前進し我が女子青年團女學生の眞心こめた奉迎歌の合唱でありましたがあまりにもおそれ多く歌ふ事すら出来ませんでした。つゞいて最後に聖壽の無窮を祈る萬歳の三唱すべてに唯此の譽ある日に生を受けてすめらみことの御英姿を拜し奉つた事の光榮を感激せずにはゐられません。又はるばると二江女青を代表して參加する事の出来た光榮を忘れずひたすら修養をつみ動きなき帝國の女性となる事に専念しようと思ひます。

長 崎 縣

目次

専門學校……………	(四九三)
師範學校……………	(四九四)
中 學 校……………	(四九七)
實 業 學 校……………	(五〇六)
青訓及び青年團……………	(五一五)
女子専門學校……………	(五二二)
女子師範學校……………	(五二四)
高等女學校……………	(五三五)
女子實業學校……………	(五四三)
女子青年團……………	(五四五)

御親閲の感想

長崎醫科大學附屬藥學專門部 清水信之

昭和六年十一月十八日午後一時、聖天子、熊本の帶山原頭に於て九州各縣より來り集まれる學生團及び在郷軍人團を御親閲し給ふ。香風肅々と流れ、光は燦として輝く。龍車靜々と土を踏んで進む。仰ぎまゐらす御英姿の尊さ、神彩突々として、四邊、眩然たる御稜威に草木美麗に映出し、國歌の勇しき調は朗々として六合に滿ち溢れ、變遷たる瑞雲を劈くあたり、掩野の學生及び在郷軍人團の恭しき捧銃禮の下に心中深く新に忠節を誓ふ。一莊嚴なる分列式—女學生の奉唱歌唯、御稜威に感泣。嗚呼建國以來三千年、潑刺たる建國の大精神が久遠の若さを以て青天大地の間に磅礴たること、そも／＼何たる幸福であらうぞ。この正氣の躍動する所、我が國運は、假令世界の列國が世紀を超えて老ひ行くとも、さながら朝日の匂ふ如く、新潮の如くたとしへなき鮮さを以て益々開拓されて行く事であらう。嗚呼、上には若き帝を戴き、天日は燦たり。忠良なる臣民の扶翼し奉るところ、寶祚の隆んること天壤と共に窮り無く、希望と光榮とは全國民を躍動させる。さらば聲高らかに祝福を捧げ、皇國の彌榮を壽ぎまつらん。

御親閲拜受の記

長崎高等商業學校第三學年 田中喜助

空はコバルト色に晴れて居た。北方から微風が心地よい迄に吹き渡つて帶山練兵場の北端に高く掲げてある國旗を睨かせて居た。霜月とは思へない程の好天氣に雲集した六萬六千の若人の血は躍り、やがて玉顔を拜し得る喜悅に胸は高鳴つて居た。間もなく自動車のエンジンの音、喇叭たる喇叭の響、そして軍樂隊の吹奏する國歌が秋晴れの空に御着聲を報じた。と共に強いショックが私達の五官を自ら謹直ならしめた。滿場肅として咳ぶきすら聞こえない。限り無い敬虔の血

潮が奔流する。莊嚴と言ふにはあまりにも嚴肅である。然かも其處に何の理由もなければ何の無理もない。否白髮三千大式の支那の如何なる名操風家を以てするも此の氣分を充分に表現する事は絶対に不可能である。「何事のおはしますかは知らねども、かたじけなさに涙こぼるる。」此の感懐こそ御親閱拜受當時の心情である。月美はしい夜の海の時にも勝る清らかさと、強い愛國の熱情とが感激の泉から油然として湧き起るのを私は感じた。そして今こそ強く判然と「日本」の二字を凝視した様な感に打たれた。數日間の雨中の御統監にも不拘、殊の外麗はしく拜される龍顏、聖上の御叙慮と御慈愛との程が痛切に感じられる。一步々大地を踏みしめて行く分列、滾々として盡きざる愛の泉より流るる赤誠が見られる或は高く、或は低く、軍樂隊と女學生との奉唱する奉迎歌、其のメロディこそは、聖上の御賢徳をたたへ皇國の興隆を千代に八千代に壽ぐ民草の誠心でなくて何であらう。麗はしい龍顏を拜する時、數千年來連綿として絶えざる皇統と國是とを想ひ彌榮え行く瑞穂の國の前途を見る。近時世界の視聽は東洋に向けられ特に滿蒙問題勃發以來列強の注視は本邦に集り、聖上には如何に宸襟を惱ませたまふか私達民草の恐懼に堪へない次第である。然し我國に取り當該問題も最も有利に解決の緒につかんとして居る。是れ一に聖上の御宏謨に外ならない。瑞穂の國、極東の帝國を双肩に擔つて立つべきは私達若人である。其の盛衰興亡は専ら私達の努力の如何にある。此の點を特に私達は銘記すべきである。さう私は痛感せずには居られない。噫、日の丸の御旗が翻騰としてひるがへる。

御親閱を拜受して

長崎縣師範學校本科第一第四學年 山田茂衛門

二千五百九十一年十一月十八日、光榮に輝く日は仄々と明け放れた。惟みるに今日こそ畏れ多くも、天皇陛下の御親閱を拜受するの榮を賜はる日なのである。「あゝ我等生けるかひあり。」此の日果てしも知らぬ帶山練兵場には、千歳一遇の光榮に感激せる民草無慮十萬、菊薫る秋空の下に集ふのであつた。

嗚呼愈々時刻は來た。初めて拜する。天皇陛下の御尊容、遙かに仰ぐ時既に私は忝さに涙のにじむをどうする事も出来なかつた。曠て分列式が開始された。「頭右！」噫、至尊玉臺に在します。身を忘れて御尊容を拜し奉れば、陛下には尊嚴極りなき御英姿を、動かざる事山の如くに保たせられ、忝くも蒼生微民の身に對して御擧手の御答禮を賜はるのであつた。其の時私は二千五百有餘年の古より、大和民族の血潮の中に滾々として盡きざる忠君愛國の大精神の鬱勃として全身に横溢するを感じずには居れなかつた。私は御前を行進し終る事の名殘惜しくて、今暫し御英姿を拜し得ばやと思ふ時既に御前を過ぎて、大隊長の號令は夢中なる耳に微に響いたのであつた。

謹んで御親閱を拜受せし當時を追想するに、朗かなる秋空に颯爽として輝き給ひし御英姿の、何と力強く我の胸裏に刻まれて居る事であらうか。又陛下が我々臣民に親しく御答禮を賜はり、更に御親閱前夜には我々の野營地に、黒田侍從御差遣の榮を忝うしたる大御心の程には、唯々感激に咽ぶの外はない。

謹み惟ふに、天皇陛下には赫耀として千秋に揺ぐ事なき大光明にてあらせられ、我々國民は此の尊き御光の下に集ひ大なる理想を之に求め、精進を此處に養つて進み行くものである。常燈上に輝き、國民其の下に共同一致するの美風は、我が帝國をして天壤と共に窮り無からしむるであらう。今や北滿の風雲急を告げ、國際聯盟の成行き亦如何とも逆睹し難き情勢に、陛下には如何ばかり御軫念遊ばされる事ぞ、御察し申上ぐるも恐懼の極である。國民たるもの一日も早く東洋の平和を克復し、以て御宸襟を安んじ奉らん事を祈らずして可ならんや。殊に未來の國民を教育するの大任ある身に於ては、其の責務の如何に重大なる事よ。御親閱拜受の榮を擔ひ、御聖姿を拜して感激に堪へず、其の眞情たるや誠によく筆舌の盡す所ではないのである。

感激

長崎縣立長崎中學校第五學年 木 藤 稔

秋天彌高き十一月の十八日、私等は榮ある御親閱を熊本帶山練兵場に於て拜受した。此の日は先日來の雨も名残無く晴れて、帶山の野には感激の氣が滿ち溢れ、天空には瑞雲が舞臺として棚引いてゐた。此の榮ある御親閱に參するものは、鹿兒島を除く九州各縣と山口縣との男女青年、學生、生徒で、其の數は六萬を數へた。帶山の廣野は此の感激の赤子等によりて滿たされ、午後一時、御鳳轡御着の合圖と共に其の活動を始めた。

正に一時十五分、軍樂隊の雄壯なる奏樂裡に榮ある分列式は開始せられた。踏み鳴らす足音は帶山の野を震はし私等は將に天にも昇らんとする感激に浸つた。帶山原頭燦として秋風に翻へる天皇旗、日章旗を望んだ時、私等の感激は如何程であつたらうか。天は轟き地は動いた。嗚呼、私等は幸ある時に遭つたのである。第四集團の私等第一大隊は吉奥大隊長の號令で分列線を出發した。雄壯莊重なる奏樂裡に一步々々、陛下の御前に近付いた。嗚呼畏し、私は「頭右」の令と共に上御一人の龍顏を拜し奉つた。御健かなる玉體を拜し奉つたのである。御前を過ぎ御奉送の位置に至り、全分列が終る迄唯々恐懼感激の涙の滂沱たるのみであつた。明朗玉を轉ばす御奉迎の歌を聞いた時、私は心身共に其所在を忘れて、遙かの玉體を望み奉つた。唱聲は帶山の原野に響應した。彼等の誠心は必ずや御嘉納遊ばされた事と拜察する。さうして後萬歳の聲は天に響き地を震はし萬雷の一時に鳴るが如く帶山原頭に響き渡つた。二時十五分此の榮ある御親閱は終つた。嗚呼畏し、此の聖代に生れて此の佳辰に遭ひ、辱くも聖天子を迎へ奉つて御前に分列の式を呈し奉つた私等の光榮よ。私の永い生涯は此の光榮に輝いて御民としての本分を怠る事の斷じてない事を神明に誓ひ得るのである。

聖上陛下の御親閱を拜受して

長崎縣立環浦中學校第四學年 山 田 時 義

聖上陛下の御親閱を親しく拜受する喜びに滿ちて、十八日早朝から起きて、御親閱の準備を整へ、帶山練兵場に向つて出發した。少し早目に晝食を済し、陛下の御臨幸をお待ち申した。午後一時「君が代」の奏樂裡に陛下は遙か向ふの一段高い所に設けられた純白の臺の上にお立ちになつた。途端大隊長の號令一下、捧げ銃を行つた。私は夢中であつた。今始めて吾等の聖天子を拜する事が出来たのである。吾々の惠深い聖天子を拜する事が出来たのである。やがて戸山學校の軍樂隊のかなでる勇壯森嚴なる軍樂によつて分列行進が始まつた。吾々の大隊が停止してゐた地點から分列發起點までは可なりの距離があつたが其處まで行く間、肅々として聲なく、只軍樂隊の奏樂に足をそろへて行進をした。私は非常に緊張してゐるのを感じた。いよゝゝ分列發起點に到着してそこで足並そろへてゐた。「分列に前へ進め」大隊長の號令が下つた時、私の精神は急に固くなつてしまつた。私は何も知らずに行進してゐた。「頭右」おゝ!!其の刹那陛下の御龍顏をはつきりと拜する事が出来た。私の心臓は高鳴りはじめた。そして心の奥底から熱い涙のせき上げて來るのを感じた。陛下は純白の高い臺の上に唯一人、太陽を背にして、直立不動の姿勢で擧手の禮を賜うてられるのを私は拜した。日本國民にして、此の御姿を拜して感激の涙を流さぬ者が唯一人としてあらうか、眞に感激の極みである。

畏れ多い事ながら、陛下の御龍顏は陪觀の方よりも一段御白くあらせられたが、しかし御血色の極めてよく有らせられるのが拜せられた。私は陛下の眞横を過ぐるまで注目してゐた。やがて「直れ」の號令が下つて始めて吾に返つた。最早陛下の御姿をはつきりと拜することの出来ないのが残念であつた。ずつと行進を續けてやつと奉送の位置に着いた奉送の位置から微に陛下の御姿を拜する事が出来、又他の集團の分列も見ることが出来た。銃剣はあだかも密林の様で行進してゐる。部隊は丁度土地の移動かと思はれ、實に勇壯の極である。やがて分列も終り、女子の奉唱團の奉唱も終つた

しばらくして、熊本縣知事の發聲で、陛下の萬歳を三唱し奉つた。萬歳の聲は實に勇壯で天地もゆるがす許りである。此の萬歳の聲こそ吾々が陛下に對する忠誠の表現である。やがて捧げ銃の號令、これが陛下に對するお別れの捧げ銃である。私は皇位の隆盛を祈り、陛下の爲に一命を投げ出す事を誓つて靜かに銃を握りしめた。

御親閱を拜受して

長崎縣立佐世保中學校第五學年 小長谷睦治

十一月十八日、此の日こそ我等にとつて感激措く能はざる御親閱の日であつた。十七日の午前零時十五分の臨時列車で出發した吾等佐中百四十七名は當夜熊本水前寺附近に露營して我等の生涯に輝かしき印象を残すべき十八日を黄金に映ゆる朝日と共に迎へたのである。

廣漠たる帯山、渡鹿の平原には清新な旭光に映えて霧が立ちこめて居た。その間には灰色のテントが浮んで居た。これこそ我等御親閱拜受者の樂しくも堂々たる偉容であつた。我等は六時起床、洗面して心身を清め行在所に向ひ、遙拜式を行ふ。朝食後軍裝を整へ九時御親閱場に向ふ。六萬五千の拜受者は儀容肅々と指定の場所に向ひ、十一時頃到着、今や遅しと時刻を待つて居た。見渡せばさしも廣き帯山の野も雲霞の如き拜受者の大群にとろせまく思はるゝばかりに埋められた。我が佐中、中隊は大隊と共に一回の豫行を實施して張り切るが如き緊張を以て機を待つて居た。遙か前方に白雲の高き臺がある。これぞ、玉座であると思ふと怪しくも胸はどよめく。

突如花火が高らかに鳴り響く、一同不動の姿勢で御着今や遅しと眼も異様に輝く、全群聲なく校旗、團旗のみ囁詞と清風に翻る。やがて嚴かに「君が代」が吹奏される。旗のハタ／＼と翻るのが一層はつきりと聞える。全野に響き渡れりと思ふ「君が代」が終るや、陛下には颯爽として玉座に立たせ給ふ。時を移さず軍樂隊の行進曲につれて我等は意義ある第一歩を力強く踏み出したのである。堂々として千米も進んが頃「頭右」の號令が掛る、頭がバネの如く動く、胸に高鳴

る動悸と一種莊嚴な氣が重々しく動く。聖上陛下には長くも擧手の答禮を賜ふ。この時言ひ知れぬ靈感に打たれて亡我のまゝ御前を通過して行く、只我等は白雲の玉座上に九重の雲深き陛下を拜受して居たのである。「直レ」と共に我に歸る、風が強く校旗を打つて居たのに初めて氣付く。かくて奉送の位置につく。

嗚呼、我等は御親閱を拜受したのだ。意義ある今日の日を吾等は永久に忘れてはならない、我等は何と幸福であらう。

無量の感に打たれつゝ「君が代」を奉唱した。續いて

「天皇陛下萬歳」を聲を限りに絶叫し今更ながら聖恩の餘りにも鴻大なるに打たれたのである。

陛下には現今の多事多端の折、如何に宸襟を惱まして給ふ事であらう。吾等は舉國一致盡忠報國の一大責務を痛感せざるを得なかつたのである。

感 激

長崎縣立大村中學校第五學年 澤山精太郎

喇叭一聲。氣を付け！帯山の平原は打たば響かんとする緊張の氣に包まれた。喇叭の音は透徹した秋空に反響して高い日章旗は爽やかな秋風に翩翩と翻へる。そして「君が代」の奏樂、今や吾等六萬の赤子は一律に言ひしらぬ神秘の氣に打たれてゐる。

時正に一時十五分、天皇陛下には眞白き御座所に御起立遊ばされた。其の颯爽たる御英姿は晩秋の大阿蘇の野に一際高く浮び出でさせられ、嗚呼吾等が陛下、彼處に在すと目の邊り仰ぎ奉り感激の念胸もつまる計り……。分列だ。銃の林、九州男子の精銳、踏みつける一步にも、みづみづしい元氣が溢れて居るではないか。國家今や危急存亡の秋、さぞかし宸襟を惱ませ給ふ事と、ひそかに拜察し奉る「陛下よ、陛下の強兵は此處にも居ります、何卒寂慮を休めさせ給へ」やがて吾が四集團の番だ。千載一遇の敬禮だ。吾等の歩調は大地も裂けよと響く。此の若人の力、意氣、皆陛下の御所

有だ。今や御座所近い。吾等が胸は有難い畏いと言ふ中にも、晴々とした嬉しさがこもつて居る。「頭右」燃然と輝く天皇旗、目の邊りに仰ぎ奉る御英姿。其の瞬間、天も地も吾等が心に一つに溶け入り莊嚴感激、其の極みの溢れる涙、御英姿は遠くかすかに……。『君が代』合唱續いて萬歳三唱、聲も嘎れよ、喉も裂けよと赤誠こめて叫び奉つた。喇叭一聲捧げ一銃、此れぞ最後の捧げ銃。吾が眼、吾が腕、誠心報國の全表徴だ。「君が代」の奏樂の下に聖駕還御。時に二時十五分。

陛下には約一時間にわたり不動の御姿勢にて一々御答禮を賜はり誠に畏き極みで此の君、此の赤子實に君臣の關係を父子に譬へ奉るのも此處に存するかと唯々忝けなさに涙のこぼるゝのみ。此の心こそ諸外國人の味ひ得ぬ日本獨特の精神即ち三千年來傳はる吾が大和魂である。吾等は此の機會に一層君に忠、父母に孝にの教育勸語の御精神を體して何處何處までも君の爲、國家の爲に働く覺悟を涵養せねばならぬと固く誓ふ次第である。

御親閱拜受感想

長崎縣立諫早中學校第五學年

津留崎博高

秋空高く澄み渡る霜月なかば。廣漠としてひろがる肥後の山野に燦然として繰揚げられたる一大繪巻物。霜月十八日莊嚴極まりなき此の歴史的情景の序幕はこの日長くも。上大元帥陛下には軍務御統裁の大任を帯びさせられ、遠く西に三百里肥後の地に龍駕を枉げ給ひました。

過ぎし佐世保御上陸、御通過の際は校旗に對して擧手の禮を親しく賜はりました。

かくて銀杏城頭に錦旗は翻騰として揚げられ、我等六萬餘の學生等が日夜思慕の念にかられて居た、至尊颯爽の御英姿を拜する時は愈々接迫し午後一時。陛下の御臨場の下に佩劍、喇叭たる「君が代」捧げ一銃「嚴肅!!緊張!!燦然たる校旗を先頭に小銃の波、莊重な歩調、大地の躍動の如き行進が起りました。輕き砂塵、光る劍尖、其の中に玉座が拜せられまし

た。「頭右」吾等の鼓動は鳴りを静め萬人等しく寂として聲はありません。陛下に於かせられては親しく吾等の分列式に御答禮を賜はり、眞に唯々恐縮の念に堪へないのであります。畏れ多い事ではありますが陛下は實に御健やかな御姿、嚴格な御態度に筆舌で表す事が出来ない或る感激が心の奥底から湧出て來るのであります。今まで吾等は唯御眞影を拜し奉つたのみでありましたのに今、陛下の御英姿を目前に拜し得た事は實に、實に無上の光榮でありました。

今や極東の平和は破れ、滿蒙の地に悪雲漲り、風雲愈々急ならんとして居る時と雖も、陛下の御英姿を仰ぎ奉りてはたとひ滿蒙の空氣如何に險惡でも憂ふるに足らないのであります。私共の近く中學生としての生活を終へて實社會に踏み入らうとするの時、此の永劫の榮譽に出會ひ、且又意義深き御親閱は私終生の奮闘努力を以て邦家に盡くさうとの覺悟を更に更に深くせしめたのであります。

感激

長崎縣立島原中學校第四學年

宮田政章

昭和六年十一月十八日!!それは私達の一生涯忘れる事の出来ない所の御親閱の日であつた。此の日前日迄の滯曇りもこよなく晴れて、共に此の光榮を祝する様に見えた。私達は野營地に整列して、帶山練兵場に向ふ時から此の光榮を思ふて心も躍りたつのであつた。練兵場について驚いた。學生、青年團、青年訓練等々さしにも廣い練兵場も人々々。而かも皆何とその顔の晴々としてゐる事よ、刻々と光榮の時が近づくにつれて、心も次第に緊張してくる。

突如「氣を付け」の號令。自動車のエンヂンの響。「多分御召自動車か……」と思つた時、「捧げ銃」の號令。靜々と壇上に玉歩を御運びになる御雄姿、私は何だか胸がどきどきしてきた。

分列開始。その歩調の何と元氣に満ちてゐる事か、「頭右の」號令と共に向けた顔の正面に丁度長くも擧手の禮を賜はりつゝある。大君の御姿が拜せられた。此の日天氣よく晴れたりと雖、寒い北風は絶えず吹きまくつてゐた。それに

も河はらず、而かも九尺もの高き壇上に約一時間、御微動をも遊ばさずに、御親閲を賜はつたのであつた。これは度々云はれることであるが我が國は重大なる危機に直面してゐる。曰く經濟國難。曰く思想國難。曰く滿洲事變等々々。併し、此の英邁なる君主を戴いてゐる日本である。必ず是等の危機を見事に打破して、よりよき日本の建設へと邁進し名實共に世界の君主國となる事を私は疑はないのである。

御親閲に列して

長崎縣立中學嶺興館 朝 永 主 雄

十一月十八日、この日は天高く玉座の上方一帯には遙かに瑞雲かゝり、御親閲には最も恵まれた日であつた。この日こそ我等の一生を通じて、二度と有得ないであらう所の光榮に浴することの出来た日である。

午後一時大本營御出發の合圖があり、同十五分より御親閲は開始せられた。軍樂隊のマーチに合はせて、行進をはじめた我等の心は、此の光榮に浴する歡喜と、その莊嚴さに打たれて、鼓動の高なるを如何ともなし難く、無我夢中に足を動かすのみであつた。大隊長の號令で一齊に「頭右」をなし、陛下の御麗はしき龍顏を拜し奉ることが出来た。かくて、分列式は終り、奉唱隊の奉唱歌奉唱の時に今拜し奉つた、龍顏を腦中に想ひうかべると、御健やかな玉体と直立不動の御姿勢との外には何一つとして思ひ出すものはなく、豫ねて陛下の御眞影で拜した御眼鏡も、御掛け遊ばされて、おはしましたかさへも氣づかなかつた。我等は大隊の最右端に位置して、最もよく拜することが出来たのであるが、唯夢中で注目してゐたのであらう。天皇陛下におかせられては、旬日來の御統監及各所への行幸に聖躬を勞せさせ給へるにもかゝらず我等のために御親閲下され給ひし事、厚き御聖徳の御發露であると拜察し、唯極みなき感涙にむせぶのであつた。尙我等の敬禮に對して、々々御重た擧手の御答禮を賜はり約一時間に亘る長時間を直立不動の御姿勢で御微動だに遊ばされず在りましたことは、洵に恐懼感激措く能はざる所である。

この他國に比類なき 聖天子を戴き、今又親しく天顏を拜するの光榮に浴した私共は、いとも幸多く有難き極みであるこの御親閲に參列したものの、心に等しく感じたものは何であらうか、それは只「あゝ有難い」と感ずると同時に益々國家の隆盛を計り愈々皇室の御繁榮を祈つて、宸襟を安んじ奉り今日の光榮に報いる事を深く心に誓つたことであらう。

感 激

長崎縣立五島中學校第五學年 野 原 勇

建國茲に三千年。聖原の瑞穂國は今や列國を凌駕して國運いや高く、四海の内津々浦々に至るまで菊花の薫ぜざるはなく誠に有難き大御代であります。

この時に當つて長くも 聖上陛下に於かせられては、熊本帶山練兵場に於て九州全土の學生生徒男女青年在郷軍人を御みづからみそなはし給うたのであります。この日や天麗かに氣澄みわたり、大阿蘇に連る豊肥の峯巒も喜々として迎へ奉るが如く山麓を廻る瑞雲も緩々として拜伏して居ります。場内の赤子無慮七萬、場外に拜觀を待つ者亦堵の如く、その壯觀なる眞に言語に絶するとや申しませう。整然として鳳轡を待ち奉る心境よ。戦き起る感激のどよめきを如何することができませう。時は來ました。喇叭一聲。大隊長の號令の響、捧銃。この時から私共は殆ど自己の存在を忘れたのであります。軍樂隊の奏樂を遠い世界のものと聞き分列に己が踏む歩調をもきこえず、玉座の御前を通過するや、緊張の極み殆ど茫然たる思ひでありました。誠に恐悅至極、感慨無量、餘りの辱けなさに涙のこぼるゝをさへ覺えなかつたのであります。御親閲が完了して還御遊ばさるゝまで一時間でありましたが、ほんの一瞬時、無意識の中に過ぎ去つた出來事のやうに思はれました。何と言ふ壯觀、何と言ふ恐懼の極みであつた事でせう。熟々惟んみるに昭和の聖代に生を享け、前古未曾有のこの盛舉に列し、辱くも拜觀を賜はつた私共の光榮は果して何物に代へられませう。

抑々我が國体が宇内に冠絶する所以のものは今更論を俟つまでもなく、萬世一系の天君を頂き奉るにあるは國民の熟知

する處であります。茲に龍顔を咫尺の間に拜し奉つては、正にその所以の尊嚴に感泣して止まぬのであります。肺腑より湧き出づる有難く尊き心こそ、それは世界の何處に求むとも二つとあるべからざるものであります。今や國內平穩なりとは雖も海外の騒亂必ずしも樂觀をゆるしません。滿蒙の天地は修補場と化し日支交渉は愈々紛糾を極め、特に時運の急なるものがあります。この時に當つて當に缺くべからざるものは、科學に非ず、財政に非ず、それは只此の赤心であります。私は信じます。龍顔を拜し奉る心、誰か此の心を持せざるものがありませう。お、此の心あつてこそ、何ものをも恐るゝにたりません。私は茲に御親閱に参加して日本國民たるの幸福を謝すると共に一層愛國の精神を強うし、愈々奉公の誠を致さん事を固く覺悟するものであります。

御親閱拜受感激

長崎縣立壹岐中學校第五學年

江 里 久 夫

天に白日あり、炳として千載を照らし、地に 聖天子あり、赫として八紘に光あり。此の昭和の聖代に生れ、畏れ多くも一學生の身を以て 聖上陛下に咫尺し奉るの光榮を拜受す。吾人の光榮何者か之に如かん。

昭和六年十一月十一日、吾等四十五名は本校を代表し、幾萬御親閱の部隊に加はり、帶山練兵場の一角に位置して時の至るを待つ。肥州の連山は豁然として澄み渡りたる秋空に巍然として聳へ、遙かに阿蘇の噴煙を望み、雄大の氣に滿ち、感激の情に燃ゆ。午後一時、一發の煙火天空に轟くと共に日章旗は橋頭高く翻翻として翻る。式場を埋むる十幾萬の觀衆寂として聲なく、肅然襟を正し、大元帥陛下の行幸を待ち奉る。一分、三分、時は刻々に迫る。正に一時五分天皇陛下には嚴かなる軍樂隊の吹奏裡に玉座に着御遊ばさる。時を移さず各部隊の行動は開始せられ、吾等も渾身の勇を振ひ、歩武堂々と行進を始めたり。幾萬の部隊寂として聲なく、歩一步 陛下の御前に近づき奉る、畏れ多くも御前二十米の地點に於て龍顔を拜し奉る。巍然として聳ゆる連山を背景として純白の玉座の上に直立不動の御姿勢にて、蜿々長蛇

の如き各隊に一々擧手の禮を賜ふ御英姿は實に現神にましましき。感激の情胸裡に滿ち、心臓鼓動し思はず感涙頬に傳ふを覺ゆ。奉頌歌も終り、「君が代」の奉唱は實に我が帝國の前途を壽ぎ奉るの感を深からしむ。かくて「君が代」の吹奏裡に玉歩を大本營に運ばせ給ふ。

噫、かゝる 聖天子を奉戴し、親しくその恩澤に浴し奉るを思へば、日本國民たるの光榮と幸福とに感激措く能はざると共に、洋々たる我が帝國の前途に對し、陛下の赤子たる吾等國民の責務の重大なるを痛感し、至誠奉公、臣民たるの義務を果さんことを期す。

感 激

長崎縣立對馬中學校第五學年

中 尾 信

秋空一碧。その蒼空の下、帶山の原一面には廣々と黄金色の秋の小草が、茵を敷きつめた様に廣がつてゐた。大阿蘇の雄姿は遠く微に原を圍み高く掲げられた日章旗は翻翻と秋風になびいた。

一時十五分 陛下の臨御と共に莊嚴な「君が代」の奏樂は、秋の空氣を揺がして靜かに流れて來た。今日、十一月十八日、我等六萬幾千の若人は一様に身に餘る光榮に浴するのである。あゝ今日、快晴の下、帶山の原は埋れるばかりの民草瑞光は原一面を包み、至尊の颯爽たる御姿は高く玉座に拜された。

折しも起る軍樂の音、我々六萬餘の若人は、茲に莊重勇壯な御親閱を受けるのである。一步踏み出した感じ、感激である。刻々と玉座に迫るにつけて、一步毎に意義深い足取りである。光榮の行進である。緊張の現れである。そして何とはなしに心の奥底に響いて來る何物かがある様に感じた。緊張し切つた心は唯夢中であつた。唯赤誠であつた。恐らく誰も見出した眞の自分の心であつたかも知れない。まるで外の者から離れた單獨の行進の様にもあつた。他の者は何一つ自分の眼には入らなかつた。扈從の人も六萬の參列者も、軍樂の響でさへも、僕の耳には入らなかつた。唯氣高い至尊の御

英姿のみが目前にまします許りだつた。それと同時に尊い力強い感じが込上げて来るのを禁ずる事は出来なかつた。列は長かつた。九州男兒の意氣潑刺と勇壯な足取りは、長く／＼續いた。若人の列はどこ迄もどこまでも一齊に揃つた。銃先は堅實な精神と充實した訓練とを物語る。皇國の力強さであつた。あゝ皇國を守る力強い若人の列、我々九州男兒、否大和男兒の赤誠の現れである。言葉に出す事さへ出来ぬ感激が刻々脳裡に傳はつて来る。長途の疲れも忘れはて、唯、新しい血潮は心臓の響と共に、次から次へと全身に迸り出るのを感じるのであつた。新鮮な若人の血潮、それが響て御國を守る原動力となるのである。いつの間にか幾萬の九州女子の奉唱が聞えて來た。靜かにその歌聲を聞くにつけ高鳴る若人の血潮は崇高な感じと變つて終つた。その歌聲は長く餘韻を引いて阿蘇の麓、廣々とした帯山の原の端にこだまして消えては續き、消えては續いて靜かに流れ行くのである。仰げば大空にはためく日章旗は皇國の行方を指してゐる。あゝ、此の感銘、我等生ける限り忘れる事が出来ようか。帝國の爲に身内にたぎる血潮を捧げよう、最後の一滴まで。

御親閱拜受感激

長崎縣立佐世保商業學校第五學年 山 邊 鐵 夫

畏れ多くも 天皇陛下には、熊本大演習地への行幸の御退次第一歩を我が佐世保市に御印し遊ばされました。當時私達もこの千載一遇の機會に龍顏を拜し奉る光榮を浴したのでありますが、熊本に於ける御親閱に際しても再び龍顏を拜し奉つたといふことは私達にとつて光榮之に過ぐるものはないのであります。

分列式の時の如きは有難さに無我夢中でありました。我等日本全國民のひとしく御父君と仰ぎまつる陛下が、私達のすぐ前にて私達を親しくみそなはしますと思ふだにかしこき極みでありますのに、陛下の御前を通り過ぎた時は、ただおうけなさに自分の喉が潤んで居るのを感じました。其の間の私共の感情、それは筆舌に盡されぬことで、御親閱を拜受したものの、みの知る感激でした。私は今でもあの氣持がぐん／＼とこみ上つて來てそのたび毎に 大君の御前にひれ伏した

い衝動にかられるのです。分列式を了へ、一定の場所につき遙か臺上を仰ぎ奉つた時 陛下にはかしこくも舉手の禮を賜ひつゝ御會禮あらせられる颯爽たる御英姿を拜しましては、たゞ大神の御姿とより外に覺えられない神々しさでした。今日國事多端の折柄、この英明なる 天皇陛下をいたゞき奉る我等の幸福を思ひ、我國が世界に卓越せる所以を考へ我等一同誠忠無二の大和魂を鼓舞し、以て皇恩に報い奉るの覺悟を愈々深うするのであります。

御親閱を拜受しての感激

長崎縣長崎市立商業學校第五學年 山 本 保 美

森の都に聳ゆる銀杏城頭に錦旗空高く掲げられてより、こゝに數日、畏れ多くも 天皇陛下には秀麗阿蘇の噴煙を背景に名物榎紅葉のけふを圍の晩秋の氣がしみ／＼味はれる帯山練兵場にて學生、青訓、在郷軍人團體を御親閱遊ばされ給へることとは畏れ多くも亦有難き極みである。

この日秋空紺碧に晴れ渡り、陽は朗らかに大空に照り榮え阿蘇の山容も秋風ぎの有明の海も今日の喜びに輝き、帯山原頭は微風のそよぎを見るのみで和やかな行幸日和である。

嗚呼こゝに天皇の鳳輦を迎へまつれり、
鳳輦を迎へまつれり。

み光に阿蘇の高嶺も有明の海もかゞよふ。

拭ふたやうに晴れ渡つた秋空に幾百十の校旗、團旗が眼も眩に微風にはためくと嚴肅な氣分が漂ひ、燦として輝く旗の下に勇壯極まりなき大分列式が開始され、無量の思を籠めた。喜びに輝く胸を高鳴らせつゝ御前通過の際「頭右」の敬禮を行ふと體がブル／＼顫動し、そして兩眼は感極まつて涙ぐみ、又、畏れ多くも舉手の御答禮を賜ひて尙、光榮と感激とで胸が一杯と言はうやうのない強い健やかな氣持が胸の奥深く流れてゐるの覺えた。

嗚呼今し天皇の御姿を拜みまつる、
御姿を拜みまつる。

み恵のいかなる幸かかしこさに涙こぼるる

かくて三十八部隊の分列を終れば奉唱部隊は御前に進み「嗚呼こゝに天皇の鳳輦を迎へまつれり……」と御親閲奉迎歌を奉唱す。最後に六萬の若人、十萬の拜觀者ともく「君が代」を合唱し、續いて天皇陛下萬歳を三唱して今日の佳き日を壽ぎ奉り、こゝに榮ある御親閲を無事終了した。畏くも陛下にはこの一時間の長きに亘つて御直立のまゝ過ごさせ給ふにも御恙なく、午後二時十分全員最敬禮裡に薙顔いと御麗はしく聖輦は秋風ぎの野原の彼方に、遂に一點となつて眼孔に滲み入るまで民草はいつまでも心から奉送申上げた。

嗚呼何といふ感激に満ちた喜びの日だつたらう。私は玉顔を拜し奉り始終かたじけなさに涙こぼれ、皆の瞳にも申合せたように喜びの涙を光らし、今日のこの譽を常に思ひ出し、忠良なる臣民として益々奮勵努力し、寂慮を安んじ奉らんとかたく心に誓つた。

嗚呼我等生けるかひありおほけなき今日の譽を

おほけなき今日の譽を

萬世に語りつぎつゝことほがむひとつ心と

畏き御親閲

長崎縣長崎市立第二商業學校第四學年

坂口勝雄

先刻から膝が震へて仕方がない、今先生が時刻を告げられたのだ。我等が數十日待ちに待つた晴の時だ。はるか彼方で合圖の花火が上つた、やがて奉迎のラッパ吹奏裡に陛下は練兵場に御到着あらせられ、場内にしつらへられたる御親閲臺

へ進ませられた。天に一點の曇り無く、日光燦爛と輝き、地には一切の不淨を吹き拂ふかの如き涼風吹き渡り、英姿颯爽とあたりを拂ひ、天地萬物皆ひれ伏して陛下を仰ぎ奉る。かくも身近に天顔を拜し奉りたる我身の喜びこれにあまるものなし。やがて分列式が開始され先頭の隊より行動を起した。今日の喜びを日本全國津々浦々に到るまで分ち與へんものとラヂオの臨時放送所が場の一隅に設けられ我々の一舉一動を全國へ傳へて居る。横吹く風に校旗を捧ぐる我身のつゝがなく使命をはたし得るや、否やを、すこぶるあやぶんだが陛下の御前にては幸ひ順風となり無事分列式を了へたのもこれ偏へに陛下の御稜威に依るものと自分は深く感激したことである。幾萬の健兒が熱誠こめた晴の演武を齎せられる陛下には、女子奉唱部隊が國民の赤誠を代表して陛下の御壽を祝し奉る奉迎歌の餘韻あたりにたゞよひ、奉祝の氣場内に満ちくたる中を、自動車兩簿に御移乗遊はされ玲瓏たる奉送ラッパ勇ましき中を御還幸あらせられた。

我等が此の光榮ある御親閲に参加せんが爲に、練習を開始してより數十日の間、その日の光景を想ひ浮べて胸をおどらせて居たのであつた途にその日は來た、數日間に渡る大演習の御統監にいさゝかの御つかれもなく天顔いとも麗はしく長時間に渡り立御遊ばされ御親閲を終らせられた。

思へば畏れ多いきはみである。我等は感激し涙ぐんだ、そしてより一層懸命に聖恩に報ひ奉らんことを心中深く覺悟した。空を仰げば太陽は赫々として輝き、あたかも聖恩のいかに廣く深きかを表示してゐるかの様に天地萬物に慈愛の光を平等に投げかけてゐる。

感激

長崎縣立農學校 宿輪 卯太郎

この日十一月十八日、おゝ輝かしき榮ある此の日これ我等が熊本に於て、陛下の御親閲を辱うする實に千載一遇の日なのである。感激の日は明けた。熊本市民は勿論全九州を擧げて齊しくお待ち申上げた榮ある日は明けた、各戸に掲揚

したる日章旗は爽なる朝風に翻り、その色も榮えて感激の裡に我等は帯山練兵場へと急いだ。晴の場、練兵場には最早人の波で一杯であつた。それ／＼の定め位置には萬を數へる諸團體が堵列を整へ、兩簿拜觀の一般群衆は、ひし／＼と附近の御道筋一帯を埋め盡してゐる。見よ、秋冷の氣爽に紅葉眞紅に燃ゆる肥筑の野は今、秋霜軽く旭光に映え、方に我等と共に御親閱拜受の情意を盡してゐる。やがて喜びの時は刻々と迫り、御入場時刻の近まるまゝに數萬の人々は一齊に襟を正し、まだ拜せぬ、至尊の御英姿を偲び奉る様は、嚴肅と敬虔との流れの一大動脈であつた時、啾唳と響き渡る喇叭の音、我々の緊張は絶頂に達した。やがて軍樂隊の奏する君が代の歌「君が代は千代に八千代に……」朗かにひびき渡る神々しい曲の吹奏の裡に御召自動車は音もなく玉座に向はせらる、一同寂として聲する者も無い。幾萬の元氣に満ち満ちたる者が集つて居るとは思へぬ靜肅さ。神韻の氣は邊に漲つて一同の面上には決死的の色が現はれてゐる。おゝ何たる嚴肅、何たる盛觀、何たる感激ぞ。

斯くして我等の感激の裡に分列式が開始された。今日を名残として奉拜の誠を致す若人に、陛下は一々舉手の御會釋を賜はつた。「頭右」の號令が掛つて、龍顏を拜し奉つた時どんな感じが起つたか、それは筆舌で盡すことは出来ない。唯夢中であつた。唯有難さに思はず眼頭の熱くなるのを覺えた。私は陛下の御英姿を拜し奉つた瞬間、帝國の國體を現實にはつきりと見出した。それは二千五百有餘年間續いて來た我國の國體を、さまざまと我々の眼前に浮出して來た、そして大和魂の如何なるものかをはつきりと意識した。大和魂……それは我等が、この日、この時、心の奥底から發したところの、この心持ちこそ、眞の大和魂でなくて何であらう。知事の發聲で陛下の萬歳を三唱した時、私は眞に日本人たるを自覺し、日本人たる者の覺悟を堅く／＼心の奥底に誓つた。

感 激

長崎縣鎮西學院第四學年 渡 邊 浩 次

久しく切望して止まなかつた御親閱に参加するの光榮に浴した我々一行は、元氣一杯で長崎驛を出發し、途中一人の故障もなく熊本驛に到着した。驛頭には「奉迎」の字を打つた大奉迎門が聳え、通る町々は美麗に飾られ、到る處の家々や通る人々の顔は感激の色に彩られ、活氣に充ち満ちてゐました。慈母に對する赤子の如き國民の、陛下に對する敬慕が如實に現はれて居る。御親閱當日の朝は膚を刺す如き冷風が吹き附けて、惡感をさへ覺えたが、「今日こそは我々の御親閱日だぞ」との觀念が油然として湧き上がり、寒さも何のそのと、朝食もそこそこに武裝を整へ、隊伍整然として帯山大練兵場に行進した。道路の片側には御龍顏を拜せんものと中學生、將た老若男女の群が長蛇をなして居る。時刻の進むに従つて、總員の緊張はいや増しに増し、銃持つ手も偉大なる感激に震へて居る。

やがて「一時十分」啾唳たる喇叭の音が満場に響き渡ると同時に「捧げ銃」の號令もいと莊嚴に、御車は滑るが如く式場に入らせられた。式場八萬の若人は肅然として唯感激に咽んでゐる。間もあらずして遙かの臺上に陛下の神々しい玉体を拜し奉り、莊嚴なる「君が代」の合唱を終れば、愈々我々の壯烈なる一分列行進は始められた。軍樂隊の吹奏は青天を衝き地面を覆へすが如く四面に響きいやが上にも我々の心を躍動せしめる。陛下の玉座が近づくに付て、足並も軽く、胸は、はち切れる許りに緊張して來る。大隊長の「頭右」の號令が朗かに響いた。嗚呼、其の瞬間の偉大なる感激、玉顏を間近に拜し奉つた、其の感激、到底筆紙に盡す事が出来ない。

私は此の十一月十八日を一生涯の記念として又尊い体験として回顧するでせう。特に陛下の如何に御質素に遊ばし給ふかを拜し奉る時に、そして我々國民が如何様であるかを考へる時に、其れは餘りにも奢侈に流れてはゐないだらうかと云ふ事を考へたのである。そして大に反省すべきであると痛感した。又此の頃の國事多端なる折に陛下の御苦心を思

ふと、涙が出る許りである。毎日新聞紙上を賑はしてゐる日支の状態はどうであるかを見て、日本國民はどう感じて居るのか、今は眠より覺むべき時なのだ。大に反省し、軟弱なる心を振起し、國民擧つて國難に當るの一大覺悟が必要であると痛切に思つた。

御親閲を仰ぎ奉りて

長崎縣中學東山學院第五學年

伊 達 登

十一月十八日、實に其の日は天清く澄んで一點の曇りもなく、文字通の天高く馬肥ゆるの日である。廣き帶山練兵場の青葉の上を吹く微風も心地よく、秋の候なる感が一身にしみる。天自ら今日のよき日を祝するやうだ。こゝに榮えある御親閲を仰ぎ奉らんと集ひし數萬の若き男女。畏れ多くも我等は 聖上陛下を九州に。否、この熊本にお迎へすることが出来、さらに賤しき自分まで親しく御尊顔を拜することが出来るのだ。斯く思つただけでも各自の心中は如何ばかりであつたらう。

歡喜と恐縮と緊張したる念をもつて、皆 陛下の御臨場を待つた。間もなく「氣を付け」の喇叭は、高く澄み切つた上空と、さしも廣い練兵場の隅々に迄響き渡つた。さて 陛下は高く登へた一山を背景として、一段高い白い臺の上にお立ちなされた。あゝその御雄姿。私はたゞその威嚴に打たれるのみであつた。奉迎の後いよゝ分列だ。軍樂隊の行進も勇ましく、同時に數萬の若き青年の血は逆流した。今迄眠るが如き練兵場は急に活氣が溢れた。我等の大隊が分列線に來た時、隊は一應足踏をして列を整へ、更に元氣をもつて行進すべき第一歩は踏み出された。旗手であつた私は我が學校を代表して御親閲の榮に浴するのだと思ひ、勇氣百倍してこの第一歩を踏み出した。暫時の後、大隊長殿の「頭右ツ」の號令が掛つた。それから敬禮點を過ぎるまで唯機械的に動いたやうであつた。其の瞬間の心中、實にたゞ恐懼を感じ、毛髪は總立ちし、總身がしびれるやうで外に何の邪念もなかつた。たゞに私のみでなく總べての者がさうであつたらう。そ

の時の心理状態は實に筆舌の盡すところではない。

これ實に御稜威の然らしむる所である。この感の起る時、自己の存在を超越して君命一下水火の中をも物ともせず突入するのである。又かゝる感あつてこそ日本人だ。大和魂の所有者だ。かくあつてこそ外國思想問題何者ぞ。まだ決して我が國の道徳は腐敗してゐないのだ。恐れ多くも 陛下におかせられては、約一時間の間不動の姿勢であらせられた。かゝる御恵みある君を上へ頂きし我等國民の誇。我は感激に満ちてたゞ悚然と佇んでをつた。やがてラジオが風聲は滑るが如く還御遊ばされると最後の放送をなした。おゝ、午後の太陽は、御稜威のあまねく我等に及ぶが如く我等を照してゐる。

御親閲拜受の記

長崎縣長崎三菱職工學校第三學年

岩 本 文 四 郎

私は一生の中に至尊を目のあたりに拜し奉る機會があらうとは思はないことであつた。それなのにその機會が來たのだ。うるはしい龍顔を拜し奉る機會が來たのだ。これこそ千載一遇といふのであらう。我は名譽ある旗手に選ばれて三菱青年訓練所の旗を捧げながら、玉座の御前を歩武堂々と進んだ時、胸は一ぱいになつて感激の極、思はずぼろ／＼と涙がこぼれた。そして知らず識らず頭の下るのをどうすることも出来なかつた。此の日天氣晴朗、廣漠たる帶山原頭には晩秋の氣が満ち充ちて、何とも言へぬ朗かな氣持であつた。

午前九時私共は幕舎を出發した。訓練所旗は、すが／＼しい朝風にはた／＼とひらめく。練兵場の又銃線の傍で晝食をして、時の到るのを待つ。誰も彼もが緊張そのものゝ様な顔をしてゐる。秋空は拭へるが如く唯一碧。遙か東の方、阿蘇の高嶺と思はれるあたりに白雲が一つ、周圍は黒山のやうな人の群である。やがて「氣を付け」の喇叭が場の隅々まで鳴り響いて、六萬六千の若人は唯一段の緊張そのものゝ姿となつてしまつた。「君が代」の樂の音は嚴かに鎮西の廣野に流

れて行く。やがて輕快にして然かも莊重な行進曲につれて御親閲は始められた。仰げば純白な玉座のあたり、初冬に近きうららかな陽ざしの中に長くも颯爽として 天皇陛下は立たせ給ふ。「頭右ツ！」お、うるはしき御英姿よ、旗を捧ぐる手が微かにふるふ。涙が！涙が！感激の涙が！何時の間にか頭は自然に下つてゐた。女子部隊の眞心こめて奉唱する奉迎歌、歌ふ者、聴く者、唯感激の涙に咽ぶのであつた。再び「君が代」が嚴かに奏せられた。終りに大阿蘇もゆるげよとばかりに、一同「天皇陛下萬歳」を奉唱していよ／＼御親閲の式は終つた。陛下には正味一時間といふ長い此の間不動の御姿勢にて一々御會釋を賜はつた事など思ひ出すと、今更唯感激に胸が寒がるのである。

あゝ、私の一生を通じて再びは來ないだらう所の此の光榮。此の感激。私は死ぬまでこの感激の心を忘れぬと固く誓つた。一本の紙を打つ時も、一枚の板を削る時も、私共は此の時の感激の情を思ひ起して働きたいと思ふ。なまけ心が起つた時、さもししい心が起つた時、私は旗を捧げて、帶山原頭 陛下の御前を勇ましく行進した時の姿を思ひ浮べよう。さうして私はこの感激にひたつて、永久に生きて行きたいと思ふのである。

感 激

長崎縣西海中學校第五學年 永 石 末 松

我等が終生忘れることの出來ない、昭和六年十一月十八日、此の日光榮に浴し奉る我々六萬數千の青年は午前、御親閲場たる熊本城東帶山練兵場に參集し、午後零時半、その西北端中央に設けられた、御座所前面に一齊に整列を終つた。拭ふが如く晴れ渡つた秋空には清爽の氣漲り、幾百十の校旗、團旗は眼も文に、ひらめいてゐた。

かくて全員肅として 陛下の臨御を待ち奉る中に、行在所御發聲の合圖たる煙火は響き渡り、式場正面の竿頭には國旗が高々と掲げられた。我等の心身は緊張の度を加へて彌が上にも胸の高鳴りは増して行つた。やがて嘽嘽と響き渡る「君が代」の奏樂、突如として起るよと見れば、陛下には玉座に着御あらせられ、數分の後、燦として輝く天皇旗の下に歩

武堂々勇壯なる分列行進は開始された。御前通過の際、私の眼は唯麗はしき龍顔を拜し奉るのみで左右に居る學友達の姿も見えず、又軍隊の奏する行進の曲も耳には入らず、只無意識の中に涙がはら／＼と兩頬を傳うて流れた。

有難やすめらみことの御姿を

おろかみまつるわが涙かな

此の涙こそ即ち私が生後始めて體驗し得た感激の涙に外ならなかつた。此の日は晴れ渡つた天氣とはいへ、阿蘇嵐は廣漠たる場内に吹き荒んで我等の肌を刺す寒風は堪へ切れない程であつた。まして時餘にわたる長時間、丈餘の高所に御直立遊ばし給へる至尊の御身を拜察し奉るだに畏れ多いことであつた。そして餘りの勿體なさには怪しく搖亂された。今や南滿の風雲急を報ずるの時、我等はこの 聖天子を奉戴して大日本帝國を泰山の安きに置くの覺悟を固めた。

感 激 の 涙

長崎三菱青年訓練所第四年次 江 藤 良 明

幕營の一夜は、勇ましい起床喇叭の音に明けた。深く立ち罩めて居た朝霧も次第に霽れて拭うた様な紺碧の晩秋の空には今日の佳き日を祝福するが様に、いとも美しい日輪が輝き初めた。昨日迄は、時雨に煙つた九州の山野も、今朝は名残りなく晴れて朗かに明け放れ、初冬の清々しい氣は四邊に滿ち充ちてゐる。おゝ！何と恵まれた日であらう。歩武堂々隊伍を整へて、帶山練兵場に到り、時の來るを待つ。仰げば、東の方、秀麗なる大阿蘇の邊、瑞雲棚引いて、陽ざしは一入麗かである。あゝ、至尊を拜み奉る時は、刻々と近づきつゝあるのだ。昭和の聖代に生れ合せたるさへ有難きに、況して一天萬乗の大君を眼のあたり拜み奉るとは何と有難くも仕合せな事であらう。思へば果報な我が身かな。

煙火一發、四邊に轟けば大國旗は竿頭高く掲げられて、翻翻と翻る。嘽嘽たる「君が代」の樂の音、捧げ銃！劍光閃々森嚴の氣自ら天地に滿つ。銀白の玉座にはいとも尊き、陛下の御英姿。燦として輝く天皇旗。私の眼には早涙が一杯。

聽て、軍樂隊の奏する勇壯なる行進曲に連れて、大分列式は開始された。「頭一右ツ」今ぞ今ぞ長くも我等の、陛下を咫尺に拜み奉つて居るのだ。涙が―涙が止めどなく流れる。感激の情で胸は張り裂ける様だ。此の心を此の情を、何と云ひ現はすべきか。私は今其の言葉を持合せぬ。長くも擧手の御會釋を賜はる。陛下の御麗しき、龍顔を拜し奉つた時、私は眞實聲立て、泣きたい様な氣になつた。「大君の邊にこそ死なめ、かへりみはせじ」心の底からかういふ氣持が湧き上つて來た。之は私一人の心持だらうか。否、否、七萬の若人の誰の胸にも湧き起つた感情に違ひない。

分列式は終つた。眞心こめて奉唱する女子の奉迎歌も終つた。再び起る莊重なる「君が代」の奏樂。七萬の若人と十萬に餘る拜觀者とが聲を限りに、陛下の萬歳を奉唱して、榮ある御親閱の式は、滞りなく閉ぢられた。此の間、一時間の長きに亘つて、直立不動の御姿勢のまゝ過ごさせ給うた、陛下を眼のあたり拜し奉つては、唯々恐懼、感激、涙のこぼるゝばかりである。

嗚呼、此の異常の感激!!此の感激に浸つて、私は、私の一生を立派に終りたいと思ふ。邪念の起つたその時は、恐れ多い事ながら、帶山原頭、玉座に座します、陛下の御英姿を仰ぎ奉つた時の感激を思ひ浮べて眞直な道を進まう。怠け心が起つた其の時は恐れ多い事ながら置しき、龍顔を拜し奉つた時の感激の心を呼び戻して、勉め勵んで行かう。感激にをのく心とこしへに失はずして我は勵まむ。

感激に満ちて

長崎縣北松浦郡楠木實業補習學校生徒 松山 數一

十一月十八日、永久に忘れる事の出來ぬ日である此日眞に 天皇時とも稱すべき日和である。秋空一碧、大阿蘇の雄峯は東に、西は金峯山一帶秋空に高く聳え帶山の練兵場には十幾萬の蒼生が肅として襟を正して、陛下の臨御を御待ち申し上げる。聽て午後一時式場の正面に大國旗が掲揚せられ、合圖の煙火が秋空高く轟く。行在所御發聲の知らせである。

暫くして嘯曉たる「氣を付け」の喇叭が鳴り渡ると同時に、軍樂隊は莊嚴なる「君が代」を吹奏する。拜しまつれば御車は今玉座の下に着かせ給うた所である。やがて自動車の扉が排せられる。陛下には今日の行幸に白銀色に輝く高さ九尺の玉座に着かせ給ふ。全員は一齊に敬禮を行ひ軍樂隊は「君が代」を奏樂する。陛下には神々しき御姿を以て直立不動擧手の御答禮を遊ばしました。陛下の臨御より御答禮に到る間の莊嚴なる氣分は何とも言ひ様のない嚴肅さ靜肅さであつた。大日本帝國に生を享け親しく、陛下に敬禮を申上げた時程、陛下の赤子としての幸福を感じた事はない。やがて壯快なる軍樂隊の行進曲が吹奏されて分列が開始される。劍光、旗影、幾千萬の九州健兒が、歩武堂々秩序整然白塵を擧げて、陛下の御親閱を受ける盛觀は是又筆古の盡す所でない。一步々々をこなにしつかり力強く大地に踏み付けて歩いた事は生れて始めてだつた。幾千幾萬の人がドツドツと踏みつけるあの足音、感激と忠誠に満ちた足音、皆泣いて行進してゐるのだ。涙が出て仕様がなない。「頭右」をしても畏れ多い事であるが、陛下の御姿が霞んでよく拜めない様な氣がした。嗚へ様のない嚴肅な氣持がした。分列終了後女子拜受者の奉迎歌奉唱があつた。陛下の直前に於て奉唱された女子の方も恐らくは泣いて奉唱された事と思ふ。「あゝこゝにすめらみことの」と二萬幾千の聲が恰かも一人の人が歌ふ様に奉唱された時拜聽して涙が出て仕様がなかつた。奉迎歌が終つて全員が「君が代」を奉唱した。私は生れて始めて陛下の御前に於て「君が代」を拜唱する光榮を得た。「君が代」の拜唱後全員、陛下の萬歳を三唱し奉つた。あの嵐の様な聲の波、何とも形容する事の出來ぬ實に感激極まつた聲の波であつた。かくて陛下は全員の奉送裡に御還幸遊ばされたのである。陛下には時余に亘る御親閱中玉座に直立不動其の間時々擧手の答禮を遊ばされるのみ、御微動だに遊ばされぬ神々しい御姿を拜し、畏れ多い事乍らとても我等の及ばぬ御業であると思つた。

私は御親閱を拜受し、陛下の御姿を拜しまつて忠誠の念益礎きを覺えたのである。

御親閲を拜受して

長崎縣南松浦郡有福實業補習學校 馬込富太郎

菊香る秋のくれ「すめらみこと」を拜する喜の日、十一月十八日は愈々近づいた。十七日の夕一切の準備を完成して長崎驛へ至れば、我等を迎へる六十一號輸送列車は、今や遅しと發車の時を待つて居る。やがて發車の時は來た、七時五十分汽笛一聲、長崎驛に少時の別を告げ、ひた走りに走る、併し文明の利器も、明日の盛事に心急ぐ我等には駄馬の歩みに等しく思はれた、同乗の友も同じ感に打たれたのであらう、夜の明けのを待ちわび顔である。しばし目どろむ中、最早御親閲拜受の場面は煌めいた、「はつ」として思はず姿勢を正せば、それは一場の夢であつて、喜びに張りつめた心の動きであつた、時は移つて十八日の午前四時は來た、植木、上熊本を過ぎて熊本驛へ着く、全員の心は極度に緊張して居た、指揮者の命によつて下車、號令一下整列する、爽に吹く朝風は顔をなめて遠くへ吹去つて行く、隊伍堂々盲啞學校の宿所へ向ふ、驛前の奉祝門、自動車に飾る日章旗、各所に吊す奉祝燈は、聖壽の萬歳を壽ぐと共に、又我等の光榮を喜んで呉れる様に見えた、道程は約二里、途中で夜は明けた、折柄の朝霜に呷か冷氣を覺えるのであつたが、今日の限りなき譽を思へば、士氣はいやが上にも振ひ起つのであつた、豫定の場所へ着いて朝食をすまし、目的の地練兵場へと進む、さて廣い／＼眼の届かぬ所も多いが、それよりも集る人の山、老も若きも晴の裝で今日の盛事を觀んものと力んで居る、秋風に翻る日の御旗、煌く劍光、實に其の壯觀は名狀し難いものであつた。

午後零時三十分、各隊整列を終ればやがて式場正面に設けられた大國旗は掲揚せられ、煙火一發澄み渡る秋空に觀衆の耳を撃く、これぞ 聖上行在所御發聲の合圖である、吾等の胸には感激の波が湧き起つた。やがて 陛下には軍樂隊の奏樂に迎へられ玉座に着御遊ばされ給ふ、愈々龍顏を拜すべき千載一遇の時は刻一刻と迫つた來た。「分列式」大隊長の「頭右」の號令は下つた、仰ぎ奉れば 陛下には畏くも擧手の御答禮遊ばさる、其の時の感、唯「有難い」の一念の外何物も朗かな秋の一日は我等の光榮を永へに飾るのであつた。

御親閲拜受感激

長崎縣西彼杵郡小ヶ倉村青年團 高橋定雄

千載一遇！光榮の日は來た。御親閲を拜受すべく九州各縣代表男女學生、青年團、青年訓練所員並に在郷軍人、無慮六萬六千人。十八日は朝來片雲だになき快晴に恵まれ若人の意氣彌が上にも揚がる。

式場たる帶山練兵場は正に秋空一碧、東は遙かに雄大なる阿蘇連峯の雄姿を仰ぎ、西は廣袤限りなき肥後平野を望む、附近一帶瑞雲棚引く絶好の秋日和。場の入口には大國旗翻とひるがへり西端に秋の陽光を浴びて銀色に輝く玉座を拜した。觀衆は今日の盛觀を拜せんものと場を十重二十重と取囲み六萬六千の若人は玉座を正面に整然として 天皇陛下の臨御を御待ち申し上げた。やがて一しきり緊張みなぎる中に煙火三發練兵場一帯を轟かした。大國旗は秋空に靜々と掲揚され肅として聲無き時啞啞たる喇叭の響きは 陛下の御入場を報じた。この時一隅より流れ出づる莊嚴なる「君が代」の吹奏に全員最敬禮裡に 陛下には玉座につかせ給うた。玉座の周圍には各大官侍立し軍樂隊の奏する勇壯なる陸軍行進曲につれて莊重麗美な御親閲の幕は切つて落された。熊本縣を先頭に分列式は開始せられた。渾身の氣將に絶頂に達し今や玉座の御前に達せむとする時、大隊長の「頭右」の號令は大地をもゆるがさん許りに響き渡つた。此の時天皇旗は燦然と輝き玉座に仰ぎ奉る 天皇陛下の颯爽たる御英姿にたゞ／＼感激名狀すべからざる莊嚴な氣は怒濤の如く強く胸を壓してさ／＼形容の言葉を知る可くもない。在郷軍人を終りに分列式は終つた。斯くして各女子學生青年團は三方より進み出で

御親閱奉迎歌はリズムもさわやかに續いて全員莊嚴なる「君が代」の奉唱あり、最後に熊本縣知事の音頭にて天皇陛下の萬歳を三唱すれば全員之に相和して帶山原頭をゆるがす萬歳の轟き、あゝこれぞ我が忠勇な民草の誠心より迸る奉公の叫びに非ずして何ぞ。

昭和の聖代に生をうけておほけなくも浴し得たこの光榮此の感激忘れじの此の日を永久に生かさんの決心はやがて鴻恩に報いんとする私の強い念願なのであつた。

感 激

長崎縣南高來郡多比良村青年團員 野 口 不 置 雄

十一月十八日御親閱遊ばされた佳日である。嗚呼感激の日は上々の日和に恵まれて愈々訪れた。前日來の荒天氣も名残なく晴れて、正に誂へ向きの御親閱日和となつたことは、天もこの榮えある日を幸するものとして 陛下の御稜威のいや高きに胸を打たれた。各縣の代表者約七萬引率者の指揮のもとに秋深き曉の露を踏み狭霧を破つて足並揃へ御親閱場に向つて流れこみ其の人々の意氣は實に衝天の慨を示した。其の時の人々の面の輝かしさよ。其の明るさよ。歡喜の極みの一と大繪卷ではあつた。嗚呼何たる嚴肅、何たる盛觀、何たる感激ぞ。斯くて時は進みそれ〴〵の定め的位置に堵列を整へ鹵簿拜觀の一般群衆はひし〴〵と御道筋一帶を埋め盡し實にや熊本市空前の人の動きを織り出したのである。愈々御親閱と思ふ時胸の高鳴りを覺へ、早や感激の涙の惨み出るを禁ずる事が出来なかつた。時刻の近まるまゝに十幾萬の奉迎者は一齊に襟を正しまだ拜せぬ至尊の御英姿をしのび奉るさまは嚴肅敬虔の流れの一大動脈であつた。

時は進み午後一時となるや集る各縣の代表者七萬の若人の氣分は極度に緊張す。愈々一時十分となるや轟然たる皇禮砲の火蓋を切つた。青雲に響き渡る喇叭たる喇叭を合圖に軍樂隊の「君が代」吹奏は始まつた。おう!!!御親閱だ。御親閱だ。全身の血が一時に逆上し或は大鐵槌で頭上をたゞかれたやうな感を覺えた。嗚呼何たる嚴肅さよ、畏くも 陛下には天皇

旗を前に高き玉座に立御あらせられ一同最敬禮を受けさせ給ひ、而して靜々と各部隊の分列行進にうつり校旗、團旗、訓練旗を先頭にかざして前進し、御尊姿と御龍顏とを數歩の前に拜した時、宇宙の萬象何物もなく 陛下と自分とより外には何の意識もなかつた只々かたじけなさに涙がほろ〴〵兩頬を流れるのを禁ずる事が出来なかつた。各部隊の分列行進終りて女子の奉迎歌奉唱、次に一同赤誠籠めて「君が代」を高らかに合唱する時、最初の一節は餘りにも勿體なく、餘りにも畏くして咽喉より出でず聲が出づれば共に涙が流れるのを如何にしても抑へる事が出来なかつた。最後に 天皇陛下萬歳三唱の聲は秋空高く響き、昭和新政の意氣と光輝とを何人か想到せざるものがあらうか。時正に二時五分長くも陛下には滞りなく御親閱を終えさせられ御退出遊ばすまで正に五十五分その間 陛下には玉座に直立不動の姿勢のまゝこの長時間を御微動だもなされず御熱心に御親閱遊ばされたのは恐懼の限りであつた。

「嗚呼義ハ君臣、情ハ父子」日本國民たる吾々の幸福何物が之に如くものがあらうか。茲に私は此の感激に浴するの光榮を得た事を痛感し幸福を感ずると同時に感奮興起の念を尙ほ更に強からしむるに至つた次第です。

我等陛下の赤子として

佐世保市南折橋青年團 山 鹿 篤 應

思ひ起す十一月十八日、正午を過ぐる十分、一發の煙火と共に日章旗は竿頭高く掲げられて六萬七千を算する拜受者の頭上に秋風おもむろに吹く。此の日空よく晴れて阿蘇の連峯を遙か東北に望む帶山高地一帯は絶好の秋日和、輝やく我等に恵まれた輝やう日。異常に緊張した我等の面には言葉に現はせない寧ろ悲壯に近い感激が胸を壓して来る。

建國三千年天孫降臨以來御歴代の 天皇御仁徳厚く臣民亦赤子の如く悦服して純然たる大和民族の本領を發揮し來た我等の祖先、我等この美はしい感化を受けて昭和の聖代に育生まれ、畏くも 陛下御親閱拜受の光榮に浴する日東帝國の青年として絶大の誇りを覺へた。

時は移つた午後一時十分、莊重な軍樂隊の奏樂裡に 陛下はお召自動車に依つて式場に着御遊ばされ愈々各縣下の青年及び中等學校生徒の分列式は開始された。唯錦旗を拜するだけでも感激に満つる我々である。恐れ多くも御起立遊ばされた 陛下の御前を行進する我等團旗を先頭に、靴の音のみが大地を嚙んで一糸亂れない歩調が響くばかり。「頭右ツ」團旗は下つた、此の時、此の時こそ我等の生涯忘れる事の出来ない瞬間、恐れ多くも 陛下におかせられては不動の姿勢の御まゝにて團旗に擧手の禮を遊ばされた。嗚呼金甌無缺の國體を有する我が日東の大帝國世界に冠絶して 陛下を神と仰ぎ奉る我が國民の幸を彌が上にも感銘深く感じられ、子としての愛撫を下し給へる 陛下の大御心を拜し奉り唯有難味を超越して涙ぐましい感想が腦裡一ぱいであつた。分列は續く。廣漠とした帶山練兵場の空氣をふるはして、分列の歩調と軍樂隊の奏樂とが否拜受者の心と心とがびつたりと接觸して帝國の臣民が行ふ分列行進、我々は單に九州の人ではない聖上の股肱となつて國を護る青年である事がはつきりと胸にしみ込んで来る。

海行かばみづく屍、山行かば草むす屍。

大君の龍顏を咫尺の間に拜して、日の國に生れた歡喜と名譽とを深く感じた。感激一入深く國歌は合唱され拜受者の異口同音なる「天皇陛下萬歲」は感謝と感激を以て肺腑よりほとばしり、無量の感慨にふけつて自然に頭は下る。

嗚呼外にありては滿蒙の天地に我が權益擁護の爲めに奮戦する兵士、内にありては陛下の忠良なる臣民として盡す我等御親閱に際して一入日本國民としての重且大なる任務を感じた。

感 激

長崎縣活水女子專門學校 志 瀉 ゆ き 子

明朗清雅の陽光に輝く旗、跳ぬる生魚の背の如くきらめく劍の光の海、嚴肅な沈黙の中に、遠く近く、一糸亂れぬその足音、おゝあの音をきけ！人、人、人………否、日本の若き魂の行進である。輝く國土の眞隨、日本の心臓、我等の

大君を迎へ奉る歡喜の鼓動である。遠くにうねる連山を脊に、淡白の玉座に、歩を進め給ふ御英姿、嗚呼、一瞬、あらゆる雜念に汚濁された血液が、秋光に亂舞せる日章旗の眞紅に映じて淨化されてゆく。日本人だ。御微動だにあらせられず、玉座に立たせ給ふ御英姿のかしこさ。日本人ならではの解し得ぬ大日本の姿が、大帝國の歴史が、如實に語られてゐる。この胸のときめきが、この心の緊張が、帶山の曠野に充ち／＼た時の空氣は、日本人のみに與へられた特權である。高き紺碧の空と、雄大な阿蘇の靈峯と、赤誠に燃ゆる若き七萬の民草の中に仰ぐ、尊くも畏き御英姿、萬物はこの絶大な感激の渦に壓せられて黙してゐる。嗚呼、何たる幸の日であらう。萬餘の若き日本女性の感激の涙にうちふるふ歌聲が浪のように、帶山の枯草原をゆるがす。斯くの如き力と、熱と、涙と、純情との歌、斯くの如き感激と、誠とを以て歌へた事は未だかつてない。忝さに聲はかすれて、喉の裏が熱い。涙はひた流れに流れて、雁回山に夕陽が傾き、帶山原頭に、陛下の還御の幸を祈つた時、等しく聲はない。昭和六年十一月十八日！爾來、日本人である歡喜、感謝が頭の髓を占めてゐる。

かの萬葉の歌人、海犬養宿禰岡麿が詠める歌

御民われ生けるしるしあり天地の榮ゆる時に遇へらく念へば

これこそ奈良の昔も、昭和の今も、我等の捧ぐべき日本禮讃の歌である。御民われ生けるしるしあり、と絶叫し、その姿に、こしこさに涙こぼるゝ、と感激の涙に咽ぶ七萬の赤子を親しくみそなはし給ひし我等の若き大君、内治の多端に、外交の紛擾に、御聖慮深き我等の 陛下よ嗚呼この忠誠と祖國愛に燃ゆる國民の祈は、達せられぬ日無く止む時があらうか大君の邊にこそ死なめ。天空は、高く碧く、廣く、かつ限りなく深い。絶大の歡喜と、感激の涙に祝福せられた正義の國土が、日本の若き魂の上に燦然と輝いてゐるのが見える。

御親閲の感想

長崎縣立女子師範學校第五學年 平田アサノ

世界の靈山大阿蘇を背景にした帶山練兵場の中央には今日を晴と日章旗が掲げられ秋の蒼空に一入輝いてゐた。その下に集つた人々は、ひたすら陛下の御出ましを御待ち申上げてゐた。一時十五分「君が代」の奏樂が嚴かに響いてきた。御着だ。最敬禮——頭を起した時、遙か前方の純白の玉座に長くも一天萬乗の大君の御姿を拜し奉つた。あゝ、今や滿蒙の風雲急にして陛下の御心を惱まし奉る恐れ多い極みの折から、邊陲の地も厭はせられず、皇城を出でまして十一日、雨中の大演習、引きつゞきの觀兵式を親しく御統監遊ばされ、今日こゝに我等に御親閲を賜はる大御心の勿体なさ辱さ——何にたとへやうもない。

分列式が始まつた。秋色に映える劍の林に、力強いステップは陛下の御前を行進する若人の誇りと感激が充ちてゐる。陛下の始より終まで直立不動の御姿勢で一々擧手の禮を遊ばされる限りない御仁愛、臣民の心からなる熱誠、この時力強い新日本の姿が浮彫された。

思想國難何者ぞ、外敵、物かはである。

いよ／＼奉唱隊の前進が始まつた。夢中だ。足の疲れも目の眩さもない、胸が一步毎に高鳴る。あまり玉座近くで恐れる光榮が外にあらうか、あまりの辱さに張り上げるこゑもかすれ、見上げる目もくもつてくる。奉迎歌に續いての「君が代」奉唱、最後の「天皇陛下萬歳」六萬の若人、數萬の老いも若きも集へる拜觀者は天も響けと三唱した。感激の涙が潸然と頬をつたふ。この恍惚境！永久に忘れる事の出来ぬこの感激！千載一遇だけに。「御親閲に行かれるとは何と言ふ有難い事！何といふ幸福、一家の名譽だ、一家の代表だ」と門出を祝してくれた故郷の年老いた父母に、たつた一目でいゝ

からこの皇恩に浴させたかつた。！

かうした喜も、日本臣民なればこそこの聖恩に浸りこの感激を受ける事が出来るのだ。我等は實に日本國民だ。

天皇の御子だ。君臣一致、何と力強さであらうか、私共はこの聖恩の萬分の一にも報ゆるやう勵まばねならない。將來兒童教育に當るにしもてけふのこの感激をもつて當れば何の困難も生じないであらう。溢れる感激の中に靜かにお召自動車は滑つて行つた。御見送りする私共の瞳は希望に輝いてゐた。

御親閲拜受の喜び

長崎縣立長崎高等女學校 鳥巢トシ

「陛下には只今大本營を御出發なされました」との傳へを聞いて、今日こそ御親閲の日なのだ。との意識で未明より緊張し身を謹んで居た私共は、いよ／＼と思つて更に緊張した。暫くして秋空に高く響く「君が代」續いて「最敬禮」の號令に心を籠め謹みて敬禮する。嗚呼今し玉體を此原に運ばせ給うたのだ。光輝に満てる帶山原頭。一本の草さへ御稜威の光を浴びて輝き、一枚の木葉さへ畏さに戦く。直ちに分列式が始められた。煌々射る様に光る銃劍。大地に揺く許りの足音。おゝ勇躍しつゝ進む學生、青訓、青年團等大和の若き丈夫達！遙か彼方の玉座に立たせられた陛下は長くも一々擧手の禮を賜はる。榮光に満てる九州男子が果して無く續く。其の壯んさ。これこそ大和魂の權化かと思える雄々しい姿。嗚呼私はよく此神州には生れて來たことよ。然う思つた時私は全身に溢るゝ喜悅を禁じ得なかつた。間もなく壯烈な分列式も終り、愈々私共奉唱隊の前進。今こそ御前に入るのだと眞劍に一步々々踏みしめて進み玉座眞近に停止した。燦々と降る秋の陽光を全身に浴びさせられて純白の高き玉座に、赤地に黄金の菊花の天皇旗を傍に靡かせ、氣高くも邊りを拂つてお立ち遊ばされた神々しい御姿、嗚呼これこそ尊い日の御子の御姿だ。餘りの畏さに自ら頭が下る。多くの中より特に此御姿に接し得る私共の幸福。まして恐多くも擧手の禮を賜はつた時の感激何とも云へぬ氣が全身をズーンと走つた。私

共は赤心から最敬禮をなす。喜びと勿體なさを深く感じ乍ら。それから奉迎歌の奉唱。長くも御姿を拜し乍ら奉唱する。日本婦人としては以上の光榮、これ程の本望な事が有り得ようか。私の様な不肖な者が此忝い御恵みに浴する勿體なさが身に泌みる。「嗚呼此處に皇尊の鳳輦を迎へ奉れり」と小さい體が張裂ける程の感激を以て聲の續く限り私は歌つた。ともすれば涙が落ちようとする。聲が震へる。それをあらゆる努力で堪へて一生中の最大なる感激を限りない喜びを籠めて歌ひ終へた。其の後萬歳三唱。私共が力の限り「萬歳」を叫ぶと蜩集せる數萬の拜觀者が之に和した。其聲は何處迄も限りなく遠く長く續いた。そして「君が代」裡に還御あらせられた。嗚呼此のおほけない今日の譽と感激を深く心に銘じて日本婦人としての使命を果さうと堅く心に誓はずには居られなかつた。

感 激

長崎縣立佐世保高等女學校 久 家 七 子

十一月十八日。我等生涯を通じて決して忘れる事の出来ない佳日。幸多き日。廣大な帶山の原野。遙かに望めば靈峯阿蘇の山脈はゆるやかに連り、目もあやに彩られた一本一草の末々に至る迄、生きとし生けるもの、なべては寶壽萬歳を壽いで居る。この廣大にして莊嚴な雰圍氣で大君の御姿を拜し奉る此の身の幸ひ。……一時三十八分。時しも午後の日うららかな陽光を浴びて銀色に照り輝く純白の玉座に大君の御英姿を仰ぎ奉る。我々の足は感激の儘無意識の中に運ばれてゆく。……足は釘付けにされた。呼吸も止るかと思はれる程の嚴肅な沈黙である。今や我々は、眼のあたり大君の御仁慈溢るゝ玉顔を拜し奉つたのである。嗚呼その一瞬間の心之を何物に譬へよう……。今は早我魂は地上を去り後には唯感涙に埋れた、空虚な肉體だけが取残されてゐるのであつた。突如靜寂を破つてよろづの少女達の誠心こめて奉唱する奉迎歌は奏せられた。……あゝ我等生けるかひあり……。こゝ迄奏した時眼頭の熱くなり何物か咽喉につまるのを感じた、嗚呼この感激——拙筆では到底現はす事出来ない。次にゆるやかに且ついと莊嚴に奏でられる「君が代」唯感激の中に……

……。やがて本山西本縣知事の 天皇陛下萬歳の奉唱に和して帶山原頭をゆるがす萬歳の轟きは我等民草の眞心をこめ天地をゆるがし、遠く阿蘇が嶺々にもこだませよとばかりに響き渡つた。この間君臣一体、何物の侵入も許さぬ意氣、歡喜、感激で蔽はれた。そして「君が代」吹奏の中に大臣に會釋を賜はり、玉歩を御運び遊ばされた。我々は何時迄も目送し奉つた。唯々感激の中に……長い様で短かつたこの間、到底外國人には分らぬ或物を掴み得たのである。嗚呼この幸多き感激よ、永久にあれ。

御親閱の光榮に浴して

長崎縣立大村高等女學校 竹 田 光 子

後數刻で御親閱が始まるのです。七萬の若人の胸は躍り血潮は高鳴り言ひしれぬ空氣は帶山原頭に充ち満ちてゐます。あゝ私のやうな何の役にもたちさうにもない、か弱い一女性がやはり陛下の赤子の一員として、この限りない光榮に浴することが出来るのであります。私の一生を通じて是程の光榮が再び來るでせうか。この光榮、この感激、光を包む帶山原頭も今日ぞ晴の日と許り生きてゐるものゝ様に輝きます。喇叭とひびく喇叭の音と共に「氣を付けッ」の號令が空氣を揺がせて秋空に響くと、忽ち若人達は齊しく緊張した。御召自動車のエンヂンの響きも靜に、しかも重々しく流れ渡ると場の一隅から「君が代」の奏樂が始まる。全員最敬禮裡に白い玉座につかせられます。時は正に一時十五分。おゝ朱の天皇旗……我等の大君は今こゝにまします。そして私達を御親閱遊ばされます。夢のやうな、否夢ではありません。國旗校旗は林立して晩秋の風にはためく。おゝその光景……時は古にかへり神祖が數多の神々をすべさせられて天降り遊ばしたかと疑ふ許り、瑞氣充ち人をして聖地にあるの感を起させる。やがて熊本縣知事の分列式開始の奏上が終ると、軍樂隊はトツプをきり行進曲につれて熊本師範を先頭に行進は續く。おゝ劍の林は輝き五色の波は流れる。軽く飛ぶ若人の足並、踏みしめる大地の響これこそ新興日本の鼓動かとも思はれます。おゝ畏き極み、陛下には不動の御姿で各部隊の變るごとに

擧手の御答禮を遊ばします。いよ／＼私達の喜び勇む足音はつましげに大地をふみしめて進み出る。躍る胸の聲を一步毎にはつきり記すが如くに……あゝ畏さに頭は垂れ涙はにじむ。忽ち起る最敬禮の鋭い聲にはつと我にかへり、深く頭をさげた。おゝどうして起さうこの頭を……又も涙は頬を傳ひ魂はとんで体のみ大地に残つてゐる思がする。まもあらず優美なメロデーが私の心をよびもどした。いと厳に和かに静寂な空気を震はせる。あゝ私達は歌ふのだ。陛下の御前で！さうだ力の限り精一杯歌はう。「あゝこゝに天皇の……」私達の口からは喜びに震へて流れ出た。おゝこの聲はかしこくも天聴に達するのだ。「おゝ我等生ける甲斐あり……」と歌ふ聲はもう噎れて調子はくるつてしまった。ありつだけの誠心から迸り出る奉唱歌は莊嚴に満ちた式場を揺がし、涯ない宇宙の隅々まで目に見えぬ尊いものとして擴がつてゆきます。軍樂隊のタクトは變り「君が代」は莊重に奏せられた。私達の高まる胸もおちつき聲を合せて奉唱し益々御代の榮えまさんことをお祈りするのです。續いて今終らんとする最も光ある式に高々と萬歳を三唱し最後の意義ある尊い最敬禮を捧げた時 陛下には自動車に召され次第に遠ざかり給うたのであります。數分沈黙は續いた。あまりの畏さにたゞ／＼呆然として白い玉座も眺めて居りました。あゝ昭和六年十一月十八日の日よ。

嗚呼感激の雰圍氣

長崎縣立諫早高等女學校 庄 島 康 子

私達は莊嚴にして且勇壯な樂隊の音に足並を合せて御前へ／＼と進んで参ります。陛下の尊い御姿を漸く遙かの玉座に拜する事が出来るやうになりますと、今までこらへにこらへて居た涙がはら／＼と頬を傳うて落ちます。何とはなしに私は胸が一杯になつた儘定め場所に着きました。そして「君が代」を前よりも一層緊張して奉唱しました。長い／＼餘韻を残しながら……。私は邊の總ての人が感激に胸を戦かせて居ると思ひました。そしてそれは拜する事の出来ると思ふ幸に浴する事の出来る人だけに與へられた大なる感激であり、御互同志の此の上もない幸であつたと思ひます。感激の静

寂を破つて馬が嘶きます。梢の揺れる音が微かに胸を打ちます。やがて奉迎歌。私は天にも響けよとばかり歌ひました。魂を打ち込んで。あゝ實に壯大だ。我國であつてこそ見得られる光景だ。私は日本の國體が今更の様に強く、勇ましく、非常に美しい物に思はれました。やがて縣知事外二名の人が陛下の御前へ進みました。天皇陛下萬歳!!!それに合はせて六萬六千の臣はそれこそ一生に於て恐らく唯一度の力強い感激に満ちた萬歳を唱へました。陛下は靜かに玉座を降りて行かれます。私達は愈々最後の「君が代」を奉唱しました。靜かに／＼頭を下げました。その中に軽い爆音を残して過ぎて行かれます。私は最敬禮を直つてからも、尙身動きが出来ませんでした。爆音がたう／＼聞えなくなると餘りにもつたいなさに胸がつまる様な感激に打たれ、新たな涙がこぼれました。漸く他の人を見た時、その人の瞳にも軽い涙の跡があり／＼と頬にうつつて居りました。あゝ、此の人達もやはりさう思ふと御互に手に手を取り、私達に賜うた多大なる光榮を喜ばすには居られませんでした。又此の尊い清らかな御國に生れ合つた事を今更の如く、神に敬虔の念を以て、合掌せずには居られませんでした。然しその時も、もの云ふ如くにたゞ涙だけがほろ／＼と頬を傳うて居りました。

御親閱拜受感激

長崎縣立島原高等女學校 内 田 峰 子

あゝ十一月十八日。永久に永久に忘れる事の出来ない日である。この南國のはてに小さな民草である私達までが九重の雲深くまします 天皇陛下の御鳳輦を御迎へして御親閱を拜受し奉つた貴い日である。煙たなびく雄峯阿蘇の麓、天空紺青に澄み渡り、白雲悠々と流るゝあの帯山練兵場に於て莊嚴にとり行はせられた御親閱式をかへり見るとき、すべてが只涙のこしこさである。御恵は山より高く海より深い事は申すまでもない。唯々聖代に生けるものゝかしこさで有難さの極みである。七萬餘の若人を前に 陛下が靜々と玉座に立たせたまひしとき、私達は御英姿をまともに仰ぎ奉ることは出来なかつた。尊くかしこさに知らず識らず頭の下るのを覺えた。奉唱隊として御前間近く進んで行つた時にはただ茫然とし

て、丁度雲の上を歩いてゐるのではないかと思つた。一齊に奉唱した「君が代」の歌聲が莊嚴に秋空に響き渡ると萬感更に胸にせまつてはら／＼と熱い涙が落ちた。動く者はない、聲一つだにない、あの人山をきづいた平野に、今は一人居ない様な静けさである。唯一つの秋風にはたはたとゆるれる天皇旗のひらめきのみが莊嚴に目に映るのであつた。あゝ十一月十八日。この日こそ代々語りつきつゝ長へに忘れる事の出来ない光榮の日である。あゝ日本國に生れ育ち嬉しさよ。今や我國は世界に並ぶものもない。惠の波は八洲に餘り、御稜威の風は遙かに海原をこえて外つ國々まで吹き巡り、陛下の御盛徳は何にたとへ様もない。唯々感涙にむせぶばかりである。小さな善も積れば大きな善となる。八千萬の同胞が各自努力を拂つたならばどんなに偉大な力となることであらう。私達は御國のため、少しでも御爲になるやうにせねばならぬと御親閱を拜受していよ／＼心が固められたのであつた。あゝ十一月十八日。この日こそ實に一生永久に忘るゝことの出来ない日である。

御親閱を拜して

長崎縣立口加高等女學校 栗原富美子

御式はいよ／＼始まりました。指揮者は紅白の旗をお持ちになつて前進の合圖をなさいました。私達奉唱隊一同は軍樂隊の奏する音と共に足音高く一歩々々と進んで行きました。さうして皆定められた位置で指揮者の號令を心静めてお待ち申しました。暫くする中に遙の方より參る御車の音が靜かなる御親閱場にひそかにひゞいて参ります。「最敬禮」と共に一同は頭を下げました。私は號令を聞くさへ早く頭が急に重くなつてつい知らぬ間に眞心より陛下をお迎へするところの姿勢をとつて居りました。「なほれ」と共に頭を上げますとどうでせう。やゝ距離を隔つた所にある純白な臺の上には陛下が直立遊ばされてゐらつしやいますそして其の右方には見る目も綾な菊の御旗が翻つて居りました。其の時の私の心はもう何の例へ様のない有難さと嬉しさで胸は一杯になりました。御姿を御拜みするなり再び最敬禮の合圖で頭を

下げますと陛下には一々答禮遊ばされました。何と御勿體ないこととございませう。一同は軍樂隊の音に合せて國歌を奏しました。私は隣きもせず陛下を御仰ぎ申しました。當時の國歌合唱と共に吹き競ふ風も或は揺れてゐる木々もすべて今日のおき日を共に喜び迎へて居ります。最早國歌合唱も終へていよ／＼御親閱奉迎歌となりますと、第一第二第三の奉唱隊は再び樂隊の音と共に一齊に奏しました。あゝ、此の瞬間涙は胸中にみなぎるばかり出て來る聲さへも震へてゐます。私達の奏する歌は陛下の御耳にも御達し申した事とせう。それと共に愛でられたる小さな小鳥等も耳をかたむけて今日の譽をどんなに喜んで居る事とせうか？

あゝ私達日本國民が幸福にして暮されるのも目の前におはします陛下の御稜威に依るのでございます。御歌にもある如く私達は誠に生けるかひがあるのでございます。私達は毎日々々此のすめらみことの御下に育まれて居ります。日本國民である以上は一時として陛下の御恩を忘れてはなりません。

御親閱を仰ぎ奉つて

長崎縣立平戸高等女學校 柴田千百子

ドン／＼／＼／＼ドーン——。雲切れ一つなく晴れ渡つた大空に、煙火が打ち上げられた。果知れぬこの練兵場に集つた私共六萬何千の魂は、その瞬間、電氣にうたれたやうに緊張した。今陛下の御召自動車が、この練兵場に着御遊ばされると見える。やがて軍樂隊の莊重な「君が代」が聞える。御車はしづかに玉座に御近づき遊ばされつゝあるのだ。まだ御尊容は拜し得ないが、私の頭の中には、はつきりと御車の進行が見える。樂の音が長い餘韻を残して終る。あゝ今玉座に御のぼり遊ばしたのだらう。

最敬禮、頭をさげてゐる中に、私の胸がかすかに騒ぐのを感じた。あゝ今すぐに吾等の天皇陛下をおろがみまつる時が來るのだ。分列式が始まつた。何萬の人々が銃を擔いで動き出した。ザク／＼／＼／＼と踏みつけて行く足音は、

大地も揺ぐばかり。銃の先につけた剣は秋の強い光をうけて、キラリ／＼と私達の眼を刺す。それはあたかも剣の林が足並揃へて進行してゐるやうな壯觀であつた。眞紅、緑等色とり／＼の旗が秋の陽に燃え立つ。遠くの方から「頭——右ッ」の號令がかすかに響いて来る。いよいよ吾等第一奉唱隊も前進を始めた。一步々玉座に近づいて行くのだ。私の胸は歡びに躍る。大地を揺がす様な音が次第にやんで分列式は終つた。吾等は軍樂隊に誘導されて前進又前進。

あゝ、玉座が見える。純白の玉座の上に直立不動の御姿勢を取つて立ち給ふ吾等の 天皇陛下左の御手はしかと御劍を支へ給ふ。玉座の左には錦の御旗が燦として輝く。「最敬禮!!」頭を下げつゝ私は 陛下が擧手の禮を遊ばされるのを見上げた。おゝ何たる畏さ!何かしら熱いものが込み上げて来た。樂長が高い臺の上に上り、タクトを振る。——軍樂隊の前奏、私共は 陛下の御前で奉迎歌を歌ふのだ。この光榮——私は林中が熱して来るのを覺えた。もう夢中で歌つた。陛下は直立不動の御姿勢で立ち給ふ。御微動だに遊ばされない。奉迎歌が終り、「君が代」が終つてどなたかの音頭で萬歳三唱。「ばんざーあい、ばんざーあい」萬歳の聲は帯山の大練兵場を大波のやうにどよめき渡つて遙か彼方の紫色に連なれる山脈を越えて行く。「最敬禮!」あゝ遂に吾等の 陛下に御別れの時が来た。故しらぬ涙がぼたり帯山練兵場の土の上に落ちた。

御親閱拜受について

長崎縣立五島高等女學校 管 茂 登 子

懸念してゐた天氣も御親閱拜受の當日は、まことに晴れ渡つて居りました。大み光に輝いたのでございませう。胸の躍るのを抑へながら時の來るのを待ちました。なぜといふ事もなしに妙に不安なやうな不思議に心の落ち付かないのをどうする事も出来ませんでしたが一歩々々 陛下の御近くに進むにつれてきちんとして澄み切つた心になつてゆくのでした。奉迎歌奉唱のときでもあたりに木魂するやうな高い聲は出ませんでしたけれども、心の奥底から言ひやうのない感激で奉

唱する事が出来ました。特に萬歳三唱のときには、靜まつてゐた胸の動悸が再び活躍し出して歡喜に聲と共に飛び上りた。い衝動に驅られました。天皇陛下には一時間直立不動の御姿勢でゐられました。長さ言ふ言葉を知りません。「生けるかひあり」とはまさに此の事です。一生涯に二度と遇ふことのない出来るかどうかかわからない此の目出度き日を憶ふときに眞に身の幸福を感謝してやみません。

皇統連綿たる萬世一系の 天皇陛下を頭に戴く我等日本臣民の誇りはまことに他に類のないものであります。そして私達の肝に銘じて片時も忘れない所の大和魂の發露がやがて第二の國民をよりよく守り立てゝゆくのです。あの古歌にある

御民われ生けるしるしあり大御代のさかゆるときにあへらく思へば

は眞に私達の考へを詠んで呉れてあるものゝやうです。昔も今も變らない大御代の日に新に日に進む隆昌と、私共臣民の赤誠とは永劫に續いてその盡きる所を知らないであります。

感 激

長崎縣立壹岐高等女學校 山 口 ス エ

藍色の空を背景に、純白の玉座に立たせられた陛下の御勇姿を、私達は本當にこの目で拜し奉つたのでございませう。昭和六年十一月十八日、どうして私達はこの日を忘れる事が出来ませう。永久に永久に心に残る日なのでございませう。あの御勇ましい御姿ををろがみ奉る事の出来た私達は何といふ光榮でございませう。「いかなる幸か、かしこさに涙こぼるゝ」實際にそれを感じさせられた私達は何といふ幸福な者でございませう。私達の想像は、常に私達の現實に比して高いのを常とします。いかなる高さにも想像の翼をのびし得るといふ事が私達の誇りでございませう。然しどうしてもあの神々しさには想像の手はとどく事が出来ませんでした。それなのに、私達は現實に 陛下を拜し奉つて涙を流したのでございませう。「あゝ我等生ける甲斐あり、おゝけなき……」しみじみと味はされたその氣持の千分の一も紙上であらはす事は出来

ません。御親閱を仰いだ時の氣持、それは只泣きたいといふ言葉で盡きておりました。思ふ存分の聲を出して泣きたいといふ事でございます。もし私に理性が無かつたら、聲を放ち、涙をふるつて泣いた事だらうと思ひます。陛下の御前で歌ふかたじけなさに、私達は只涙を流しました。一生懸命歌はうとする聲はかすれて震ひます。けれども一句々歌の意味が生々と心にせまりきて、今更の様にはふり落ちる涙をとどめる事は出来ませんでした。

あゝ私達は何といふ幸福な者でございます。

感 激

長崎縣立對馬高等女學校 熊 本 道 子

秋陽光麗らかに廣漠たる帯山練兵場に照映する處、我が一天萬乗の聖の 大君には、純白を欺く玉座に、高く神々しく立御遊ばされました。天つ日嗣の大御姿を仰ぎ奉る幾萬の民草は、此の上無く限り無き光榮に、湧き返る感激の涙を抑へもあへず、全身は唯々歡喜の高潮に滿された。じつと固定化した様な四邊の空氣は、森嚴の氣を漂はして微動をだに許さざる緊張を覺えさせた。

あゝ此處に、こよなく長く尊き、現人神の塵泥の數にも足らぬ我等民草を親しくみそなはさんが爲に、臨御あらせ給へるぞと思へば、つと胸の塞がるを覺えて思はず頭はひた下りに下つた。大空に懸れる天つ日影は、いや輝きに輝いて、聖天子の御英姿に、大御光を添へまゐらせ、幸に浸れる我等に祝福の微笑を浴せ、空行く雲も歩を停めて、深き瀾き無言の敬意をさゝげまつれるかの様であつた。斯くして、此の身に餘る光榮に浴することを得たのは、我等人の子なればこそ否これ全く日本の本の民草なればこそと、今更ながら皇御國の名に負ふ「日の本」と云ふ莊嚴な文字が、茲に新なる印象を以て、強く固く腦裡に刻まれた。かゝる我等の熱誠を、現人神に聞え上げ奉らんと、渾身の力を籠めて、聲高らかに歌ひ出でし奉迎歌、さては、大御代を壽ぎ奉る「君が代」の國歌は、餘韻嫋々として、阿蘇の外山の輪彼方に消えていつた。

この刹那我等の心は底知れぬ靜寂の裡に潜んで、恐れ多くも 陛下が一々擧手の御答禮を賜はるのを、はふり落つる涙と共に、いやが上にも有難く感じ奉つた。

おゝ我等が萬歳の齊唱よ！若人の血潮を躍らせて、九天も震へ、大地も撼げとばかり、聲を限りに三唱し奉つた。此の日の本國の津々浦々にまでも響き渡つたであらう萬歳の聲に、言知れぬ力強い何物かを感じ、いや榮え行く日の本の元氣に滿溢れた輝しい面影が、今一際祝福の色彩に飾られた無量の喜にえ堪へられなかつた。あはれ、此の感激の波高き一日が、どうして瞬間的のものであり得られませうか。いざさらば、我が魂の亡逝く日まで、此のおふけない光榮を胸底に深く留めて、まのあたりに拜み畏み奉りし 陛下の御英姿の大御前に、時斷えず赤き心の花束を堆く捧げ奉つて、この深く尊き意義ある一日を、永久の憶出草と致しませう。

感 激

長崎縣長崎市立高等女學校 井 川 智 恵 子

「前へ進めーッ」秋晴れの陽光輝く今日の日よ。十一月十八日午後一時四十四分、私達は軍樂隊の誘導の奏樂につれて前進した。待ち望んだ 陛下の御前に出るその時が愈々來たのである。今日は一入列も整然と……坂の上に進出すると、錦旗燦として輝く傍にもう玉座に立たせられた 陛下の御英姿がはるかに拜される。やがて畏れ多くも玉座から僅かに四十五米の距離、奉唱の位置に着いた。初めて近々と拜し奉る 陛下の御姿！あゝそれは本當に何と云ふ神々しさであらう。畏れ多さと有難さの混つた何とも言へぬ敬虔な氣持が胸一杯を領して、一度仰いだ頭は自づと下つて來るのであつた。「最敬礼」ふと、私の腦裡に閃いたものがあつた。「現神！」あゝ眞に我が 天皇陛下は現神で在らせられるのだ。再び御姿を仰げば「私達の 陛下」と親しくお呼びかけ由上げたい様な心からの懐しさの情に私は限りなく心が和いでゆくのを覺えた。何とも形容の出來ぬ嬉しさ喜ばしさが胸を衝き上げて來るのであつた。やがて樂隊の前奏が始まつた。そ

して奉迎歌の奉唱。この時こそ、眞心からなる私共の聲を、陛下の御耳に御心に聞え上げんものと、力限りの聲を張り上げる一萬五千の乙女の頬は熱した。「あゝこゝにすめら尊の風聲を迎へまつれり」奉迎歌の一節毎に胸の感激は高まつて涙がせき上げて来る。「今日の生まれを……ことほがむひとつ心に……」と合せて奉唱した聲の餘韻は、深い感動に顫へて居た。今、樂隊は調子を換へて莊重な國歌……。光普き君が代に生れ出で、あゝ何と言ふ私達の幸よ、光榮よ、純一な喜びの心を以て私はしみじみそれを思はずには居られなかつた。

間もなく眞向うの臺の上に、熊本縣知事閣下の黒い姿が現はれた。「天皇陛下萬さあーい」知事さんの感極まつた發聲「萬さあーいーあーい。」唱和する場内全員心の底から迸り出た力強い叫び聲は、あのはるくくと廣がつた肥州の大曠野を覆うた。もはや陛下還御の時間である。私共は最後の注目を申上げた。次いで最敬禮。頭を擧ぐればまだ端然と玉座に立たせられた。陛下はやがて靜かに御會釋を賜はつて、玉座の階段をお下りになるのである。再び「君が代」吹奏裡に御車は滑り出でた。ラツパニ聲啾啾と響き渡る。休めの合圖である。思へば一時間に過ぎる長い開始終不動の御姿勢を以て、連日のお疲れもお厭ひなく私共の爲に御親閱を賜はつた皇恩の辱なさ！。

「あゝ吾等生ける甲斐あり。」本當に私はさう思つた。君が代に生を享けて初めて、再びめぐり遇へぬかも知れない光榮に餘る日——この感激こそは永久に消えぬ心の灯となるであらう。

御親閱を仰ぎて

長崎縣成徳高等女學校 岩崎シゲ子

光榮に輝く熊本の山河は秋陽を浴びて朗かに且つ詳かであつた。陛下の鹵簿入場を知らせる大國旗は、帶山原頭秋空高く掲げられ、銃聲一發邊りの山々に木霊すると、皆は齊しく緊張に緊張を加へ、咳一つ聞えない。唯何處からか軍馬の嘶きが高く響いて来るのみであつた。一時十分 陛下は軍樂隊の「君が代」吹奏裡に玉座に立御しました。全九州から

此の光榮ある御親閱拜受の爲め集ひし十餘萬の民草で、さしもの廣き帶山は埋められた。式は男子の分列式から始まる。學生、青訓、在郷軍人と、國家の將來を雙肩に擔ふ若人の分列式は、いとも勇ましく、いとも嚴かに終へた。次は愈々我等奉唱隊の順番である。心は益々緊張の度を深めて行く。軍樂隊のマーチに合せて、進めの號令と共に、感激に充ちた第一歩。自から力が加はる。肅然且つ整然、前進又前進、御前纜かに五十米の所で、止れの號令が掛かる。一同停止最敬禮玉座に立御します我が日の本の現神なる陛下の御姿を今眼の邊りに拜し奉りては、自ら頭が下り胸は異様に高鳴りして、唯々有難さ、勿體なさで、理り分かず目に涙さへ浮んで来る。嗚呼この時誰か感慨無量ならざるものがあらう。この時の氣持は私の如き拙い筆では逆も盡す事が出来ない。

嗚呼此處にすめらみことの風聲を……と軍樂隊の伴奏と共に感激に充ち満ちた吾等乙女の歌ふ聲は、風に傳はつて、餘韻爛々、阿蘇に木霊し、秋空高く響き渡つては、有明の海を越えて、遠く佐世保の岸にも波打つた事であらう。感極まつて聲も出さうでない。五十米前方に神の如く立御します陛下の御姿を拜し奉つては、畏れ多さに聲は慄ひ、唯口を動かすばかりだつた。次いで熊本縣知事、御前に參進し、感激に満ちた大聲で 天皇陛下萬歳を奉唱すれば、集へる幾萬の民草は之れに和して、天地も揺げと力の限り心の底から唱和した。この熱と力とに溢るゝ聖壽萬歳の聲は潮の如く遠く遠く雲間に迄傳はつた。八日東京御發榮以來、大演習御統監、國務御繁忙の陛下は、殊の外御機嫌美はしく、我等風情にまで、一々御會釋を賜はる大御心を推し奉りて、感涙にむせぶ外はなかつた。かくて光榮ある御親閱式はすんだ。

陛下は「君が代」吹奏裡に還御遊ばされた。光輝燦然たる天皇旗、太陽のすべてを包容する如く、天下のすべてを包容する天皇旗。陛下の御聖徳。太陽と共に、我が日の本の我が皇室のいやさかへにさかえまさん事を心からお祈りする。

御親閲に参加して

長崎縣波佐見高等家政女學校

中山 シゲ子

一點の曇りもなく澄み渡つた秋空の下に、麗かな陽光を浴びて今日の榮えある御親閲場に入りました。私達の心は何となく引きしまるのをおぼえます。廣大な帯山練兵場、金粉まきちらす大廣野の其處此處に在郷軍人、學生、生徒、青年團等が屯し、拜觀團休はさしもの練兵場に黒垣をつくりました。

時は刻一刻と進んで一時十五分、煙火天にこだますれば、氣を附けの號令と共に私達は一齊に起立しました。萬籟寂として聲なきなかに嘸啞たる「君が代」の吹奏樂が流れてきます。思はず襟を正しますと最敬禮!!! 聖上陛下をお迎へ申し上げました。頭を恐る恐る上ぐれば 陛下は純白の玉座にお起立遊ばされ、側には天皇旗が金色燦然としてひらめいてゐます。お、この時、阿蘇を始め四方の山々も御光に輝いてゐました。天か下我こそこの 大君の民にこそあれと胸のあつくなるのをどうすることもできませんでした。軍樂行進曲と共に莊嚴なる分列式、劍光、御旗入り交るころ御威光の尊さに涙なしには拜觀できませんでした。つゞいて私達の奉唱隊前進、樂の音の一つ一つが胸に深く跳り込み、一步一歩陛下の御前近くに私はこれ以上申す言葉がありません。やがて位置につき最敬禮して仰ぎ奉ればその神々しいみ姿に恐懼のあまりからだはわなないて仕方がありませんでした。奉唱歌! どうしても始めの中は聲が喉につまつて出ません。たゞあついあついものがこみあげてくるばかりでやつと聲がでゝもふるへてゐるのです。あゝ今すめらみことの御姿を拜みまつるかしこさにたゞ涙こぼるゝばかりです。「君が代」——ほんとうに私はこの時こそ君が代は千代に八千代に苔のみすまで萬代不易の御光と心深く感じた事はありません。つゞいて萬歳! 萬歳!! 萬歳!!! 萬歳!!! 萬歳!!! 十幾萬の國民が阿蘇の高嶺にとゞけと聲はりあげて高くさけびました。陛下には始終御端正な御姿で御親閲遊ばされ、再びおこる君が代の奏樂と共に最敬禮の裡に御還幸遊ばされました。

あゝわれら生けるかひあり、おほけなき今日のほまれを萬代に語りつぎつゝことほがむ、ひとつ心に、無上の感激を胸深くきざみこめて御奉送申上げました。

御親閲を拜受して

長崎縣鶴鳴高等女學校

小川 ミサエ

私達總員六萬六千人が榮光に輝く御親閲を仰いだ十一月十八日の帯山練兵場の空は、麗朗と澄み渡り、瑞雲棚引く絶好の秋日和でございました。

午後一時十五分、莊嚴な「君が代」の吹奏が廣い練兵場にゆるやかに流れ、高さ二間餘りの純白な玉座に、畏くも天皇陛下の神々しい御英姿を拜しました。やがて莊重輕快なマーチが吹奏され、揃つた足音も勇ましく、一糸紊れぬ分列式が初まりました。林の如き鉢劍や、幾拾となく續く軍旗が、うららかな陽光に照り映える莊麗美、私達は只驚喜の瞳を輝かす許りでございました。

一時四十分頃、分列式が終りますと共に、私達御親閲奉唱歌奉唱隊は、玉座に近い奉唱場所まで行進いたしました。一步は一步よりと、身も心も引き緊り、御前近く進みました時は、私達の魂は畏さと歡びに慄へ、只夢見る心地でございました。うららかな陽光を浴びさせられ、天降りました神の如く、純白の玉座に端止に立たせ給られた 陛下は、私達が最敬禮を致しました時、龍顏御覽はしく舉手の禮を賜はりました。あゝ此の畏さ、かたじけなさ。筆舌に盡し難い感激の血潮は、怒濤の如く身内を駆け巡り、感泣の涙ははら／＼幾條となく頬を傳はりました。奉唱歌奉唱には、今こそ陛下の御前で奉唱する一生一度の擧の時だと、精一杯の聲を張り上げましたが、涙聲になるのをどうすることも出来ませんでした。奉唱歌奉唱が終ると、本山熊本縣知事が御前に進み、臺上に立ち 陛下の萬歳を奉唱され、私達も之に和しました、六萬六千の民草の眞心こめた萬歳の轟は、天地を壓し、遠く阿蘇の山々にも木霊せよとばかり響き渡りました。最

後の最敬禮の時には、陛下は玉座を御下りになり、御歸還遊ばす由承はつておりましたので、御姿の拜めぬ壇上を豫期しつつ頭を上げましたが、長くも陛下はまだ御立ち續けてあらせられました。そして擧手の禮を賜はつて後御下り遊ばされました。私達は今更の如く恐懼し、感激に打たれ、隨喜の涙に咽ぶばかりでございました。

あゝこの榮光ある日の聖恩への感激、此の感激性あればこそ、私達は日本人です。此の感激性あればこそ、日本帝國は彌榮に發展するのです。すめらぎのまします國、日本に生を享けた私達は、何といふ幸福でせうか。私達は一生涯この千載一遇の榮光ある日の感激を忘れず、國家の爲努力する事を誓ひませう。

感激

長崎縣環浦高等女學校 富 永 ミ ネ

天高く氣清く日本晴の日、昭和六年十一月十八日、此日こそ私共が待ちに待つた御親閱を仰ぐ千載一遇の佳辰である。はてしもなく廣い帶山練兵場の内外は早くも人も埋められてゐた。私共は幸福なものだ、仕合せものだ、今日は私達の大父君を、天子様を拜むことが出来るばかりか、御親閱まで戴くのだと、参加七萬の若人の顔には齊しく歡喜と榮光との色が湛へられてゐた。かくして私共は言ふに言はれぬ敬虔と感激とに満ちた氣持で只管 大元帥陛下の着御を御待ち申した。

やがて御着場合圖の號響き渡るや、場内は一層靜肅に宛も人なき練兵場と化した。間もなく「君が代」の奏樂が莊重に流れて來た。度々耳にした「君が代」ではあるが今日程崇高莊嚴に感じたことはない。聖壽の萬歲、國家の安泰、私共は言ひ知れぬ固い決心が五体を緊張させ、身も心も顫動を禁ずることが出来なかつた。やがて陛下には燦めく錦旗を傍に高き玉座に着御遊ばされた。

畏き御親閱の式は始まつた。申すも畏き極みながら、神の如く、慈父の如くに敬慕し奉る我 大君の御英姿を目のあた

りに拜し奉る此瞬間、更に新なる崇高敬虔の念の高まるのを感じるのでした。男子の勇ましい分列行進に次いで、私共女子奉唱團は肅肅御前近かに進んで誠心からの奉迎歌を奉唱申し上げた。此間前後一時間に亘る長時間、陛下には直立不動の御姿勢で、御親閱を賜はり、時々擧手の御會釋さへ賜はつた。實に畏くも有難き極みと申上ぐるより外はない。奉迎歌をお歌ひ申上げる瞬間、不圖眼頭が熱くなつた。歌詞は幾度となく繰返し歌つたものである。併し此の時の奉唱程心の奥底から強く意識して歌つた事はなかつた。今迄のそれと比べて何といふ意識した感激でしたせう。全く私達の魂の眞聲であつた。然し餘りの感激に打たれて舌がこはばり喉がつかまるやうになつて意のままに歌へなかつたが、後に同様同感の方が多かつたことを知つて流石は日本帝國の女子だと自ら其の特徴を感ぜられた。次いで奉唱する「君が代」も陛下の御前で餘りの有難さに感涙滂沱たる中に、誠心こめた有らん限りの聲もて、莊重に唱へ奉つた。此利那感極まつて私は最早死んでもよいと思つた。此感激は現世境遇を共にしたもの、外には味ふことが出来ず、到底筆にも言にも表はすことが出来ない。斯くして最後に熊本縣知事發聲の下に唱和した「天皇陛下萬歲」は實にも天地をゆすり、山野を震はせ日本帝國永劫無窮の榮光を誓つて、聖壽の萬歲を稱ふ感激の眞叫であつた。やがて再び起る莊嚴の「君が代」奏樂の中に……。

いつまでも此のまゝにあれかしとあられぬ願ひの中に御名残り惜くも還御を奉送した。

この榮光、この感激、この歡喜、この赤誠をもつて私達第二の國民は我帝國の一段の發展と隆運とを期し、力の限り根限り一入の精進と、一層の努力とを以て、御國に奉仕する強き覺悟を決めた。

御親閱を拜受するの榮光に浴して

長崎縣玉木職業女學校 鈴 木 艶

昭和六年十一月十八日、此の日こそ私等の生涯にとつて忘れ様として忘れる事の出来ない最も印象深い日である。天も此の佳き日を祝してか、紺碧の空高く澄み渡り、晩秋の風は颯爽として、上氣した私等の頬を撫で、行く。廣々として果

しなき帯山練兵場は今將に無限の歡喜に包まれてゐる。やがて煙火一發。續いてドドン、ドンと打ち上げられる號報に陛下の御入報は報せられたのである。ついで軍樂隊によつていと厳かに奏でられる所の「君が代」の奏樂に何時とは知らず心の引きしまるのを覺えた。やがて勇ましく繰り出された所の囀々として盡きる所を知らない長蛇の如き、然も莊重な男子の分列式が何方へともなく消えるが如く影をかくすと、續いて私等奉唱部隊も徐ろに前進を始めた。轟く胸を押へながらやがて陛下の御前近くに進み出で心からなる最敬禮を捧げて我等は靜かに頭を上げた。彼方の玉座に肅然として微動だになし給はず立たせ給へる我がすめらみことの、神々しい御姿をまのあたりに拜し奉り、感極まり、胸懐き、自から感涙のにじみ出るのをどうする事も出来なかつた。溢れ出る此の感激の心を私等の拙い言葉で何物に譬へる事が出来やう。唯有難さ、忝けなさに、私達は幸福であると言ふ千載一遇の無上の光榮に咽ぶのみである。日頃御眞影は拜しても今こゝに眞實御龍顔を拜し奉り、親しく御親閱を仰ぐと言ふ事は、如何なる恵であり、如何なる事であらう。

あゝ此處にすめらみことのみくるまを

迎へまつれり、みくるまを迎へまつれり

みひかりに阿蘇の高嶺も有明の海もかゞよふ。

感涙に咽びながら真心こめて奉唱し、やがて六萬六千の民草の大阿蘇もゆるげとばかり三唱した萬歳の轟きを名残りとして式をつゝかなかく終りに近づき「君が代」の奏樂の裡に陛下は御還御遊ばされたのである。帯山練兵場に此の尊き數分間の息詰る様な雰囲気居合せた人々の満面には云ひ知れない感激の色がたゞへられてゐる。

しばし茫然としてゐた私は此の榮えある御親閱を仰ぐ事の出来た、日本人最大の榮冠と、深き感謝と感激とに得も言はれぬ無上の誇りを感じ溢れ出づる涙を止め得なかつた。

感 激

長崎縣長崎女子商業學校第四學年 山 田 喜 美

國旗、軒燈を各戸にかゝげ全市を擧げて奉祝氣分に満てる熊本各市、菊の香も目出たき十一月十八日、感激の日は訪づれました。身にあまる光榮に浴する我々六萬三千の民草は今日の幸の日を如何に待ちわびて居た事でありませう。輝かしき榮ある此日、紅葉眞紅秋日にはゆる四方の山、空は唯紺碧に晴れわたり、見渡す限り果てしなき練兵場はこよなき今日の光榮に輝いて居る様に思はれました。午後一時、やがて喜びの時は刻々と迫り、いまだ拜せぬ 聖天子の御姿を思ひまつりつゝ御待ち申す時ほどなく嘯唳として響き渡る喇叭の音、愈々御着と思ふと自から精神と身体の緊張を覺えました。やがて何萬とも知れぬ銃の輝き、數千本にのぼる各校團旗のはためき、隊伍堂々として分列式は開始され軍樂隊の行進曲に歩調を合せて感激の一步一步をふみしめる。我等奉唱隊の行進はそれから約一時間の後でありました。仰ぎ見れば長くも不動の御姿勢で玉座に御直立の 聖天子の御英姿、竿頭高き天皇旗は燦として輝き颯爽として邊りを壓する嚴肅さ、其の裡で奉唱致します時あまりの恐れ多さに、自然と頭が下り筆古に盡されない感激に思はず涙がこぼれました。九重の奥深き御姿を名もなき民草の拜し奉るかたじけなさ、これこそ千載の一遇とも申すべき御座いませうか。さかへ行く日の本に生を受け此の身にあまる光榮に浴した我々は、さゞれ石の、いはをとなりて苔のむすまで榮へまつる聖壽の萬歳を一つ心に、壽ぎ奉る次第でございます。

感 激

長崎縣佐世保高等裁縫女學校第四學年 立 石 代 美 子

晴朗な秋空の下に、此處帯山練兵場の四時色變へぬ松の緑葉はそよ吹く風に戦いてゐました。足に踏む芝生の小草も風

に揺れて草も木も今日の光榮を感激してゐるかの様に思はれました。空を飛び交ふ小鳥の歌も今日の喜びを誇いでゐるかのやうでございました。人の海のやうな……御親閲を仰ぐ七萬の學生、軍人、青年團……の人々の面は喜びに輝いてゐるが、眼の輝きに言ひ知れぬ緊張を感得されるのでした。

やがて軍樂隊の「君が代」の吹奏、御召自動車の音聞えて、間もなく陛下には銀色に輝く、丈高き玉座に御登臨あらせられました。遙かに拜する神々しい御姿、頭は只有難さに下るのみでございます。感涙の眼を上ぐれば天皇旗は翻々と翻へり、御前を絶え間なく行進する分列隊の銃剣の林が太陽に輝いてゐる光景は、東洋の盟主としての我國威を若人の力を以て示してゐるやうな感じがいたしました。雄大崇高、此の感じは、この場この時に於てのみ味はれたもので、私の一生を通じて忘れられない感じなのでございます。式中北西の風強くして、容赦なく高き玉座を吹いた事でございます。至尊の御身には御微動だも遊ばされなかつたのでございます。これ偏に青人草にたれ給ふ大御心の深さでございます。陛下の御前に侍る千載一遇の此の光榮を感泣しつゝ君が代——奉唱歌——萬歳の三唱——私のあるだけの魂をこめた聲で歌ひ唱へました。此の若人の喜びに満ちた感激の聲は野を越え山を越え海を越えて日本國中に響き渡るべき尊い魂の聲でした。

草も木もよりて仕ふる大君のみ前にあればたゞ涙する

感 激

長崎縣大村女子職業學校師範科 桑 原 キ ミ エ

冷かに吹きくる風にそゞろ身も心も引きしまる十一月十六日の星月夜、多數の級友に送られて私達は特別列車の窓に倚りつゝ、畏きすめらみことをおろがみまつる歡喜の念に燃えながら大村の驛を發しました。車中のまどろみも時の間に、明くるあしたの七時、熊本驛に着きました。プラットホームを出て先づ最初目についたのは驛前交叉點に高々と聳え立つ

奉迎門でありました。車窓の外に立並ぶ民家に翻へる日章旗にせよ、此の奉迎門にせよ、今日の佳き日を喜びことほぐ熊本市民の清き心は到る所に充ち溢れてゐました。

明くる十八日午後一時十分、私達の待ちに待つたためた時は参りました。菊の香高き秋晴の空に、おごそかに響き渡る進軍喇叭に、七萬の若き民草襟を正し歩調を揃へて靜かに仰ぐも畏き陛下の御前に近づき奉る。神々しい聖姿!!始めて拜し奉るみかどの御前!!畏さ、忝けなさに氣も遠く、夢か?現か?唯夢の中に……。やがて軍樂隊によつて奏される樂の音につれ、奉迎歌を奉唱する時、感慨と畏さの情に燃えながらも感極まつて聲もかすれつゝ……。樂の音の收まつた時、遙か彼方の玉座におそれ多くも直立不動にあらせられる陛下の御英姿!私達すべての民草に對して靜かに擧手の禮を賜はりました時の心中はどう言ひ表はすべきでありませうか。唯よろづの思ひ胸に充ちて感激の涙に咽ぶのみでした。そして涙に曇つた私の眼前には感激!感激のみが限りもなくひろげられて行くのでした。やがて「君が代」の奏樂が終ると共に靜かに靜かに玉座から下御遊ばされた陛下の御姿を拜み奉る時、又してもこみあげてくる感涙の爲、狭霧の中に陛下を拜し奉るかのように唯おぼろに拜せらるゝ御英姿、感極まつて手を合はすばかりでありました。

あゝ、十一月十八日、此の日こそ私達七萬の若き民草の永久に忘れる事の出来ぬ、忝けない佳き日でございます。皇統連綿として光輝世界に類なき我が日の本の皇帝とおろがみまつりし此の千載一遇の好機に際會しました事は私達にとつて何と幸な事でございます。あゝ榮えある此の日、御恵み深き陛下の大御心を深く肝に銘じて現代女性としての尊き使命を果しつゝ今日の佳き日の感激を持ちつゞけて行かなければならないと思ひます。

御親閲拜受感激

長崎縣東彼杵郡竹松村女子青年團 中 山 タ ケ

我が皇室の御紋章なる菊花も薫る昭和六年十一月十八日畏くも 天皇陛下には熊本縣下帯山練兵場に於て九州各縣下中

等學校、男女青年團、在郷軍人分會代表者を親しく御親閲遊ばされました。校長先生、團長様の厚き御導きの許に不肖私も千載一遇の光榮に浴したのでございます。

この日空は一片の曇りなく晴れ渡り、雄大なる阿蘇の連峯も遠く光榮に輝いてをります。御親閲當日なる十一月十八日に夜をついで集ひ來れる陛下の赤子實に十數萬、さすがに廣い帶山練兵場も將に埋もれやうとしてをります。是等の民草が等しく陛下の御成りを今やとお待ち申上ぐる折から突如聞ゆる煙火のひびきに萬場寂として咳一つする者もございません。莊重なる軍樂隊の行進曲につれて分列式は嚴肅に行はれ、つづいて私達奉唱隊は皆齊しく眞の敬虔の心に満ちて進み行く遙か彼方の雪白なる玉座に在します陛下の神々しき御姿を拜し奉つたその瞬間唯ありがたい感より外に何の言葉もありません。奉迎歌の奉唱も、萬歳も唯感涙の中に終りました。其の間陛下は一時間餘を直立不動の御姿勢のまま微動だに遊ばされず、一々擧手の禮を賜はる有難さ。唯胸にあふるゝ感激の中に奉送し奉つたのであります。身は片田舎の賤家にありながら天顔を拜し奉つたこの光榮は私共の永久に忘れられない日であります。

感

激

長崎縣北高來郡小野村女子青年團 久保フジノ

昭和六年十一月十八日、終生忘れる事の出来ない有難い日で御座いました。私も村より御親閲拜受者として參らせて戴き身に餘る光榮に浴し感謝と喜びの涙にくれるもので御座います。御親閲遊ばした熊本練兵場、それは廣い草原で又御親閲を仰ぐ六萬餘の拜受者も誠に多うございました。私も奉唱部の第一部隊として指定の場所につき、風聲を御待ち申しました。惠まれた身は寒くも替くもない御日様に守られ乍ら。午後一時十分頃空高く花煙は上げられかすかに「君が代」の奉樂が聞えて參りました時云ひ知れぬ嚴かさに胸はうたれ、身はいやが上にも固くなりました。

最敬禮の後行進曲で分列式が始められました。皆私共の前を通つて陛下の御前まで進むのです。感激の一步一步を力

強く大地にふみしめて後から／＼と續く時、頼母しい日本の男子の「海行かば水く屍山行かば草むす屍大君の邊にこそ死なめ顧みはせじ」の古語と共に今更強く胸をうちました。この日本人特有の御奉公が身にしみて嬉しうございます。分列式が終つて私達も御前まで進みました。あゝ其の時の感激を何と申し上げませう。間近に龍顔を拜する畏さ、有難さたゞ涙にくれるばかりで御座いました。

あゝすめらみことの御姿を拜みまつる

御姿を拜みまつるみ恵のいかなる幸か

かしこさに涙こぼるゝ。

唱へる者の聲は感激にふるへてをりました。「君が代」の奉奏に最敬禮を申し上げ靜かに滑る様に消え行く御歯薄を御送り申し上げた後やつと我にかへつた自分の肩はおしつけられた様な重い、感じを覺えました。四時頃より歸路につきました。思ひ／＼に今日の思ひ出多き幸ありし身を故里へ遊ぶとき私共の心はいつ迄も／＼今日の光榮を忘れまいと靜かに歩を運んで居りました。

福

岡

縣

目次

女子専門學校……………	(五四)
師範學校……………	(五一)
中 學 校……………	(五五)
實 業 學 校……………	(六三)
高等女學校……………	(六五)
實業女學校……………	(六五)
青訓及青年團……………	(六四)
女子青年團及處女會……………	(六九)

奉唱の感激を追ひて

福岡縣女子専門學校 高柴 とし子

人生の歩みは大波小波のうねりのやうに時々感激の経験を介在せしめながら刻みつけられて行く。人にもし過去の幾星霜を顧みる時に先づ心に浮べるものは恐らくはさうした感激の経験であるだらう。回顧は人間性を美しくする。回顧は進展の頓挫を意味しない。それは明日の努力への力強い送辭ではないだらうか。

昭和六年十一月十八日！この日はかしこくも 大元帥陛下には大演習御統監を了へさせられて後親しく九州の青年を御親閲遊ばす日である。私はこの日の感激の経験こそは私共の將來に幾度回顧が繰返されやうとも常に第一番に想到されるべき思ひ出であらう事を揚言したのである。勇壯な分列式を行ふことを知らない女子に對して特にあたへられた名稱は「奉唱隊」だつた。私共は雀躍してその名譽あるつとめを果すことを誓つた。

あゝあの日はすばらしい晴天だつた。晩秋の南國の空はあくまで澄みわたつて今日の盛儀を壽ぎまつる爲に心して雲の點在を許さないかのやうに思はれた。一發の煙火が式場正面の大國旗をゆるがす頃、帶山練兵場を埋めた大群衆の緊張はいやが上にも増して行つた。私共三萬三千の奉唱隊は場の西北のやゝ低まつた所に立つて隊長の命令を待つてゐる。

分列式の壯觀！血に燃える青年の一人々々が一歩づゝ踏みしめる足音は大地にひびいて恰も地鳴りのやうである。その健全な肩に支へられた銃劍の磨き込めた底光りは日本の明日を擔はんとする彼らの意氣を物語つてゐる。

いよゝ隊長とマーチの指導をうけて私共の行進が始まり全員はおそれ多くも玉座近く凹形に配列した。仰ぎ奉れば折から少しく頭上を傾いた太陽は純白の玉座を照らして明るみと陰との美しい立体美を見せてゐる。その上にかしこくも直立不動の姿勢をとらせ給ふ 大元帥陛下の一条亂れない御姿よ！。それは人間としてよりも、むしろ神性の示現としての眞面に拜するにはあまりに畏れ多い御姿であつた。やがて軍樂隊の吹奏に和して御親閲奉迎歌が始まる。「あゝわれら生

けるかひあり、おほけなきけふのほまれを」
ほんとうに生れて来た甲斐があつたのだ。

みたみわれ生けるしあり大君の榮ゆるときにあへらく思へば

と自然人の赤裸々な告白を遺して逝つた我らの祖先の心持に眞に感銘し得たのはこの歌を唱ふ時だつた。引續いて全員「君が代」の奉唱となつた。おゝその君の現身を目のあたり拜しながら唱ふことの何といふ名譽！感激！

「君が代はちよにやちよにさざれいしのはほとなりてこけのむすまで」

あらゆる實際的興味を捨て、若き 陛下に對し永遠の生命を希ふ心に何の不合理をも感じなかつた事を思ひ出す。

次は本山熊本縣知事の發聲によつて萬歳の三唱である。式場の若人も幾人とも知れず押し寄せた觀衆も一人々々の渾身から叫び出される萬歳の聲は總和して天地に轟きわたる。今まで鳴りを靜めて動かなくつた連山も大きな「こだま」をかへす有様は連山自身の聲かと疑はれる。

新に思ひ起す日本人であつた事のよろこびと、この 陛下を祝福申上げながら生きて行かうとするよろこびと、すべての人の心はみな一つであつた。そして又自分自身の務めを全うする事によつて國家社會の爲に有爲な人間となりたいと、私共は期せずして同じ誓を心の中にくり返すのであつた。

感激の刹那は刻々に進んで行く。陛下には御自ら玉歩を運ばせられて御車をお召しになると、軍樂隊はそのわだちの音の聞えなくなるまでも、ゆるやかな「君が代」を奏してお送り申上げた。

記憶すべき一日はかうして終つてしまつた。心一ぱいの躍動をいだいて福岡に歸つてはや一ヶ月餘。再びあの日の光景を心に浮べて綴ることの意義深きを喜びつゝこの稿を草した次第である。

御親閲を受けて

福岡縣福岡師範學校專攻科

松岡國夫

第二學期のはじめから、御親閲の練習や、色々な準備に忙殺されて居た私達は、唯ひたすらに榮ある御親閲の日を指折り數へて待ち奉つて居た。十一月十六日午後六時五十分三百健兒の意氣の象徴!!!校旗を先頭に全校生徒を擧げて御親閲への旅路に就いた。歩武肅々と夜の福博を行軍する時、私達は意氣軒昂將に出征兵士の心境にも似たる氣概があつた。

十七日午前二時深更の熊本驛に下車。驛前の奉迎門を潜り奉祝提灯の軒燈を縫うて舍營地春竹校へ進む時、私達の心は憧れの地に來た喜び光榮の日が、目前に展開された緊張に自ら胸の高鳴るのを禁ずることが出来なかつた。

明くれば十七日。澄み切つた碧空の東方遙かに大阿蘇の偉大な山容を仰ぎつゝ、午前九時頃春竹校出發。今日の野營地健軍村に向つて行進。午前十一時頃野營地着。午後の半日幕舎の設營。一夜の旅の夢を此の天幕の中に結ぶこととなつた。今宵この邊一帶の畑地草原に野營するもの實に一萬三千人に及ぶとのこと。見渡す限りの原野に幾百十と散見する天幕は實に此の懐しい一夜のホームであり又生命の巢である。戸山學校の軍樂隊の演奏、星空に躍る銀龍!!花火は如何に私達の一夜の旅愁露營の夕を慰めてくれたことであらうか。

明くれば十八日。今日こそ私達が一日千秋の思ひで待ちわびた御親閲の當日。恵まれた快晴。朝來御親閲を受くる學生在郷軍人、青訓生や一般拜觀者が蜿蜒帶山の式場へと續いて居る。眞に人間の渦卷、人間の氾濫。我が、福岡師範の生徒もこの雑沓、この洪水の中を泳ぎながら午前十時半頃所定の位置に到着した。六萬の御親閲拜受の若人は既に整列を終へて 陛下の着御を唯待ちに待ち奉る。晴れ渡つた晩秋の空に轟る幾百十の校旗團旗莊嚴壯絶、一大繪卷の展開である。やがて 陛下行在所御出發の合圖の煙火。刻々に緊張し行く場内の空氣。間もなく「君が代」の奏樂裡に 陛下は玉座に御着き遊ばされた。水を打つたような靜けさ。唯見る肅然と整列する人垣の壯觀。愈々分列式開始。第一集團より順次玉座

に向つて分列。戸山軍樂隊の勇壯な軍樂の吹奏につれて。沈靜より活動へ。人と銃劍と旗と軍樂の交響裡に移動する分列の偉觀。私は今極度の緊張と興奮裡に何か偉なるものに引かれ行く様に次第に玉座に近づいて行く。分列式發足點の所に來た時には自分以上の或力に引ずられて歩む様な氣がした。「頭右」の號令も私の耳には入らなかつた。唯私の全身全靈はすべて陛下の御姿に傾注された。生を享けて二十有九。はじめて仰ぎ奉る御姿。其の崇嚴其の崇高、おう此の一瞬の感激こそは實に私の一生を通じて永久に忘るゝことの出来ない貴くも神秘的な一頁であつた。私は陛下の御前を遠ざかることが、苦しかつた。いつまでも、いつまでも陛下の御姿を仰ぎ奉りたい。死んでも……練兵場を一周して所定の位置に着いても私はこの感激、この心の激動を抑へんとして抑へることが出来なかつた。分列式はまだ續いて居る。遙かに玉座を仰ぐと陛下の御姿が小さく拜せられ其の下に翻翻と天皇旗が秋光に映えてはためくのを仰ぎまつる。分列式が済むと奉唱隊が定位置に進みやがて奉唱歌の合唱。「嗚呼こゝに天皇の鳳聲を迎へまつれり」。の歌のしらべが帯山練兵場一帶の空氣を振はして赤子の至情の結晶、唯一つに凝つて秋空の快晴にひびく。最後に「君が代」の合唱、陛下の萬歳を三唱し奉つて此の盛なる式典の幕は滞りなく閉ぢたのである。時に午後二時十分。式がはじまつてより將に一時間である。

すべらぎは現つ神なり千萬に動くべき世のあらむと思ふな

はじめて陛下を仰ぎ奉つた私の心に強く感じたのはこの歌の精神であつた。神人。おそれ多いけれども私はかう申し上げる外に言葉がない。「すべらぎは現つ神なり」。私の過去の信念はこの體驗——貴い體驗によつて益々此の信を固くしたのであつた。陛下を拜して「死しても既に悔なし。」と感じたのは實に私一人ではあるまい。

御民われ生けるしあり天地の

さかゆる時にあへらく思へば

天平時代を謳歌した萬葉人の此の歌は又やがて昭和の大御世を謳歌する現代人の歌である。私達は此の聖世に生れたる

の多幸を自覺し各々其の分に應じて奉公の道にいそしみたいものである。

感想

福岡縣小倉師範學校 村上 義美

身は草奔の一微臣でありながら、圖らずも空前の恩榮に浴するを得た私は、感激措く能はず、こゝに拙文を草して、永く此の感興を留めたいと思ひます。

回顧すれば、去る昭和六年十一月十七日、限り無き期待と歡喜とに胸を躍らせながら、大阿蘇連峯を後に、肥後の平原を前に擴げた、南國の野營地に集ひたる一萬有餘の學生は、明日に迫つた御親臨に、抑へ切れない興奮を見せて、野營の準備にいそしんでゐたのです。やがて黄昏が迫る頃には、準備も完了し、皆思ひ／＼に天幕の中に埋火を圍んで、つましい團樂に幸運を語り合つたのでした。八時半頃でしたらう。陛下には、辱くも私達の野營地に、黒田侍従を御巡視の御名代として御遣はしになつたのでした。私達は斯かる夜間に於て、斯くの如き御心附を賜はつた寂慮に對しては、眞に感謝の意を表す言葉を持ちません。歡喜に興奮して、寢覺め眩ちな一夜を明した私達の上には、遂に牢記すべき良き日が廻つて來たのです。輕快にはげんだ聲、明るい喜悅の溢れた顔、輝かしい瞳、それは期せずして、彼等の内心に充滿してゐる幸福感を、無言の中に最も雄辯に物語つてゐるではありませんか。——(中略)

廣漠たる大練兵場帯山の原頭を集へる賜閱七萬の若人と、十萬に近き陪觀者の群は、今や幾十日の間待望せし陛下の御駕を迎へたのです。「最敬禮」の號令と共に一齊に下げられた十數萬の頭、私は其の時電氣に觸れた様な尊嚴を感じたのです。そして其の瞬間全身を擦過する、或る偉大な力の爲めに、心は全く空虚にされてしまつたのです。其の時こそほんの短時間ではあるが、眞に「無我の境」に遊んだのです。「直れ」の號令で恐る／＼顔を上げた私は、見るべからざる尊いものを仰ぐ時に起る刹那的な、複雑な感情に躊躇しながらも、雪白の壇上に出立ちませる現身の神を仰いだ

のです。おゝ!!如何に尊嚴、崇高の麗はしの玉體よ。三千年來、御仁慈を垂れさせ給うた神の御末よ。

輝やかに 出で立ちませる 大君を

仰げば我は 思ふことなし

愈々分列式が始まつて、間もなく私達の順となつた。私は殆ど夢中で歩いて行つたのでした。「頭右ツ」ハツとして注目すれば、驚く程間近に立ちませる 陛下の龍顏には、崇高なる御仁慈の光が漲つて、恐れ多くも私達に向つて御會釋遊ばしてお出になるではありませんか。私の心は全く勿體なさと感激とで一杯でした。私は限らない御慈愛に抱かれて、慈母の懐にある乳兒の様な安らかさと、信者の様な法悦とに浸つたのです。張り裂ける様な幸福の絶頂を歩いてゐたのです。自分が日本人である喜びを 陛下の民草であるといふ事を深く強く自覺したのでした。私は信する——此の御親閱に臨んだ人々の心を、この——此の信念が如何に力強くゆすぶつたかを。此の信條が私達の心に血管に流動してゐる限り、我が帝國の礎は、泰山の安きに保つ事が出来るといふ事を。そして過去半生の精神的放浪者が、安住の天國を見出した喜び、それを私は感じたのでした。

午後六時四十分より、熊本市廳前に武装を解いて八時までの自由行動、私は友人と五人連れで熊本城へ向つたのです。上通筋より左へ折れて、少し行つた處でふと顔を上げると、直ぐ前方に城頭高く翻つてゐる日章旗が、城と共に夜目にも白くはつきりと浮き出てゐるではありませんか。

闇に白き 宇土の櫓に翻へる

清き御旗の かしこかりけり

それでもなくとも感じ易くなつてゐた私達の心に、此の日章旗がどんなに強い感慨を誘つた事か。「感激に生きよ」これは私達が良く耳にする言葉です。私は今度の御親閱に臨んで、初めて此の語の持つ深い意味を體驗したのでした。總ての人々の心中に感謝感激が宿つてゐる間は、世の中の争鬭、悲劇、紛擾といふ様な人間の醜惡な半面は妄りに起り得べきも

のではないといふ事が、事實より確信へと導かれたのです。

私は今度の御親閱によつて幾多の尊い而かも得難い體驗を得た事を感謝せざるを得ません。同時に此の尊い體驗を、將來永く自己修養の上にも、兒童教養の上にも、十分に生かして行きたいと思ひます。

御親閱を拜受し奉る

福岡縣中學修猷館 田 鳥 信 俊

十一月十七日、日夜千秋の思ひをして待ちに待ち奉つた其の日は遂に明日に迫つた。修猷館を代表したる吾々五年生は身も心も勇躍しながら熊本に向つて出發した。

十一月十八日!!此日熊本市帯山練兵場の空は正に秋空一碧、東に大阿蘇の雄姿を望み、西に金峯山一帶瑞雲引く絶好の秋日和——九州及沖繩、山口の各縣青年訓練所、高等學校、専門學校、男女中等學校、在郷軍人、女子青年團代表を網羅せる總員實に六萬六千の赤子、此千載一遇の光榮に浴せんものと場内に流れ込み、吾等も群衆を縫うて指定の場所に着いた。

午後一時五分、式場正面の大國旗櫓頭高く翻り、煙火一發秋の大氣を震はせて高らかに轟き渡る。溢れる様な奉迎者に埋まつた練兵場は、水を打つた様な沈黙、時計は刻一刻と嚴肅なる時を刻み 陛下を待ち奉る。吾等の氣は愈々緊張の極に達した。やがて喇叭一聲兩簿の先驅、帯山練兵場四端に達したることを告げる。全員一齊に直立不動、一段と緊張味を加へ、高鳴る心臓を抑へ、皆一つ動かさない。と、莊重な「君が代」の吹奏が緩やかに流れる、大隊長の號令にて捧銃の禮を爲せば、麗かな陽光を浴びて銀色に光る純白の玉座に長くも 天皇陛下の颯爽たる御英姿を拜し奉る。

時正に一時十五分、紫紺色に霞む阿蘇連峯の大自然を背景に吾等九州の青年男女の整然たる姿は、大日本の若き力強さを表現して、四十四萬坪の大平原を埋め盡し誰一人として微動だもせぬ嚴肅さである。やがて軍樂隊の莊重輕快なマーチ

につれて御親閲式の幕は切つて落された。我等の心は歡喜感激に躍つて居る。吾々は第五集團第一大隊第三中隊である。福岡縣部隊先頭の光榮を擔つた我大隊は、五彩色とりどりの校旗を先頭に、滿腔の熱誠を以て、大地を一步／＼しかと踏み付けて 陛下の御前に進む。「頭右つ」の號令と共に校旗はさつと、低く垂れ、一齊に 陛下に注目の敬禮を爲す。

其時 陛下には、之に對し畏くも、直立不動の御姿勢にて嚴肅なる擧手の御答禮を賜うた。「頭右つ」と共に 陛下の龍顔を仰いだ。其の嚴かな而も萬民を慈しみ給ふ溫愛の情溢れ給へる御顔を拜した。實に其瞬間だ。一切の言葉も無益である。唯感激の一字に盡されて居る。我部隊は場内を一周して所定の場所に落着いた。遠く御座所を眺むれば、未だ御親閲は酣である。學生部隊の行進が終ると、在郷軍人の分列式である。整然たる分列式、快い歩調軍樂隊の莊嚴輕快なマーチは續く。陛下には御微動だに遊ばし給はず、儼然と御直立遊ばされて、いとも御熱心に、御親閲あらせる。ら

かくて、分列式、勇壯嚴肅極まる光景を呈し終つて、一時計分から女學生と女子青年團、が緩やかな奏樂裏に玉座を凹形に圍みながら前進隊形を整へびつたりと止つた。九州代表三萬三千の女子奉唱隊は軍樂隊の吹奏と共に「あゝ、すめらみことの」の御親閲奉迎歌を奉唱し、その美しい餘韻は、さしもの大平原を壓し、遠山を震はし、感激ひし／＼と胸に迫る。之に續いて、全員「君が代」奉唱す。之が終ると、本山熊本縣知事は御前に進み、臺に上つて 天皇陛下萬歳を奉唱すれば、之に續いて、忽ち起る鯨波に似たる萬歳の唱和、民草の赤誠こめて天地を壓し、さしもの大平原も震撼し、遠く阿蘇の山々にもこだませよと許り響き渡つたのであつた。かくて、こゝに前代未聞の御盛儀は滞りなく終りを告げた。

式後追懐するに、分列式の時、一時間に垂んとする長時間を要したるにも拘らず。陛下には御熱心に不動の御姿勢にて、大隊毎に御擧手の御答禮を賜うた。我々は、實に其の御姿、御態度を仰ぎ見奉つては、何とも言ふ事の出来ぬ神々しさに自ら頭の下るのを覚え、平生の御修養の程拜察し奉り、誠に畏れ多き極みであつた。

陛下が國事多端な折柄、我國民將士の意氣を盛ならしむる爲、陸軍特別大演習を親しく御統監遊ばされ、更に又、吾々九州の青年男女を御親閲遊ばされた事は、實に吾々少青年の感激に堪へない處である。榮え行く日の本國よ、陽の如き

陛下を戴ける我等の胸に浮ぶもの、忠君愛國の念より他に又何があらう。

御親閲拜受所感

福岡縣豊津中學校第五學年

柳 瀬 幸 則

今秋熊本を中心として陸軍大演習が行はれた。國事多端の時に當り、畏くも 聖上陛下には東都を後に遙々西陣の地に御行幸遊ばされ、秋風薄寒を覺える熊本の帯山練兵場に於て勇壯なる群臣の閱兵を遊ばされ、又我々學生も同じ光榮に浴する事を得た。我等の光榮これより大なるものがあらうか。實に生涯の光榮であり、畏き極みである。我等は等しく此の聖代に生を享けて盛典に参加することが出来た。依つてこゝに謹んで所感を述べようと思ふ。

十一月十七日。我等五年生一同は背囊を負うて名狀し難い敬虔と喜悅とを抑へながら何時もより早く歸宅し、準備を整へて再び登校し、奉安殿前に集合したのは、早や夕間深く秋氣身に沁む七時半頃であつた。頭上高く輝く星斗は恰も奉迎の意を表してゐるかの如くきらめき初めて居る。我等は豊津驛から乗車した。夜の事とて眺望は出来ず只雑談と沈黙と睡眠とに時間を過した。翌朝三時半熊本驛着。我等百數十名は陸軍將校に引率されて構内に集合する。夜氣は身に沁んで寒さはひどい。驛頭は形容も出来ない程立派な裝飾振りで一層の謹嚴を感じさせられた。驛から鐵道學校へ向ふ街路は、幾萬の小國旗で飾られ、そこには巨大な鯛の模型、こゝには警備も出来ぬ美飾が施されてあつた。目的地へ着いたのは四時過であつた。此處にも數千名の中等學校の生徒が先着して居た。黎明五時を期して此處を出發し、商業學校へ向ふ。

間もなく十八日の太陽は昇つた。噫それは我等が一生忘る可からざる祝福すべく又感激に滿ちた日の出である。本校は宗像中學と合併して出發。目ざすは帯山練兵場。途中幾多の警官と幾多の憲兵に絶間なく逢ふ。帯山練兵場着。この日正に秋更けて天空皆一碧、渺茫たる練兵場は幾萬とも知れぬ學生、青訓等の群に埋もれ、阿蘇の靈峯を吹き下す清風に心の底まで清められる心地がする。中食。——休憩。——整列。

午後一時に至り、抜刀、着剣。前方高く据ゑられた擴聲機は殆ど引つきりなしに御召自動車の通過地名を告げる。時は来た。一時十分。遙に轟く號報。今や陛下には行在所を御發榮遊ばされ、刻々に鹵簿は躍進し給ふ。美装の音楽隊は妙音高らかに奉迎の樂を奏し奉る。御召自動車の音、いと神々しく秋氣の中をかすかに傳はる。音が次第／＼に高まる。愈々臨御!!現神の御登壇!何たる御英姿ぞや!何たる謹嚴なる御姿ぞや!この感激のシーンに際して宇宙の精靈は動搖する。「捧げー銃」その瞬間萬感胸に滿ち我等學徒の心は一つに凝つて至尊の足下に集る。「君が代」の調は雄々しく莊重なり。ズムで、練兵場の中を靜かに／＼廣がり一節一音の悉くが高く天へ舞ひ昇り、丁度慈愛に富んだ春の雨の様に我々の心を濕す。そして將來忠良な臣民となるべき、又重且大なる責任を脊負つて立つ第二の國民としての覺悟は更に深刻に感じられた。「立てー銃」愈々分列式だ。「右向けー右」右翼の先頭から發進。嚙啞たる行進曲の音に合せて、次から次へと進む幾團又幾團の御閱兵。順次に回を重ねて愈々我等大隊の番となつた。二回の方向變換の後陛下の眞下を威武堂々たる分列式の行進である。「頭——右」大隊長の號令はかゝつた。力をこめて頭を向ける。注目する。そこには颯爽たる大元帥陛下の御英姿。しかも御舉手の御答禮。我等は身もなく心もなく、すべては陛下の玉容に吸ひとられてしまつた多數の分列でなく唯我一人が未だ曾てなき緊張に滿たされて、元氣よく濶歩してゐるの感がある。かくてこの感慨はこの帶山大練兵場に群れ集つた幾十萬の人のいづれもが感じたことであらう。やがて二三回の旋回をしてもとの位置に戻り莊嚴裡に閱兵は終了した。續いて女學生並に處女團の黒い波がしづしづとよせ集まる。奉迎歌を奉唱するのだ。嵐の前の靜寂がひし／＼と身に迫る。間もなく麗しい響が流れて來た。その第一音の妙なることは何とも形容の仕様がなかつた。實に日本女性のやさしさと誠心とから出た音調である。

「——」
歌が終つた。我々は赤心ほどばしる萬歳を三唱し、かくして式は幕を閉じた。陛下は感激に滿ちた幾十萬の魂よりの奉送を御受け遊ばされて再び鹵簿は肅々と御歸還遊ばされた。

この赤誠をこめた忠臣の群を見て如何に我が國家が愈々進展して行くかがわかる。又思想問題などにかぶれ極めて僅少の者のあるなど何の心配もないことだ。ほつとして汗を拭いて居る中にさしもの人々も次第に退出して行く。あゝもう此の處を去るのか。印象の深い阿蘇よ、森よ、さては帶山の練兵場よ、さらば、さらば。

御親閲式に關する感想

福岡縣中學明善校 清水晋作

昭和六年十一月十六日午後九時登校。校庭は物靜かである。所々に低い話聲がする。滿天の星は牙え渡り、快く冷えた秋の夜氣が身に迫る。銀河が鮮やかに流れてゐる。吾等は明日の快晴を豫知する。校庭の空氣は何かしら吾等に緊張味を與へる。御親閱参加出發にふさはしい夜である。間もなく銃器庫が開かれる。中に入つて薄暗い提灯の光に劍をつり銃を取つて出る。劍や銃の鳴る音が今日に限つて一種異様に感ぜられる。集合の笛が鳴る。缺席者その他の事故者一人もなく誠に快い。玄關前に集合し明治大帝行在所に遙拜。毎日毎日拜んでゐるのに何故か今晚は特に敬虔な心持にさせられる。「捧げ銃」をした瞬間兩頬の筋肉がビリビリと引締る様な心持がする。折からけたまひしい號外の鈴の音。早速安藤先生が號外を讀んで下さる。日支衝突事件に關する號外である。嚴寒の異郷に身をさらし祖國のため、君國のために身を犠牲にして奮闘してゐられる吾が忠勇の士を思ふ時、吾等はいやが上にも緊張したのである。校門を出た。皆無言で只靴の音のみである。吾等は冷靜な深い感激に胸を埋めて驛に向ふ。驛には南筑久商の生徒諸君が整列してゐる。吾等は緊張して汽車にのりこんだ。汽車の中でも皆靜かである。修學旅行の折と全然異ふ。それだけ緊張してゐるのである。途中暫くの間中島先生から滿洲問題の話をしていただいた。

十七日午前二時半、熊本驛着。久留米熊本間一睡もする事は出来ない。熊本驛から熊本鐵道學校までの緊張にはちぎれる様な行進を續ける。流石に淋しい夜の大熊本のアスファルトを只揃つた靴音のみで行進を續ける。皆無言である。ザツ

クザツクと響く足音のみが耳に入るばかりである。夜霧のはつた街道はひえてゐる。吾等の頬はつめたい空気をうけて益々引締つて行く。誰も彼もが口を一文字に喰ひしぼつて、キツと前方を凝視めて行軍する姿がまざ／＼と胸に描かれる。誠に男性的な深い高い何物かを感じしめる感激に充ちた行軍である。三時鐵道學校着、多くの先着部隊が並んでゐた。吾等の番號の聲も凛々しく引締つてゐた。緊張に満ちた一瞬々々である。空気が非常にひえてゐる。早速充當せられた室に入る。一室に百五十人で文字通り詰詰である。此所でも一睡もせず夜が明けた。七時頃朝食をとる。ひやい握飯も母が慈愛をこめて作つて呉れたのだと思へば何とも言へない程頗るうまい。食事がすんで所定の幕營地に行進を續ける。町にはまだ朝霧が漂うてゐる、熊本の秋は久留米の秋よりも餘計ひえる様だ、このひえると言ふ事が吾等に益々緊張を與へる此の行軍も足並の揃つた愉快な行進であつた。皆無言の中に足を合はして行く時各人の心は全部融け合つてゐる様に思はれて何とも言へない心持がする。これでこそ今まで五ヶ年間中學明善校で鍛へられた甲斐があるのだと力強く感激した。鐵道學校から野營地まで大分の距離があつて相當の時間が掛つて到着する先發隊の先生方や學友諸君が来てゐて色々の準備の世話をしてくれる。其所で吾々は天幕張り及び便所掘り等一樣に努力して案外早く片づいて終ふ。先生も生徒も全く一緒になつて汗と泥にまみれて仕事をする。先生と生徒の協力の美しい情景である。學校の中に於てよりも今回の如き學校外に於ての方が先生とお近づきする機会が多い様に感ずる。段々幕營地内の整理がはかどつてそれがすんでしまつて泥にまみれた顔をふきながら氣の合つた友達と今日の感激にみちた數々を語り今回の榮光限りなき實に千載一遇の吾等の幸福を語り合ふ。折しも團々たる太陽は西山に落ちんとして雲を紫味を帯びた紅に染めなしてゐた。吾々は暫くそれを眺めてゐた。何時もの太陽が今日は特に胸に深く感激を刻みこんだ。陽が沈んで夕闇が吾が幕營地内にも迫つてゐた。吾が明善幕營地は段々靜かになつて行く。日夕點呼をすまして天幕内に入る。天幕内は先生と生徒と共に苦心協力して作つた假寐の宿である。藁の上に粗末なむしろを敷いたのである。けれども吾人は快かつた。瓦斯ぬかしに開けた天幕の天井から見える空に星がきらめいてゐる。昨夜と同じ天の川が美はしく流れてゐる。空は明るい、友と明日の晴天を喜んだ。九時

になつて一齊に就寝、吾等が幕營地内はひっそりかんと靜まり返つてゐる。粗末な床に炭火をかこんで吾等若人は明日の榮光に胸を躍らしつゝ寝についたのである。皆安らかにねむつてゐる様である。吾等若き學徒は此の麗はしい假寐の床に如何に感激に満ちた緊張した一夜を明かした事か。不寝番で自分と他の級友の一人とは四時に目覺めた。皆今日將に來らんとする幸を胸に深く刻んで假寐の夢を結んでゐる様子である。深更の不寝番勤務、幕舎外は冷氣身にしみる。滿洲出動兵士の身の上がしみ／＼感ぜられる。明くれば十八日、愈々胸躍らして待ちに待つた榮への御親閱式當日である。秋寒の朝風に紅潮した頬をさらしながら日朝點呼をうける。それから体操である、皆元氣一杯である、緊張してゐる。國旗掲揚あり吾等は國旗に對して嚴肅なる敬禮を行ひ益々緊張の氣分になつて來る。諸準備を整へて愈々御親閱式場へと向ふ。吾等が母校中學明善校の歴史に富める笹龍膽の校旗が竿頭高く秋風にあふられて眞紅に輝いてゐる。他の學校のその様に絢爛でこそないが吾等が校旗は實に尊く嚴かなものに思はれた。吾等明善校は威風堂々感激に満ちて歩を運ぶ。

愈々練兵場に到着。さしも廣々たる帶山練兵場も九州各縣から今日の榮に浴せんものと雲集し來つた數萬の若人によつておほはれ、只ならぬ空氣が充滿する。此所で晝食をして命を待つ。此の日澄みに澄んだ秋に空片雲なく快い秋風は數萬の若人の紅燃ゆる眞心の薫りを載せて吹く、吹く、吹く。吾等の感激の一瞬々々が過ぎて行く。若人の感激に満ちた息吹に吾等の胸は頬は快く紅潮して行く。何處の學校も流石に緊張してゐる。各校旗や在郷軍人旗が感激と緊張とにみだされた帶山原頭の秋風にひるかへつてゐる。刻々に時間は迫つて來る。刻々に若人の感激と緊張とが高まつて來る。帶山一帶に集まつた若人の群は實に大偉觀である。若き男女の眞剣な喜びと嚴かさとは帶山を壓してゐる。遠くから拜見する玉座は純白の布を以ておほはれ、何とも形容し難い森嚴そのもの、如き感じがその周圍をとりまいてゐる。

間もなく軍樂隊の勇壯なる吹奏。思はず襟を正しはちきれる様に緊張するさしもの數多き學生群が一瞬にして水を打つた様な靜けさになり、そこには只緊張と躍る胸の鼓動とが流れるのみである。愈々奉迎。「氣を付け」の喇叭に全員一齊に何とも言へない中に不動の姿勢をとる。次いで「君が代」の吹奏、實に實に吾等は何もかも忘れて……。至尊の御英姿

を玉座に拜し奉つた時、或る何とも言へない高い尊い何物か、吾等の頭上にパツとかぶせられた様な實に神秘的な心持になつて思はず目頭に涙のうるむのを覺へしめた。自分はその時の光景をまぢ／＼と心に描きながら紙上に表はし得ないのである。それから直ちに分列式に移る。感激にみちて否感激以上の或る何物かに全身全靈を打ちこんで畏れ多くも上御一人の御前を一步々大地を踏み締めながら行進する。嚴肅と言ふか莊嚴と言はうか如何なる言葉も以てしても及ばざる實に實に何とも言ふ能はざる一瞬である。斯くの如き涙のこぼれる様な感激の中に幾萬人かの分列式が終る。此の間申すも恐れ多き事ながら、陛下におかせられてはほとんど一時間にわたらせられ直立不動の御姿勢にて御微動だに遊ばされず吾等の分列を見せなはせられたのである。吾等九州男兒の榮光たるや實に偉大である。吾等學校の感激は實に偉大であつた次は女子の奉迎歌奉唱である、三方より數知れぬ乙女子が赤誠あふる、胸を感激におの／＼かして静々と玉座の御前に進む紅燃ゆる若き血汐の薫る歌聲が感激にみちた秋の中空に響き渡る。吾等は實に銃を持つてゐる手がぶる／＼とふるえた。實に崇高なる而して純真な氣分に満ちた一時である。續いて全團體の「君が代」合唱、最後に 天皇陛下萬歳三唱。共に幾萬若人の赤誠こめし奉唱は天地に轟き餘音は遠く阿蘇の連峯にまで響いたのであらう。國歌合唱も萬歳三唱も小學校時代より幾十回となく繰り返へし唱へし事であるが、衆上陛下御前にての奉唱は眞に感激の極致である。斯くして御親閲式は終つた。感激の涙にあふれた式は終了した。静々と御車は還御あらせられる。「君が代」吹奏裡に。

吾等は吾等の幕營所へと急ぐ、早速後片づけに着手する。而して喜びと有難さに満ちた今日一日も暮れて行く。沈み行く太陽に向つて吾等は今日の事を感謝し何とも言へない徹底な心持になつた。將に落ちんとする太陽は今日の限りなき幸福を喜ぶかの肥筑の大自然に微笑みを投げてゐる。吾等は驛へと向ふ。途中水前寺で一休みして行く。それから威風堂々今日の激烈な感激を胸にきざんで驛へ行進。斯くして思ひ出の熊本を後に汽車にのりこむ。車内は緊張して静かである。十九日午前一時頃、久留米驛着、明善校玄關前にて校長先生からのお話がある。一つ一つ身に滲みてまざまざと昨日の光景を胸にかけて再び感激の泪に心をうるほしたのである。滿洲否世界の風雲急を告ぐるの時、この千歳一遇の有難き榮

へある御親閲をうけし若人の感激は永久に吾等が胸に残るであらう。永久に中學時代を想ひおこしてはあの胸高なりし一時を思ひうかべて感激の涙にむせぶことであらう。吾人は今回の幸福を永遠に紀念し、感きわまりしあの一時の純真なる赤誠あふる、眞心を以て生きて行かねばならぬ。終りに此の感激に満ちた御親閲拜受の光榮に浴し、謹んで天壤の無窮と聖壽の萬歳を禱つてやまぬ次第である。(感激に洩しつゝ、昭和六年十一月二十六日夜記す)

御親閲の感想

福岡縣中學傳習館第五學年

加藤 勝

昭和六年十一月十八日、それは我が生涯の歴史に特筆大書すべき日である。

この日、太陽先づその初光を若さに漲る託麻原に投げて、天壤と共に窮なき日の御子を壽ぎ奉れば、若き五萬の生靈一時に之に和す。朝の新鮮なる空氣は、古き歴史の氣韻と共に生氣溢る、若人の勇壯なる掛聲を託麻原の隅々に迄ふるへを帯びて傳へて行く。体操を終へて海苔につゝんだゴツゴツの握飯、——これも 陛下の土地で取れたのだ。と思ふと今日に限つて一粒が勿體ない様な感じがする。——二つを喫して腹を満たし、武裝を整へて帶山練兵場へと急ぐ。廣い。廣い。廣い。緩やかな起伏ある一帶の芝生の所々に木があつて、すつと向は紫の山。——これが帶山の練兵場である。その一番高い所に純白の玉座が拵へてある。其の玉座を約二百米の前方に見る所が我等第五集團の位置である。こゝで又例の握飯を食つて 陛下の臨御を待つ。空は飽くまで澄み、ちぎれ雲一つだになき大空に飛行機が舞ふ。

一時間半許待ち、漸く疲を覺え始めた頃に火花が上つた。續いて喇叭が吹奏された。その瞬間、脊が硬直した様に感じた。今までの疲と、脊と、背囊とが融けて無くなり、清淨な魂だけが其所にある様に感じた。氣がついて見ると、最早、陛下には彼の玉座の上に立つてゐらせられた。私は「君が代」の終つたのも知つてゐる。私の眼は、否、全神經は彼の白い玉座に集中されてゐた筈だ。それに 陛下がお登りになつたのを全く知らない。既に行進を始めてからも、何だか寢足